柳生武芸帳

中巻

五味康祐

新潮文庫

新　潮　文　庫

柳生武藝帳

中　巻

五味康祐著

新　潮　社　版

1531

カバー　木下二介

目次

兵庫介……九
西江水……一八
神燈……二八
密談……三六
紅……四七
門……五六
呼續濱……六六
雌雄……七六
御堂……八六
苦肉の計……九五
夕映え……一〇五

Digitized by the Internet Archive
in 2024

https://archive.org/details/unkhown0000vari_n6r9

遺書……二三五
烏梅……二四四
神今食……二五二
湖水渡り……二六一
一葉浮水の構え……二六九
袂の裏……二七八
蕨餅……二八八
無刀取り……二九八
先駆け……三〇七
逆立ち……三一六
妙安寺……三二五
所司代(一)……三三四
所司代(二)……三四五

野　風……一一五
石燈籠……一二五
美し松……一三五
間遠渡り……一四四
指打の條……一五四
透し鍔……一六一
山伏の司……一六九
雪の上の足迹……一七九
お杖師……一八八
檢　死……一九八
花　車……二一一
直門弟子……二二〇
女　傑……二三〇

柳生武藝帳

中卷

六十六部……三五五
六剣士㈠……三六五
六剣士㈡……三七四
京都代官……三八四
玉蟲……三九二
七騎落……四〇三
寒夜ニ聞ク霜ノ太刀……四一三
密使……四二五
仙洞御所㈠……四三四
仙洞御所㈡……四四四
柳馬場……四五四
嗣長卿邸……四六三

兵　庫　介

　宿の番頭が、二人を上客と見込んで、丁寧に挨拶をして襖を閉め出ると、どちらともなく、固くなつて沈默した。
　多三郎から沈默を破つた。
「まるで、この前の宿部屋と、これでは同じじや。」
　と言つた。
　ふつと清姫は思い出しわらいをした。
「そう……あの時も、わらわは困つた……」
「あれで困つておられたのかい。きつう、わしを責められたぞ。」
「わらわは正しかつたと思いまする。」
「はつは……正しいか、左樣、姫は正しい正しい……今もな。」
「冗談になさるのかえ。」

通りにしている。そういう作法があるからと、別に自身で思つてしているのでなく、無心に、そういうものと思い込んで箸を運び、女中の給仕へ茶碗のお代りを出すのである。

その點、野人の多三郎は出鱈目だ。一見、淀藩二萬石の姫君と並び坐つて些かの位落ちもない品格が、蓬々としたその風貌にはそなわつていたから、二人の間柄の唯でないのを察した女中も左程にこの兩人を怪しまなかつたらしい。併し、土地でも一流の宿屋で、いろいろの客に接している彼女達には箸の持ちようひとつで客の身分は分るのである。

默々と箸を運ぶ姫と男を見較べるうち、女中は次第に目を大きくして驚き且つ怪しんだ。食膳をさげてから、わざわざ帳場へ往つて、

「離れの間のあの二人は氣をつけなされたがよいぞえ」と番頭の耳元に囁いた。

「何故じや。」

「何故と云うて、あの、若い姫樣は兎にあれ、男のお客は、山賊かも知れませぬわいな。」

と言つた。

食事の濟んだふたりは、もともと食事というものがそうした性質のものなのであろう、何となく氣分も落着き、寛ろいで對い合つた。

「風呂へは入られぬのかい。」

と多三郎が訊いた。

「あい、もうお前さまとは、離れるのは嫌じや。はだかになると又、逃げてしまうかもしれぬで

「冗談とは申さぬぞ。誰が、姫の前に冗談口を叩こう――」

この前の白須賀の宿とちがつて、廊下をせわしく往反する跫音も此處までは聞こえない。多三郎は淸姫の前を立つと、障子窓に寄り、念のため窓を明けて外の樣子をそれとなく眺めた。女竹の數本繁つたこじんまりした裏庭である。

多三郎が其處で背を向けている間に淸姫は傍に脊き捨ててあつた手甲などを片附ける。それから、彼に背を向けて脚絆を脱ぐ。

聲をかけて女中が入つて來た。

「さきにお食事を召上りまするか。お風呂のあとになされますか。」

と二人を等分に見遣つて訊く。

「わしは風呂はよいぞ。姫の好きのようにされい。」

「わらわもあとに入りまする。」

「……では、お食事の用意を致します。」

女中は座敷にはいつて來て、多三郎の開け放した窓を又閉めたり、燭臺の灯加減を見たりしてから出て行つた。少時して、今度は二人づれで二の膳附きの配膳を襖のきわに置き、そこから、床を背に並び坐つた兩人の前へ別々に膳部を運び据えた。

食事中、ふたりは殆んど物を言わなかつた。氣儘に育てられたとは云つても歴とした永井家の家老の屋敷に成人した淸姫である。自ずからに、食事の作法は身についていて、椀を口許へ持つて來ても、吸う汁音はたてない。据膳の器物に盛られたどれから箸をつけるかも、ちやんと作法

もその一人である。
「うつ。」
と呻めいて多三郎の前方から跳び退つて身構えた。
多三郎が驚いた。
一、二歩進み出て、
「このわしに見覺えのありそうなは、さては柳生の一門か。それともあの日の、山伏か。」
言つて、宿場の辻角へ横ざまに走つて角を背に構え立つた。
首領はそれで、雙生兒の多三郎の方と知つたのである。京へ著くまでは、一鬪とて大事の躰である。首領は、いらぬ怪我人でも出しては事が面倒と見たから、配下の氣負立つのを制して身を退いた。
「いずれ、京で相まみえることもあろう。その時が勝負じや。」
言い殘して足早やに宿場の人群れへ紛れ去つた。
そのことがある。多三郎は、まだ、相手の正體を知らぬだけに氣にかゝる。それで幾度となく氣を使つたのである。
清姫が戻つて來た。湯あがりに頬がつやつやして全身から、まだ湯氣の立つような溫まつた感じが襟あしのあたりに立匂つていた。仄かに、糠袋を使つたあとの柔らかいにおいも、清姫の近づくにつれて多三郎の嗅覺に來る。昨日までは夕姫のだつた衣裳を、矢張りきちんと身につけている。

……」
「何を云う。今宵、同宿を申出たはわしが方じや。滅多なことに去りはせぬぞ。」
「きつとかえ！」
「湯を使えば體もやすまる。さ、浴びて來られよ。」
「何故、お前は入らぬのじやえ。」
「湯につかれば、あとに眠り込むおそれがある。わしは今宵姫の身を護らいではならぬでな。」
「では、待つていやるか？」
「——待つ。」
清姫は安心した様子で女中を呼び、風呂の用意を命じた。「ずい分前から沸いておりまするぞえ。」先程の女中とは別の、四十すぎた女が鐵漿の齒でわらつて、顎を二重にしてうなずいた。
清姫が湯殿へ立つと、多三郎は又窓へ寄つて、それとなく闇の庭を窺つた。ホトリ、と雨粒が葉をたゝき、その數が次第に增して本降りになる。
「これは困つたぞ。」
素早く窓を閉め立てて、獨語したのは、雨では餘程の緊張を保つていぬと、庭に忍び寄る者の氣配は感じ取れぬからである。夕姫を淸姫にしたてて見送つたあと、赤坂の宿場の手前で多三郎は淸姫の姿を待つたが、その時に肩を怒らし、何となく目つきの強い一團の武士の通るを見た。
千四郎なら或いは、松平伊豆の差し向けた刺客と覺つたかも知れぬが、多三郎は彼らとまだ刃を交えていない。併し、一團の中には一兩度、千四郎を攻めた時の生殘りがいたのである。首領

「多三郎さまは、わらわが嫌いかえ？」
「好もしく思うておるわ。分らぬか？」
「では、わらわに何處までも附いて來てたもるか？」
「……」
「わらわは宇治へ戻ります。そなたも、京であろう？」
「わしは尾張じや。姫と偕に寢るは、今宵限りかも知れぬ。」
「まことかえ？　わらわのために京へ送つてはたもらぬのかえ。」
「わしには、なさねばならぬ大事があるのじや。」
「よい。」
　淸姫は兩手を頰にあてて、耳のあたりから後ろへはらりと髮を拂い下げた。「わらわの願いを肯いてたもらぬのは多三郎さま一人じや。でも、よい……」と獨り語を言つた。
　間もなく二人は各自の枕で眠つた。
　益々、雨量の加わつた丑滿頃である。灯りの洩れる丸窓の下に微び寄つた人影がある。宿の廊下から、軒づたいに來た者で、さして雨にうたれることもなく窓の下に立つた。番頭の治兵衞である。宵の、下女の言葉があるので夜中の厠へ用を足した後、ふと樣子を見る氣になつた。
　燭臺の傍らに枕屛風を衝立ててあるが、窓の薄目に明いた隙から內らが見えた。寢ている二人は屛風に遮られて分らない。ただ、眠り入つている筈が、屛風の裾でしきりに蒲團の端が動いている。番頭は目をむいて頸をなゝめに延ばして覗き込んだ。それでも、如何に背のびしても枕屛

「お前さまも入つておいでなさらぬかえ？……いい氣持。」
多三郎は笑い顏で首をふつた。
「そもじのその顏を見ておると、ほんに極樂のようじや。殘念でならぬな。」
女中が這入つて來る。「寢具をのべてよろしゆうございますか。」ときいた。應えずに、つと淸姫は立つて行つて、隅の鏡臺に向つて坐つた。
「よいぞ。早う敷いてくれい。」と多三郎が答えた。
女中は一たん引下がると、ふたり連れで又やつて來た。どちらも蒲團を抱えて居つた。淸姫は鏡に面しつゞけ、多三郎は床柱に寄つて淸姫の後ろ姿に見るともない眼をやつて居た。ふくらかな臀部の下に足裏の綺麗な指が揃つて、重なつている。多三郎は破顏した。
女中が挨拶を殘して、兩手で襖を閉めて去つた。二人は床に對い合つて坐つた。いよいよ雨が烈しい。空に眼を据えてから淸姫が言つた。
「これでは、明日もこの宿に休まねばならぬかしら。」
「分らぬ。――多分、やむであろうが……」
「降ればよい。」
「――」
「わらわは、女（おなご）の著物を着せられて、いこう氣が弱くなりましたのじや。ぬかるみを往くのは嫌と思いまする。」
暫らくして、又言つた。

「兵介が悪戯はまだなおらぬか。」
　と尋ねた。
「はい。貴方様に似合わぬ慮外な子でございます。でも、あの子を躾けるのは樂しみでございますね。」
　と笑つた。兵介とは後年の連也齋で、この頃まだ十歳の腕白ざかりである。あまり腕白がすぎるので、一時、三州の姉婿林五郎太夫の許に預けられていた。
「いかにも樂しみじやが、あまり構いすぎて、疲れの出ぬようにせいよ。」
　兵庫介はそう言い殘して廊下を廻つて玄關に出た。嫡男淸嚴は既に出仕している。次男の茂左衞門が、家來とともに玄關まで送り出て、
「今日も夜廻りでございますか、父上。」
　と笑つた。
「これ、春に聞こえるではないか。」
　白いものの混つた太い眉で睨めつけたのは、兵庫介は時折、夜遲くまで城下の世情を見てまわると稱して、出歩く。それを春には內密にしていたのである。
　明るい笑い顏が、玄關の式臺を出る背姿にまで送られた。兵庫介は從者を從えて屋敷の門を出かゝつた。
　そこで、ふと停つた。身構えは何でもなく停つたと見えたが、
「あつ。」

風の內は見えぬ。固唾をのむうち、突如、屛風の上に蓬髮の頭があらわれ、
「……」
何か口走るのが聽こえた。頭はすぐ沈んだ。女は苦痛に泣いていた。

寬永十二年の此時、尾張家兵法指南柳生兵庫介は五十八歲である。祿高五百石、これは年寄・成瀨隼人正久成の慫慂で藩主義直附となつて、江戶より名古屋に來たときから渝らない。兵庫介が加藤淸正に召されていた當時は實祿三千石だから、五百石ではとの意見もあつたが他の家臣へのつり合いで義直自身五百石にとゞめたという。兵庫介は、義直のこの言を傳え聞いて仕官する氣になつたのである。以來終始五百石を享け、それ以上は兵庫介の方で固辭した。尤も、嫡男淸嚴が義直に同じく仕えて三百石を給されたから、父子合せて八百石を領したわけにはなる。後に島原の役で淸嚴は義によつて松倉長門守の客分となつて、出征して戰死をしたので、家督は次男茂左衞門利方に讓つた時は隱居料二百石を受けた。寬永十二年は、隱居の三年前である。

數日降りつづいた雨のあがつた翌朝、お稽古日で兵庫介は出仕した。肩衣半袴に身をとゝのえ了ると、老妻春が差料を袂でつゝんで差出す。兵庫介は武藝者に珍しく愛妻家で、老妻春は、もと島左近の女である。目に眩しいほど爽かな朝陽のさす庭に吾亦紅の暗紅色の花が咲いている。ふとそれに視線を注いで、
「今日の下城は常より遲れるかも知れぬが、案ずるでないぞ。」
と言つた。それから、

餘り騒ぎ立てぬがよいぞ。」
と言つた。
「と仰せられますると……誰ぞ、他流試合でも？」
「或いはナ。――試合と名乘つて參らば、所定どおりに取りはからつておくがよい。」
「……は。」
「わしが歸宅は遲うなろう。案じぬがよいぞ。――喜助、參れ。」
供の槍持中間に聲をかけ、その儘何でもない顏で登城をした。
內膳は途中から引返して、門を這入らずに、塀をめぐつて隣り屋根の道場へ赴く。
「高田三之亟どの、たしか歸宅のはずじやな？」
道場玄關で、弟子のひとりに尋ねた。
「はい、只今道場で稽古をつけておられます。」
應えるまでもなくパンパン袋竹刀の搏ち合う音にまじつて、
「まだまだ……それ。」
錆びて鍛えぬかれた聲がしていた。內膳は道場へ通つた。
尾張家兵法師範役のそれにしては意外に狹い道場である。三、四人、弟子同士が稽古をしている。三之亟は正面師範席の次の座に端坐して、稽古に一々注意を與えているが、その傍らで、眼を輝かせて利かぬ氣そうな少年が稽古の有樣を見詰めているのが、兵介――後の連也齋嚴包である。

と息をのんだのは屋根上に平這つて見ていた多三郎である。『西江水』の奥傳の形だつたのである。『濡れ緣に雪が積つているのを便所へ行くとき滑つた途端の身構え』で、この形は柳生石舟齋と山田浮月齋ただ二人しか天下に會得するものがなかつた、と云われる。それを、兵庫介は構えた……

西江水

ゆつくり、兵庫介は歩き出した。屋根を見上げたわけではないのに、多三郎は瓦にひらばつて動けない。顔を伏せ、ひたいごしに眼を皿のようにして門を潜り出て往く相手を見送つた。
「内膳。」
「は。」
表へ出きつたところで、兵庫介は門に控えた家來のひとりを呼んだ。
「三之亟は又戻らぬか。」
「いえ、昨夜遅く、道場の方へ戻られましてござります。」
「そうか。」
その儘歩き出す。工藤内膳が何となく附いて行くと、
「わしの不在中、何ぞ騷ぎがおこるやも知れぬ。相手は、おそらく三之亟以外の手にはおうまい。

「いかにも。屋敷をお出ましなされる時じや。」
「フム……」
三之亟は兵庫介の高弟で、この頃もう六十前だが、至妙のその早業は錚々たる他流兵法者をも容易に寄せつけなかつた。柳生道場に試合の申込みがあると、順序として兵庫介は先ず師範代の三之亟に立合わせる。十數年そうしてきて、誰ひとり遂に兵庫介の力倆を見た者はなかつた。ことごとくが三之亟に打負けて退出したからである。尾張柳生家記錄では、三之亟が木刀を捨てたのは唯一度しかない。劍聖上泉伊勢守信綱の一子、權右衛門と立合つた時である。權右衛門は拔刀術に精心をくだいて遂に名人となり、諸國修業の途次、尾張に立寄つて柳生道場へ來たのだが、その時の試合で、はじめの一本は三之亟が勝ち、尋いで權右衛門が勝ち、三本目で、ガラリと三之亟は木刀を捨てた。
「さても神妙なお手の內、それがしの及ぶところでござらぬ。恐らく天下に、お手前に勝つ者はござりますまいぞ。」
と感嘆したという。
その三之亟が、兵庫介に代つて心魂を傾けて教導したのが後の連也齋である。兵庫介の刀法には、何としても表藝の武術に忍者の修練の翳が入る。およそこれからの武術は武技一本で究むべきであり、忍びの修行のあとが殘つてはならぬというのが兵庫介の考えだつた。それで子の兵介は專ら三之亟に指導をゆだねたのである。
兵介は子供だから、他流者が來て、三之亟と試合をするのを見るのが愉しくて仕樣がない。

内膳の近づいて來るのを、いち早く見つけたのも少年だ。

「爺、内膳めが來よるぞ。」

背のびするように腰を浮かして三之亟の耳へ囁いた。

三之亟はおだやかに首をめぐらした。

そのそばへ寄つて來て、

「高田どの、只今、殿は御出仕あそばされましたがな。もしや致せば、今日、何者かが他流試合に參るやも知れぬで、注意せいとのことでござりましたぞ。」

「やあ、じいが他流試合をするのかい。これは、もうけたぞ。」

「何を仰せられます若。」

「内膳には分らぬわ。のう、じい。久しぶりじや。じいの手の內、とくとみてやるで。」

兵介は大いにはしやいで、コレはシメコのウサちやんじや、とつぶやいた。

稽古をしていた弟子達が腰をかゞめた内膳の話しぶりに、何事かと手をやすめる。

「つゞけて打たぬか。」

三之亟は聲をかけて、

「——今日、その者參る、と申されたかな？」

と内膳へ尋ねた。

「左様——」

「御出仕まえか。」

「いや、奥儀ではござらぬ。ちと存念あつて、某、ためしに御披露申上げたき太刀がござれば、殿ほどの御腕前、或いは御會得あそばすやと——」

「む。ならば教えてくれい。」

義直はパッと起上つて、側小姓に手傳われ素早く用意をとゝのえた。この時義直三十五歳。武藝に於て凡庸の業を超え、名目にもせよ兵庫介から柳生新陰正統第四代を繼いだ人である。身拵えを了わると、ツカツカと靜坐する兵庫介の前へ來て、

「さ、兵庫、立てい。」

と言つた。

一方の壁ぎわには陪侍の家臣が、さて如何なる手練が見られるかと手に拳を作つて見入る。普通なら、工夫の奥傳は人拂いの上でないと披露せぬのが兵法者の建前で、それが今は公けに傍觀出來るというわけだから、一同の緊張したのも無理はない。

ところが——

「それがしが方はこの儘でござる。さ、御自由にお打ち召されい。」

兵庫介は相變らず坐りつゞけて、扇を膝に立て、別に、あらたまつて構えをとるわけではない。

「予がこの儘に打込んでよいと申すか。」

「御意。」

「きつとじやな?」

如何な兵庫介とて、相手が熟練の義直である。眉を張つて、側臣も息をころした。

「内膳、かならず今日、來よるのじやな？」
と再訊く。
「さ、左様のはずでござる。」
「――工藤どの、委細は相分つた。我らはまだ稽古があるで、どうぞ、お引取りなされ。」
「では……お手前なれば萬に一も間違いはござるまいがの、騒ぎ立てるなとの殿のお言葉でござりましたゆえ、氣をおつけなされて下されいよ。」
道場の床板にじかに坐つて朋輩の稽古を見ている門弟のうしろを、するすると中腰で通つて内膳は道場を出る。
「誰が試合に來るのじや、じい。」
「分りませんな。ハテその樣にきつう力んでおられると、臨機の處置がなり兼ねまするぞ。コレ、こう致せば何となさる。」
あつという間に兵介は其の場でひつくり返されていた。
兵庫介は常とかわらず先ず本丸に登つて主君義直に挨拶し、時世談めいた二、三の垂問を受けたあと、城内虎の間に設けられた内稽古所で義直へ稽古をつける。側臣が四、五人、陪侍を許される。
「殿本日は某常々考案の一手を御傳授申上げまするぞ。」
「何、奥傳を授けると申すか。」

「何、もう一度とな？……よーし。」
大きく息を吸い込んでから、
「見たかつ！」
矢庭に今度は躍り込んでパツと打つた。兵庫介は身をひるがえさない。前回同様、眞向に腦天を打砕かれた感じで、木像の如く兵庫介は靜坐し、木刀は反動ではじき返された。
「いかゞでござる、との。」
兵庫介の口邊に微笑がうかんだのはこの時である。
「少しは、御會得あそばしましたかな。」
と言つた。
ふらふらと義直は其の場に崩れ坐つた。
「わ、分つたぞ……」
肩で大きく呼吸をしている。右手（めて）に握つた木刀が、その手からガラリと落ちた。
見ていた側臣にはさつぱりわけが分らない。
たゞ、ひとり、折々義直に打太刀を勤める大田信之助だけは、
「うーむ……」
腕を組んで唸つたそうである。後刻他の家臣が、
「お手前に、あれが見えたか。」
不審の面持で尋ねると、大田は、こう云つた。

「では參るぞ。」
義直は兵庫介を見据えると、半歩退き上段にパツと振りかぶつた。
兵庫介は、靜坐をつゞける。氣色ばむこともなく、たゞ、じいつと義直の眼を見る。
相手に氣の漲りでも感じとれたら、却つて打込む氣魄を獲たろうが、兵庫介の正坐には水の如き無心の靜謐しかない。いつでも、何處からでも打てそうで、全身これ無欲、天然の岩の如く隙だらけである。
「何をなされております。餘計な御忖度は無要でござるぞ。――打込まれませい。」
「う……な、ならば、行くぞ。」
ひと呼吸、氣をしずめ、「やつ。」と義直は打込んだ。
この太刀先きは存外鋭かつた。
兵庫介の腦天にガンと當つた。と誰の目にも見えたから、「あつ。」とばかり身を乘出す。
一番驚いたのは、云う迄もない當の打込んだ義直である。したゝかに手應えがあつて、まことの巖を擣つたように木刀は撥ね返されていたのだ。
「……」
兵庫介は、ゆつくり、手のひらで頭を撫でた。
「兵、兵庫……」
「いや、大したお力。兵庫、身に沁みて痛うござる。――なれど、まだまだこれぐらいでは兵庫介は倒れ申さぬぞ。今一度、もつと性根をすえてお打ちめされい。」

御刀持ちの小姓から佩刀を受取ると、其の場で抜き放つて、
「よいか兵庫。――参るぞ。」
先刻と同じ上段に構えたのである。
――と、兵庫介が眼で天井を示す。二度、三度日くばせする。
「……？」
上を仰いだ。瞬間鼠の騒ぐように跫音が遠ざかつて行つたのだ。
「兵庫、あれは……？」
呆氣にとられるのへ、
「――どうぞ。無刀取りを、お試し下さりましよう。」
先刻とは別人と思えるきびしい態度で、ずんと身を反らして構える。
兵庫介は、登城する者の常で、小さ刀をしか此の時腰に帶していないが、それで萬一、曲者と對決する仕儀になつた時の用意に、義直の太刀を奪つて立向うつもりでいたから、無刀取りを口に出したという。一つには、太刀を義直に把らせその安全をはかつたのである。
その夜。城をさがつた兵庫介が歸路へ、ぬつと立ちふさがつた者があつた。

別に變化のわざでも何でもない。兵庫介どのが頭にはコソとも太刀は當つておらなんだ。頭上寸前で、徒手を以て拂い上げたまでのこと。神の如くその手並が鮮やかだから、見た目に、眞向微塵と映つた迄の事である、と云つている。

「もはや御納得のことと存じまする。只今の業が無刀取りの序でござる。」

「無刀？……し、然らば兵庫、予がもし眞劍を以て打たばいかゞ致す、それでも手で拂いあげるか？」

「これは殿のお詞とも思えませぬな。眞刀なれば却つて事はた易うござる。殿が御太刀奪い取り申すまで。——何なら、おためしなされまするか？」

義直は、默つて兵庫介の顏面を見まもつた。無刀取りと云えば各流派が祕中の祕の太刀である。氣心知つた家臣の前にもせよ、それを、餘人の前で披露するというのは考えれば訝かしい。又、この日の兵庫介の態度には、終始、日頃の彼らしからぬ何か茶化した輕佻の風がある。

義直は暗君ではない。じつと兵庫介と目をあわしているうち、何かこれは深い仔細がありそうだと察した。それがどういう事かは今は恐らく兵庫介は洩らすまいが、いつかは說明するに違いない。とすれば、こゝは、申出るまゝに、無刀取りとやらを見せよと言うべきかと判斷した。

それで、

「然らば我が太刀を取つてみい。」

「何事じやな？」
「お手許に、武藝帳と名づくるものがござろうか？」
「武藝帳？……ハテ、それを問われるお主がその覆面では、あるとも、無いとも申し兼ねる。」
「……」
「姓を名乘られい。凡そのところは察せぬでもないが……その姿では、拔討ちもなるまいで。」
「何。」
「斬りつけるは當方じや。いつまでも、默つておられると柳生兵庫、近頃とんと氣が短うござるぞ。」
「ま、松平伊豆守さま家中にて小野田完藏――」
「――で、あれなるは御配下か？――成程、伊豆どのらしい御用意よのう。」
又、相手はさがる。持上げた提燈が、感情の昂ぶりをあらわして微かに顫えた。完全に壓倒されている。
「武藝帳をお尋ねであつたな。如何にも柳生兵庫、いさゝか存じ寄りのすじがござるが――と申せば、何と爲さる御所存じや？」
「……」
「默つておられたのでは、折角、名乘り召されたが無駄に相成ろう。――當方、道を急ぎ申すで、いつまでも默つておられると――」
「待て。然らば松平伊豆守が家臣の名目に於て相尋ねる。柳生武藝帳なるもの、御所持か？」

神燈

兵庫介の前に立ちはだかつた男は頭巾に面を覆つている。手の提燈を、その覆面の前へ高々と掲げて兵庫介をすかし見た。

「率爾ながらお手前、柳生兵庫どのか。」

と言つた。

あきらかに、いずれかの藩へ仕える者の口ぶりである。

「いかにも某、柳生じやが、お主は？」

丁度、伏見町を過ぎたあたりで、左方に黝々（くろぐろ）と大須觀音の木叢（むら）が見える。動くともなく其の樹影にチラリ、チラリ人の氣配がする。兵庫介は、左手（ゆんで）にさげた提燈をゆつくり、相手の面前へ照し上げた。提燈の握りに當るところは竹が卷いてある。兵庫介の拇指の爪は、ギーとその竹をなずつたのである。

闇夜の靜寂だから、爪音は存外きわ立つた。彼方でハツと幾つかの人影が動いた。

覆面にも、この爪音はこたえたらしい。咄嗟に胸を後へ引いて、

「お手前柳生どのなら、チト伺いたい儀がござる。」

語氣が强くなつている。

心流にこの構えがある。始祖妻片謙壽齋から出て、今、江戸日ケ窪に大樣彌次左衞門なる者が門弟一千を超えるといわれる道場を構えている。おそらく、松平家から内密の話をうけ、門弟中の腕利きがえらばれて來たに違いなかつた。——とすると、小野田と名乘る首領を除いては、木心流目錄以上の使い手であろう。おそらくは、日下浪人中の者であろう。

兵庫介の態度に漸くきびしいものがあらわれた。浪人は亂を好む。覆面の彼等とて、大方は妻子があり、何とか武略をあらわして松平家の祿にありつこうとの野望に燃えていよう。妻子のためなら身を捨てるぐらいの覺悟は、その構えをうかゞえば分るのである。

「小野田と申されたな？」

兵庫介は一歩、踏み出た。

「伊豆どのが家中とは、お主ひとりがことらしいが……此の場は、雙方おだやかに、濟まさぬか。お互いの爲にも、それがよかろうかと存ずる。」

「……」

「いかゞじや？」

じりじりと相手は後退している。兵庫介はすかさず詰める。距離をひらけば、覆面どもが兵庫介ひとりを圍む。妻子の餘計な嘆きを何處かで生む仕儀にもなるからである。

さすがの兵庫介も、そこまで氣をつかつたからか、この時、樹影から又ひとり、ふらりと姿をあらわした者のあるのに氣づかなかつた。

あらわれたのは多三郎である。

「――無い。」
「いずれに匿まつておられるな？」
「――」
「申されよ、老中松平伊豆守が名代として相尋ねるのじや。御返答の如何によつては、かく申す小野田完――」
忽ち兵庫介の大喝が、小野田の口上をさえぎつた。
「默れ。かりにも尾張家師範役をつとめる柳生利嚴じや。不審のすじあらば何故表向き、年寄役を經て相糺さぬ。伊豆どのが才覺にては、尾州藩が武士を尋問致されるに覆面を以て足れりとなされるか。當方、滅多なことでは人は斬らぬが、藩の名分に關るとあらば已むを得ぬ。お主が一命、次第によつては頂戴致すが、よいか。」
闇夜をつんざく大聲である。樹影にひそむ人數をあらかた檢べようとの魂膽からだが、まんまと乘つた。
首領の身に大事があつてはと、バラバラと集つて來たのである。
――六人。
それだけの人數を讀んでおいて、ゆつくり兵庫介は提燈を足許へ下げた。灯りで顏が下から照し出される。兵庫介の口邊には微笑がある。
六人は首領と兵庫介の對峙を、八方から取卷いた。いずれも黑覆面で、提燈は下げていない。スワと云えば拔かんずの身構えでいる。足幅が、夫々一齊にひろいのは、同門の證據である、本

カギ型の熊手は、人の手の役割に似る。綱を引けば竹が延び、あたかも猿臂を延ばした如くなる道理である。高所に先端のカギをかけて登るが、その際、竹の一節々々に指をかけ、且つ足がかりとする。常時は綱を緩め、竹を束ねて持つ。

「しころ」は兩刃の鋸で、一方は竹、一方の刃は木を截るに便に鍛えられている。これを以て、矢來、柵など難伐のものを伐る。但し伐りようは奥傳と古書にあるが、平凡に考えて、音をたてず伐る方法があるものだろう。

　戸口なども、これで破つたろうとは當然考えられることである。

「さく」は型に數種あり、錠を開けるに使用された。

「かすがい」は登攀用具の一である。「大かすがい」を城の石垣に順次さし込むと急造りの梯子となる。「小かすがい」は四本あれば、蝙蝠の如く高所にへばり附いて何時間でも體を支えうるわけである。

「戸締器」は戸が開かぬよう外から戸口に施す金具である。忍び込んだとき、内部の家人が逃げ出すのを防ぐに用いられた。

「大坪ぎり」「小坪ぎり」は錐の變種で、木の柄が元についている。戸が立詰つて少しの隙間もない時、この「大坪ぎり」を以て穴をあけ、手を差込んで戸を開けるのである。或いは「小坪ぎり」を用いた後「さく」であける。

　この他にも足音をころす「綿足袋」や惡水を濾して飲むための「三尺手拭」等があるが、要するにこれらの忍び道具を用いて術を使う。人の目には、絶對其處を逋れまいという盲點が邸内に

多三郎は屋根上で、兵庫介の『西江水』の奥傳の型に目を瞠つたが、その後もひそかに兵庫介のあとを尾け、名古屋城に忍び入つた。

書けば簡單だが、白晝、番卒の目をかすめて堅城名古尾の本丸に侵入するは餘程の術者でも容易でない。——が、手びきがあれば、左程、不可能事でもない。他ならぬ兵庫介が多三郎のその侵入を、それとなく扶けたのである。番卒の注意をわざと兵庫介がひけば、これは出來る。兵庫介にすれば、どこまで、尾けてくる者の術が巧みか試してみる氣があつたのかも知れぬ。或いは他に深い考えがあつての上か。誘われる罠なら敢て陷る覺悟で、多三郎の方は、先刻の虎の間の天井裏まで尾けたのである。

忍術は妖幻の術でも何でもないので、ことごとく、熟練の上で行われる業である。とかく合理性を好む今樣の讀者のために、だからこゝで、忍び道具のあらかたを説明しておくと——「ひし」や「鐵びし」は、暗夜敵に追われるときなど、地上にこれを撒いて追手の足を痛めるためのものである。十兵衞が坂崎出羽守を刺して庭から逃走するときに、この「鐵びし」を撒いている。「八方手裏劍」「十方手裏劍」は少年又十郎が光圀附の望月庄左衞門を暗殺する條で使つた。「かぎ」は紐や綱の先きにつけて抛れば、どういう便宜があるかは容易に想像出來よう。「くない」「大くない」は土を掘る道具である。鐵門など戸締りの堅牢なとき、門の敷居の下に穴を掘つて潜入する。

「忍び熊手」は竹を一節ごとに切つたもの十數節から成り、中に一條の綱が通つている。先端の

多三郎は聲をのんだ。靜寂がつゞいた。首領の提燈はふるえるのをやめ、一歩、兵庫介が後退した。

萬歳をした儘で、ゆるく提燈が弧を描きはじめる。何やら一聲、咽喉に詰つた聲を發した。それが最期である。弧は忽ちに地上へ向つて落下し、ぱつと燈が消えかけて、見る見る炎が提燈全體を燃やし出した。

「當方、好んで戰いは致さぬわ。思いを改め、此の場を立去るがお身達の爲じや。江戸へ戻ろうなら、費用は當方にて差渡す。いらぬ苦痛を見ずと、そう致すが師の爲でもあろう。惡いことは云わぬ。——さ、その太刀を引けい。」

片手に提燈、右手に血の滴る拔身を下げて靜かに兵庫介は右を見、左をかえり見た。

たじたじと退る者がある。ふみとゞまつて、隙あらば尙も斬り込もうとはやる者がある。蠟の加減で提燈の中が一時暗くなり、それから炎が搖れてジ、ジ、……と音がした。

「どうじやな。先刻申したとおり、當方急ぎの身じや。たゞ默つておられると——」

「ひ、ひけ。……退け。」

小聲に一人が叱咤した時には、もう、殆んどがサツと闇に退いている。たゞ一人だけ、灯りの前に殘つて、大きく太刀を振りかぶつた。

「早川淳之進、見參……」

拜み打ちに躍り込んだ。まだ若い聲だ。

「たわけ。」

幾つかある。忍者はそれを利用するので、體の關節を自在にはずして、想像を絕する小さな穴でも通過するのである。加えて聽覺視覺の訓練が行き屆いている。吾人の判斷で、屢々不可能と見えることも、ことわりを知れば案外納得がゆくのである。

多三郎が虎の間に忍び入るぐらいのことは、さしたる難事ではなかつたかも知れぬ。

さて大須觀音の木影から立現われて、多三郎はそれとなく兵庫介の擧動を窺い見た。覆面の刺客達は、遠目であるが、いつぞやの宿場はずれで多三郎に迫つたあの一團らしい氣配がある。首領の體つきが似ている。

「あれが、では松平伊豆の廻し者かい……」

呟くともなく多三郎は口にした。闇夜に、二個の提燈が互いを照し合つて動かずにいる。

そのうち、一方のふるえるのが次第に激しくなり、何やら、兵庫介に向つて叫んだ。

兵庫介は答えた。同時である。提燈がパツと交叉し、圍んでいた輪が一齊にとび離れて燈に白刃がキラリと拔かれるのが見えた。其處だけが明るみ、四圍は闇である。

「氣をはやるでない。その方たち本心流が門弟か。」

兵庫介の云うのが聞かれる。兵庫介は、相變らず左手に燈を提げているが、位置は、交叉して覆面と入れ違つた。

覆面の首領は、萬歲（ばんざい）をした如く高々と提燈をかゝげ上げている。

「や、……やりおつたか？」

が、さまざまな音階で微(しの)びやかにすだいている。
一度、ふつとその蟲の音が歇んだかと思われた。
その時覆面の大きな眼(まなこ)がギロリと動いた。
まるで無言劇である。いつそ、兩人は常人にきこえぬ特別な無音の聲で對話しているのではないか、と思えるほど、そうして、沈默をつゞけていた。
蟲が直ぐ微びやかな鳴き方を取戻した。熟練した耳には、蟲のすだく遠近の位置は聞き分けられるのである。人の跫音が近寄るなら、遠くの蟲から次第に鳴きやむ。
……人の近寄る氣配はない。
「お主の方から、それでは樣子を話されい。」
氣儘頭巾の武士の方が、おもむろに口をきつた。錆びて、かなりの年配を思わせる口調だ。
「されば江戸の近況より申上げる……」
これは聲にまだ若々しい張りがある。神殿へ背を向け、編笠を傍らに置いた武士である。
「柳生但馬守どの、內々に江戸へ人數を集められ、武藝帳列記の歷々衆に直接尋問ある筈の事、これが一つ。――次に山田浮月齋、但馬守が意中を喝破致し早くも京へ人を遣わしたる氣配、その先手と思しき霞の多三郎を、御手前、名古屋にて斬るべき事。第三は――」
「待て。多三郎とやら、如何にも當地に潜入致しおるは承知じやが、この汀(なぎさ)佐五右衛門以外、多三郎を斬る者江戸にはおらぬか？」
「――殘念ながら。」

と云つた。兵庫介は靜かに體をひらいたので若者は力あまつておのが足を斬つたらしい。
「無駄に死ぬるでない。」
ぽん、と、蹲る若武者の面前へ提燈を投げたのである。そうして身を退いた。
提燈が燃えあがる。
「む、無念じや。……」
うめく若者のそばへ、兵庫介の立消えるのを目で追いながら朋輩が驅け寄つた。
「馬鹿者。」
と小聲に叱つた。
その時にはもう、多三郎は闇を突いて斜めに兵庫介の跡を追う――。

密談

熱田神宮の神殿で對坐している二人の武士があつた。
一人は深編笠を傍らにした覆面。他の一人は氣儘頭巾に顔をつゝんだ武士。
どちらも大小を差さぬ丸腰である。
默りあつて、互いの眼をいつまでも見合つている。
寂（せき）として四圍に聲なく、折々燈火の油がじじ……と鳴る。神殿の蔀（しとみ）の外は眞暗闇だが、秋の蟲

「それがしの見るところ、鍋島より恐らく島津へ移つておろうか。」
「……」
「それより先は、まだ調べ足らぬが、或いは淀の永井家かとも思われるふしがある。」
「――」
「が、それはまあ、禁中の首尾がよく参つてのこと。差し當つては多三郎じやが……」
風が出たらしい。
鬱蒼たる巨木にかこまれたこの神殿の夜空に、ざわざわ樹々のさわぎが聞こえ、それが一そう靜寂の氣を深める。
夜風にあおられ、燭臺の焰がなゝめにさつと傾いた。

「然らば、御承諾ねがえまするか？」
「多三郎暗殺の一件かな。」
「いかにも。」
「それよりひとつ當方にて聞きたいことがある。會津の小瀬源内、斬られたそうじやが、下手人は矢張り浮月齋一派か？」
「そのように噂されておりまするが。」
「中ノ院大納言卿が息、何と申したか……」
「神矢悠之丞。」

「十兵衞は何とした？」

「柳生十兵衞、別にお役目がござる。」

「？」

「友矩又十郎の兄弟、本明日中に當地を通過致しまする。このこと、右の第三條にも當てはまり申すが、その節、お手許にある武藝帳巻の二、又十郎にお手渡しありたき事。それを以て、又十郎は公卿に身をやつし禁中梨本院にて、藪左中將嗣長卿と對面。あわよくば――」

「……」

「されば、この意圖どの程度に浮月齋探知致しおろうとも、京に於て彼等は又十郎が使命をはゞむは當然。よつて、十兵衞ひそかに護衞となり、無事、一の武藝帳奪回の曉は直ちに道を西にとつて九國に走り、鍋島家との生死を賭くる暗鬪を致さねばならぬ。されば、當尾張周邊は悉く――」

「この汀佐五に相委せると申すか、なるほど――」

頭巾の中で、おだやかな目が笑つた。

「但馬守どの、考えたな。」

「何と？」

「いや、さからいは致さぬ。この示談いかにも承知致すぞ。……が、鍋島家と今申されたが、武藝帳、殘念ながら最早鍋島藩には存すまい。」

「な、何と？」

ことさら聲に力を張つて、訊いた。

「い、いかにも……」

「で、お主、直ちに江戸へ引返されるかの。」

「いや、それがしには別に、所用がござるで……」

黑い杖が音もなく手のうちを離れて、床に置かれた。

「然らば、用はこれ迄か。」

「――左樣。」

兩人の眼と眼があう。

默禮ののち、氣儘頭巾の方が先ず座を立つた。大小は坐つていた位置から一間餘のところに置いてある。それを拾い取つて、小刀を差し、おもむろに下緒を摑んで大刀を腰に差した。

覆面の武士は脇差だけ、相手とは反對の神殿の隅に置いてある。起つて行つてそれを差す。それから元の位置に戻り、編笠と杖を拾つた。

人の動きで焰が又ひとしきり搖れなびいた。

神殿中央に兩者は立つて向い合う。熱田大神宮境内――鎭皇門內、孫若神社の神殿である。儀式めいて雙方互いに一禮をした。くるりとそれから氣儘頭巾が先ず踵をめぐらし、蔀をひらいて神殿の縁へ踏み出る。階に足をかけるとヒタと蟲が鳴き止んだ。若い覆面の士も、同じく氣儘頭巾につゞいて神殿を出る。

後ろ手で、もと通り蔀は降ろされた。二人は土に降り立つた。

「その、神矢とやらを斃したも同じ浮月齋が手のうちと聞きおよぶが、まことか？」

「いや、悠之丞なれば斬死致してはおりませぬぞ。下谷廣德寺にて、柳生家が息女於季、ならびに旗奉行大久保彥左衛門どのが看病にて一命あいとゞめ、只今療養の身でござる。――斬つた千四郎、これまた手負いの所、浮月齋に救われていずれかへ忍び逃れたる由。」

「では相討ちか。」

「――御意。」

「ふむ……」

氣儘頭巾のおだやかに笑いを含んでいた眼がはじめて、すつと光つた。

彼は言つた。

「ならば最後に今ひとつ訊く。松平伊豆が背後で絲を引く黑幕は、誰じや。春日の局かな？」

「恐るべき御眼力。そこまでを、尾州にあつて見屆けられたは、さすが汀どのじや。いかにも絲を引くは大僧正天海にござる。なれど、この儀は、……む？」

ぱつと瞳孔がひらいて、とつさに左手が傍らに立てかけてある杖を摑んだ。黑塗りの、一見何でもない只の細身の杖である。

氣儘頭巾の方がすると頭を振つた。

「ふり向くでない。ふり向くでないぞ。」

日顔で云つている。――それから、

「多三郎の儀は如何にも承引致す。――要件は、それだけじやな？」

熱田大神宮には、大宮と稱する本社の他に、八剣神社、高藏神社、日破神社、大福田社、紀太夫神社などが境內に鎭座まします。孫若神社もその一だが、氣儘頭巾は孫若の社から鎭皇門を出て北へ向つた。
丁度、紀太夫神社のある旗綾へさしかゝつた時である。
「汀佐五右衛門か……」
闇の前方に、ぬつと男が立つた。
「……」
豫期していたのか、汀佐五右衛門なる武士は一向驚く樣もない。
「多三郎じやな。……」
低い聲で、ゆつくり立停る。
「當方にも用があつたが、そちらで遣つて來てくれるとは、忝い。――先ず、お主が待ち伏せたわけを聞こう。――用は、何じやな?」
油斷なく多三郎は近寄つて、
「されば尋ねる。お主は旣に知つておるかも知れぬが、會津藩・小瀨源內を斬つたはこの霞多三郎じや。」
「ほう……」
「待て。その時、末期のきわに源內が申した、武藝帳に列記の人物、或るものは但馬守が捏造じやと。――この儀、まことか?」

「……では。」

闇夜に眼だけが光つて、覆面が云う。その耳許へ顔を寄せ、

「この附近で、斬るでないぞ。」

頭巾は素早く囁きのこすと、夜風の如くすーつと闇に身を沒した。

殊更、跫音を殘して覆面は反對の方向へ歩み去る。

再び蟲はすだき出した。

餘程經つた。

長い影を搖らして蔀に巫女の姿が立現われた。

「……」

用心深く、暫らく外の氣配を窺つている。

却々出て來ようとはしない。年齢の程は分らないが、二十をいくらも過ぎてはいまいと思われる女性である。下ぶくれの顔立ちで、そつと蔀を押開け、緋の袴で神殿を出たとき、灯に映(うつ)された横顔に意外に妖艶な情緒があつた。跫音を忍んで、一段々々階を降りた。足袋跣(はだし)だ。人の待ち伏せる氣配はない。緋袴を亂し、一氣に彼女は闇を突いて走り出した。

こちらは氣儘頭巾である。

氣儘頭巾とは、覆面と違つてたゞ目だけ空いた筒狀の頭巾をすつぽりかぶつたのを云う。即座にだから頭巾を取ることが出來る。

無言で氣儘頭巾は詰め寄る。上空に風が梢を騷がして過ぎた。氣儘頭巾の手が刀にかゝつた。
白刃が二樣に、交叉した。
「こ、こらえてくれい……」
絕叫に似て、雄叫びのあがつたのと同時に脫兎の如く足音は闇を疾り去つた。

翌朝になつて、境內寶田神社の前で死骸になつた巫女が發見された。日破神社につかえる夏路という女である。兼々、禰宜の何某とねんごろになり、人目をさけて折々神社の內で密會を重ねていたのが、この夜に限つて、禰宜に差閊えがあつて約束の刻限に出向けなかつた——そのあいだの不慮の死であろうという事である。何者が斬つたものか、多分、女の淫らであつたのを怒つた他の禰宜の仕業であろうかとも見られたが、當夜密會を約していた當の禰宜が、いや、絕對に彼女は自分以外の男と交つていたとは思えぬ、もともとが、自分の方で無理に誘いかけた事だつたと淚ながらに懺悔したので、では外部の者の仕業かという事になつた。そう云えば、彼女の刺されていた場所から、少しはなれた旗綾に、點々と血の迹の境內外へつゞいていたのは、彼女が反抗して痴漢も手負つたからだろうと見られたが、奉行所の探索に關らず件の痴漢らしい者は發見されなかつた。後に當の禰宜は斷罪に處せられた。

さて當夜に話は戻る。
此處は柳生兵庫介が屋敷の奥の間である。

「……」

「嗤つたな、よし。さらば重ねて訊こう。源内が最後の言葉に、眞實を知るは尾張の汀佐左右衛門――お主ひとりじやと、左様申して源内は絶命したぞ。まことか。まこととお主がその事知るなら、一體、何者じやい？」

「分らぬか？」

「？……」

「源内と申せば但馬守が門下の逸材。それを斬るほどのお主で、まだこのわしが分らぬか。――たわけ。」

「ぬ？……」

多三郎の眼が大きく見開かれ、背をかゞめた窺う姿勢で、本能的に手が差料の柄にかゝつた。正體の如何では即座に拔合わす覺悟だ。

汀佐五右衛門は、身をひく。その刹那である。

「あッ……お、お主……」

多三郎がはじかれたように、大きく距離をおいて跳び離れた。

見事に、汀は『西江水』の構えをとつていたのである。

闇の何處かで、ひえつ、と咽喉笛の鳴るのが聞こえたのは此の時だつた。

「そ、そうか……汀佐五右衛門とは、お主がことか！」

多三郎の體が、じり、じりと退る。

紅（くれない）

「……お歸りなされませ。ずい分と遲うございましたなあ。」
妻女は跫音にいち早く座を起つと、ふすまのすそを開け、次の間にはいつて來る兵庫介を迎え入れた。
紅（くれない）は裾をそろえて坐り直しただけで、母の後ろ姿を見遣る。父の兵庫は愛妻家と評判が高いが、迎え立つ母には何か、夫を手に据えて大切にする樣子があり、本當に、長い歳月をかけていたわりあう夫婦の美しさと云つたものが仄々うしろ姿にうかゞえる感じがした。母の春は島左近の娘であるが、島左近と云えば關ケ原の役に石田三成の帷幄にあつた勇將だつた。その人の娘を、德川の天下となつた後、然も御三家の隨一尾州藩の兵法御師範役の身で、些かもはゞかることなくいとしんできた兵庫介の偉さというものは、何でもないようだが娘の紅には身に沁みてうれしいのである。云つてみれば、彼女も逆敵の孫に當る。次弟の清嚴、茂左衞門、兵介、みんなそうだ。父の胸中が女心の淺はかさで推しはかられようもないが、もしかしたら、子供達が不憫なため敢て世情を無視し、母との生活を保ちつゞけてくれたのかも知れない、と思う。
戰國時代に、妻子を人質にして死に到らしめるぐらいはざらに見かけたことだつたし、まして、逆臣の女（むすめ）なら、見捨てておいても武士の當然の擧措と誰ひとり怪（あやし）まなかつたろう。そんな風潮

御油から、久々に娘の紅が戻つて來たというので、兵庫介の妻女は、朝の夫の言葉があつたが、起きて待つていた。
「いつも、お父上はこの様に遅いのでございますか。」
もう子の刻も過ぎようとしている。待ちくたびれて、愼しみもなくあくびの出そうなのを慌てて袖でかくし、紅は言つた。……十六で、花やかな顔立ちだから、年よりは若く見える。
「いつもというわけでもありませぬが、この頃はよく、お出歩きなされて……何處ぞ、よいお伽の相手をおつくりなされたのかもしれませぬ。」
「まあ、お母さまとしたことが、ホホ……」
「いゝえ。」
案外まじめに否々をしたところを見ると、この年になつてもその道は別なのかと、却つて一そうおかしくなつた。――が、それは口には出せぬので、
「兵介は、相變らずのやんちやでございますか。」
紅は話題を轉じた。一時、御油で彼女は兵介をあずかつていたからである。
「えゝえゝ、それはもう……」
云いかけて、妻女はふと振り向いた。兵庫が歸つて來たらしい。

「旅のつかれがあろうに、よく待つておつてくれた。——春、茶をくれい。」
紅の前へ著替えもせずに、坐つた。
「お召替えをなされてはどうでございますか。」
春が訊く。
「よいわ。——くれない、それで、皆々に變りはないかな。」
「はい。お舅さまも却々の御元氣でございます。」
「はツは……あの老人、元氣では口がうるさかろうナ。」
「ハイ。ホヽ……」
妻女が茶を淹れて兵庫介の前へ据えた。ついで、紅と、自らのも置く。
「ところで、何しに參つたの？」
「別に、……用はございませぬ。」
ちらと母の表情を讀んで、紅はあいまいに笑つておいた。
兵庫介もくどくは尋ねない。父娘三人、夜の更けるのも忘れてなごやかに談笑を持つた。
兵庫介が己が居間へこもつたのは、それから小半刻もして後だろうか。
「いこう更けたようじや。残る話は明日にも出來る。——さ、もう其方たちもやすむがよいぞ。」
云つて、別の間で著替えを濟ますと奥へはいつたのである。
紅は母を手傳つて、脱ぎ捨てられた父の衣服をたゝんだが、ふと、袴の折目を揃えた手に、何やら手ざわりで觸れたものがあつた。

の中で、兵庫介は妻を愛みとおしたのである。餘程の肚がなければかなわぬことだし、武藝の上で、自信もあつたに違いないが、それにもまして深い愛が無ければ出來ぬことだつたろうと、女の紅は思うのである。

「……何じや、まだやすまずに待つておつたか。」

母の出迎えをうけて父が低く言つている。一年ぶりに聞く聲である。

「いえ、くれないが御油から參つておりますので。」

「なに、女が戻つたと――」

ツカツカと遣つてくる氣配で、さらりと襖があけられた。

「お久しゆうございます、くれないでございます。」

紅はニツコリ笑つて父を仰ぐ。

「成程……いつ參つたな。」

「お父さまの御登城の、ほんのあとでございました。」

「婿どのは、變りないかな。」

「はい。くれぐれも宜敷くとの事でございました。」

くれないの表情には一點の翳もない。御油の郷士林五郎太夫に嫁いでもう八年ちかくなるが、子供がないので何時までも娘々して見える。

何ぞ、不仲なことでもあつて戻つて來たのではあるまいかと、父親らしい氣遣いを一瞬したらしいが、娘の表情の明るいのに兵庫介の眉がひらいた。

「わらわ達も、やすみましようかえ。」
母がほつと落着いた面持で笑いかけたので、紅は素直にうなずいた。
女ふたり、父の居間とは廊下を距てて別の間に寝る。弟清巖、茂左衞門、それに兵介の三人は、高田三之亟らと別棟の座敷で寝ている。
さて寢所へはいるとき、父の居間にまだ起きているらしい影が動いていたので、くれないは、母の著替えをするのを見すましてから、厠へ立つ風をよそおつて、そつと、父の寢所の次の間へ這入つた。
「お父さま……」
ふすまの影から聲をかけると、ヒタと何やら動きやんだ氣配がある。
「はいつてよろしゆうございますか。」
「……くれないかナ？」
「はい。」
「何か、用か？」
「少し、お耳にいれたいことがござります。」
暫らく應えがなかつた。
稍あつて、
「はいるがよい。」

見ると、血の迹である。

「……」

はつとして母を見遣つたが、これは紅に背を向けて襦袢をたゝんでいたので、彼女は、そつと懷紙を取出して、母に氣づかれぬように血痕の上に抑えておいた。兵法者の娘として、幾度か彼女は人の無慘な姿は目にして來ている。夫・林五郎太夫も三河周邊では一應名の通つた劍術者だが、如何ような場合があろうと、武人の妻は夫に血の理をたゞしてはならぬものじやと、當の兵庫介から云い含められて嫁いだし、舅の林三郎兵衞にも同じ注意は幾度か受けた。三郎兵衞は、もと福島正則に仕えたが、武邊の諍いで朋輩を殺め、以來故鄕三河に在つて武士を捨てた人である。兵庫介とは、正則が熱心に兵庫介を召抱えたいと希んだ頃、兩三度、主君正則の使者となつて懇請に赴いた。それが機緣で兩人は相識る仲になつたが、後年、兵庫介が尾張德川義直に召抱えられ、他藩に「骨のある武士」の推擧を慫慂されたとき、この林三郎兵衞を推薦した。三郎兵衞は厚志を謝して、綺麗に斷つて來たのである。

「主君正則公が在世の世なれば、御芳志をお受けも致そうが、口論までして逆つた藩公は最早世におわさぬ。武士の意地の見せようもござらぬ次第じや。されば二君に仕える藝も致しかねる。」

と言つたという。以來、一そう兵庫介は三郎兵衞と親密になり、娘も嫁にやる程の仲になつた。——

衣服をたゝみおわると、

傍らを顎で示す。
紅は膝ですゝんで、
「お疲れなされているのではございませんか。」
と言つた。
「話というのは、何じやな。」
「二、三ございます。はじめに、お願いがあるのでございますけど、——兵介を、わたくしども夫婦に頂けませぬかしら。」
「何。……」
「このことはお舅さまからも是非お願い致してくれとの事でございましたが、多分でも、お手放しはなさるまいと、夫は申しておりました。」
くれないは賢い娘である。もう寝るときまつて、父の居間へはいつているのを母が訝れば、可愛い兵介を養子にしたい相談をもちかけているのだと、即座に答えられるように、右の話を最初に切出した。母が聞いていたのでは、承知してくれないにきまつているから、父ひとりに話しているところだと。
むろん、兵庫介や春が三人の子のうち、どんなに末子の兵介に期待をかけているかは彼女とて充分知つているのである。駄目にきまつている。又、そんな相談を、わざわざ夜中にすることもないのだ。それをしたのは、だから母に怪まれぬためで、本當に告げたいことは別にあるに違いなかつた。

しのびやかに襖を開ける。
兵庫介は紅へ背を向ける位置で刀の手入れをしていた。
血のりをぬぐつた布が、脇に丸めてある。
人を斬つたと、敢て娘の前にかくさないのは、公儀にはゞかりない太刀を振つたからか。或いは、返り血の袴についていたことぐらいは夙く承知でいるのか。
太刀は、胴田貫の大業物で、兵庫介が加藤清正に仕えた頃の名残りである。
しずかに紅はふすまを閉めた。
「氣がついたかな?」
何氣なく、兵庫介が聲をかける。
「お袴に、返り血がのこつておりました。」
「……そうか。」
傍らの燭臺へ刃を翳して、鍔元から呼吸をとめて靜かに見上げ、見下す。
刃をかえす。——この時、はじめて、懷紙を口に含んだ。
くれないは、何時か舅の三郎兵衛から、熟練の士は、人を斬つた太刀の血のりで相手の奈邊を斬つたかを見分けるものだと聞いたことがある。
それを思い出したので、父の手入れのおわるまで、息をころして無言で控えていた。
パチンと靜かな鍔音を殘し、兵庫介は鞘におさめた。
「……これへ参るがよい。」

ともあろうかと察したのである。少時して、喜作が茶店へ戻つて來て云うのに、
「何ぞ、お人違いのようでございました。」
「どちらがですか？」
「友矩さまの方でございます。はじめは丁寧に物を申されておりました。女のお普化も、何でも永井信濃守さまの御息女で清姫君とやら名乘つておられましたが。ふた言、三言、おことばの遣り取りのあつたあと、不意に、友矩さまが氣色ばんで、
『や、うぬは別人であろう。……まさしく、過日の姫ではない。そ、その天蓋取られよ。』
　左様申されましたところ、お普化の方が、
『見破られたか。いかにも、わらわは清姫ではない。この聲にお覺えがないかえ。いつぞや、そなたの屋敷に忍んで見破られた、夕姫じや。』
　左様申されましてござります。」
　と語つた、という。そのあと、
「何、夕姫……」
　友矩はぎくりとしたようだつたが、直ぐ、ひややかな笑いを湛えて、
「いかにも其の聲、おぼえがある……。それにしても不思議なところでお目にかゝつた。われらを追つての、旅かな？」
　と訊いた。夕姫はこたえるかわりに、するすると後退して、
「目の見えぬが口惜しい……いかにもわらわは、京へ上ります。」

「兵介をか。ハツハ……無理を申す。」
娘へ顔を向けて、低く兵庫介は嗤つたが、眼が鋭い。次を言え、と促しているようである。
くれないは輕く、うなずいて見せた。それから、ひと呼吸ののち、
「當地へ参る道中で、不思議な人を見かけました。」
と言つた。
「——武士かな?」
「いゝえ、女のようでございます。普化僧のなりをなされておりました。」
「……」
「江戸の友矩さまと又十郎どのの旅姿に、よく似たおふたりを途中の茶屋に憩んでおりますとき、見掛けたのでございます。わたくしの供の喜作が目ざとく見つけて、わたくしに教えてくれました。それで、茶屋を出まして、おふたりに聲をかけようと致しますと、」
「普化僧がおつたのか。」
「はい。友矩さまが、何やら聲をおかけなされておりました。」
「何故、女と見たな?」
「うしろ姿で分りました。前からなら、却つてたゞのお普化と思い込んだかもしれませぬ……」
くれないは更に詞をついで言う——
友矩、又十郎の旅装さえ思いがけないことなのに、女の普化僧とは不思議の装いであると思つたから、それとなく喜作に様子を見に行かせた。男女の語らう場ゆえ、自分が出ては氣まずいこ

ふすまの外で妻女の呼びかける聲がした。
「おゝ春か……はいつて參れ。」
兵庫介は目配せでくれないを制しておくと、靜かに應える。
しのびやかに襖が開いて、
「……おや、やはり此處におりましたのか。」
春の皺のある眦が一瞬、きつくなつた。
紅は落着いている。すつと座を譲り、
「御無理なことを御父上にお願い致しておりました。お母さまにお聞かせしてもお叱り蒙るだけでございましようから。」
「何を申したのでございますか？」
「たしかに無禮な頼みでな、兵介を五郎太夫の猶子に呉れいと申し居る。はつはゝ……そちが聞けば、言語道斷であろう。」
「それで、何とお答えなされました。」
「きまつておろう、斷つた。」
それから優しい目で紅をかえり見た。
「今も申した通り、春がこの有樣じや、殘念ながら辭退すると舅どのに傳えてくれい。」
「は、はい……」
「――さ、話がきまれば、もう夜も遲い。ふたりとも、下つてやすむがよいぞ。」

言つて、矢庭に身をひるがえすと街道わきの木立へ紛れ入つた。

友矩は追わなかつた。通行人もあることで、騒ぎ立てられるのを惧れたものであろうか、又十郎を促すと、喜作が呼びかける遑もなく、足早やに名古屋へ向つて立去つた――というのである。

「……わたくしは、喜作の話の模樣で、おふたりの跡を追うのはやめに致しました。どうせ、當地へ參られるときまつていますこと、お父上の許へも、おふたりでお立寄りなされているに違いないと存じたからでございます。それで、女の足並でゆつくりこちらへ參つたのでございました。でも先程、お母さまに伺いましたら、まだ友矩さまはお越しなされていないそうでございますね。それが、不思議でなりませぬので、このことお耳に入れておこうと思いました。」

「……」

「それから、もうひとつ、――丁度あれは、鳴海の宿場をすぎたあたりでございました。夕姫さまとやら申す今のお普化が、わたくしを追越しなされたのでございますが、しばらくして、その普化僧姿を、ふしぎそうに呼びとめたお美しい旅の姫君がいらつしたのです。」

「?」

門

「もうし。まだおやすみになりませぬのかえ?」

兵庫介は、確かに、だが腹へのむのだ。朝陽がまさにのぼらんとする時、東天に向つてその太陽の「光り」を、のむ。一說に、これは無類の不老長壽の法とも云われるから、好奇の讀者はこころみに驗してみるとよい。一定量を嚥むと、水と同じで、あとは一口ものめぬそうだ。そうして、充分に大氣を嚥んで暫らくすると、胃から腸にかけてゴロゴロ腹が鳴り出す。尾籠な話だが、やがて噯氣と放屁で體內から排出されるわけだ。「空氣が旨い」とよくいうが、馴れれば本當に空氣の味が舌で味わい分けられるそうである。

柳生兵庫介はこれを、「神氣を頂戴する」と名附け、好天の朝には必らず行うのを習慣とした。爽かな空氣を以て、體內の惡質ガスを排出する手段と解しても、たしかに健康には奇效がありそうである。

さて此の朝、充分に神氣を「頂戴」して兵庫介が座敷へ戻りかけると、棟つゞきに、くれないや春の眠つている座敷の雨戶が一枚、すつと明いて、もうきちんと著替えをすました紅の白い顏がのぞいた。

「お早うございます……」と言つた。

「おゝ、もう起きたか。」

「はい。母さまはでも、まだおやすみ……」

「うむ。疲れがこのところ續いたでな。充分に、やすませてやるがよい。」

兵庫介は白の寢卷に白い帶ひとつ。むろん丸腰である。庭石づたいに、ゆつくり緣側へ戻つた。

兵庫介の傍らには、先刻の刀を手入した布はもはや見當らない。春が隣り座敷へはいつて來た音に素早く座蒲團の下へ敷いたのである。

「では、おやすみなされませ。」

先ず春が兩手をつかえた。

尋いでくれないいも母と並んで、深々と頭を垂れる。顏をあげるとき上眼にじつと父の表情を讀んだ。

それからニツコリした。

翌朝。

兵庫介が寢所を起き出たのは習慣どおり卯の刻（午前六時）である。嗽水をつかう前に、しらじら明けの庭に降り立つて朝露をふんで爽快の大氣を嚥む。

普通、食道と氣腔は異なるから、空氣は吸うことは出來るが嚥み得ない。水が鼻から入ると困却するのと同じ理窟である。だが熟練が足りると、自在に空氣をのみ下し得る。ごくん、ごくん、氣持のいい音をたてて嚥下するそうである。

はるかに、曙の空へ向つて兵庫介はそれをした。大きく口をあけ、兩手を脇腹に當てて、朝氣を嚥む。常の者がこれをしたのでは、如何に大きく吸い込んでも肺へ通じ、肚には溜まらない。のもうとした刹那には、空氣は鼻孔からにげる。

醫學的說明を俟つ迄もなく、人體がそういう構造になつているので、食物が氣管へ通らぬように出來ているのである。

「さあ……」
「よい。よく世話を致してくれた。殆んど一睡も致さなんだであろう。——春へはわしから申し聞かせておくで、今日一日、ゆつくりとやすむがよいぞ。」
昨夜、春とくれないが兵庫介の寝所をさがつてから、小半刻もした頃、庭に忍び寄つた跫音があつた。
「柳生どの、……柳生どの……」
聲を殺してホトホト雨戸を敲く。
兵庫介は起き直つて枕許の太刀を引寄せたが、たまたまこの時、厠へ立つたくれないが物音に氣づいたらしい。
遠い座敷の方で雨戸を繰る音がして、
「どなたさまじや……？」
氣丈に、そつと問うのが聞かれた。ついで「あつ。」と聲のむ氣配。
兵庫介は動かずに耳を澄ました。松平伊豆守差廻しのあの刺客達が再び襲つて來るとは考えられない。熱田神宮境内で討ち損じた多三郎の襲撃なら、もつと堂々としている筈だからである。
——と。
「申譯ござらぬ……か、かゝる姿で……」
呻くが如き男の低い聲がした。
「ともかくおあがりなされませ。父を、父を直ぐ呼んで參ります。」

くれないが一旦内へ姿を消して、縁側づたいにその前へやつて來た。寢不足で目が赤く充血している。

ちよつと聲をひそめて、

「昨夜のこと、御存知でございますか？」

うかゞうように訊いた。

「刑部どののことかな？」

「ハイ。」

「春は、氣づいたか？」

くれないは父の顏に見入つて、かぶりを振つた。

「もう、おやすみなされておりました……」

「何處に匿もうたか？」

「わたくしの一存で、中二階のお部屋に忍んで頂いておりまする。」

兵庫介は障子を充分に開け、おのれの部屋へはいる。

「參れ。」

目でうながした。くれないがついてはいつて、障子を閉めようとするのを兵庫介がとめた。

「詳しいことは、いずれ刑部直々(じきじき)に訊こうが、傷は、深いか？」

「よくは分りませぬけれど、よほどの深手と存じまする。」

「相手は誰じやと申したな。」

「左程の傷か。」
「御意。」
「斬つたは？」
「山田浮月齋――」
「何？」
「刑部どの、以前にも柳生兄弟を浮月齋一派より救い申した由にござります。――或いは、そのゆきがかりかと。」
「場所は？」
「當屋敷近くの由でござる。」
靜かに庭で朝陽の玉が葉洩れにサヤサヤ搖れていたが、兵庫介はふと視線をそれに注ぐと、
「いよいよでは浮月齋、尾張まで參つたか。」
低く、つぶやいて、
「よい。大儀であつた。――さがつてくれい。」
もう見臺に目を戻していた。
三之亟は、これ又落着きはらつて道場へ引返して行く。實はこの時、他流試合と稱して容貌魁偉の修驗者が道場へ乘込んでいたのだが、三之亟、一言もそれには觸れなかつたのである。あつさり片附けるつもりだからだ。
三之亟が道場へ戻ると、待ち兼ねた如く、

「いや、かゝる夜中にお起し致しては御迷惑……それより、今宵一夜、いずれかへかくまつて頂けまいか。傷の手當は、來る途次にて致し申した。……ど、何處でも、人目に立たぬ場所で……」
その時からそれが友田刑部と兵庫介は察している。天蓋笠が雨戸に觸れる音を聞いたからである。併し、何故か座を立つては行かなかつた。
くれないが手をかして、家へあげる氣配がした。ついで何處かへ紛れ去る跫音を聞き取ると、靜かに兵庫介は身を横たえたのである。
くれないが寢所を出て行つて後も、一向に兵庫介は刑部の居る中二階へは樣子を糺しに行かなかつた。常のように嗽水をすませ、朝食を採り、見臺を立てて書見をする。そのうちに清巖、茂左衞門、妻女春と、順次朝の挨拶を述べに來る。
春へは何事かを囁いたが、平靜な表情だつたから家人の誰も怪む者はなかつたらしい。――ただ春がうなずいて、緊張の面持で去つたあとに、高田三之亟が呼ばれて來て、
「御用でござりまするか？」
と尋ねたとき、
「友田刑部が手負うて二階にやすんでおる。樣子を、見て來てくれぬか。」と言つた。
いくらか三之亟の顏色があらたまつたが、これも肚は出來ている。
「然らば、」
落着いた態度で座敷を出、暫らくして戻つて來た。
「……おそらく、駄目かと存じまするぞ。」

「あたりまえじや。爺が勝つてくるるまで動かぬわい。」
「はつは……修驗者どの。お聞き及びの通りでの。この場にて直ちにお相手つかまつろうか。」
「うぬ。……然らば、お主ともども其處な小僧も打ちのめしてくれるわ。」
言つて、道場の端へ走り、刀架から手頃の棒を摑み取つた。他流試合の場合の稽古に、道場には各流派の木刀、棒などが備えられていたものである。
修驗者はその一本を摑み取つた。
口では負けず雜言を吐いたが、三之亟も充分に素早く用意をとゝのえる。
兵介は、むずと口を結んで道場中央を動かない。
やがて、兩者は一禮してさつと構えた。三之亟は兵介を庇う位置。修驗者はそれから充分の距離をとつている。
門弟達にすれば、他流試合の相手が三之亟に手もなく打たれるのはもう見馴れているので、さして緊張の面持でもなかつた。——が、意外に試合は永びいた。
修驗者が、防備一方の構えを崩さなかつたのである。仕懸ければ、逃げる。色を見せれば、更に逃げる。それでいて不思議に手剛い氣概が棒の構えに感知される。
三之亟の表情が曇つた。とび込んで打てば雜作もないが、相手は當初から打たれる覺悟で此の場に臨んで來たと、ようやく見抜いたからだ。何のために負けに來たのか。その邊の眞意が汲めぬだけに、却つて躊うものがある。三之亟は相手の眼を覗き込んだ。
丁度その頃、ねむらなかつた紅に送り出されて、柳生家の門を出た虛無僧姿の人物がある。——

「兵庫介どの、何と申されたかい？」
修驗者が目をむいて問うた。どつしり、道場の一方に坐り込んでいる。
「ちと所用でな。師範代の某に御相手申せとのことじや。不服でもござろうが、ま、一手、お教え願おうかの。」
三之亟はこの頃五十七歳、年より若く見えたが、背は低い方だから一向に風采があがらない。
「何、所用？……では、この九鬼法眼に相手致すが恐しいか。うわつはつはゝ……」
傍若無人に破顔したが、三之亟は顔に蠅がとまつた程にも色を變えない。
「爺、そちは默つておるのかい。」修驗者とは對面に、むずと小さな體で道場に坐り込んだ兵介が黄色い聲をあげ、修驗者を睨みつけた目を戻した。
やつぱり三之亟をにらみつけている。
「なになに、左樣お怒りなさらずとも、この爺が打ちのめして見せましようでな。それより若、あれほど、短氣は若の缺點よと常々おいさめ申しておるに、あの樣な馬鹿者が廣言で短慮めさるとは、お情け無いわ。チト愼しまつしやれ。」逆に、めと睨みつけた。
修驗者が激昂したのは當然だろうが、もともと柳生道場へ他流試合に來るほどの者にしては、その態度が萬事輕薄すぎる。或いは別に含む處あつて、わざと傍若無人の振舞いに出ているのかも知れない。――と、他の門弟達はまだ何か釋然とせぬ面持だ。
三之亟は、その門弟達を壁板に一列にならばせた。
「若、若はこゝに坐り込んでおられましような？」

あとの治助に聲をかけておいて、内玄關から屋内へはいつた。

柳生家の道場は、庭石づたいに内庭からも往反出來るように建つている。くれないは昨夜來・睡もしていないから、ようやく睡氣をおぼえたので、母の春に詞をかけて居間にこもるつもりにでもなつたのだろう、内庭を左に見て母の座敷へ廊下を行きかゝると、

「――おつ。」

掛聲とともに、天から降つた如く矢庭に目前の庭へ棒立ちに空から男が降り立つた。

「――あつ……」

さすがに柳生兵庫介の娘という自恃がある。と胸はつかれたが、悲鳴は嚥み怺え、

「――何者じや？」

聲低く、鋭く相手を見る。本能的に右手（めて）は胸に添えて、懷劍の錦の袋を帶から抜き取ろうとしていた。

「しツ……怪しい者ではない。わしは霞の多三郎という――。屋敷をいま出て行つたあの人物、そもじの父、兵庫介であろうな？　それさえ申してくれるなら、そもじに手出しはせんぞ。」

野袴に草鞋きやはん。なゝめに太刀を背負つているが覆面ではない。炯々たる眼光でくれないをヒタと見詰め、皓い歯をみせた。

天下の兵法者柳生兵庫の屋敷に、白晝、堂々と襲つて來るからには餘程の劍術者にちがいないが、それにしても、目と鼻の道場には、高田三之亟以下諸大名に指南役で抱えられるぐらいの達人は常時ひかえているのである。くれないが一語、聲をあげれば押つ取り刀でかけつけてくれよ

呼(よび)續(つぎ)の濱(はま)

くれないに送り出された虚無僧は武家屋敷町を西方へ歩いて行く、くれないは何時までも門のかどに佇んで、虚無僧姿が邸の塀をまがり去るまで見送つた。
「御油(ごゆ)の御内儀様――あれは、どなた樣でございますかい。」
くれないの傍ら二、三歩うしろで、同じように見送つた門番の足輕が尋ねると、
「さあ、誰でしようねえ……」
くれないは白い咽喉で愉しそうに笑つて、
「治助もずい分と永い間の御奉公をしてくれましたなあ。もう、何年になりますのじやえ？」
「はい、お屋敷へ御奉公して十二年でございまするぞ。はじめて當家へお目見得に參つたころは、御内儀さまはまだ、女童(おんなわらべ)でござりました。」
「ほんにそうじや。……丁度いまの兵介ぐらいであつたかしら……」
「覺えておいでなされますかい。」
「おぼえています。治助が、お嫁をもらつたころのことも。ほゝ……」
巧みに、笑いに紛らせて玄關へ踵を返すと、
「頼みますぞえ」

「む？」
「あのお方を、何者と知つて斬りました？」
「もと坂崎出羽が家臣、友田刑部――」
「それが分つて、何故斬ります？……あのお方に何の罪がありましたのか。」
「そもじには申しても分るまい。強つて知りたくば兵庫どのに聞かれよ。」
「待ちや。」
「？」
「――逃げますのか？」
くるりと多三郎は向き直つた。
「逃げはせぬ。」
ゆつくり、彼女の顔を見つめて云つて、背に負つた太刀の下緒を胸のあたりで解きかゝつた。
バラバラと其時には庭の樂影から道場の內弟子が驅けつけている。
「各々方、く、曲者でござるぞ。……出會われい。」
庭のうしろへ向つて呼びかけ、屋內へ叫び掛ける。主だつた弟子は道場でこの時はまだ高田三之亟と修驗者との立合いを見ているので、多三郎を囮んでいるのは、目錄も得ていない連中である。
――四人。
多三郎はするすると樹の下まで退つた。さがりながら素早く下緒を解いて、太刀を胸前で水平

う。

——無論、相手もそれぐらいは覺悟の上で庇から飛降りたに違いない。侍女の春は何處の居間、女中の誰は何處、家來は何處、すべて樣子はうかゞい見ての行動にきまつている。ひつそり、庭にも鍵の手の廻り縁にも家人の動く氣配がない。

「云つてくれい。……今のは、兵庫介であろう？」

「……」

「そうか。そもじのその眸で讀めたぞ。矢張り、兵庫じやな。——よし。」

うなずいてから、不意にニツコリ笑つた。

淺黑い緊つた容貌にくらべてあまりその微笑が爽やかすぎたから、くれないは却つてハツと、息を吸う。

「もうひとつ、訊くが——」

相手の頰から直ぐ笑いは消えた。

「昨夜、當家へ手負いの虚無僧が紛れ込んでおろう。……あ奴、絕命はまだせぬか？」

「——」

「教えてくれい。それを聞けば用はないのじや。」

「——」

「……そうか。あれだけの深手で……」

「多三郎、と申しやつたな？」

緣側から春が云つた。
それから春は多三郎に向い、
「お前さまは、此處を柳生兵庫介の屋敷と知つて押入りなされたのか？」
「如何にも左様――」
「ならば主は居りませぬ。長男淸殿も今出掛けたばかり。御用があるなら、このわたくしが承りましよう。」
「用は濟んだ。」
「なれば怱々立退いて頂きましよう。」
「成程。それは當方とても希むことじや。……が、御身いま、出掛けたは淸殿とか申されたな――まことか？」
「……」
「？……」
多三郎は春を見詰め、目を轉じて廻り廊下にくれないを見る。らんらんと眼が光り出した。その眼へ「やつ。」と叫んで竹村が打ち込んだ。多三郎は體をひらいて泳ぐ竹村の肩を斬つた。ぱつと血が四散し、其の場で竹村は死んだ。
「無益の殺生を致し度うはないぞ。」
多三郎は他の三人を睨んで言つて、
「内儀、まことに出掛けたは兵庫ではなかつたのか。……ちえーつ、……失敗つたかい。」

に横にして突出し、右手で柄、左に鞘を持つて何時でも抜く身構えをした。

廊下に兵庫介の妻女春のあらわれたのは此の時である。

春はおのが居間で障子を閉め立てて縁側からの明りに縫物をして居つた。腕白者兵介は三日に一度は、きまつて着物の袖附を綻ばす。前を裂いている事もある。稽古着と着替えずに内弟子を相手に棒キレなど振廻わすからである。そんな繕い物を、この時も針箱を引寄せて春はしておつた。

その時、門弟の何やら叫ぶのを耳にして、ちよつと針をやすめ、庭の氣配をうかゞつてから、膝にひろげた繕い物を押入に片附けて、縁へあらわれ出たのである。

既に曲者は幹を背に、太刀を片手に抜き放つて構えていた。春は取亂さなかつたが、曲者も、縁側に立つ春を逸早くみとめる程に落着き拂つている。

弟子は全て稽古着姿で、手に手に薪や手頃の樫の木刀などを握つているが、眞劍を持つている者はひとりもなかつた。

四人のうち、年長の竹村和也というのが何氣なく庭を通りかゝつて多三郎を發見した。おどろいて相弟子を長屋から呼び寄せたが、驅けつけてみると成程、くせ者がいる。併し、いそいで刀を取りに引返すのは何か、敵にうしろを見せると思われそうな心理から、其の場で手當り次第に得物を把つて、多三郎を取圍んだのである。

「仕懸けてはなりませぬぞえ。」

する。——よろしいな、此處で、お待ちなされるのじや。」
云い残すなり、道場のはずれの控えの間へ入つて差料を摑み取る。
「曲者というは如何ような風態じや？」
再び道場を横切つて戸口を出るとき、注進して來た弟子に尋ねた。
「は。たゞの浪人者と見うけまするが。屋根より傳い入つたものらしゅうござる。既に、竹村は相果てておりまする。」
「何、屋根づたいに參つたと？」
三之亟の顔色が變つた。
彼は出かゝつた戸口を一たん道場へ振り向いて、
「各々は來るに及ばぬ。それより、必らずとも若をお護り致してくれい。」
それから、道場中央に坐り込んだまゝの兵介へ、
「若、よろしいな。くれぐれも其處をお動きなされてはなりませんぞ。」
「うん。」
兵介はニツコリ笑つて見せたという。三之亟ははじめて刀の柄にしめりを吳れ、庭へ向つた。
それと丁度同じ刻限である。柳生家の門を出て西へ向つた清巖が築出（つきだし）鳥居崎の邊にさしかゝると、前方から三人連れの尾張藩士が遣つて來た。
いずれも下城の途次に何處かへ立寄つての戾りらしく、上下（かみしも）姿で、中間を供につれている。何やら聲高に喋つている。その話しぶりでは、築出町の西に裁斷橋というのがあるが、その橋の議

齒ぎしりして呻くと、返り血を浴びた體で斜めに、二歩、三歩と幹を離れ出した。
——その頃、物置めいた薄暗い中二階で、まさに息を引取ろうとする友田刑部から何事かを柳生兵庫が聴き入つている。……

こちらは道場だ。
不可解な修驗者の構えにようやく高田三之亟が氣疲れを覺えていると、其處へ内弟子のひとりが驅け入つて來て、
「一大事でござる。く、曲者がお屋敷の庭にてあばれておりまする。」
と注進した。
「何？……」
他の弟子達が色めき立つ。
「さては汝、我らを此處へ釘づけせんため狂言を致したか。」
言つて、高田三之亟は忽ち躍り込んで相手の棒を叩き落した。同時に、空を摑んで修驗者は其の場にのけ反つてタラタラ眼から血を流した。
三之亟は言つた。
「こ奴は庭の曲者と同類に相違ない。後日吟味のために引捕えておけい。」
そう云つて、二、三の弟子に指圖を與えると、
「若、若は此處を動いてはなりませぬぞ。お庭の曲者、かならずこの三之亟が成敗致して參りま

「さればかように謝罪致しております。何卒――」
「えゝい……ぬ、ぬげと申せば脫がぬか！」
彼等の一人は、清嚴が藩主義直公の側小姓をつとめた頃の上役で、平田春一郎と云つた。四十過ぎた溫厚な人物である。それが中に割つて入つて、
「まあよいではないか、あの樣に詫びていることじや。許してやりなされ。」
と言つた。却つて相手は怒つた。
「おのれ……」
天蓋を脫ごうとせぬ清嚴へ拔き討ちを懸けたのである。
「何をなさる。」
あやうくとび下つて太刀をかわすと、更に相手は二の打ちを懸けて來る。
清嚴は思い餘つて尺八を取直しその刀を敲こうとした。手許が狂つて、逆に尺八の尖端が削られた。
「こ、これほどお詫び致しておるに、何たる無體をなされる。……」
「默れ。うぬこそ不淨の身で反抗するとは、もはや勘辨ならん。――覺悟せい。」
叫んで、眞向に太刀をふりかぶる。清嚴は思わずとび退つて、其處で色を失つた。
削られた尺八の尖端から何やら金の刺繡が覗いている――

論らしい。

橋の欄干には銘があつて、天正十八年六月十二日に、相州小田原の陣中で討死した堀尾金助なる者の追福のため此橋を架けたと記されている。施主は母だが、その母の生國を言い爭つているらしい。

清嚴は遠慮をして充分に道をひらいて行交した。併し馴れぬ虚無僧姿とて右手の尺八が、一人の鐺を掠めたのである。

「無禮者……」

議論で氣が立つていた最中だから、相手は怒つた。

「武士にむかつて何たる無禮じや。その笠脱げい。」

と言つた。清嚴にはそれが出來ぬ。

先程、父兵庫介に呼び寄せられ、時刻をはかつて呼續濱に出向いて彳んでいよと命じられたのである。

「わけはいずれ、歸宅の上にて明かすこともあろう。虚無僧姿で出向くのじや。途中、いかなることがあつても天蓋を取つてはならんぞ。——よいな。」

とその時兵庫介は言つた。

——そのことがある。

「これはこれは、とんだ粗忽を致しまことに以て申譯がない。どうか、御かんべん下され。」

「ならぬ。詫びを致すに天蓋も脱ぎおらぬ……ぶ、無禮な奴。」

物がとび出すようなことがあつてはならないのである。

——どうしても、守勢であつた清厳の構えが一そう防禦的になつた。

こちらは山崎甚左衛門だ。

日頃傍輩から眞劍の强さを矚望されている手前、太刀を拔いたとあつては相手を倒さねば面目がない。

たかが虛無僧と見くびつたが、存外出來る敵と、心得があるだけに甚左衛門も見てとる、いよいよ闘志が湧く。穿いていた草履をうしろへ脱ぎ撥ねて、袴の片袖を拔いた。太刀は手直りのする來ノ國俊である。

「おのれ、いずれは名のある使い手の門下であろう、わしは當尾張藩士山崎甚左衛門じや。當方名乘りあげたからはその笠取つて、尋常に勝負をせい。」

と云つた。

「……」

清厳は爪先でわずかずつ詰め寄つた。

平田春一郎と、今一人の朋輩も事がこうなつては最早とめようがない。甚左衛門の中間が、萬一の場合は主人に殉じようと早くも決死の顔で甚左衛門から數歩さがつて、同じように虛無僧を睨む。

「嘉助、手出し致すでない。ひけ。」

平田春一郎が低くたしなめたが耳にはいらないらしい。じりじり主人の詰め寄るにつれて嘉助

雌雄

虛無僧姿の淸嚴に斬り掛つたのは大番組で百二十石、山崎甚左衞門という。頗る短慮者で傍輩からも常に注意されていたが、氣が短いは幼少からで、それをあらためるため自らも心を練る工夫にずい分と武藝を修めた。

家中では、太刀すじは多少荒いが實戰に却つて凄味を見せるであろうと噂される達者である。父の甚五兵衞は既に致仕して悠心齋と號し、これは柳生兵庫介とも昵懇の間柄で折々屋敷へも訪ねて來た。

淸嚴はそれを知らぬ。悠心齋なら來訪を迎えて父の座敷に挨拶に出たこともあるが、斬りつけて來た相手がその次男とは知らなかつた。

短慮者というだけで、あつさり敵の力量を輕視したから刀を叩き落すつもりが逆に尺八の先を削られたのである。

（油斷のならぬ相手……）

淸嚴の全身が緊張して相手との距離を必要以上にひらいた。

尺八の先きにのぞいている卷物が何かは淸嚴は知らぬ。併し、虛無僧姿で呼續濱に立てと命じた父の意圖が奈邊にあつたかは、おぼろ氣ながら察しられる。尺八を存分に振つて、萬一中の

いつの間にか周圍に輪になつて通行人がたかつていた。清嚴のよろめきにつれてそれが一方へ崩れ散つた。
ほとりと、清嚴の手から尺八が落ちた。

この時人垣に立ち混つて勝負の樣子を眺めていた深編笠の武士がある。
虚無僧が斬られて人々がどよめき搖れても終始彼は其處に佇立して動かなかつた。
わずかに編笠のふちを持ち上げ、獨眼が冷やかに光つている。
旅姿の柳生十兵衞である。
當然、尺八の尖端に燦くものを見ていた筈だが彼は清嚴を助けなかつた。——何という冷酷さ。同じ柳生一族の身で、ともに武藝帳の行方探索に參與しながら、父但馬守宗矩と兵庫介の反目に彼も亦准じたのである。
右によろめき、左に傾きつゝやがて清嚴は歩むのをやめた。上體がゆれている。どうと大地へ倒れる寸前の姿勢だ。
山崎甚左衞門は、別に虚無僧に意趣があつたわけでなく、相手の無禮に怒つたまでで、一太刀浴びせればそれでもう滿足である。別に更に太刀を振つて死命を制する必要はない。そうでなくても相手は深手だ。
「たわけ者が。」
一喝して、餘裕綽々、よろめく清嚴の前で懷紙を出して早くも太刀の血のりを拭つた。

の逞ましい腓（こむら）に力の瘤（こぶ）がかたまつた。

清嚴はやむなく尺八を片手靑眼につける。後退すれば斬られる。立合うと覺悟をきめた以上は、太刀と尺八の長短の差で間合の勝負をしなければならぬ。即ち長短のスペースが生死の分れなのである。來ノ國俊の刃渡り二尺四寸前後で立動けば必ず負ける。尺八の長さ――一尺八寸まで間合をせばめて擊ち合えば清嚴が勝つ。雙方じりじり間合を詰めていつた。二尺四寸の境が清嚴の危機だ。

午下（ひる）りの陽がこの時雲間を出て甚左衞門の鋩先（きつさき）に燦然と光つた。それ以上に尺八の先から金色（こんじき）が耀いた。

「む？……」

甚左衞門は一瞬目を射られる思いがしたが、尺八の尖端に驚きの視線を注いだのは彼ひとりではなかつた。平田春一郎、朋輩某（なにがし）とて同樣である。

やがて充分の間合になつた。

「やつ。」と雙方同時に叫んで躍り込むや二條の光芒が交叉した。その一條は血の絲を引いた。

「見たか！」

と甚左衞門は叫んだ。ゆらゆらと虛無僧は蹣跚（よろめ）いて、だらりと尺八を下げ、袈裟が半ば千切れて絹布の小袖に肩口からすーと血のすじが走つた。

「……む、無念……」

がくりと天蓋が胸へ垂れる。それでも猶死力を盡してふらふらと五、六歩あるく。

「無禮者退れ。」

力まかせに傍から十兵衛の肩を突きとばそうとしたがヒラリと體をひらいて、

「邪魔じや。」

拔く手も見せず一刀にさつ、と斬下げた。

甚左衛門は毬の如く跳躍して背を大地に當てて即死した。顔を兩手で覆つていたそうである。頭蓋が眞二つに割れていた。

平田は聲を發する遑もない。返す刃に裃の肩ごと斬り落された。その日のうちに平田はおのが屋敷に擔ぎ込まれて死んだ。

十兵衛は今ひとりの傍輩某を、中間とともに二つ胴に斬つた。それから尺八を拾い清巖の突伏したそばへ寄つた。

「しつかりせい。」

落着いて、勵まし、驚愕仰天する人々を掻分けて裁斷橋の架つている川下へ姿を沒した。土地の者はこの川を三途川と呼んでいる。橋詰に姥堂が在るからである。この時の光景を目撃していた一部の者は、たしかに深編笠の武士は手負いの虚無僧を抱えて姥堂の裏へ走つたと云い張つたが、誰ひとり其處まで尾けて見た者はない。

半刻程のち、注進する者があつて奉行所から同心が現場へ來た。平田脊一郎はこの時擔がれて邸へ歸つたが、既に舌は硬直し、物を云い得なかつた。

尚、裁斷橋の東二町ばかりの所に一堆の塚があり、頂上に松が四本植えられた。世人これを「甚

パツと白紙が足下へ捨てられる。
それを合圖の如く淸嚴はがくりと大地に手をついて伏した。
「待て山崎。」
平田春一郎が呼びとめたのは甚左衛門が虚無僧へ近づいてその天蓋を脱がし取ろうとした時である。
「まだ危いぞ。先ず待てい。」
と云つた。
それからツカツカと進み寄つて、轉がり落ちている尺八を不審そうに改めようとする。
柳生十兵衛は默つて其處へ歩み出た。
「な、何者じや？」
平田春一郎の拾い上げようとする尺八をむずと踏んづけている。
「見らるる通り旅の者じや。」
「う、う……ぶ、無禮者。武士に向つて何たる橫着……その足引けい。」
日頃溫和な平田が嚇怒したのだから、よくよくのことである。
激怒の聲に甚左衛門が振り返つた。
「や、うぬは？……」
平田は學問は立つが武技は切紙程度である。上役の身に萬一の事あつてはと甚左衛門は駈け戻つて、

木々の間を庭へ出るときから高田三之亟の方は多三郎の動きを見取っている。歩きたがら襷を締め直した。

「おゝ……三之亟、來てくれましたか……」

縁側ではるも愁眉をひらく。三之亟に勝ちを制した者まだ一人として無いとは存も知っているからである。

「何、三之亟？」

多三郎の眼が光つて、すつと庭のはずれに姿を出した人物を見た。

「や、――そうか。」

と云つたが、活き返つた如く表情に明るさが戻る。

「……おもしろい。お主が相手とあらば此處へ參つた甲斐があつたぞ。――三之亟、うぬとの勝負なれば何處までもこの多三郎表藝の兵法で致す。よいか。霞流にも武藝はあるぞ、見せてやる。來い……」

と云つた。

三之亟は無言だ。

相手を嘲笑も罵りもしない。

「當家あるじ柳生兵庫に代つて高田三之亟、相手を致す。」

と云つた。

それからツカツカと進み出て、左手で鍔元を持ち右手を前に泳がせて跨をひらいた。手が柄に

左が松」と呼ぶのは後年のことである。甚左衛門の供養に悠心齋が植えたものだという。甚左衛門には子が無かつたので悠心齋は致仕していたのが再び義直に仕え、家督百二十石を享けた。

一方、清嚴は表向き「病氣のため」こゝで致仕したことになつている。甚左衛門に受けた傷が實は理由である。——二年後、寛永十四年、傷の治療に有馬に入湯していた折、島原の亂がおこつて義によつて松倉長門守の客分となり、出征して戰死をしたと『尾州柳生家系譜』にあるから、左程の深手ではなかつたのだろう乎。

話は戻る。

柳生兵庫の屋敷の庭では多三郎と高田三之亟が對決した。

三之亟の庭へ來るのを紅（くれない）が最初に認める位置に在つた。

彼女の目に動いた歡喜を多三郎は見落さなかつた。

「?……」

目前の内弟子三人は物の數ではない。彼は庭をつたつて逃げる手段を講ずるため故意に一人を斬つたまでだ。

虛無僧姿で出掛けたのが寔に清嚴なら、兵庫介はこの屋敷の何處かに居る。天下に、多三郎の怖れる相手——たゞひとりそれは兵庫介利嚴なのである。如何に自負しても、『西江水の構え』はまだ會得するに至らぬ……

左へ左へと多三郎が後退しはじめた。くれないの歡喜を、兵庫介の來る意味にとつたのである。

「おゝ！」

ぱつと多三郎は下段に取る。らんらんと眼が光り出した。生れ落ちるなり野邊に捨てられ陰流の忍者山田浮月齋に人里絶えた山で鍛えられてきた武力である。下段の太刀先三寸に必殺の祕技がある。

高田三之亟はじりじり迫つた。まだ右手は刀にかけない。一瞬を誤れば、斬られるのは三之亟自身である。必死の色で次第に顏が靑ざめてゆく。未だ曾て、柳生兵庫介を除いてこれだけ怖るべき靑年と太刀を交えたことはない。術に於ては、三之亟に一日の長もあろうが、體力の差は對峙が長びくほど三之亟の不利となる。

次第に時が移つた。

廻り廊下ではくれないが、緣側で春が、息をこらしてなりゆきを見戍つている。彼女達にも三之亟の皺の多いひたいに靜かに汗の流れるのが見えた。庭は不氣味な靜寂に占められた。

それが却つて不安をつのらせたが、來るなと止められていた道場から、ひとり、ふたりと、先程の高弟たちが姿を見せる。そうして棒立ちになつて息をのむ。

たしかに兩人のうち一人は次の刹那死ぬのが目に見えている。白刃が一閃すれば生と死の二樣の運命が眼前で分たれる。いずれが勝つにもせよ、そういう生死を劍ひとすじに託した武藝者のきびしさと一種の神聖感が庭には滿ちていたから、門弟達も容易に三之亟に味方して多三郎に斬りかゝることを忘れた。それほど兩者の對決は嚴肅に見えた。門弟達も武藝者なら、いつそ一切を對決する兩者にゆだねるのが武藝の眞諦とも思えたのであろう。

かゝれば一瞬の勝負だ。
多三郎の表情が固くなつた。
「居合で來るかい。」
と云つた。
三之亟は應えない。實に嚴粛な眼で相手を見詰める。多三郎の非凡を三之亟は知つているのである。
「多三郎。三之亟が末期の言葉じや。武士たる者がもはや忍びを修むべき世ではない。天はお主の武藝を惜しもう。心を洗つて、兵法の何たるかを今一度考えてみよ。」
と云つた。
「何をぬかす……」
「まことじや。お主ほどの妙手なればいずれの藩にても、」
「うるさい。——」
多三郎の頰に皮肉な嗤いが痙攣めいてうかぶ。
「餘計な御託をほざきおつて、その實、兵庫介の助に來るを待つておるな？」
「ぬつ……」
三之亟の面にパツと朱がのぼつて、
「そうか……」絶望的に憐憫の色が眼にうかんだ。「そこまで僻んで受取られては是非もない。——惜しい男じやが……ゆくぞ。」

庭からはコソとの物音もない。遂に耐えかねてか、又ひとり門弟がそつと姿を消して往つた。

「たわけ。」

不意に吐き捨てるように木刀を摑んだ弟子が言つた。同時にびゆつと唸つて木刀が振り下された。

さすが强情の兵介も、ぎよつと肩をすくめて振り向く。膽がすわつているようでも、そこは十歳のまだ少年だ。「あつ。」と黃色い叫びをあげた。

修驗者は隙をぬすんで、先刻三之亟に敲き落された八角棒でも拾い上げようとしたのか、出鼻をしたゝかに搏たれ、鼻を片手で抑えて身を屈しておつた。おびたゞしい血が指の間から滴り落ちた。

「溫情をかけてやろうと思うておつたに――」

弟子は言つた。

「やい。おのれがような卑劣漢は、こうしてくれる、その手を放せい。」

更に二度、三度と木劍を揮つて修驗者の面體（めんてい）を打つた。

「やめてやれ、高崎。抵抗出來ぬを打ち据えるも卑怯じやぞ。」

見兼ねたから兵介が言う。

「御尤もじや。併し若、こやつは棒を摑んで若を狙い打とうと致しましたぞ。」

「何。」

兵介は視線を門弟から修驗者へ移した。

音なく右手が動いて三之亟は遂に刀の柄を握つた。

御　堂

道場の武者窓から、紅葉した欅の葉のそよぎが兵介の眞正面に見える。ひとり去り、ふたり去り、高田三之亟に踏みとゞまれと云い含められていたのに、庭の曲者が氣になるかして、そつと道場を出て行く門弟がいつの間にか迹に二、三人を残すのみとなつた。

兵介はそれでも、じいの言葉を守らねばならないと思つて、じつと欅のそよぎを睨んでいる。自分とて年はまだ子供であるが、多少は遣えると兵介は私かに思つているのである。曲者の一味らしい修験者は、先程からようやく我に返つて眼からこぼれる血を拭つている。その前に、これは動くこともならず樫の木刀を握つた門弟の一人が、庭の様子を同じように氣にしながらも、

「やい、おのれは庭の曲者と如何ようの間柄じや。申せ。高田先生の來られる迄に白状するが、おのれの爲であろう。――默つておると、叩きのめさるるがオチじやぞ。」

木刀を振りかぶらんばかりに睨めつけた。三之亟の戻つて來る迄に、少しでも曲者の正體を明かさせ、それを報告したいと單純に考えての嚇しである。

併し自棄的な冷笑をうかべて、無言に修験者は眼を洗つた。死ぬ覺悟は夙うから決めている態に見受けられた。しばらく無氣味な靜けさで時が經つ。半時、一時と經つ。

とまはござらん。見らるる通り、當屋敷を騷がせた詫びに拙者、この場にてハ、腹かき切り申そうで……」
「――」
「頼み申す。一時ながびけば、それだけいのちが危い……の、其許を武士の子と見込んでの頼みじや。柳生兵庫どのが三男ならば、こ、この……」
「默れ。」
門弟が威丈高に叱聲した。
「盜人猛々しいとはうぬのこと。切腹するとは、ほざきおつたぞ。」
「待たぬかい高崎。」
兵介は一途な少年の眼差で修驗者を瞶めて、
「ほんとうに、腹を切る氣かい？」
「うそは申さぬ、……この通りじや。若、早う、早う行かれぬと……」
「よし。」
兵介はもみじのような手を膝にそろえていたが、バツと起つて、
「おれも柳生のむすこじや。お前の死を無駄にはしようまい。――うん、曲者を逃がしてやればよいのじやな。引受けたぞ。」
ばたばた床板を踏み鳴らして杉戸から道場を駈け出した。

「お前は、このおれを打つつもりであつたかい。」
「……」
「やい。おれは柳生が三男の兵介じや、挑むなれば逃げはせんに、何で、堂々と申込まぬのかい。」
それから立上つてツカツカと修験者の慴伏する前へ出て、
「顔をあげい。三之亟には負けようが、おれとなら分らんぞ。やい、勝負するかい。」
と云つた。そうしてかゞみ込んで、小さな手で修験者の肩をゆすつたが、
「……あつ。」
ぺたりと其處へ坐り込んでしまつた。
相手は舌を嚙みきつていたのである。

「……若は、兵介と云わるるか、お、おねがいがある……」
硬直して、まわりかねる舌で修験者が居ざり寄つて兵介の前に、がくりと手をついた。
「な、何じやい……」
「見らるるとおり、拙者この場にて相果てる。これが末期のねがいでござる。若……、どうか、庭へ参つて、ふたりの立合い中止させて下さらぬか。」
「――」
「申すまでもない。庭の人物、拙者とは些か由縁ある間柄、……わ、わけは、詳しく申述べるい

「危い、小童。」
「ど、退かれぬか。」
雙方から二條の白刃が兵介の頭上紙一重にピタリと詰めて、とまつた。
「……勝負をやめいと云うておるわい。」
兵介のこの一言には微塵の畏怖もない。
眞直ぐ多三郎に向き直つて、
「おれはお前に申すこともあつて來たのじや。やい。傍輩は切腹しよるぞ。」と云つた。
「う？……せつぷく！」
「そうじや。舌を嚙んだで助かりはすまい。不憫じやからお前を逃がしてやるわい。――よいかい、これに懲りて、二度と屋敷へは來ないと此所で誓うて行けい。」
「……」
多三郎の太刀は先刻の一瞬後、手許へ戻され下段につけられていたが、眼は、異樣な輝やきで兵介を凝視した。ひるまず兵介の方でも見返す。無心の、おそれを知らぬ單純な眼の色である。
高田三之亟は、これも逸早く太刀を背ろへ廻して、立てた。兵介から二歩とは離れぬ位置に突居る儘だが、咄嗟に、多三郎が斬り掛ければもう死ぬ覺悟でいる。せめて兵介の身だけを守ろう肚である。
無氣味に多三郎は兵介を凝視しつゞけて動かない。
「やい、逃げぬのかい。」

兵介にすれば、子供らしい單純な好奇心で走り出たことかもしれない。强情を張つて、道場に坐り殘つてはいたが、門人の殆んどが出て行つた儘戻つて來ない庭の出來事へは、彼も大人におとらぬ關心はいだいておつたに違いないので、いえば、修驗者の要請が、庭の樣子を見にゆくことを理由づけてくれたから雀躍してとび出したともとれる。

が何にしろ、兵介は庭へ駈け出たのである。

丁度それが、三之亟のまさに刀を拔こうとする寸前だつた。

「じい！……」

少年にその場の緊迫の氣配は分らない。或いは一種の緊張は感じ取つたかも知れないが、云つてみれば兵介自身、云い知れぬ緊迫感に捉われていたのである。

「その勝負やめい。」

云つて、多三郎、三之亟の對決の眞只中へ割つて入つた。

「む、若……な、な、何をなされまするぞ。」

門弟たちがおどろいて一齊に手をのばした時は既に遲い。

「きえーつ……」

裂帛の氣合で三之亟の拔討ちが鞘走つておつた。

凡庸の者ならこの時、だから眞二つに兵介を斬つている。

一方、多三郎も追いつめられた立場で半步退つて必死の一太刀をその、下段から敵の脾腹を窺づてサツと地摺りに拂い上げていた。が多三郎も出來た。

それから高田三之亟を見下し、
「その小伜には負けようが、この次出會うたとき、うぬとの勝負はつけてくれる。」
ヒラリと向うへ身を沒した。

尾州星崎の庄笠寺（かさでら）村に天林山笠覆（りゅうふく）寺という寺がある。
むかし、聖武帝の御宇、善光上人が靈木（みそぎ）を感得し給うて、熱田明神の神勅を蒙つて此の本尊を彫刻され、初めは小松寺と號して勅願寺だつたといわれる。
ところが星霜累（かさな）つて中古、兵火のために諸堂滅び、靈像は空しく曠野に殘つて道路の涯、風雨のさらす儘に置かれていた。
或る年、鳴海の長者の侍女で美艶の女性があつて、この大悲を尊信してこゝに歩を運ぶこと數月。一日、常のように詣でていると、村雨が降つて來て忽ち靈像は雨水に浸されたから、彼女はこれを悲しんでおのが被つていた菅笠を脫いで御像に着せまいらせた。
丁度その頃、都から昭宣公の嫡男で中條兼平卿が關東への下向に當つて通りかゝられたが、ふと見ると、一人の侍女が道のかたわらに笠もなく憩んでいる。笠がないのでその面相の美しさが、風のそよぐにも痛々しいほどあらわに見える。卿はひと目でこれを見そめ給うて、鳴海の長者に乞うて都へ召しつれ歸られた。
程なく彼女は姙娠となり、遂に簾中となつたので、後年、此の土地に下つて伽藍をいとなみ、尊像を安置したのが、この寺の由緣と云われ、本尊は今に笠を被（かず）き給うので世人これを笠寺と呼

兵介が一歩ふみ出ると、たじたじと退つて幹にどつと背をつけた。
この場の思いがけぬ事態に最も魂消たのは廊下の春に違いないが、辛うじて、春はおのが胸を抱いて佇立し得た。くれないの方が兵介の來るのを見たときから、我知らず足袋はだしで、庭へ飛降り、兵介に駈け寄ろうとするのを、
「あ、あぶのうござる……」
門弟の一人に袂を引かれてとゞまつた。
「負けたか。」
悲痛な聲で、突如、多三郎がうめいたのはそれから間もなくである。
「負けたぞ、我ら浮月齋一派、いかほど未來を賭けようと柳生にこの小童在る限り、わ、われらは遂に敗北じや。……無念。」
「……」
「それにしても末怖ろしい器量よ。柳生兵庫じきじきのお仕込みか、それとも高田三之丞、お上が教えたか？」
「黙れ。」
「いいや。いかにも此の場は、多三郎、情けを受けて退散致す。――が、柳生武藝帳は、我ら一派如何ように相成ろうと必らず奪い取らねばならぬ。――小竜、おぼえておけ。わしは霞の忍者多三郎――」
そう云つて、右手に太刀、左に鞘を握つて氣合諸共跳躍してヒラリと頭上の枝にとび移つた。

清姫が訊くと、

「わしは尾張にいのちを賭けた用があるで、名古屋からは動かぬつもりじや。そもじとも、今宵が一度の契りやも知れん。併しわしは、終生、姫を忘れまいぞ。」

と云つた。

その言葉があるので、あれ以來、一日一日の旅程を我知らず清姫はのろのろと歩いている。尾張をさえ旅していれば、何處かでふと、多三郎にめぐり逢えぬとも限らぬような氣がするからだ……。

苦肉の計

清姫が地藏堂に憩んでいたのは申の刻（午後四時）前である。

ひつそりした四邊に人の跫音ひとつ立たず、頭上に樹々の梢が折々の風でさわぐ以外は、思い出したように、病葉が舞い落ちて來る。

堂のめぐりは緣側になつていて、風雨に曝されて木目の立つた、板の端が、所どころ朽ちて缺けている。何氣なく清姫は坐つていたのであるが、氣がつくと、臀部のやわらかさに判然り節目の立つているのが感じられた。

申の刻すぎになつて、意味もなく肩でひとつ溜息をついて、傍らの杖と笠を引寄せ、清姫が立

んでいる。

さて、その笠覆寺境内に地藏堂があり、その堂へ詣でるともなく遣つて來て緣に腰をおろした一人の女人がある。

晩秋の日もようやく暮れようとする時分だつたから、參詣人も案外見當らず、木々の繁つた仄暗い其處に他の人影はなかつた。女人はゆつくり市女笠を脫ぎ、ほつと肩をすぼめて息をつく。どこか面やつれした翳りが表情にあるが、その美容は神々しいばかりで、見る者の眼にはひと目で名のある大名の息女と分る。——淸姬である。

赤坂の宿で雨の夜に多三郎と結ばれてから、彼女はひとしお孤獨を愛む身になつている。父永井信濃守の家臣が又、いつ彼女の身柄をたずね探して來るかも分らない。以前であれば恋も何、多三郎という野性の武人の情けを知つてからは、淸姬の氣質にある奔放の性は一そう大名ぐらしの格式張つた固苦しさに耐ええず、そのくせ他方では、老臣坂和田喜六の膝下で馬を攻めたり太刀を振うたあの男まさりの烈しさを忘れたように、何かすつかり女々しくなつている自分が分つた。

だからなるべく人目を避けて、こうして休むにも樹深い御堂の緣などを利用する氣になつている。

多三郎は、淸姬を淀へは一緒に送らぬと云つた。交りのあつたあの夜にも、それだけは冷淡なほどハツキリ云いきつて、彼女の淋しさなどにはまるで劬りの言葉も與えてくれなかつたが、

「お前さまは、ではどうなされます?」

云つて、
「それにしても、まだ尾張におられたか。」
まじまじと清姫を眺める。
じつと見返しているうちに忽ち清姫の瞼に赧みがのぼつた。
「おなつかしく思いまするぞえ。」
と言つた。
「己も逢いとう思うていた。」
「本當かえ？」
「――」
「お前さまは、あの夜、二度とは逢えまいと申されました……」
「わしの一命は測り難い。いつ此の地に死ぬるやも知れぬ身であつた。そもじは今見たであろう、おれは陰流の忍者じや。それであの夜限り逢えぬと言つた。が、こうして逢うたからはもう手離さぬ。よいか？」
「では、いつまでも……わらわと京へ行つてたもるのかえ？」
「いいや。」
多三郎は頭をふつて、向合つたまゝ又近々と清姫の眸の中を見入つた。清姫はうなじを反らして顔をあげ、はげしく多三郎の左右二つの眼を交互に見て、意味を讀みとろうとする。そのうちハツと全身燃え立つばかりに赧くなると、

上ろうとした時である。靜かだつた四圍に奈邊ともなく、鳥の羽ばたくに似たハタハタいう異様な物音が聞えた。
清姫は頭上の梢を仰ぎ見た。
何もない。
ついで木立の間にあたりをすかし見たが、矢張り何事もない。
氣のせいであつたかと、杖を握つて腰を浮かした矢先きへ、
「清姫ではないか。」
一陣の疾風に似た氣配が頭上をかすめたと見ると、何と堂の屋根に身輕に枝からとび移つた男があつた。清姫は我が目を疑つた。
多三郎なのである。今しも懷いつゞけていた人である。
「お前さまは。」
かわいた聲でひとこと呼掛け、清姫は掌中の笠を落した。ひらりとその面前へ飛降りて、
「思いがけぬ所で逢うたぞ。」
多三郎が言つた。
「どうしてわらわが此處に居るとお知りなされたのじや。」
多三郎の顏面は吹き出す汗で濡れ光つている。何處か遠くから、清姫の姿を見とめて一氣に駈けつけてくれたと、當の清姫は思つたのである。
「姫が此處に居ようとは知らなんだわ。奇遇じや。」

柳生兵庫介は、多三郎が逼れ去つた直後に、中二階の友田刑部の息を引取つた物置きから下の座敷へあらわれて來た。

「おゝ見さげ果てましたぞ、若。今度という今度ばかりは、この三之丞、つくづく若の御養育を致すがいやになり申した。御父上に願い出て、匆々に御相手勤めは御免を蒙りまする。」

「こらえてくれ、じい。爺はあの山伏の舌を嚙んだを見ておらぬで、云えるのじや。わしはこの目で見たでのう、可哀そうでならぬで、お父上に叱られるも覺悟でしたのじや。もし、お父上が切腹せいと申されたら、わしは立派に死んでみする。その時はでも、じいが介錯をしてくれぬと困るわい。」

「何を云つております。さ、濟んだことは仕樣ありませぬ。お父上には一緒にお詫びを申してあげますゆえ、じいにも此處でお詫びを致しなされ。」

これは紅（くれない）の聲。

兵庫介が廊下に出て立つと、

「あなた。」

妻の春がふらふらと二歩ほど進み寄つて、一杯、眼に泪をうかべて否々とかぶりを振つた。はりつめていたおのれの氣持が夫の姿に始めてゆるんでの、浮び出た涙であろう。

兵介は父があらわれたのには矢張りぎくりとして、庭の只中に立竦んでいる。その肩を抱かんばかりに、廻り廊下から駈け降りたくれないが寄添つて立つている。これも心持ち父の姿に青ざめている。

「こんな晝間に。」

と言つた。多三郎は構わず姫の肩に手をかけた。淸姫はよろめいてうしろへ戻つた。

堂の中は、部戸をすかして暗くカビの臭いが立て罩めて見える。疊の敷かれてあるのがそれで分る。二萬石の大名の淸姫が、身分賤しい忍者の情をうけることの恥ずかしさは彼女の意識にはのぼらぬので、たゞ、いつ人の來るかも知れぬ小さな御堂の中で、情人に抱かれるのを姫君育ちらしく羞恥したのであろう。

併し抗すべき力はもとよりなかつた。

「許せよ姫。」

多三郎が、手甲の白い指を摑んだ。微かに力をこめて指は握り返して來たのである。多三郎の右足が一歩踏み出て、淸姫の兩足の間へはいつた。

うしろが緣に閊えるので淸姫は退身し得ない。多三郎の右手が淸姫の腰へかゝつた、汗くさい男の胸板に壓せられて、その儘淸姫はずるずると堂の中に搔き込まれた。

「わらわが自分で……自分で、」

淸姫はうつたえるように囁いたが、聲にならなかつたのかもしれない。多三郎は彼女の體を横たえて先ず素早くおのれの野袴を脫ぎ下した。紐の端が明けられた部戸から緣へ垂れた。それから容赦なく淸姫のすそに廻つて、彼女の腰をかゝえ上げた。

淸姫はうめいた。堂の片隅に頭を押しつけられて多三郎の自由になつた。

「いつまで其處に立つておるか。たわけ。」
「……」
「曲者を逃がしたはそちが差出た振舞いのせいじやと、存じておろうな?」
「かくごの上じや、父上。」
「そうか。ならば後ほど折檻致す。それまでは、部屋を出ることはならんぞ。――くれない。」
「はい。」
「兵介を裏座敷の小間に閉じ込めておけい。わしが許すまで、一歩も出してはならん。よいな。」
「……は、はい。」
くれないが兵介の手を曳いて庭づたいに裏座敷へ廻つて行くと、
「坂本、鹽川。」
「はツ。」
「道場の修験者、身柄は後刻わしがあらためる。死者ともなれば佛じや、ねんごろに弔つてやれい。」
終始、ぼけたように庭に突立つて三之亟、多三郎の對決を見つゞけておつた內弟子ふたりは、漸く我にかえつた面持で、手にしていた薪を恥ずかしそうに後ろにかくしながら二、三歩後退して、兵庫介に一禮をし、うなずきあうとパツと道場へ引戻す。
兵庫介と春と三之亟が殘つた。
「友田刑部、今はてたぞ。」と兵庫介が言つた。

高田三之亟だけが、兵介に愛想づかしをした折とは別人の如き、きびしい表情で眞直ぐ廊下を見上げた。
「曲者は、逃がしたか。」
兵庫介が低く尋ねた。
「殘念ながら。」
「霞の多三郎じやな？」
「御意。」
そこへ道場から內弟子が走つて來て、
「申上げます。」
三之亟へ言いかけたのが、廊下に立つた兵庫介に氣づくと慌てて向き直つた。
「奇怪なる山伏風の者、只今道場にて落命致しました。」
と言つた。
「身許の當てはつかぬか？」
「おそらく多三郎一派の者かと思われまするが。」
三之亟が答える。こたえながら目で何事かを問うている。
兵庫介は一つうなずき返しておいて、
「兵介。」
「は、はいツ。」

中將嗣長卿が息と婚姻の儀、既に準備されておるとか申す。禁中にて武藝帳探索の結果仕組まれた策とすると、これはおそろしい……」

「――」

「おそらく、身に婚姻のせまつておることなど露清姫は知るまい、と刑部は申して死んだが。」

「一體、友田刑部、そこまで詳しくどうして知つておりましたな？」

「淀城にて信濃守に面識を得たそうじや。詳しくはわしにも分らぬが……」

それからあと、中二階の刑部の亡骸を匆々運び出してだびに附すよう、その時道場の修驗者の遺骸も燒くようにと命じ、尚兩人の衣裳、所持品などは念のため調べておけといいつけて兵庫介は座を立つた。

「お出掛けなされますか？」

「やむを得まい。事情を知つた上は、生かしてもおけぬ男――。」

「で、では殿が多三郎を？」

「武藝帳のいさかいがうとましいで清巖に持出させたが、禁中まで探索をはじめたとあつては看過しもなるまい。」

云いながら大小を差した。そのまゝ座敷を出る。

三之亟が跟いて出ると、廊下を渡つた兵庫介は先刻多三郎のとび移つた樹を見上げるところで停つた。

「あれかな？」

「……」一そう三之亟の眼が鋭く問いかけるのへ、
「遺言は聞き取つてある。」
ひと言いつて、
「春、くれないは昨夜來眠らずと疲れておろう。面倒じやが兵介の監禁は、そちが代つてしてくれい。」
春が不安げに去つたあと兵庫介は座敷へ三之亟を呼んだ。
「刑部がおそろしいことを申しおつた、武藝帳の一卷、鍋島から確か島津の手を經て淀永井家に移つたと聞いたが、永井信濃守が息女清姫が所持致しおるそうじや。」
「何と申されまするかい?」
「清姫。——むろん當人は氣づかずと東海道を道中致しておる由。刑部同様虛無僧姿とか申す故、帶にでも縫い込んで卷いておろうか。——困つたは併し、あの多三郎じや、清姫に近づいておると申す。」
「げつ。」
「或いは勘づいての接近か——これは、まだ分らぬが。」
「ちーつ……そうと知れば庭前にて斬り申したものを。いらぬ容赦を致しました。」
「まあ待て。清姫が所持すると承知の上なら多三郎ほどの男、既に拔取つておろう。……がそこまでは知るまい、とわしは見る。それより恐ろしいは清姫の行末じや。京へ戻らば、程なく疾左

それらを順次、丹念に兵庫介は見て廻つた。既に鯉口はきられてある。
とある堂の前に來たとき、ふと、けわしい顔で兵庫介は立停つたが、堂の內から此時あつい呻き聲が洩れ、わずかに開いた蔀戶のあわいから紐がのぞいてヒクヒク動いていた。
――多三郎の策は當つた。
苦笑して、兵庫介は半ばから踵を轉じた。
次の堂へ往く。
こゝも堂宇の甍を蔽うばかりに樹々が繁つている。地藏堂だ。ちよつと立停つただけで、此處でもあつさり道を引返そうとしたが、不意に、さつと體を飜して木立の間に身を匿した。丁負いの虛無僧を抱えて深編笠の武士が走り寄つて來る。

夕映え

「十兵衞か？」
思わぬ所で、意外に名を指されて十兵衞はぎくりと立竦んだ。
「――誰じや？」
木立の影から姿をあらわしたのを、編笠越しに見る。
「――や、叔父貴か？」と言つた。

しげしげと枝ぶりを眺め、目を轉じて今度は築地の屋根瓦を塀に添うて、左右に見遣る。多三郎の走つた足跡が光線の加減で點々と瓦の上に殘つている。

「よし。」

と兵庫介は獨語して、いつの間に用意してあつたか懷中から草履を取出し、

「あとを頼むぞ。」

庭づたいに塀の潜り門から、つと姿を消した。

こゝで説明しておかねばならない。江戸寬永寺横で多三郎に斬られた小瀨源内の言つたとおり、柳生但馬守の手許にあつた武藝帳は寫し物である。誰がどうして筆寫したかは此の時はまだ分らないが、眞物は尾張の柳生兵庫の手許にあつた。それを兵庫介は尺八に嵌め込んで淸嚴に持たせたのである。

約の通り、呼續濱で柳生十兵衞が受取る筈のところを、淸嚴の負傷で、はからずも十兵衞は平田春一郎以下を斬つて、遁げた。武藝帳は當然十兵衞の手中にある。

一方、鍋島家にあつたそれが、はからずも淸姬の身邊に所持されていたとは夢にも多三郎は知らない。知つておれば、わざわざ夕姬と衣裳替えなどさせるわけはなかつたのである。

さて兵庫介は屋敷を出て南へ向う。四つ辻に來れば立停つて地形を眺め、他家の塀の上に枝のひろがる松樹を見遣つたりして、直ぐ歩き出す。小川があれば岸の地面を見詰める。

見えぬ絲にひかれた如く、そうして遂に天林山笠覆寺の境内に來た。藥師堂、護摩堂、地藏堂、多寶塔、祖師堂の諸堂が笠覆寺の一郭に點散している。別に池があり池中には辨天祠が在る。

「？……」

「其許、東海道を下る道中にて山田浮月齋が一派と爭つたそうなが、そのおり扶けをいたした虛無僧が友田刑部じや。亡き坂崎出羽守が家臣と申すが、——不憫ながら、浮月齋の手にかゝつて先程相果てた。」

「では浮月齋も尾張まで參つておる？」

「お主ほどの武藝者が死力をつくす事いまさら兎や角は申さぬ。——が、十兵衛、武藝の本義を父同樣ふみ違えてはお主の武術が惜しい。武は仁じや。平和の世ならいさぎよく無刀となるが寔の武技。お主ほどの男を武藝帳あらそいなどに、」

「待て、叔父上。——いかな叔父貴の言葉でも、これは聞き捨てには出來ん。」

氣魄は鋭いが、あくまで語氣を抑えて言う。

「やむを得まい——」

兵庫介も苦笑をして、

「さ、もう申すことはない。それを置いて往けい。」

と言つた。

それとは淸嚴の身柄と、十兵衛のかぶつている深編笠である。

手負いの淸嚴は云う迄もないが、深編笠をこの白晝に取つては拙い——。

十兵衛が應えずにいると、兵庫介が言つた。

「いかゞ致した？　其許その姿で淸嚴を救い出してくれたのであれば、誰ぞ相手を斬つておろ

その十兵衞に抱えられてがくりと頭を垂れた手負いの虛無僧姿が淸嚴とは、兵庫介もひと目で見分けた筈であるのに、眉ひとつあげない。涼しいが、笑わぬ目もとで、
「尺八の中身、受取つたであろうな?」
低く問いかける。そうしてすつと一歩、出る。
「たしかに受取り申したぞ。」
「ならば當尾張に用はないはずじや。友矩、又十郎の潜み場も其許なら承知の上であろう。その手負い者、もはや介抱には及ばぬ。さ、自由に立退いてくれい。」
「?……」
「不審かな? そちなら但馬どのも同様であろう、念のために申しておく。柳生兵庫、以後武藝帳には手出しはせぬぞ。」
「む?」
「それからお主たちを追うた松平伊豆どのが刺客の一味じや、首領はこの兵庫が斬つた。おそらく、當地より京へは參らずと江戶へ引返したであろう。邪魔をする者ひとりは、減つた道理——」
「……」
「尙、これも最後の餞けに申しておく。鍋島が手の一卷、淀城主永井信濃守が息女の手中にある筈。」
「だ、誰にそれを聞かれたか?」
「友田刑部——」

「忝いぞ十兵衞。」

早くも太刀を鞘にして兵庫介が言つた。一瞬の變り身に、十兵衞は深編笠の切られるのをまもつていたからである。

代りに十兵衞の片足草鞋の先が縦に切込まれている。

「何をなさる。」

右手を刀にかけ、左指で猶も紐を解いて、徐々に十兵衞は脱いだ。

「それ、お受取りなされい。」

ぽんと兵庫介の足許へ抛る。清嚴を降ろすとき、要愼深く尺八の方は兵庫介からはるか離れた位置に立てかけてあつた。

十兵衞は深編笠を抛つたはずみにもう尺八は左手にしていた。

につこり兵庫介が笑つた。苦笑のつもりでも、これほど鮮やかな擧措を見せられては、兵法者として莞爾とせざるを得ぬ。

「行けい。」

と言つた。

歩、一歩と枯葉をふんで十兵衞は退る。

「叔父貴、今の挨拶、忘れぬぞ。」

と言つた。

「おゝ、當方も覺えておこう。」

きた言葉として、多分この兵衛は仕込んである。それを真壁まで言ふ人があらば家来の者に聞かれな

い。さすれば三兵衛の命は惜しいであらう。……さうして、その上に、お前達と言はぬか？」

「――」

「然らば申し上げる。言ひとしてこの白刃、[illegible]の者を[illegible]て[illegible]、互ひに、覚悟合で

ござらぬか。」

「えさうな。……」

十兵衛は目の前に[illegible]の影をうけた兵吉介の首をじつと見すへつた。兵吉を殺せば、今度は兵吉

介が[illegible]、さ言ひつた十兵衛を斬れぬ。そして[illegible]をおさへておければ、見た者がそ

[illegible]はいかにも[illegible]であらう。兵吉介は[illegible]、[illegible]としいふ。これ[illegible]して、[illegible]

[illegible]で、[illegible]、[illegible]つてゐるといふのである。――[illegible]では[illegible]。

[illegible]であらう。[illegible]は[illegible]であれ、[illegible]を十兵衛に[illegible]れたことに[illegible]りはなかつた。

一瞬、[illegible]の木の上に落ちた。カナカナと[illegible]を踏んで[illegible]つてゆく。[illegible]

来して頭上の梢にとまつた。

「いかにも験ぎ申そう。」

十兵衛は[illegible]つた。それからはじめて[illegible]不の[illegible]におろし、[illegible]して[illegible]の[illegible]を[illegible]て[illegible]に

あつた。それへ[illegible]、[illegible]かけたのである。

「これは。」

[illegible]にかけた手に[illegible]十兵衛は[illegible]りに[illegible]クルッと一回転して、立つた。

は別の意味に受取り、
「あ、いけませぬえ。……誰か來ます。」
羞じらいで顔を兩手で覆つて肩をすぼめた。
「しずかにせい。」
と多三郎が叱つた。彼はそうして力まかせに清姫を搔き抱いた。常人には聞こえずとも忍者の耳には明瞭すぎる話し聲だつたのである。
「姫。……」
不意に熱をこめて多三郎は言つた。
「わしは仕事のある身ゆえそもじを京へは送れぬが殘念であつた。併し、もう離さぬぞ。そもじとわしは、會うべくして逢うたのじや。この多三郎の心をいつまでも摑んでおつてくれい。」と言つたのである。
「嬉しく思いまする……」
清姫にとつて、うそにもせよ有難い言葉であつた。彼女はおそるおそる手をまわして彼の頸を抱いた。
少時してから多三郎は身をおこす。
「姫、その着物を脫いでくれぬか。」
と言つた。
意味を解しかねた。後れ毛を搔きあげ、膝前をあわせて清姫も起き直ると、矢庭に多三郎は彼

「最後に訊く。鍋島がもとの一巻、永井信濃が息女の手中にあるというは、まことか？」

「刑部が末期の言じゃ、嘘は申すまい。」

「――そうか。」

不敵な笑みを浮べて、

「今ひとつ――去る夜熱田神宮境内にて、江戸の使者が申した多三郎刺殺の儀、何となされる？」

「武蔵殿を殺す前に誓ったことじゃ、當方別の仔細もあれば、かならず、斬る。」

「よし。」

うなずくと同時に踏み蹴って斜めの一散に雑木林を駆け消えた。

多三郎はその時いきなりこの一瞬間を抱いていた。彼の目的は他にある。心が他所に離る裏り、礼次のあの勧誘には喰い入らなかった。

浮世は但し三身の女である。まして逢いたいと気がれつつ行った逢いし野性の男の刺殺におそえつけられていた。あの声は言葉はなりであったものが、次第に言葉は消滅している。諸田のなれこうなそれを確り。

ありてすの顔をうかべて、内端山窓の中で、寿美はおのれが中集なる夫人に似てあることをなされた。男の心が数かの王勇を瞳したので一瞬思わず息をあげたので、うつしかのように散えている男は、それからの暫らくいいつとしていた。何ゆえか、微かに肩の震えて人形がするようなた役が

「江戸の屋敷を出るときからじや。」
「その時、何ぞ父の信濃守どのから預かつて參られなんだのか？」
「父は國許にいたゆえ、そのような事知りませぬ。」
「思い出してくれい。では何ぞ家來衆から受取らなかつたかい。」いよいよ多三郎の語氣には張りがない。
木立に聞こえていた話し聲は先程、散り散りに落葉を踏みならして去つた。
「そう言えば、家老がわらわの出發の折、成田不動のお守りを縫い込んであると、丸ぐけの帶を渡してくれました。」
「な、何故それをあの宿で言うてくれなんだ？」
「お前さまの言葉と、お守りと、わらわにどちらが大事じやえ？」
肉づきの豐かな胸へ清姫は衿をあわした。凜乎として、然も、或る淋しさが男のそうぞうしい心を怨ずるように眸に濡れ光つている。
多三郎は肩をほつと落したが、
「わしが惡かつたぞ。姫の知らぬことじや。いらぬ詮議をして、わるかつた。……」
往時の東海道は、今のように名古屋から岐阜、米原の方へは北上しない。便船で桑名へ渡り、四日市、關から鈴鹿峠を越えて水口を過ぎ、近江國草津で今の東海道線に出會う。
四日市から關の宿場の中ほどに石藥師なる宿がある。

女の全身を着物の上から撫でまわす。遂には背後にまわつて肩から脱がそうとする。
「あれ、……何をなさるのじやえ。」
「とつてくれい。」
「そんな……」
「とも角とつてくれよ。」
言いながら清姫の承知も待ちきれず力をこめて引き剝いだ。
「いやじや。……いや。」
清姫は胸を合そうと藻掻いて、おのれの乳だけを抱いた。稍あつて多三郎は言つた。
「姫、何ぞ、大切に身につけているものはないのか?」
「何のことかえ?」
「そもじの身のまわりの品じや。大事なものはないか。」
「その様な愚かなことどうしてお訊きなされます? わらわはこの衣類、ことごとくお前さまが用意して來て下され、」
「きえーツ。……失敗つたか!」
どんと尻餅をついて叫んだ。不審げに清姫は愛人の表情を讀もうと暗さの中で眼をいそがしく動かした。
多三郎は力なく言つた。
「今一度訊く。姫のあの虛無僧衣裳、何處から着ておられた?」

れば忽ち見分けるのだが、とも思うが、平地でそれは悩わない。
そのうちにも相手が立去るので又ブランブラン腰の袋をゆらして追うた。どうやら虚無僧の衣服が、男物にしては寸のつまつた短いことも氣になるのである。
「旅の恥はかき捨てじや。思いきつて背負わせて貰おうかい？……」

野　風

男は麻生の吉郎である。前方の男女は吉郎の躇ううちにもサツサと遠去かつて社務所の玄關へはいろうとする。
とうとう、たまりかねた。
「もし。……待つて下され。」
樹影から躍り出して、一散にふたりの背後へ駈け寄り、
「お願いがありますのじや。」
聲をかけた。
「む？……」
びくつ、と肩を動かし虚無僧が、振向く。
姫の方も何かハツとしたらしいが、これは立停つたまゝで振向かなんだ。

もう寛永十二年もおわろうとする十二月はじめの頃、右の石薬師から高宮神社の境内へ道をそれた男女ふたりづれがあつた。
女は品のいい美女。男は背のすらりと高い虛無僧である。ふたりは旅のつれづれを會話に紛らせるほども親しくはないのか、或いは物も言わぬほど親しすぎる仲なのか、たゞ、足なみを揃えて歩いて行く。ところがその跡を、見えがくれに尾けて行く別の男がある。これは見るからに逞しい體つきで、腰に丸い包み袋を下げているのはたんまり握り飯の燒いたのでも用意しているからか。とすれば、腰つきから見ても武士ではない。
男は、前の二人に遲れかけてはブラブラ袋をゆさつて距離をつめ、木影に身を寄せてふたりの有樣をうかゞう。時々、話でもしあつているようだと、とりわけ眼を光らせる。
兎角するうち神社の境内へふたりは這入つていつた。
街道ではないから、少々橫手へ廻つても誰も怪しむ者はあるまい。男は菅笠にそれでも顏をかくすようにして、小走りに兩人と平行に進んだ。それから去り氣なく片膝ついて、草鞋の紐を緊め直す恰好でふたりを見送つた。
「ちがうのは分つているのじや。あの虛無僧とて、わしが肩にしたお人では到底ない。あれは、ほんとの男じや。お武家かもしれんがのう。しかし……」
ひとりごとに呟いて、首をかしげる。
「矢つぱり、あの女はわしがねらいをつけた——元は虛無僧姿をしておつた人じやがのう。」
それにしては體つきが少し違うようにも思える。いつそ、思いきつてこの肩に舁がせてもらえ

「では、申上げにくうございますがのう、一生のお願いじやで、一ぺん、お前さまを背負わせてみて下さいませぬかい。」
「コリヤ。そちは大名屋敷に奉公したと申したな？　中間であつたか？」
「はい。」
「ならば武家の婦女子に對する禮儀は心得ておろう。――白晝、かゝる場所で婦女子を背に致そうなぞとは、言語道斷な奴。」
「それは分つておりますのじや。無禮をお咎めなされるなら、あとで、この首刎ねられても否やは申しませぬわい。どうぞ、お願いじやで一ぺんだけ、せ、背負わせて下さりませい。……」
眞情、髯づらにあふれている。
虛無僧は奇異の感にうたれたらしいが、女の方も、不審げに初めてあと返つて、まじまじ吉郎を見た。
目もさめるばかりに美しい乙女である。吉郎の表情が、
「おゝ。」
と息をのんで、歡喜に輝いた。あの渡し場で、うなじに觸れた柔肌は、このような美しい人のものであつたに違いないのじや、そう思えたからである。
あの感觸が、つい昨日のことのようにゾクゾクうなじに甦る。
「お願いですわい。負わせて下され。」
もう一度背に出來るなら……吉郎はそう思つたのだろう。

虛無僧の右手が天蓋のふちにかゝる。心持ちすり上げて、
「何用じや。」
「はい。そこなお人にお願いがございますのじや。」
「何？……」
笠を押上げねば確と相手を見定め得ぬのは、そういう物をかぶり馴れていない證據である。
「そち、何者か。」
と訊いた。
「わしは、さるお大名が江戸屋敷に以前お仕え申した、吉郎と申す者ですわい。お願いというは、もうし、お前さまわしを覺えておられませぬか。」
背姿へ問いかけた。
女は、
「いゝえ……」
ふり向かぬ儘に、首をふる。
「では、この聲にも、お覺えがございませぬかい。」
「ありませぬ。」
「やつぱり人違いであつたかのう。」
獨語したが、氣の所爲か女の聲があの時と瓜二つに思えてならぬ。
吉郎はその人への懷いに生涯を賭けたつもりだ。

「はい。」
天蓋を搖らして武士は乙女と面を見合つた後、
「いつの事か？」
「今も申し上げたとおり、ふた月ほど前でござりますわい。」
「女虚無僧たゞひとりでか？」
「そうですわい。」
はじめて乙女の方から聲をかけた。
「わらわと身丈も似たお方であつたのかえ？」
「似るも何も、お、お……」
乙女の眸は眞直ぐに注がれてくるが、怨ずるように一すじな思いがこもつている、と吉郎には見えた。
(もう間違いないぞ。)
歡喜に勇氣百倍して、
「お前さまを一ぺん、背負わせて下されば分りますのじや。」
といつたのは、もう、その人かどうかを確かめるためより、今一度あの肌ざわりに觸れたい一念からだつた。
違つた。

「待て。」
二、三歩、踏み出す相手と乙女との間に虚無僧は立ちふさがつた。
「死んでもよいと申しおつたが、それほど背に致したい、わけは何じや？」
「……」
さすがに、自ら省みて答え得ないでいると、
「大名屋敷と申したが、主は、誰じやな？」
「な、永井信濃守さまでございます。」
「？」
思わず女と面をあわせる。
虚無僧の語氣は忽ちせわしくなつた。
「そ、その永井家が中間、何の咎で放免されおつた？」
「放免なぞではございませぬぞ。わ、わしは只、つまらぬ賭事に手を出しましたで、恥ずかしゆうて、お暇を願い出たのですわい。それから江戸を發つて沖津川の渡し人……えゝい、こうなつたら何もかも申しまするわい。わしは、おはずかしいが、渡し人足に身を落しましたのじや。ごらんの通り體だけは人にすぐれておりますのでな。——或る日、あれはもう二月（ふたつき）も前のことですわい。ひとりの、丁度お前さまがような虚無僧どのを徒（かち）でお渡ししましたのじや。すると、實はそれが、うら若い女であつたで、わしはもう——」
「待て。お、おんなの虚無僧とな？……」

夕姫が多三郎のはからいで清姫と衣裳をすり代え、清姫を尋ねる永井家の臣に追われて、馬で遁げた經緯は前に述べた。

夕姫は巧みに永井家の追手をまくことは出來た。

併し何分にも視力の不自由な身で、女の一人旅では、いつか又永井家の追手の目につこうとも、いつそ男裝の虛無僧姿が便利と考えて、衣裳はあらためずにその儘、東海道を京へとつた。

さいわい賀源太に忍びを仕込まれた身だから男の步行ぶりを擬するに左程難澁はしない。通行人にも怪まれることなく尾張の領地へはいつた。

たゞの者には男と見せ得ても、だが、紛らし得ぬ相手がある。同じ忍者の柳生兄弟、當の裝束を代えた清姫、山田浮月齋の眼だ。

このうち友矩、又十郎に喝破された模樣は、兵庫介の娘くれないによつて旣に語られた事だから略すが、たゞその時の、友矩の言葉使いで衣裳の主が永井信濃守の息女清姫であることは察し得た。

清姫なる女性を、むろん夕姫は識るよしもない。併し何となく興味の湧くのを否み得ない。こういう虛無僧姿で、東海道を上ろうとした人の運命への、女らしい興味である。

それで、この衣裳のまゝでいれば、もしかすれば先方から聲をかけてくれるかもしれないと考えたから、今度はその妙な期待もあつて、虛無僧姿のまゝで旅した。

悲しいかな、聲をかけて來た相手は、思いも寄らぬ輕薄の浪人川野黎左衛門である。——と云つて、黎左衛門が炯眼だつたわけではないので、如何せん、いかに步きざまに男ぶりを眞似よう

吉郎の眞情あふれる請願に、虚無僧から、
「あれほどに申すは、よくよくの念いであろう。さいわい、あたりに人も見當りませんぞ。負われてみられては、いかゞじや？」
とロを添え、少時思案の様子であつたが、
「では背負うてたもれ。」
乙女も手の市女笠と杖を下に置こうとするので、
「も、もつたいない……」吉郎はひざまずいてその手をとり、
「わしが持ちましようわい。さ、さ、凭れかゝつて下され。」
背を向けて乙女の前にしやがんだ。
そうして負い立つたのである。
違う。
やわらかな胸が背を壓して來たときは、天にものぼる心地がしたが、うしろへ手をまわして乙女の臀部を持上げたとき、瞭らかに別人であつた、と覺つた。
「どうじやい。渡し人足なら、どんどん歩けようがの？」
天蓋の中で、縞模様の影の落ちる武士の眼が、キラキラ異樣な好奇心で乙女の腰のあたりを見ていることなど吉郎には分る由もない。
虚無僧姿は、誰あろう大久保屋敷の浪人、川野黎左衛門である。負われているのは夕姫である。
これには說明が要る――

夕姫は街道を追うて來る黎左衛門を拒みきれなかつた。黎左衛門は、それでも歩きながら話しかけ、「どういう御事情の上かは知らぬが、兎に角惡い所を見てしまい申したワ。全く申譯がないのう。」と殊勝な口ぶりで、自分がもと江戸駿河臺、大久保彥左衛門の屋敷に寄食する川野黎左衛門だと名乘つた。

大久保家に居る浪人という一事が、夕姫の心を捉えたのは已むを得ない。少々輕薄の氣味はあるが、けつして惡い男でなさそうなのも夕姫を諦めさせた。彼女はとつさの思いつきで、永井家の姫に仕える奧女中だと僞つた以外には、京へのぼること、ひとり旅であること、目の不自由な女の身ゆえ思いきつて虛無僧姿になつたことなどを話したのである。

以來、黎左衛門は傍らを離れない。

「旅は道づれと申すでのう。それがしも實は京へのぼる途中なれば。」

と、親しげに道中を偕にする。宿も別室ながら同じ旅籠をとる。一度、天蓋を脫いだ夕姫の美しさに呆氣にとられて見入つてからは、益々何かと親切になつた。目が不自由の身では、時にはその親切も有難いので敢て夕姫は拒まなかつた。

が、たゞひとつ。道中で下の用を足す度に、街道で待つていてくれる相手の心中が、想像すると羞ずかしく得堪えぬのである。一度や二度は我慢をしたが、遂にシンが疲れた。

「思いきつて、お前さまが御一緒してたもるなら女裝に戻ろうかと思いまする。」

と云つた。

何で黎左衛門に異議があろう。

とも女の身には紛らしきれぬ一事がある。放尿の仕様である。

丁度、あれは知立の宿場も過ぎた邊りであつたろうか。街道すじから外れた草叢をえらんで、用を足した。人が見ても常なら男子の野糞と見紛うわけである。ところが突如として體内に衝撃をおぼえた。牡丹の煎藥を使つて以來、永らく途絶えていたものが足下の草を赤く染めて落ちたのである。

とつさのことで、夕姫は羞恥に狼狽した。――それを、これはまさしく野原の快い用を足していたに相違ない浪人者が、はるか後方で、用を終つてぬつと立上り、フト草叢の向うに天蓋のゆらゆらするのを目にとめた。

よせばよいのである。變な親切心をおこし、

「おオい、そこな虚無僧。……紙が無いなら、進ぜるぞ。」大聲をかけた。

あつと夕姫は全身、火となる。御丁寧にも相手は秋草を踏分けて近づいて來る。夢中で身繕いをして、其の場から尺八を手に足早やに街道へ上つた。

「はテ、妙な奴じやのう。」

小首をかしげて、折角近寄つたついでだからと、現場を見にいつた。

「や、や。……」

豫想に反して草が濡れているだけの處へ鮮やかに血の跡がある。

「……そ、そうかい。あ奴、婦人であつたかい。……」

「ふーん。あんなテも、あつたかのう……」

その頃だ。

高宮神社から西へ五里、關の宿場はずれで、鈴鹿峠と柘植への二手に別れる街道の中央に佇立した三人の武士がある。

石　燈　籠

鈴鹿峠の方は所謂、東海道すじになる。

關の地藏町から、「火繩屋彦四郎御火繩所」なる立札を右に見て、次第に山路に踏入れば鈴鹿川が幾瀬となく左右に流れている。土地の者は八十瀬と呼んでいる。其處から右の方に夾石を見、更に山の半腹に大里石を眺めてはねかけ橋を渡り、「藤の茶屋」、沓掛、坂下と過ぎて鈴鹿峠に到るのである。坂下村には櫛を賣る者が多く、藤の茶屋から沓掛の間には奇石怪石がむらがつて、松の根はこれがために曲り、恰も人の工みなせる山の樣なので古法眼が却つて綺に描くことかなわずと筆を捨てた——そんな傳說のつたわる筆捨山があつた。

柘植への道は、これに對して左方を往く。金場、梶が坂、板屋、一ツ家と山中を辿つて柘植に至り、其處より貴生川町を北上して三雲で東海道に合する道と、佐那具から服部をすぎて伊賀上野に至る道とに分かれる。

「そ、そ、それはよい所へ氣がつかれたぞ。うん。それがし何なら早速、衣類を整えて進ぜる――」

云つて、丁度、知立の手前、有松の立場を過ぎるあたりで何處からともなく女物を揃えて來てくれた。聞けば、有松の人家は藏づくりで絞染めが多く、童の浴衣にも竹に虎の形をつけたり、赤さいで白手拭に靑く絞り染めたものがあるという。なるほど、黎左衞門のとゝのえて呉れたのも長襦袢に至るまで絞であつた。

他方、夕姫の脫ぎ捨てた虚無僧裝束を、

「何と致したものかのう、捨てるは惜しいで……」

見下していたが、「そうじや。」おのが膝を叩いて、

「わしが著ようわい。」

とうそぶいた。

黎左衞門實は浮月齋一派へ千四郎にすゝめられ、報酬の金子に惚れて加わつている。浮月齋が何者かは知る筈もないが、尾張へ着けば、行動は私の自由にならぬ。目前に思いも寄らぬ美女がいるのに、何の金子ぞ、という氣になつた。虚無僧ならよも浮月齋が氣づくまい、そう思つたのである。

こゝろみに衣裳を着け、天蓋をかぶつてみると、我ながらよく似合う。その上、仄かに女の體臭がのこつている。「きめたわい。」欣喜して、あつさり浪人風態の方を捨てた。

それ以來の、夕姫と黎左衞門である。話を戻すが、背負われた夕姫へキラキラ眼を光らしたのも故なしとしない。黎左衞門もともとが臆病ゆえ、まだ夕姫の身に指ひとつかけてないのだ。

十兵衞はそこで暫時、默り込んでから、
「どうじやな？」
もう一度友矩を見た。
「拙者が待伏せてみましよう。」
「そうか。……」
十兵衞はさからわない。
「では當方にて又十郎は預る。待合せの場所は京都妙安寺じや。――よいな。」
と言つた。
「又十郎、參れ。」
「は。……」
「何を致しておる、參らぬか。」
「は。……で、では兄上。妙安寺にてお待ち致しておりまする。」
「おゝ。兄者が御一緒じや。安心して行けいよ。」
いつまでも立つていては人目にもたつことで、十兵衞と又十郎は鈴鹿峠への道を、友矩はひそかに清姫の通るのを待つため柘植への道に別れた。
暫らくは二つの道を雁行して進む。そのうち最初の橋にかゝる。もう、道程に遠近があり一方は他方の姿を橋上には認めなかつた。

いずれを辿るかは、先きに淀へ着くのを希むか、禁中に目的をかけるかによつて異つて、人口を避けるなら伊賀上野へ、堂々と進もうなら東海道を採るということもある――。

さて、その左右への分れ道に立停つた三人。

しばらく鼎立するかたちで顔を見合つたが、

「矢張りわしは柘植へ参ろう。――友矩、足勞じやがその方ひと先ず、單身、京へ上つてくれぬか。」

年長の一人が言つた。十兵衛である。

「又十郎は何と致します?」

「わしが連れて參ろう。」

「そ、それは――」

不安そうに又十郎は左右に兄をうかゞい見て、

「それがし、父上より、かならず友矩兄とは離れるでない、と命じられて參りました。」

と言つた。

「構わぬ。」

十兵衛の視線は友矩へ移ると、

「それとも、そちが待伏せるか?」

「どちらでも宜敷うござるが、まこと、永井家の息女満姫どのが身邊に――」

「あると申す。兵庫どのが氣性じや。虚言を申されたとは思えぬぞ。」

二、三歩場所を移して、もう一度薙ぐ。

それから刃を拭い、道に戻つて去り氣なく柘植道を往つた。

川野黎左衛門と夕姫が高宮神社を出たのは丁度そんな頃である。麻生の吉郎に呼びとめられてから、ほゞ一刻ちかくすぎている。

吉郎は、夕姫を背負つて、人違いであるのをさとつたが、一瞬の落膽のあとから不思議な希望が湧きおこつて來て、

「どうでございましようかのう、お前さまがた、京へお上りなされるなら、こうして、力のつゞく限り背負うてお供をさせて下さりませぬかい。」

と申し出た。やわ肌の背中にもたれかゝる感じは、何としてもあの女虚無僧の時を彷彿させる。氣の所爲ではあるが、こうして背負うているとあの切ない思慕の情が慰められているような氣がするのである。

探すといつてみても、考えてみれば顔を見知つているわけではないし、內股を首すじにフトあてて貰わねば確としたことは分らない。

と云つて、餘程の奇特な女人でもない限り、武士が先刻叱つた如く、この賤しい身に婦女子を負うことなどは許されぬ道理である。とすれば、せめてこの儘、どこまでも歩きつゞけていたいという氣持が吉郎にはおこつた。

人目に立つのは分つているが、むしろその方が、顔を見知らぬあの女虚無僧に我が存在を知ら

それから一刻後。

同じこの別れ道へ白髯の老兵法者が佇立する。

右　鈴鹿峠道

左　柘植道

と草叢に突立つて、標柱を讀んで、はじめに鈴鹿山への白い道を目で追うた。それから、ゆつくり柘植道を見る。

暫時、そうして立停つたまゝで、次第に眼を光らせた。十兵衛が何處へ行き、友矩がいずれの道を取つたかを見破ろうとするのである。

忍者に讀心の要法というのがある。常に何者かを追い、且つ追われる身では、二叉道（ふたまた）に差しかかつて追う相手を見失うことがあつてはならないので、地形、相手の力量、武力、形勢など悉くを想起して二者のうちいずれか一道をえらぶ。

掌をさす如く、山田浮月齋はこれを誤つたことがなかつた。

それでも、充分、時をかけて思索したのは、十兵衛、友矩のうちいずれを追うべきかを思い耽つたのだろう。

不思議そうに、迹から來た旅人がそんな老武士の彳む姿を眺めやつては、申し合わせたように東海道を上つて行つた。

浮月齋は、ゆつくり歩き出した。柘植への道である。五、六歩行つてから、何を思つたか傍らの草へ分け入つて、脇差ですーと草を薙いだ。

あらためて黎左衛門へ向き直り、丁寧に頭を下げた。
「今日まで、何かとほんとに御手数をわずらわせ、心苦しゅう思うておりました。背に負われるは兎も角、この者が道中致してくれますなら、もう、安心でございます。どうぞ今後は、わらわにお構いなくと道をお急ぎ下さりませ。」と云つた。
もともとが仕方なくて一緒にした道中だつた。別れるならこれに越したことはない。それに、吉郎が永井家の中間なら清姫の様子も何かと聞き知つている筈で、云わば一石二鳥と、夕姫は思い立つたのである。
「うーん……さ、左様に申されるなら、何、その……」
黎左衛門眞赤になつて、たゞ頬ばかりふくらませている。
「お武家さま――」
吉郎も大名屋敷に奉公した身で、武士とは云つても、どの程度の器量か、相手を見るほどの眼はある。まして、思いがけず、願いがかなつて勇氣百倍しているから、
「このお人の申されまするとおりじや。どの様なお間柄かは知りませぬがのう、どうぞ、これからはもうわしに委せて下さりませ。いのちに代えてもお守り申しますわい。」
と云つた。
貧乏くじを引いたのは、結局、黎左衛門だつた。
痲生の吉郎、思えば憎い奴であつたが、當の夕姫から申し出られた手前、それでも一緒の旅を

せる唯一の手段(てだて)のようにも思える。
それで、
「のう、おゆるし下さらんかい。」
背へまわした手で、うながすように二、三度、揺つた。
あわてたのは黎左衛門である。
「な、何を申すのじや。——やい、その方いま、永井家が屋敷の中間(ちゆうげん)と申しおつたな。まこと左様ならば、その、背に致す婦人が誰かは、」
「あ、もし……」
夕姫が今度は狼狽した。永井家の姫君に仕える奥女中と、云つた嘘が、ばれるからである。それで咄嗟に、
「これほどに申しまするのも、眞心あつい證據でございましよう。わらわも目の不自由な身。何なら、申すまゝにさせてみようと思いまする。」
「何、何、何。」
夢中で天蓋を脱ぎとつたのは餘程、あわてた證據であろう。「然らば御身、こ、こ奴がような者の背で道中致そうと申されるか。」
目が据わつている。
「あい。……」
夕姫は落着いて、「さ、降ろしてたもれ。」もう天にも昇らん心地の吉郎の背から降り立つと、

道中、何とか工面をし、水腹をかゝえて、それでも兎も角三日後には尾張の城下へ着いた。
早速、あらかじめ約してあつた熱田大神宮の社頭――石の大燈籠の前に、物乞い同然の姿で立つていると、地獄に佛とはこの事か、急ぎ足で來る多三郎を見つけたのである。
「おゝ、おゝ……大月どのではないかい。わ、わしじや。川野黎左衞門でござる。」
とびつかんばかりに躍り出て、名乘つた。
「む……」
曾てこれほどすさまじい表情の多三郎は見たことがない。それほど鋭い眼で、見すえて來たが、
「なるほど、お主か。」
ようやくそれと分つたのだろう、複雑な苦笑(にが)いで、
「何しに又、左樣な恰好を致しておられる？……」
「いや何、仔細は後刻申そうで。――それより、のう、我乍ら目もあてられぬが……」
空腹と寒さを愬えた。
多三郎は何か困つた樣子に見えたが、
「やむを得ぬ――」
うなずいて、
「暫らく、待つておれよ。」
云い殘すと、足早やに參詣人に紛れ入つた。
程なく戻つてくれた時には、まさしく衣服一揃いに、大小、菅笠まで用意してある。別に、提

しようとは、武士の意地にかけても云えぬ。あきらめて、掌中の珠を取られたような懐いで別れる肚をきめた。

「然らば拙者ひと足先きに参るぞ。」

ぐつと吉郎を睨みつけ、その場を立去りかけたが、ふと氣がついたのは、手にした天蓋である。夕姫と一緒の旅でこそ一段と面白味もあれ、別れるとなれば、頭の重苦しい天蓋笠など眞つ平であつた。

それで、多少は面當てのつもりもあつて、

「そうじや。この扮裝、今となつては迷惑至極。御身とて又、必要の折もござろう。お返し申すぞ。」

と申し出た。

「あつ。」と目をむき、

「そ、それではお前さまが、矢つ張りあの日の女虚無僧であつたのかい……」

狂喜とも驚愕ともつかぬ呆けた表情の吉郎などは見捨て、午餉の席を乞うつもりだつた社務所へツカツカとはいつて行つた。

其處で、なけなしの財布をはたいて、禰宜に衣服の古着を乞い、虚無僧裝束は夕姫に突き返した。近ごろ最大の、黎左衞門には見榮である。

さて夕姫と分れてみると、懐中の乏しさもあり、尾張城下へ引返して浮月齋一派に荷擔する以外に生きる瀬はない。

その儘、肩をならべ、來た道を引返しながら、
「實はのう、恥を申さねばならんが……」

美　し　松

「それがし、イヤひどい目に逢うたわい。實は、お主じやから云うが、此處への道中さる大名の江戸屋敷に仕えたと申す女性と知り合いになつたのじや。それはよいが、こ奴、女の身で虛無僧姿など致しておつての、拙者のことゆえ一目で變裝とは睨んだが――」
「虛無僧女？」
「左、左樣。――ま、これがなかなかの美形での。拙者の炯眼に見抜かれたと覺悟を致したものか、向うから何かと言葉をかけて參る。女の身のひとり旅で、あまつさえ目が不自由ゆえかように浅ましい姿をしておりますとか申しての。そう聞けば不憫ゆえ無下にしりぞけもならず、」
「そ、その女虛無僧――いつ別れた？」
「三日になろうかのう。」
「三日？」
「左樣。そ奴が實はなかなかのしたゝか者じや。それがし、」
「それで、女、女虛無僧は何とした？」

り飯の竹の皮包み一つ。
「か、かたじけない……」
この時ばかりは黎左衞門、肚の底から嬉し涙をこぼした。さて人目をさけた木立に入つて、ともかく衣服を身につけ、握り飯に腹ごしらえをすませて戻つて來ると、
「わしは少々急ぎの用があるで、此處で別れるがな。明朝辰の刻、何なら今一度此の邊りで待つておらぬか。——ま、宿なとつて風呂を浴びられよ。」
同じ浪人の身の筈が、意外に大枚の金子を手渡してくれた。
「お、お主は？……」
矢張り山田浮月齋とやらに荷擔しておるのかい、と咽喉まで出かゝつたが、吳々も他言はならぬと千四郎に云われていたのを思い出し、躊うちに早や多三郎は立去つてしまつた。
翌朝辰の刻。
さつぱりした氣分で、早目に城下の宿を出て境內に出向くと、うまい具合に途中で多三郎に行き會つた。
「いよオ……」
別人の如く黎左衞門は血色もよい。
「何處へ參るな？」
「む……京じや。」

「まさか背負いもなるまいが、——いや、あ奴なら、本當に背に負うて歩きくさるやも知れんぞ……」
「川野。」
多三郎は複雑な笑いを眼に浮べ、
「わしはまだこの尾張に用があるで、お主、ひと先ず京へ向つて上つてくれぬかい。さしずめ、落合う場所は鈴鹿社の下。兩三日待つてわしが現われねば、次は石部じや。かならず、いずれかへは姿を見せる。」
「そ、それは、所用とあればやむを得ぬが、それがし一向お主らが意圖することにうといでのう。道中何かと心細いおもいも致すで。」
「費用なれば、」
「いや、金子の程は充分に昨日貰うたわい。わしの申すはのう、山田浮月齋どのとやらの、」
「落合う場所か？」
「左樣。」
「ならば案ずるに及ばぬ。いずれをお主が歩いていようと、浮月齋どの差廻しの者が尾けておろう。」
「何、何。」
「これは冗談じや。ハツハハハハハ……ともあれ京へお主は行けい。途中、萬一その女虛無僧とやらに出會つた砌は——」

「今申したとおり、別れたわい。」
「虚無僧装束のまゝか？」
「いや。恥を申さねばならぬと云うのはこのことじやが……」
黎左衛門は、相手が多三郎という氣安さもあつて、こゝで有りの儘に、自ら虚無僧姿となり女を守護したことから、麻生の吉郎の一件、はては高宮神社の境内の出來事に至るまでをつゝまず話した。
「さればナ、堪忍ならぬと思うたで、裝束はその女人に突返してやつたわい。」
「うゝ……」
「おゝ。お主もひと事ながら憤つてくるるか。全く以て、無禮なはあの永井家の奥に仕えるとか申す女――」
話すほどに、更めて口惜しさがこみあげ、黎左衛門内心に又舌打ちをした。多三郎の胸中などだから察しようもない。丁度城下町の鍛冶職などが店鋪を構える通りで、庶民の住宅も多かつた。
多三郎が立停つた。
「その別れた場所、高宮神社であつたな？」
おどろくほど低く訊く。
「左樣。今ごろはあの兩人、水口あたりまで參つておるかのう。」
「中間が、確かに背負うと申したか？」

なるので高宮神社の境内にそれとなく捨てて來たが、あとは腰紐にいたるまで丁寧に風呂敷に包んで背に結えている。いつ何時、夕姫から別辭を言い渡されても思い出深いこれさえあればという愛惜と、別離の用意のためである。

鈴鹿峠を越え、こうして一歩一歩京へ近づくのが、訣別の日に向つて近づいているとは理窟として納得しても、感情の喜悦はそれに餘る。だから源義朝首洗いの水と傳える稻川の傍らの泉で、隻眼の旅の武士がキラリと鋭い一瞥をくれたのも氣づかなかつたし、其處から少し行つた小里村で、辨慶背競石の傍らに憩う修驗者が目を光らして夕姫の歩行を見送つていたのにも大して意をはらわなかつた。忠實な下僕の姿勢で、夕姫には常に一歩を譲つて歩いたのである。

一度、いかめしげな白髯の老武士から道づれに身分を問われ、

「永井信濃守さまが江戸屋敷に仕えた中間ですわい。」

と正直に應えたのも、渡し人足などが從いていると思われては夕姫に申譯ないと考えたからだつた。

「永井家の、ではあれなる女性も關りのあるお人かな？」

老武士の重ねて問うのに、むろんそうだと答えた――その行きがかりが、他日美松の山中で無慘に斬られる理由になろうとは知る筈もなかつたのである。

うつくし松とは、街道すじ平松村山中に在り、松の葉が細く艶があつて、四時色を變ぜず蒼々としている。松の高さに大小はあるが、大樹は根から四、五尺まで幹常に雄松の如く、それから枝が數十にわかれて近くで視ると蓋の如く遠く眺めれば「あすなろう」に似ている。即ち葉は

人目にたつと氣づいたか多三郎はそのまゝ又あるき出す。「かならず、笠を目立つ所に結びつけておいてくれぬか。」

賑やかな通りの四つ辻へ出た。

「笠を置くのじやな？」

黎左衞門が、「よいわい。きつとあ奴、見つけ出してみしようで……」云つた時には、「さらば。」と多三郎の聲だけ殘つて、姿はない。

黎左衞門の見込み通り、その頃、吉郎を供に夕姫が歩いていたのは水口の宿場である。鈴鹿坂下から五里十一町。

名物の葛籠（つゞら）細工を賣る店が多く、殊に釜敷は千利休や紹鷗の好みで作られてから風流士の間に名高くなつた。むかし、大岡山に長束（ながつか）少輔の居城があつたが故あつて廢され、寛永初年に再營されたが城番の置かれたのは同十五年である。後に加藤家累世の居城となつた。

さて吉郎は夢心地だ。彼が一緒に旅してくれるならと、夕姫は女姿をあらためぬから、近づいてみれば見るほど陶然とする美貌に、全くこの人のためなら水火も辭せずという氣になつている。夕姫は何かと吉郎の扶けを求めてくれるのも、勿體ないほどに嬉しい。

剃え、思い出深い虛無僧裝束は、思いが容れられてあの高宮神社で黎左衞門に突返されたときから吉郎に贈られた。

むろん下司の身で、虛無僧姿に化けることは愜（かな）わぬが、それは問題でない。天蓋だけは邪魔に

「予が意中もたしかめずと差出たことを致す。」

と不興を蒙り、一時蟄居を命ぜられた。それでも一言の辯解もしなかつたのが益々喜六の意に愜つて、喜六は身に代えてもと主君に進言し、遂に蟄居を、赦された人である。妻との間に二男があり嫡男は同じく四郎右衛門の名を繼いだ。

『徳川御實記』慶安四年の項に依ると、家光が病臥中、その心を慰めるため諸藩の武藝者を召して武技を見た記錄があるが、その中に三月二十四日、「永井信濃守尚政が家士山崎兵左衛門、同源太郎、桂原四郎右衛門が劍法御覽ありて、各々服、銀下さる」と記されている。卽ち二代目四郎右衛門である。

さて信濃守尚政は四郎右衛門を召すと、

「賴みというは他でもない。淸姫じや。去月江戸參覲の途次、たしかに姫の姿を見たゆえ坂和田喜左衛門を追手に出したが、何者かの遮げにて空しく引揚げて參つた事情は、もはやそちも承知であろう。女人の身にあるまじき言行とは云え、捨ておくこともならぬ。匆々に其方が盡力にて連れ戻してくれよ。」

と言つた。

四郎右衛門は、

「は。」と平伏して、猶も確とした應えを躊つていると再び尚政が言つた。

「それとも、姫を尋ねる理由が別にあること了知せねばと申すか。」

「いえ。」

雌松、幹は雄松で其の雌雄分明でない。平松村のこの山中だけ悉く同木だが、隣山は常の松で美松一株もなく、他所に移したり鉢植えにすると必らず枯れた。和漢松の部類を考えてもいまだ此の類を聞かないのである。はるばる觀賞に來る旅客も絶えない。

そういう場所で斬られただけに吉郎の死は一そう悲慘と見え、併し、事情を知る者になら、いつそ彼にふさわしい死場所とも見えたであろう。――むろん彼の死に就いては後章で別に述べる。

さて此處は江戸――

吉郎が以前奉公したという麻布の永井信濃守屋敷の裏塀に、のつそり突立つた男があつた。まぎれもない武士の證據に、太刀一ふりを帶び、體軀も逞しい。たゞ何となく病いあがりの窶れが見えるのは不精鬚の故ばかりではなく、左肩から襟のひらいた胸元へかけて、一すじ、刀の傷痕があつた。

即ち千四郎である。

大名屋敷の裏塀では人通りも尠い。とがめる者があつても千四郎は一向介意しなかつたろう。――それ程、彼はすさまじい形相で絕えず辻の一角を睨んでいた。密かに邸内へ出入する者があるなら、其處を通ると當りをつけているともとれる。

そのころ、邸内で信濃守の御前に平伏していたのは桂原四郎右衛門兼忠だつた。兼忠はこの時三十二歲、戸田流の奧旨をきわめて永井家の歴々中隨一の達人と稱された。淸姬が老臣坂和田喜六の許にあずけられていた時、喜六にたのまれ私かに淸姬を指導したのが桂原四郎右衛門である。後に、このことが主君信濃守の耳に達し、

即日、御前を退出すると屋敷に戻つて旅装をとゝのえ江戸を發した。

主君尙政に淸姬召還を命ぜられた時の席には、重臣が侍つていたが、四郞右衞門の眞の役目を知つていた者は一兩名にすぎない。それも凡その事情にとゞまる。眞因を知つているのは、だから尙政を除いては四郞右衞門唯一人かも知れなかつたのである。

江戶を出立するとき、彼は嫡男を膝下に呼寄せて、

「父がこの度の役目は生還をはかり難い。萬一のことあつても斷じて死因を追求致すでないぞ。汝は、武藝一すじに專念して流名を興してくれ。」と云つた。それから遺品に包永の脇差を授け、家來一名を從えて屋敷を出た。

これが寬永十二年もおわろうとする十一月末である。

四郞右衞門が甲賀の流れを繼ぐ程の者なら、江戶品川を過ぎるあたりから、それとなく尾いてくる者のあることぐらいは勘づいたろう。

尾けていたのは千四郞である。永井邸の裏に突居た時とは別人と見せかける下心があつた故だつたのか、東海道を四郞右衞門主從に附かず離れず上る姿は、名ある武家の御曹子としか見えない。四郞右衞門は併し別に背後を警戒する樣子はない。千四郞の方も殊更に前の主從を窺い見る態度もない。

雙方一定の距離を保つて、時に一兩日の差で、次々と事なく街道すじの宿場を上つた。

そうして十二月はじめに尾張へ着いた。この時から、兩者の活潑な動きがはじまる。桂原四郞右衞門は柳生兵庫介の屋敷へ、千四郞は人を尋ねて熱田神宮境內大燈籠の前へ走つた。

「桂原、予はたかだか十萬石餘の淀城主じや、松平伊豆どのは聞こえた才物。――これ以上は、壓力に抗し得ぬのじや。察してくれい。」

と言つた。

四郎右衛門は肩をふるわせて、「勿體のうござりまする。左程の仰せを受けた上は、この桂原、身命に代えても。」と答えた。

桂原四郎右衛門、表藝に戸田流を稱するが實は甲賀の忍者である。

永井信濃守尚政の父直勝が長久手の役に敵將池田勝入齋を討ち取つて勇名を擧げた事は前に書いたが、この勸賞で直勝は三河國に於て千貫の地を加恩され、翌年更に二千石の地を加えられた。そうして關ケ原の役のおり家康に供奉し、凱旋後は近江國にて野洲(やす)、蒲生、栗太、甲賀の四郡より采地二千石を加增されたが、この時甲賀の鄕士三十七人衆を召した。その首領が桂原四郎右衛門の父茂助である。茂助は柳生石舟齋と親交あり、甲賀の術の一部を流(なが)したと傳えられる。四郎右衛門はこの父に就いて幼少から忍者の修行をさせられていたのである。

四郎右衛門は併し、忍者に躾けられながら性溫厚で、長ずるに及んで一切、術を捨て、もつぱら表兵法の修行に專念した。この點晩年の柳生兵庫介に似ている。武藝の境地も若し兵庫ほどの精妙に達していたのなら、主命とは云え忍者の葛藤する渦中に身を投ずるのは確かにくるしかつたろう。――が、上意とあればやむを得ないし、上意のためだけに身命を捨てるが一般武士道であつてみれば猶更、この機に蹶(た)たざるを得なかつたわけだ。

玄關には既に家令の浦治兵衞が衝立の前で控え待つている。
「ようこそお出でなされた。主人兵庫、奥にてお待ち申しております。御案内致す――」
浦治兵衞は兵庫の妻女はるの實家島家の遠縁に當つた。この比五十を過ぎているが、實直一方の人物である。桂原は沓脱石に草鞋を解き、用意された濯ぎは使わずに式臺へ上る。刀架に差料は掛けなかつた。
仄暗い廊下を渡り過ぎ、一度、庭に臨む縁へ出てから、鍵の手に渡り廊下を渡つて書院へ案内される。途中、障子を閉め立てた座敷を過ぎるとき、室内で少年の何やら喚くのと、それをたしなめるひそやかな婦人の聲を聞いた。
兵庫介は床の間を背にして正坐し、はいつてくる桂原を凝乎と見てから、
「よう來られた。折よく非番で在宅しておつた所じや。」
目を離さず言つた。
「久々に御意得申す。桂原四郎右衛門――」
一禮をして、刀は持枠えずに左脇に置く。
「浦。」
兵庫介は、障子を閉め立てようとする治兵衞へ、
「チト用談がある。當方にて呼ぶまで茶は要らぬぞ。」
「は。」
「それから、淸厳に不自由の身であろうが、これへ參るよう傳えてくれ。」

間遠渡り

柳生兵庫介の屋敷をたずねた桂原四郎右衛門は、門前の中間に、
「江戸より參つた桂原と申す者じや。兵庫どの在宅なら御意得たいと、傳えてくれぬか。」
菅笠を脱いで物靜かに聲をかけた。
尾張家兵法指南役の居宅ともなれば、手づるを求めて何とか兵庫介の推擧にあずかろうとする牢人者の來訪も少なくない。いつの世にも、立身した者の周圍には樣々の理を附したあぶれ者が寄りたかる。中間はその方の判斷には目がこえている。
「お待ち下さりませ。」
ひと目で、歴とした身分の士であるのを察したから、駈け走りで玄關の取次ぎへ連絡した。
戻つて來ると、
「御案内致しまする。」
あとを朋輩の中間に賴んで桂原の先きに立つ。
四郎右衛門は笠を從者に持たせ、
「その方此處にて待つておれい。」
一人で門を這入つた。

「本心で申されるのか。」
「……」
「お手前そのつもりでも、武藝帳に列記された筆跡は消え申さぬぞ。」
「消した。」
「何。」
「當家に預りおいた一巻過日十兵衛三厳に手渡したが密かに汀の姓を抹殺致した上じや。」
兵庫介は端然、云いきつて態度に些かも崩れがない。桂原四郎右衛門は、その氣なら抜討ちを仕懸け得る。兵庫介は丸腰である。
眉を張り、身を乗出し氣味に穴のあくほど兵庫介の表情を見戍つたが、
「そうか。」
浮かしていた腰を、落した。暫らくして言つた。
「分つた。お手前なら無理もない。……そうか、それほど主家を大事に思われるか……」
少時して又言つた。
「場合によつてはお手前と刺違えてもと存じて參つたが、そこまでの覺悟ありと見破れぬとは、いや、桂原四郎右衛門、としを取つた……兵庫どの、お主に當つて清姫どのが行方を糾すは諦め申す。――が、これだけは教えられい。清姫どのが身に異状はあるまいか？」
「おそらく無い――」
「何處で逢われた？」

「は。」
浦治兵衛の足音が去ると、兩者は默つてただ見詰め合う。
「何時、當地へ着かれたな？」
兵庫から口を切つた。
「先刻。」
「信濃守どの御健祥か。」
「兵庫どの。」
桂原の顔面に皮肉な笑みがうかんだ。
「今日訪ねて參つた理由、お分りか？」
「淸姫の行方かな？」
「左様。お手前なら御存じであろう。伺い度い。いずれに居られる？」
「何故わしが知つておると見られた。」
「たしか江戸柳生家より三兄弟上洛せし筈。ならば必らず御手前方にて、」
「知らぬ。」
「何と？」
「お主、考え違いをしておらぬかな。いかにもこの兵庫江戸柳生の一族じや。併し信ずる道は別。念のために申しておくが、汀佐五右衛門と名乘つた武士、もはや此の世にはおらぬ。且つ、武藝帳なるもの一巻たりとも當屋敷には無い。」

息絶えたが、その砌り、清姫どのが身邊に武藝帳ありと言い遺した。――まことかな？」
「……」
「先程も申すとおり、當方に武藝帳への執着は一切ない、ただ清姫どのが身に危難の及ぶを惧れる故じや。」
「い、いかにも鍋島藩が手の武藝帳、清姫どの所持なされての出奔であつたが……刑部がどうして知つておつたか。」
「四郎右衛門、刑部は實は藪左中將嗣長卿の落胤じや。されば鍋島藩より島津を經て、永井家に武藝帳を託したもコレ刑部が才覺。お主が武藝帳に名を連らねていること彼は知つておつた。」
「げつ……」
「わが判斷に誤りなくば、清姫どのの所持する一巻にお主が名も記されてある筈。清姫どのより武藝帳を取り戻すをお主、主命と思うておろうが、お主自身のためでもあること覺えておかれい。」

柞原四郎右衛門が兵庫の屋敷を出たのはそれから間もなくである。浦治兵衛は玄關式臺まで丁寧に送り出した。從者の笠を受取ると四郎右衛門は門を出て道を西へとる。顔色のすぐれないのは笠にかくれて從者に窺えるわけもなかつた。
明珍甚兵衛の店鋪の前を通りかかつた時である。向うから二人づれの旅姿の武士が來る。何氣なく見て、素早く柞原は笠の面を俯せ、行き違つた。

「知らぬ。」
足音が近づいて、
「父上お呼びでござるか。」
廊下に清嚴の聲がした。
「這入つて參れ。」

清嚴はいつぞやの呼續濱の疵の手當でまだ臥つている身だが、それを兵庫介が呼びつけたのは、武藝帳を十兵衞に手渡す前後の模樣を桂原に納得させるためである。ひと目で凡そを四郎右衞門は察したようなので、
「さがつてよいぞ。」
あつけなく淸嚴は退室させられた。むろん桂原四郎右衞門に面識はない。
片足を引摺り氣味の足音が遠ざかると、
「そうであつた、お主に聞かせることがある。」
兵庫介から再び口をきつて、
「友田刑部が斬られたを知つておるかな。」
と言つた。
「……」
「その顏では知らぬようじやな。手にかけたは山田浮月齋。刑部みずから當屋敷へたどり着いて

多三郎と別れるとき、「お主が何處を歩いていようと浮月齋どの差廻しの者が尾けておる筈じや。」と冗談ともなく多三郎が言つた、その言葉がある。それで氣をつけてみたのだが、なるほど、旅の武士らしいのが、どうもこちらを尾けていそうだつたのである。それで幾度となく振向いた。

「いよいよあ奴じやな。」

胸に大きくうなずいた。

が、別に警戒すべき相手ではない。むしろ、今の黎左衛門にとつては歡迎すべき人物だから、何なら近寄つてくれるのを待とうかと、歩度を緩めると、うしろでも他用にかこつけてそれとなくおくれる。わざわざ道わきに外れて放尿してみても一向近寄る氣配がない。それでいて歩度をのばせば一定の間隔でぴたりと尾いてくるのだ。

「勝手にせい。」しまいには氣にかけるのはやめにした。すると、丁度、宮の驛から桑名への渡し船の帆が見え出した頃である。すーつと風の吹き寄せる感じで相手が近づいた。肩を並べる。

遠慮なく黎左衛門横眼で見たところ、何處ぞの歴とした藩士のいでたちだ。

「ふーん。こういう身分の侍が一派では、なるほど、多額の報酬というも嘘ではなさそうじやぞ。」

そう思つたから、つい親愛の情を披瀝したくなり、

「率爾ながら、お手前も矢張り、京へ向われるかい。」

ことばを掛けた。

――無禮なはあの永井家の奧に仕えるとか申す……

一人が相手に喋りながら去る。

「八十次郎。」

しばらく歩きつづけてから、四郎右衛門は立停つて從者をかえりみた。

「わしはこれより今一軒所用を果さいではならぬ。獨りがよいで此處で其方と別れる。夕刻までには宮の驛に戻つておろう、桔梗屋なる旅籠にて待つておれ。」

と云つた。

「では旦那樣も桔梗屋へおいでなされるのでございますね。」從者が念をおすと、

「必らず行く。」

うなずいて見せ、今來た通りをもう足早やに引返して行く。あつ氣にとられて從者は見送つた。

こちらは川野黎左衛門である。賑やかな通りの四つ角で多三郎に別れ、所在なさにぼんやり商家の店先など眺めたりしていたが、

「そうじや。あの女、見つけ出さいでおくものかい。」

思い出したように獨語し、忽ち急いで道を鳴海の宿場の方向へとつた。それから笠寺觀音の前も過ぎ、宮の驛にたどりついたが、その間、幾度となく黎左衛門はうしろを振見ては、

「ハテ！」小首をかしげた。

の間もなく出ることを喚いてくる。宮の渡し場から桑名へ海上七里、むかし、天武天皇が大友皇子に襲われ給い、伊勢から尾濃へ亂を避け給う時この渡船の着岸の遅いのを嘆かれて「間遠なり」と宣うた。以来ここを間遠の渡りと稱ぶ。

七里の海上、風景斜めならず、西南に朝熊、二見ノ浦、鳥羽の湊、東北には三州遠江の浦々はるかに見えて美景の海路である。船は六人の水夫(かこ)が左右に立つて櫓を漕ぎ、帆を少し開き掛けて進む。大船のゆたかな感じで地上に坐しているようにしか思えない。風で海の荒れた時は佐屋へ廻るが東海道を上るおりは前方に桑名城が見え、下り船からは熱田神宮の濱鳥居、高櫓の神燈が海上渡船の目的(めあて)となつた。

さて渡し場に来ると、尾州家の家士が紺地に紋白の葵の御紋を染めた幕をうち四半の幟を立てた監船所にいて乘船する旅人を何となく見ている。黎左衛門は、前にも一度夕姫と乘つているから此の渡しは大いに馴れたつもりだ。

「これに乘り遅れると、今日は渡船がないかも知れぬぞ、さ、乘られんかい。」

武士を促して自分はトットと板を渡つた。乘客は甲板に坐るのである。もうかなり混んでいる。舷(ふなばた)のいい位置をと目でさがして、不意に「う。……」とうなつた。

姫若風の女性と、千四郎そつくりの人物が差し向いに坐つているのだ。

「――左樣。」
笠を目深かにかぶつているので容貌は明らかに判り難いが、壯年で、口許の引締つた薄髭そらな武士である。いよいよ以て黎左衛門は信頼をした。
「では矢張り、お手前も山田浮月齋どのとやらに逢われる筈じやな？」
「――」
「いや、かくされいでもチヤンと拙者には相分る。――大月多三郎を存じておられるかい。つい先刻まで、尾張の城下町へ一緒に參つてな。別れるとき、お手前がことを申しておつたわ。」
「む？……」
どきつとしたらしいが、黎左衛門には却つてそれも愉快なことだつた。
「はつは、驚ろかれたか。されば、尾けられるには及ばぬ、のう。何ならともども旅致そうで――」
「お手前、……姓は？」
「こりや申し遲れた。拙者江戸表にて、大久保彦左衛門どの屋敷に寄食致す浪人。――川野黎左衛門と申す。以後お見知りおき下され。」
「……」
「で、何處へ參れば、浮月齋どのに逢われようか？」
相手の顏をのぞいたが答えなかつた。
そのうち、海が眼前にぱつと展け、渡口の船着場が見え出した。聲を大にして船子が旅客へ船

「おつ、忘れるところであつた。――おおい、ここへ來られい。我らが一派の千四郎じや、お引合わせ致すぞ。」

渡船場の桂原四郎右衛門に呼びかける。

――知らぬが佛だ。

千四郎は江戸を發つた時からの相手を見誤まる筈はない。桂原また、尾行して來た人物であると早くも見抜いている。桂原が立竦んだのは、千四郎の前に坐つた女性が、他でもない尋ねる清姫だつたことである。

「……船が出ますぞーい。」

船頭が岸に向つて聲を張つた。バタバタ駈けて來る商人がある。それに前後して桂原は意いを決して船上の客となつた。

「さ、ここじや。――來られい、引合わせるで……」

手招く黎左衛門へ、

「いや、拙者はこれにて。――どうぞ、氣にかけずお話しなされよ。」

清姫がその聲の武士を氣にしなかつたのは、海面を見つめて想いを他所に趨らせていたからだろう。

「そうかい。坐つたが樂であろうに……」

左右に一搖れして、船が滑り出した。人情で、乘客は離れ去る岸の有様を振返る。次第に陸地は遠ざかつて、ひろがりを加えてゆく。清姫も感情のこもる視線をふと熱田宮の森へ投げた。

指打の條

黎左衛門は旅客をかき分けて二人に近づいた。

「やはり、千四郎ではないかい。一體、いつ此處まで來たのじやな……」

江戸で手傷を負うたと噂に聞かされたことがあるから、眼の上角を白眼にして見下した。

相手の女は、これは又眼も覺めるばかりの美しさである。大久保家で寄宿していた素浪人とは何としても見えぬほど、千四郎の容姿も端麗で間然する所がない。

千四郎は悠然り向き直つた。心ある者なら、黎左衛門の乘船するのを夙に見知つて、故意に背を向けていた、と看破したろう。

「これは珍しい所で逢うた。お主も桑名へ渡るかい。」

と言つて、破顔した。

黎左衛門には美女が氣になる。横眼で見る。女はさあらぬ態で舷から海を見下している。

「先刻、見たときは多三郎かと思うたぞ。雙生兒ゆえ無理もないがのう。多三郎といえば、尾張城下で訣れたばかりじやが、お主、出會わなんだかい？」

そばで女がヒクツと肩を痙攣させたが黎左衛門は氣づかない。

「逢わぬ。それより、あの武士、お主が連れではないのかな？」

「む。……そ、それは。」
黎左衛門は靑くなつたり赤くなつたりした。
「こうなればもう何もかも云うわい。いかにも拙者前に一度、この渡しで桑名へ着き、それより鈴鹿峠へ向うておつた。お主との約に背くようで、心苦しくは思うたが、その女人に强つてと賴まれたゆえ――」
「モシ。」遮つて、
「そのお方は今、何處におられますのじやえ?」
一すじの眸を向けたのは淸姬である。
「されば別れた相手ゆえ、今何處とは確と申し兼ねる。それがしとて、實は多少氣にかゝる事ござつてナ、尋ね探す心づもりでおるが、別れた場所は、石藥師が先きの高宮神社境内でござつた。」
全身を耳にし、黎左衛門に背を向けて突立つ桂原四郎右衛門を其の時鋭く一瞥したのは千四郎である。
「確かに高宮神社でお主、別れたか?」
殊更に千四郎は駄目を押した。
「そ、そうじや。」
穩やかな海面を滑る如く進んで船が桑名に著いたのは申刻すぎ。――この日の便船はこれでお

黎左衞門が言つた。「お主に訊こうと思うておつたが、のう。我らが上洛の役目は一體、何じやい？」

「……」

「そ、そう怖い顔をするでない。お主の身扮があんまり……」

暫らくして、又言つた。

「これは多三郎にも話したことじや、拙者さきごろ、異な女性に出會うてのう。——左樣、却々の美形であつたが、こやつが虛無僧に化けておつた。」

善人丸出しに、何とか、不機嫌に默り込んだ千四郎の氣分を逸らそうと思いついて話し出したことであろう。淸姬と桂原にこの話が與える衝動を知る筈もない。却つて、はじめて美女が自分を振見てくれたのに大いに氣分をよくした。

「婦女子を前にしてかようの話を致すも如何なものじやが、拙者はじめは男とばかり思うておつての、然るに放尿する樣子が尋常でない。」

どつとあたりで乘客が吹出した。黎左衞門は頓に話しぶりに氣が入る。

「よつて問い糺したところ、女と白狀致しおつた。そこまではよい。然るに、こ奴には吉郞とか申す色氣違いがお供に附いておつてのう。おんぶして歩きたいと申しおるのじや。よいかい、白晝、婦女子を負うて鈴鹿峠にでも登ろうと申す——」

千四郎がはじめて關心を見せた。

「お主、では鈴鹿峠あたりにいたのか？」

「多三郎と別れた直後？」
千四郎が立停つた。五、六歩前へ出た淸姫も思わず、彳んで、振向く。多三郎の名が出たからである。
「さ、左様じや。」
「何故別れたな？」
「それは分らぬわい。ふたりで歩きながら話しておつたに、突然、多三郎が方で所用があると申しおつて……」
「何を話しておつた？　先刻の、女虚無僧とやらのことか？」
そうだと黎左衛門はコックリをした。千四郎は沈思し、
「……そうか。」と、うめいて、
「黎左衛門。お主が話しかけたあの武士われらが一派とは、敵じや。」
「何、何。」
「最早おそい。あれ程、みだりに他言は愼しむよう申しておいたに。……情けない奴。」
怕い眼で黎左衛門を睨む。
黎左衛門は本氣で靑ざめた。やや遲れて歩いて來ていた武士の方をかえりみると、早くも何かを感知したか、それとなく街道のわきへ寄つて小憩している。
千四郎が言つた。
「お主の責じや。あの武士斬れい。」

わる。

乗客一同ぞろぞろ岸にあがつた。左方に大神宮の大鳥居がある。少時往くと城門に達し、片町、吉津屋町などいう町が城門の内にある。それを出て新町を過ぎると寺が五つ六つ見えた。桑名は伊勢尾州の湊だから町數多く、商家軒をつらねた繁花の驛である。音頭膏藥なる看板を掲げた店あり、一般に古道具屋が多い。紺屋もある。有名な桑名の燒蛤は、女松の毬で燒くのである。さて船を降りた旅人は前後して、これらの町の風物を眺めやつて齊しく四日市の宿場に向つた。黎左衞門、淸姬、千四郎、桂原も例外でない。

黎左衞門は終始千四郎に話しかけると見せて淸姬の傍らを去らない。が、砂川の橋を渡つて富田の立場にさしかかつたとき、淸姬のうしろを廻り、そつと千四郎の傍らに寄つて來て、

「のう、あとより參るあの旅の武士、お主らが一派の仁ではないのかい？」

不審げに聲をひそめて尋ねた。船中から此處まで、どちらからともなく避け合つている樣子に漸やく氣がついたのである。

「違う。一向心當りのない奴じや。」

「げつ。では、失敗つたぞ。拙者、そうとのみ思い居たゆえ、親しく言葉を交したが。」

「何處から一緒であつた？」

「尾張城下じや。左樣、多三郎と別れて程なくの頃から、それとなく拙者を尾行し參つたで、てつきり――」

「や、やられたわい。……」

黎左衛門は刀を把つた左手の指四本（拇指を除く）をバラリと切落されて頓狂もない悲鳴をあげた。思わず、落ちた指を拾おうとする。

その時にはもう桂原は身を翻えして千四郎と清姫を追うた。

「姫。……姫。……桂原四郎右衛門にござりまするぞ。とどまりなされい。――姫……」

太刀は鞘に收めてある。往反する旅人が驚いて道を左右にあける間を疾風の如く驅けた。

次第に千四郎との距離が縮まつた。

千四郎の方は清姫を抱えているので日頃ほど輕捷でない。

「姫、お主自身で驅けられぬか。多三郎に會えるのじや。しつかりなされ……」

髄をゆすつて勵ましたが、清姫は失心せんばかりで、土を蹴る跫音が遂に背後數間の近さに迫つた。

千四郎は覺悟をした。走りやむと、清姫を背後にしてくるりと桂原へ向き直つたのだ。

桂原も歩度をゆるめて、停る。

暫らく雙方ただ火の如き呼吸を吐いて對峙した。

「！……」
「猶豫はならんぞ。お主われらに與しようとなら、速かに斬つてみせぬか。」
「や、やむを得ぬ……」
到頭黎左衞門は合點した。面前にいる千四郎の眼のけわしさでは、いやと云つたところで、どの道許してくれる樣子はない。却つて下手に拒めば拔討ちが來よう。美人の見ている手前もある。一か八か、旅の武士に勝負を挑む覺悟をきめた。
黎左衞門は目をつり上げて桂原四郎右衞門の前へ戻つて行つた。と見る間に、千四郎は矢庭に淸姬を捉え、
「そなた多三郎に會いたいと申されたな。それがし案内致す。此の場に長居は無用じや。參られい。」
云つて、橫抱きにするや一散に南を望んで驅け出したのである。
「しまつた。」顏色を變え立上つた桂原の前に黎左衞門は眼を据えて立つた。
「よくも人を誑らかしおつたぞ。覺悟せい……」
口を渴かして叫び、太刀を拔き放つて斬込んだ。桂原は一步踏みちがえ切先をかわすと、下からさつと黎左衞門の指を刎ねた。後世、十兵衞奧傳と傳える古流新陰業太刀の一である。曰く
――「人を殺す勿れ、たゞ戰意を失わしむれば可なり」と。

者と、その武藝帳の入手をはかる青年忍者と。

道幅は左程廣くなかつた。千四郎が先ず刀の鍔を指で押した。千四郎得意の抑え斬りの身構えである。四郎右衛門は身をいくらか沈める構え方で、これは肘を張り氣味に柄へ手をかける。いずれも同じ新陰流――小指一本が確と柄を握れば其の場で太刀は閃めいて勝負がつく。

千四郎が遂に先ず抜いた。それにかぶさる如く四郎右衛門は斬りつける。清姫は顔を蔽つた。勝敗は決した。

「姫。……と、殿のお側へお戻り下されましよう。……」

絶叫したのが四郎右衛門の最期である。優劣をきめたのは鍔の差だつた。

鍔はもともと透し彫りのないのを尊ぶ。地の厚味はうすいがよい。厚い鍔は、敵の刃を受け止めるに便利であるが、その爲に重くなりすぎ、差し方によつては鞘走ることがあるからである。普通の熟練した武士なら、だから厚い鍔は心掛けて用いない。

併し忍者は鍔のひろく大きいのを使う。時には鞘ごと大地に立て、鍔を踏臺に土塀などを乘越える用意である。桂原四郎右衛門は自身の武藝に陰の忍びのわざを含めることを自戒し、鍔を普通のものよりむしろ小ぶりで薄くした。紙一重の差で雙方の切先が交叉したとき、四郎右衛門の斬込む刃は千四郎の鍔にとまり、千四郎の打込んだ切先は、鍔を側つて相手の眉間を割つたのである。

清姫は眞青になり、不幸な家臣の亡骸を呆然と見下した。

千四郎は太刀を拭つた。

桂原四郎右衛門が視線を移した。

「姫。――桂原にござる。それなるは姫が父君に敵對致す一派の者。何卒お離れ下されよ。拙者、主命によつてこの者を斬らねば相成らぬ。」

肩でする呼吸が、いくらか桂原の方が大きいのは彼我の年齡の差であろう。

ゆつくり千四郎が言つた。

「もはや知つておろうが當方、霞の忍者千四郎じや。永井信濃守がこの千四郎を斬れと申したとは奇怪。――姫、聞いておかれいよ。御身が間違えられたとおりこの千四郎、多三郎とは雙生兒じやが、考えること我等兄弟はひとつ。進むべき方向も、與する立場もひとつ。されば多三郎を慕われる御身は、父に仇召される。父上がとういか、多三郎を大切とお思いか。とくと肚をきめられい。」

そう云つて、少しずつ雙方で間合を詰める。

清姫は氣が動搖して事を判斷する餘裕はない。

「やめてたもれ四郎右衛門。何も、斬り結ぶほどのことないのではありませぬか。話せば分りましよう。やめて、……千四郎どの、おやめなされておくれ。」

おろおろと唯言う。

兩者にとつては、だが女の意志など最早どうでもよかつた。一瞬氣をゆるめた方が斬られる。異様な殺氣に、旅人が息を詰めて見成つていることにも氣をくばる餘裕はなかつた。

相手が何者かは、無言の睨み合いで既に一切は感知しあつている。武藝帳に名をとどめる兵法

い。

旅する者は、いずれはその必要と事情あつて家郷を出たものだろうから、この僥倖を欣び、次次と峠を越える。商人あり、馬を叱咤する武士があり、あわれな婦人の一人旅もある。いずれにも樹上の武士は目迎え、目送したが、

「おかしい……わしは、あやまつたかな？」

と獨りつぶやいた。

それから又幾人かが通り往き、通り來つた。

丁度、そうして朝から二刻近くも過ぎた午前である。

「？……」

武士の眼が急に光りを帶び、樹上から身をのり出した。

「あ奴か……」

とうめいた。

東海道を京へ向う多くの旅人とは反對に、急ぎ足でこちらへ登つて來る人物がある。笠に顏をさえぎられてよくは見定め難いが、歩行ぶりに常人と異つて異様な輕捷さがある。

「あ奴じや。――まさしく霞の多三郎――」

言つたと思うと、猿の如くスルスル幹を這い下りた。

岩頭に一度佇立すると、眼下を行く笠の移動を見下して軈てなゝめに自らも勾配を走り下り、坂の曲るあたりでポンと丈餘の崖を飛び降りる。

「致し方ない。わしが、さもなければ斬られておつた……。姫、この光景を目のあたり致された以上、もはや我らと旅は出來まい。やむを得ぬ、この場にて某は別れ申す。――あの川野黎左衞門もし無事なれば、やがて此處へ追つて參ろうで、何なら同道致されるがよいぞ。武藝はともかく、人柄は無類の善人。御迷惑はかけ申すまい。」

聞いているかいないかも判じ難かつたが、千四郎はそれだけを言い殘すと、

「――御免。」

さつと矢のように西へ向つて走り出した。

それから二日經つた。

鈴鹿峠から猪鼻の立場にかかる道中を見下し、巨木の枝にまたがつて眼下を通る旅人を密かに監視していた武士がある。

名におう鈴鹿山は、八丁二十七曲り。道は狹くて嶮しく、淸水が所々に湧出して雨の日は越え得ない。峠の茶屋は澤という立場で、甘酒を賣る店が多く、此の邊が伊勢と近江の國境になる。左に淸淨山十樂寺、子安觀音などを望んで鞍骨坂をこえ、猪鼻をすぎると蟹が坂の立場にいたる。猪鼻では家々は黃色の飴をひさぎ、又、經木の如き物を紙で貼つて黑く塗り、水吞と稱して賣つていた。

武士が木に跨つていたのは、その鞍骨坂のあたりだつた。

十一月の末ともなれば例年ならもう一帶に降雪を見るが、この年は暖冬でまだそのきざしがな

肚をきめたらしい。多三郎ももう持前の逞しい面構えに戻つて、これ又ニヤリと破顔をした。
「いかにも清姫どのが所持したという武藝帳、今この懷中にあるが、そう簡單には渡せんな。」
「當り前じや。お主からただ取返そうとは云わぬ。いのちともども受取ろう。」
「よい。——取つてみい。」
正面きつて、忍者同士の對決なら白刃を交えることもなく、いつそ氣が輕いのだろう、思うさまに術を使う奇妙な愉しさすらあつてか、どちらも不思議な微笑をうかべた。
「この儘やるか？ それとも、場所を變えるか。」
多三郎が訊いた。
「ふざけるでない。水邊でならお主にかなわぬが、山ではわしが術のものじや。動きはせぬ。」
「よーし。ならばまずお主が消えい。」
素早く手で菅笠を脫ぎ捨てた。
「見破るか？」
弓削三太夫が言う。弧を描いて多三郎に抛られた笠が樹林の谷間へ落下していつた。
忍者は術を競つて敗れれば卽ち死ぬ。掟でなく巧拙の理である。姿を消すというのも呪文をとなえてパッと消えるお伽話のあれではない。通行する旅人の步行を藉りて身をくらますのである。
忍者同士なら、原理は分つている筈だが、それでも猶、視覺の盲點を利した遁走が可能とされた。一種の錯覺を利用するという。萬一その術にのつて暫時でも相手の姿を見失えば、不意を襲

歩いて來た男はぎくつと立停つた。
「久し振りじや霞の多三郎。——わしを覺えておるかい。」
と言つた。
たしかに男は多三郎である。笠の庇をあげ、
「知らぬ。柳生一派の者か？」
「ふざけるでない。——鍋島忍者じや。」
「何？」
「覺えがあろう。その懷中にいたした卷物、もと我らが手にあつたを、島津公より淀藩を經て淸姫どのが所持となつた……おめおめお主に奪われては、鍋島よりそれの行方を見守つて來たこのわしの術が立たぬ。——のう、柳生を相手に立廻るほどのお主じや、この弓削三太夫、勝負するに不足はないぞ。」
陽焼けした顏にうつすら不敵の笑みさえうかべて言う。
年は三十前後。
右頰にえぐつたような刀疵があるが、凄いほど苦味走つた美丈夫である。
道は片側は山の岩肌、片側は目のとどかぬ谷間である。
弓削三太夫と名乘つた忍者が、少しずつ移動してその谷の斷崖を背ろに構えた。忍者なら絶壁はこわくない。多三郎が逃亡を企てれば谷をえらぶにきまつているからである。
「そうか。……お主が弓削か。」

戰せい。」

と言つた。それから踵を轉じると鈴鹿峠を一散に驅け下つた。

弓削三太夫は云うまでもない鍋島元茂の家臣である。奪い取つた武藝帳は、麻生の吉郎が知らず虛無僧裝束として持ち歩いていた夕姫のものだ。

吉郎は美し松で山田浮月齋に斬られ、浮月齋は丸ぐけの帶に縫い込まれてあつたこの武藝帳を發見してこれを多三郎に託したのである。それを美事奪回した。

「見い。わしが忍びは多三郎にまだ負けぬわ。」

會心の笑みをうかべ疾風の如く三太夫は水口の宿へ走る。そこに待つている人がある——。

山伏の司

山川の橋を渡つて水口の城下にはいると、少し坂を登つたあたりに大池町なる町があり、煙管(きせる)、籐行李(とうごうり)などひさいでいる。この邊りは葛籠(つづら)細工が名産なのである。

其處からしばらく行くと夷町を過ぎ、左手に大手の木戸門が見えた。右に天滿宮が見える。市中は閑散として賑いなく、更に町をすぎ、馬場先の立場を越えると右方に高く大岡寺山が望見された。これから右に續いて岩山あり、兀(こつ)として草木を見ない。すなわち岩根山と呼ぶ。

われ刺される道理だ、術の敗北が死を意味するわけである。

弓削三太夫が先ず通行する商人の歩行に乘つて姿をかくした。直ちに多三郎は喝破した。

次に多三郎が雲水に寄添うと見ると忽ち姿を消した。三太夫は佇立して、凝乎と地面をにらんでいたが、

「見たぞ。」

と言つた。はるかな頭上の梢から多三郎は降り立つた。

次に三太夫が掌中の目潰しを投げた。粒狀のそれが道幅ひとつを飛ぶ捷さより多三郎が三太夫の隣りに移り立つ方が早かつた、と、見た目には見えるのである。多三郎の手に、投げられたばかりの目潰しが空中で捕捉されている。

こういう闘いを、數度にわたつて兩者は交した。至極童話めいて、何か遊戯を樂しんでいる明朗ささえ感じられ、第三者が若し術者の《眼》をもつて、しかも常人の心情で見たなら微笑を禁じ得なかつたろう。術が優れて居れば居るほど、のどかに遊戯めいて眺められるそうである。

――が、そうして何度目かの競いがおわつた時だ。

「ぬつ……」

と多三郎が叫び、

「見たか。」三太夫は一擊、多三郎の臉を搏つた。

返す手に懷ろから卷物が掠め取られている。電光石火の業である。

「今いのちを奪うは易いが、陰流のよしみじや。一度は助けてやろう、口惜しくば術を勵んで挑

聲があつて、單身、白頭巾の人物だけが弓削の平伏する前へ立現われた。
「大儀であつた。取戻して参つたな？」
「は。確かに。」
「多三郎は何と致した。」
「術の上にて勝負致してござる。なれど、あれだけの男ゆえ、一身に及ぶことはござるまいと存じまする。」
「そうか。――見せい。」
「は。」
弓削三太夫は、懐中の一巻を呈上する。
受取つて白面の士は卽座に紐を解きバラッとひらいた。牙軸が手から足下へ傳い落ちる。武藝帳である。
以前、江戸柳生屋敷で、友矩が襖の裏から取出したのは、連判状めいた人名列記の巻物だつたが、今ひらかれたのには太刀を構えた人體を黒く墨で塗りつぶして、個々のその構えに名稱と、下に小さく姓名が書かれてある。
冒頭に――
漣（さざなみ）の位　　柳生又右衛門
とあり、尋（つい）で――
小太刀丸橋　　田中甚兵衛

左方に見えるのが飯道寺山である。甲賀郡中にそびえ、これを山伏の司の地と旅人は呼びならわした。――實は甲賀忍者の據城である。海拔六百六十四米、現今では單に飯道山と呼ばれる。

その山腹へ、街道すじをそれて鍋島忍者弓削三太夫は一散に走つた。

中山の仄暗い樹下に古びた祠がある。樵夫も滅多にこの邊は通らぬらしく、枯れきつて色あせた草花が竹筒に枯れ枝のように細々挿されている。

三太夫は祠の前に來ると、急に歩み停つて呼吸をしずめて利き耳をたてた。動物の如くその耳朶はヒクヒクと動いた。

「此處であろうと思うがのう……」

呟いて、少時また耳を敧てる。

それから百舌の啼き方をした。

落葉を踏んで、ゆつくり跫音が近づいたのは間もなくのことである。跫音は數人だつた。

「弓削か？」

重々しくその中の一人が聲をかけた。

忽ち三太夫は其の場に平伏して、

「御意。只今立戻りましてござる。」

と言つた。

一同の跫音が停り、

「そちたちは此處で控えておれい。」

「いえ、拙者その場にあらばおめおめ斬らせは致し申さぬに。……仰せに依って多三郎が行方を尋ねて参った節、千四郎め、清姫どのを捨ておいて何やら一散に駈け申した。さてはと存じ暫時あとを追い申したところ、これが當方の見込み違い、千四郎、まだその一巻多三郎が手中にありとは知り申さなんだ。よって、念のため再び街道を引戻し、桂原が亡骸に行當った次第でござる。」

「しかと、しかと千四郎が斬ったに誤りはないな？」

「清姫さま自失の有様のところへ辿りつき、例の大久保家に寄食致す川野粂左衛門。その者と、姫との問答にて千四郎に違いなしと見きわめ申した。——尚、粂左衛門その砌の話では、指四本、桂原に斬り落されたと申しております。」

「何。」

蒼白い顔がキラリと光って、

「指を斬られた？……桂原にじゃな。」

「御意。」

「そ、それはまずいぞ弓削、川野とか申す奴、とかく口が軽いと誰やら申しておったが。……桂原も輕率なことを致してくれた。」

「？」

「指を落す太刀捌きは、新陰が刀法にあるばかりでない。これなる武藝帳にも實は明記してあるのじゃ。餘人には出來ぬ業、その痕跡を川野が片手へかりそめに殘しておいては如何なる人物あ

寒夜聞ゝ霜の太刀　狭川新九郎
猿飛太刀数八、急の太刀なり　汀佐五右衛門
山月の位　馬木家六
明身の位　笠間又兵衛
指打の條　桂原四郎右衛門
一葉浮水の構え　佐々木左門
電光下段　弓削三太夫
水月割り　出淵平兵衛

などが夫々の身構えを圖に示して寫されている。
白頭巾の人物は丹念にそれらを見直した。炯々たる眼光。
やがて目が細くなると、
「間違いない。まさしく予が所持した鍋島の一巻じや。大儀であつたぞ、三太夫。」
と言つた。それからスルスルと巻物をまき戻して、
「もうよい。頭をあげい。」
許可があつて、はじめて三太夫は面をあげる。
「殿。――早速乍ら永井家の桂原四郎右衛門、霞の千四郎に斬られましてござるぞ。」
「ぬ。……その方、見たか？」
微かな動揺が面を覆われた眉のあたりに走る。

び猪鼻の立場へ引返した。
元茂を始め、それとなく一同は見送る。
中に身丈の並すぐれた眼光鋭い一人があつて、「殿、念のために某も出向き申そうか。」と問うた。
他の者すべて旅装束覆面の中に混つてこの魁偉の武士だけは素面である。眉が太く陽焼けしたひたいに其處だけ鉢卷狀の迹が肌白く殘つていた。いつぞや清姫を夕姫と間違え襲つた山伏の大道法眼である。卽ち飯道寺山の長だ。
「よいわ。そちにはまだ賴みがある。――甲賀山伏が屯所に案內せい。」
と言つた。
不敵な笑いで、「されば――」天道法眼は先きに立つ。
こちらは弓削三太夫である。さいぜんのようには木にのぼらない。鈴鹿街道の八丁二十七曲りを、それとなく行交う旅人に目をつけて桑名の方向へ向つた。
川野黎左衞門がひよこひよこやつて來たのと行逢つたのは蟹ケ坂のあたりである。全く痛々しい窶れ樣で數步おくれて清姫が來る。多三郎の行方は分らない、千四郎はいない。然も父の家臣の斬られるを目の前に見て、男への思慕の方向に彼女は道をえらんだ。一度身をゆるした相手は、生涯の夫と思い込む乙女らしい生理の倫理にすべてをゆだねたのである。父へはたしかに裏切りになる。不義には違いないし、身のほそるような、切ない羞かしさに打ちひしがれてあの氣の强かつた姬君の驕慢さは全く見られない。

つて明祭致すやもしれぬ。まずい事になつた。」

しばらく沈思して、

「――川野なる者、今どの邊りにおるな？」

「尋常の足であれば、今日あたり鈴鹿を越えるかと存じまするが。」

「例の淸姫も偕にか？」

「それは――」

「よい。……斬れ。生かしておいては後日何かと面倒。……不憫なれど、次第によつては淸姫ともども已むを得ぬ。予が天に誓うて申す。刀疵で天下亂れなば、淸姫が一命には代えられぬのじや。そちが人を斬らぬと誓願しておるは予も承知じやぞ。その上で申し渡す。川野だけは、かならずともに斬つて參れ。」

「は。……」

「いずれ事は禁中にて落着致す。時節が參らば、そちが不審の武藝帳が謎も解けよう。すべては天下安泰をはかる但馬が胸中にある。予は、但馬守を信ずるぞ。――よいな、そちも知る通り、柳生兄弟、見事浮月齋一派が裏を掻いて、最早大津にまで潛入致した。十兵衛は淀へ參つておる筈。――そちの、あとは決斷ひとつじや。思いきつて、川野が身柄をこの世から抹殺致してくれよ。……」

主君鍋島元茂の上意とあつては弓削三太夫も承引するより術がなかつたろう。其の場から、再

「いずれ、我らが一派の宿願成就のあかつきは、この川野黎左衞門ただの浪人ではござらんわ。見ておられい、今に、そもじにも頼もしい男とうつるようになるで。」
そこへ向うから輕裝の武士がツカツカと寄つて來た。
「お主、――川野どのかな？」
と訊く。
「お、そうじや。何ぞ御用か？」
ひと目で相手をただ者でないと見たのは、黎左衞門にもフト多三郎との奇妙な共通が相手から感じとれたからである。
（もしかすればこ奴こそ、我らが仲間かも知れん。）
そう思つたから、
「どうじや、御用なら、同道致してもよい。」
鷹揚なところを見せるつもりで、ぐんと胸を反らした。
「そうか。お主話が判る。」――では其處な御女中と、鳥渡別れて來てもらえぬか。」
「ど、何處へ參るのじや。」
「直ぐそこでよい。――用は暫時で濟み申すでな。」
あとの言葉は清姬へ向つて言つた。
「聞かれる通りじや。それがしちよつと行つて參るで、ぼつぼつ歩いておつて頂き度いのう。」
それから相手に向い、「すぐじやな？」とダメを押した。相手はうなずいた。

それでも、誰が何と言おうと大名の息女に生れ、姫君の氣儘な生活をしていて、しかも選んだただ一人の男への信頼だけは失わない。世人に多三郎がどう見えようと、彼の血統にある高貴性と氣品を、彼女はおのれの肌で知つたのである。――ただの忍者ではない。その確信だけが清姫を獨り旅の佗しさから支えてくれた。

が、何處にいるかも分らぬ人を尋ねる心細さは。

「何をしておられるかい。……さ、程なく上山の宿にたどりつき申すぞ、今しばしの辛抱じや。上山へ着けば必らず大月多三郎が消息は分る。精を出されんかい。」

わざわざ戻つて來て黎左衛門は激勵し且ついたわる。おのれは白い布で左手を首から吊りさげている。

「登り坂というは、ズキズキ傷が疼いて困り申すわい。」

もう百遍あまりも、愚痴つぽくそう云つては立停つて清姫の足の遅さにあわせている。それでもつい清姫はおくれがちになつた。

「のう。」

黎左衛門は漸く肩を並べて、言つた。

「それがし、見らるるように手傷は負うたが、一生の不覺であつたわい。あの奴(やつ)、逸早く逃げよつたで千四郎に名をなさしめたが、今度あのような奴あらわれたれば、必らず目にもの見せてくれる。されば御身も安心してわしのそばについておられいのう。」

「……」

雪の上の足迹

宇治の別邸に清姫が歸館したという報せをうけて、
「何、姫さま戻られたと？」
目をむいて使者に問うや、押つ取り刀で馬に鞭打ち、宇治へ駈けつけたのは坂和田喜六である。
「姫、おなつかしゆうござる……ど、どこにおわすかい。」
廣縁を喚きながら走つて來て、
「久々にて京へお歸りなされたというに、この爺めに一言の詞もおかけ下さらぬかい。情無う存じまするぞ。」
にが蟲かみつぶした顏で、坂和田喜六は廣縁へ坐り込んだ。
清姫は老人が廊下をやつて來る前から庭に出ていて、一度、跫音に振向いたが、頬を赧らめ、すぐ顏を戻した。
何となく坂和田喜六の目を避ける容子がある。
「これ。その方キクとやら申したな？ かりにも、姫をお育て申したこの喜六が參つておるに、取次も致さぬとは何たる阿呆じや。それでも御奉公がつとまると思うておるかい。たわけ。ささ、お取次を致せ。」

黎左衛門は斬られるとも知らずノコノコ跟いていつた。

それから暫らくして、

「うわーつ。何、何、何をするかい……」

道をそれた木立で黎左衛門の絶叫するのを淸姬は聞いた。他の道行く者は齊しくぎよつと立停る。

「やられたぞ。無念、無念。……やられたぞ。」

大聲で喚きながら、それでも命に別條なかつたのか必死の形相で逃げ出して來た。

白刃を手に拔き下げている。胸から血が奔き出し、白い布を忽ち朱色に染めている。

「ど、どうなされましたのじや？」

人を嫉う切なさが一瞬吹つとぶと淸姬はさすがに、凜とした大名の息女に戾つた。駈け寄つて傷を檢べる。

黎左衛門の吊つていた左手首が鮮やかに切斷されていたのだつた。

他は何處も手疵を負うていない。

「しつかりなさらぬかえ。」

きびしく叱咤して、直ぐ、道路を眺めわたし落ちていた馬糞を拾い取つてワナワナ顫える黎左衛門の手首に塗りつけた。

馬糞は急場の刀疵に奇效ありといわれていたものである。——

つたという。

むろん喜六は運命のそういう變轉をこの時想像すべくもない。いつまでも、振向こうとせぬ清姫の腰部に、思いがけず女らしさのながれているのに氣がついてハッと目をむいた。

「姫。お人拂いを願えませぬか。それがし別に、機嫌など損じておりませぬ。たゞ、お耳に入れたき儀がござりまする。」

「……菊、そなた下つてたもれ。」

「ハイ。いこう、冷えて參りました、あまり永居をなさいませぬ方が――」

「分つております。」

女中が一禮してから、喜六の前を通るときも頭をさげ、すり足で立去ると、

「話してみやれ。……」

清姫は心なしか頸垂れている。

その様子をうしろから暫らくまだ喜六は聲をのんで見戍つた。

「姫は江戸より、ずつとお獨りの旅でござりましような？」

「……」

「お返辭を願いまする。」

「話というは、それかえ？　ならば、わらわの事は構うてくりやるな。」

「これは怪體。――爺め僭越ながら姫を我が手鹽にかけた娘とも思うておりまするに、餘計な斟

いつまでも姫が振返らぬので到頭そばの奥女中に當つている。

「ハ、ハイ……」

まだ勤めて間がない女であろう、眞赤になつて、

「申上げます。御家老坂和田さまが御挨拶にお越しなされ」

「御挨拶ではない。お耳に入れたき事あつて參つたわ。おのれ何も知らいでツベコベ申すは不屆きな奴。誰の取りなしで、當屋敷へ奉公致すよう相成つた？」

「もうよい、爺――」

「は。」

「わらわがお城へ寄らずと宇治へ歸つたが氣にさわるなら、こらえてたもれ。夜中のこととて、皆に面倒かけとうはなかつたのじやえ。」

「これは。姫のお言葉とも思えませぬな。女の御身で東海道のひとり旅などあそばすがようなお人が、いつからその樣に心やさしゆうなられましたかい。爺め、一向聞えませぬわ。」

「好い。わらわが謝まりまする。もう機嫌を直してたもれ。」

言つて、相變らず庭の向うに繞らされた土塀のあたりへ視線を投げている。清姫のこの別邸は、宇治朝日山の半腹に在り、園林の風色絶佳と稱された。後に、慶安二年、清姫の縊死を悲しんで父の永井尚政は此處へ興聖寺を移したが、今も京畿に於ける曹洞禪宗の名藍である。興聖寺ははじめ京都深草に在り、道元法師の開いたものだが、いつの頃からか破壞して跡形もなかつたのを尚政が不日の經營を爲して移した。その時の、普請の采配に當つたのが喜六の嫡男喜左衛門であ

羞恥と、おそろしさと儚い好奇心で出された品を凝視する清姫より、坂和田喜六の表情は餘つ程沈痛だ。

喜六が取出したのは、紛れもない多三郎が着物の片袖である。思い出すのに寸秒も要せぬ程清姫にはなつかしい品である。ただ、とつさに片袖を出されたので、腕が斬り落されたかと其の豫感が胸へ來た。血痕をさがす目になつた。

——無い。

忽ち清姫の顔に喜色が散る。「これを、どうして手に入れましたのじや？」

「矢張り覺えがござりましたのかい。……あ、淺ましゆう思いまするぞ、姫。」

滿面朱を注いで喜六が喚いた。腸を絞るような聲だ。

「お聞きなさりたいとなら申上げまするぞ。姫。こ、これを持つて參つたは忍者でござつた。姫が不義をなされた相手を斬つたとやら申しおつた——」

「ええつ。」

「お覺えがござるな？　その樣に下司な女にお育て致したおぼえはないに。……お覺えがござるのじやな？　さ、申されい、何者と不義あそばした、この片袖の男とか？　殿の立場もお考えにならんでか。……」

「……」

「それがし申す事よつく聞かれいよ。御父永井信濃守さま、江戸へお下りなされたは、參覲交替が爲ばかりではござらぬ。姫さま江戸お屋敷におわすうち、さる大名が御嫡男と內々婚姻の儀

酌じやと申されまするか。」
「……」
「已むを得ぬ。との御不在中の國許をあずかる家老として、改めてお尋ね致す。一人の旅でござつたか……それとも他に。」
「ひとりじや。」
「？」
「何故そのようにくどう尋ねまする。話というがその事ならもう聞きとうない。――さがつてくりや。」
「姫。一昨夜お城に忍者の忍び入り申したこと、最早お聞き及びでござるか？」
「……」
「姫にお心當り無くばよし。萬一、お胸に覺えあることなら、この喜六に一切お打明け願いとうござる。斷じて他言はつかまつりませぬ。」
「な、……何故その忍者、わらわに關わりがありますのじや？」
「證據の品を見せねば知らぬと申されまするか？」
「えつ……」

喜六は悲愴な面持で懷中より何やら取出した。
その時にはもう、夢中で清姫は喜六を振見ている。

昨夜のことだ。
寢に就いて間もなく、物音に目がさめた。寢所の灯は點つていた筈であるのに暗闇である。
人の氣配がする。
「——何者じや。」
大聲に喚きたてるほど喜六は練れぬ武士ではない。蒲團の下に敷いた差料を手に把つて、徐ろに闇を見すかした。
「誰じやな？」
聲をかけた。相手に殺意があるなら、灯を消すひまに馬乘りになつて來よう。
「坂和田どのか？……」
意外に相手も落着いている。鍛錬しきつた錆びのある聲で、口調に聞きおぼえはなかつた。
「夜中罷り越した非禮は許されよ。仔細あつて、かようの闇にて對面致す。」
「用は何じや？」
「申し傳えおくこと二條。御家中の桂原四郎右衛門、過日相果てた。」
「な、何？」
「今ひとつは、當家御息女清姫どのの身邊、ここ一兩日氣をおつけなされたがよい。姫は、不幸の境涯をお好みなされすぎる……」
「待て。身邊氣をつけようにも姫のおわすは、」
「宇治じや。今宵おそく着かれた筈。」

をお取交しなされようためでござつた。然るところ、姫には例の氣紛れ心にて突然の御出立。それを引止めも致さぬ江戸家老めは大馬鹿者じやが、途中街道にて伜喜左衞門がお呼び止め致すも肯かず、參られた姫はシンニユウ附きの尻輕女（おなご）——と、餘人は申しましようぞ。なれど某（それがし）ひめを御養育致したが因果、はた又天魔の魅（み）入りしか、姫に限つて萬に一（いつ）も御躰に瑕（きず）つくようなこと斷じてござるまい、御緣談は姫さま御不在にても相とゝのう事、却つて、京のよき水にて一段とお美しゆうなられたのち、はゞかりながらこの坂和田が晴れの嫁御のお供つかまつつて江戸へ下り申そうと、飛脚便で申し送つたはツイ五日の前でござる。あわれ、喜六も耄碌したと云わるるが口惜しさに、この年まで致仕も願わず御奉公致したが一生の不覺。——死にまさる恥でござるわ、姫。」

片袖を鷲摑みにして、血管の浮いた老いの手をブルブルふるわせ、喜六は掻き口説いた。

そのわりに、剽輕（ひょうきん）感はあつても悲愴味のないのを、主君尙政でも見れば、却つて胸を搏たれたろう。

坂和田喜六にして、一世一代のこれが無器用な芝居だつたのである。

喜六とて淀十萬石の城をあずかるほどの人物だから、本來なら滅多なことで冗談など言わない。文武をたしなみ、ひそかに里村昌琢（しょうたく）法眼に連歌を學んだのが、武骨一ぺん、弓馬の道に氣のこもるのをゆるめるためだつた。それ程の氣概の士だ。如何に手塩にかけた姫との再會がうれしいからとて、場合が場合だけに剽輕（ひょうきん）の擧措など採れる筈もない。喜六は心で哭いているのである。

かいが、氣にかかるのは姫の身邊に氣をつけよと云われたあの言である。もしかすれば、この宇治の別邸へ忍者の來るのを示唆しているのかも知れぬし、もはやその忍者と對決する以外に、匆匆の手段はないと喜六は豫め覺悟して此處へやつて來た。常の寡默の城代家老の態度では、けむたがつて、淸姫以下、女中の誰もが喜六の泊り込むのを忌み避けるに違いない。姫可愛さの餘り、年寄りの一徹で何としても身邊より動きませぬと談じ込めば、一掬の笑いがあろう。せめて、それが女達の氣を和めようかと考えたのだ。

馴れぬ芝居で、左程うまくいつたとは自身思えぬが、それはもう已むを得ぬ。

再び背を向け、じつと薄曇る空の遠くを見上げている淸姫の微かにふるえる肩へ、

「よろしいかい。」喜六は聲を張上げた。

「不義など遊ばす姫がようなお人を、滅多なことでお一人に致すわけには參り申さぬ。餘人に知れなば更なるお家の恥でござる。姫をお育て申したが身の不幸と諦め、爺め本日より當屋敷を動きませぬゆえ、左樣御承知ねがいまする。」と言つた。

その夜、大雪が降つた。

何事もなかつた。

淸姫は喜六が泊り込んでから、會うのを避けて終日座敷に引籠り、姿を見せない。それとなく女中に問うと、案に向つて何やら書いておられまするという。喜六は「お躰に障りないよう氣をつけいよ。」とだけ言つた。

「その事しかと、お手前知つておるか？」
「――左樣。別に證據の品これへ置いて參る。それがし立去つて後とくと見られい。姫を不幸に致す品……御不審なれば、直々に見せられたがよい。」
それからほんの一時、すーと冷たい風の忍び入つたのが、思えば曲者の立去つた時である。
早速灯を入れて見ると片袖が敷居ぎわに抛られてあつた。
桂原の死の事はともかく、女の身で、『不幸』が何を意味するかを判斷するのは容易だが、男まさりの氣の强い姫、という想い出が、つい頭を擡げる。否々姫にかぎつてと否定したい氣持もある。それで、男物の片袖を兎も角、淸姫に見せた時の樣子に俟つことにした。ところが、拾い上げてよく見ると袖に結び文あつて、
「拙者自身の物に非ず。忍者が身につけし品に候。爲ㇾ念」と書かれていたのである。
喜六の顏色が變つた。――以來、まんじりともせず夜を明かし、馬をせめて馳けつけたが、豫感は的中し、淸姫は旅より戾つている。あまつさえ、身に匂う女らしい嫋々の風情は曾ての姫に毛ほどもなかつたものだ。
かりにも十萬石の大名の息女が、忍者如きと情を通じたとあつては姫のふしあわせで事は濟まない。淸姫との緣組に媒妁を申出たのは松平伊豆守なのである。併し忍者が永井家の近邊に出沒しはじめた眞因を知らぬほど喜六はうつけでなかつた。次第によつては、永井家は沒落するのである。
そこで、一計をめぐらした。今となつては、どうやら淸姫の思慕をひるがえさすのは至難にち

老は云つている。

元來、十兵衞の住んだと傳える正木坂の道場跡は現在法德寺と柳生陣屋跡（小學校）をつなぐ白梅橋の橋畔に在り、八百十三坪の今は水田になつている。門弟一萬三千六百餘人を擁したと傳える十兵衞三嚴に如何にもふさわしい大構えの道場跡だが、一方友矩屋敷は、繼子坂をはさんで法德寺とは對面の山腹に在つた。鼓武が峯というのは、その友矩屋敷の地下をえぐつた一山向うの峯である。十兵衞が西國隱密の旅にのぼるとき、ひそかに法德寺境内に植えた「みつよし杉」（一名十兵衞すぎ）は、後にこの鼓武が峯に移植されて高さ百尺、直徑八尺の巨杉として聳え立つた。拔穴の口を杉の根で巧みに塞ぐ深謀が見事奏效したわけである。

――今以て、だから、當時柳生一門のめぐらした智謀と武略の全貌がどれほど大きなものだつたかは吾人には分らない。――ただ、わずか三卷の武藝帳とその秘密を、天下和平のため保持しようとした彼ら一門の死鬪のあとを小說風に逐うてみるまでである。

――さて話は戾る。柳生村から奈良まで五里。坂原ノ庄を越え、大柳生ノ庄を越え、忍辱山、東里とすぎて若草山の北麓から東大寺わきへ出る道を、前後して疾風の如く走る二人の忍者がある。行交う者あると見れば忽ち路傍の木立に身を沒して潜む。或いはその儘木立から木立へと枯草を騷がしてつつ走る。一は霞千四郎、他は忍者裝束の友矩である。

千四郎の方は時々、

「杖か、フム、臭いぞ。武藝帳なんぞでも卷き込めてあるやも知れん。」

うそぶくともなく呟いて走つた。

忍者が遂にあらわれたのは翌夜である。奇妙なことに、併し朝、雪に足跡が残つているだけで、誰ひとり危害を受けた者もない。がその足跡をひと目みるなり喜六は「うつ。」と呼吸が詰つた。

足跡は何と、屋敷内から外へ向つていたのである。徹宵、それも寝ずの番をしていた喜六の座敷の前からだ。外部より侵入した足跡でない。

實は、忍者は草鞋を逆さまに穿く。踵の方を前にしてはく。雪の上の足跡は、すると前進方向から遣つて來たと見える。喜六はそれを知らなんだ。

「早や忍び込んでおつたか！……」

動轉して、念のため足跡を辿ると土塀を躍り越えたあたりに一本、深い穴が窪んでいた。それをじつと見入つて喜六は、

「杖じやな。」と叫んだ。

お杖師

明治維新になる頃まで、法徳寺境内に「友矩井戸」と呼ばれた井戸がある。一名を「金魚井戸」とも云つたそうだが、軍用資金を沈めてあるとも、惡水ゆえ飲む勿れとも永く村民たちの間で言い傳えて來たそうだ。それが、多分本堂の床下に通じた抜穴への一方の通路ではなかつたかと古

「どなたさまでござりますかえ？」
内から問い返して來たのは、意外にもすゞやかな女の聲である。
「江戸より參つた柳生家が一門小瀬源内と申す。チト主人玄齋どのに所用じや。あけい。」
胸をそらして、明らかな藩士口調になつた。內らではひつそり默り込む。
やゝあつて、おとし鍵を拔くらしい音がし、
「……どうぞ――」
色白でつぶらな瞳の乙女が顔をのぞかした。
「玄齋どの在宅か？」
念のため、這入らずに訊く。
「裏の仕事場で待つております る。」
「左樣か。」
チラと人の往反する左右に鋭く一瞥をくれて、內へ身をひいた乙女に誘われる如く、這入つた。
案內されるまゝに仕事場へ行くと、玄齋であろう、三十六、七の男が刀鍛冶のいでたちで板の間に坐つている。
「これは、よくこそ參られた。會津の小瀬どのとか申されたが……」
「左樣じや。小瀬源內、お見知りおき願おう。」
仕事場は意外に暗い。片側の上間に孟宗竹の色あせて乾いたのが十數本、別に鎚がほうり出さ

友矩は無言だ。全力を出せばどれぐらいの捷さを友矩が會得しているかは分らない。適度に歩度をゆるめ、けつして千四郎に追いつこうとはしなかつた。かりにも從五位下・刑部少輔に任ぜられ、將軍家に徒士頭とつかえる身が忍者如きに身をやつして千四郎を追おうというのは、餘程逼迫した事態が大和へ來た千四郎の行動につながつているからだろう。——が、東大寺の甍が望見されるあたりから、踵を轉じて友矩は傍道へと外れた。

奈良の柳生家屋敷は寺林町にある(現在奈良市役所)。坂崎出羽守の遺兒が四百石の影扶持を享けるまで密かにあずけられたのはこの屋敷だ。その寺林町から少し離れて、興福寺の光林院という、化物寺とて無住の寺があつた。

友矩の身は其處へ消えた。

こちらは千四郎——。町中にはいると人の往反する賑やかな三條通りへ眞直ぐ出る。左右に並ぶ旅籠や土産物店を交互に見遣つて、次第に西下し、

「む、これじやな。」

『柳生杖師』と看板のある一軒の前に立つた。兩隣りとも名物らしい品をひさぐ賣店であるのに、こゝだけは軒下に孟宗竹の五尺餘に截斷したのを束ねてあるだけで、表戸は堅く閉ざしてある。重厚な看板をそれでも凝乎と見上げてから千四郎は軒下に立ち、ホトホト戸を叩いた。

「誰かある。——開けい。」

と言つた。

暫時耳を傾けて待つと、再叩いた。

「こ、これは……」
右手の小刀を見入る。切先より三寸餘のところに鎚を以つて打ちすえた如き疵があつた。
「芯に通されておるは、さては鋼であつたか。」千四郎は言つた。
「ほ。……小瀬源内ともあろう仁が柳生杖の仕組も御存知あらぬとは意外。――何ぞ、思わくあつておトボケなされる御存念かな。」
玄齋は複雑な口邊の笑みを消さずに言う。
「小瀬どの。我ら所式どおりそれを鍛えてござる。さればゞ、打ちすえる個所によつては、造作なく斷てる筈――」
「何？」
「お貸しなされい。それがしが此の場で截つて御覧に入れる――」
低いが落着いた口ぶりである。
千四郎は不審げに玄齋を見戍つたが、やがて言われる通り杖を手渡した。
「その脇差も、ついでにお貸し願えぬかな？」
「何？……これは、ならんぞ。」
「はは……左様なれば勢以、わしが居間より太刀を取つてくれぬかな。」
「はい……」
勢以と呼ばれた下ぶくれの乙女は千四郎に手をついて一禮して出ていつた。
「奥州會津より、いつこちらへ参られましたか？」

れてある。
「お坐りなされてはいかゞじやな。……粗茶など用意させましようぞ。」
「忝いが、早速ながら杖を所望致す。一本、見せてくれぬか。」
「ほ、これは又氣のお早い……」
玄齋は意味あり氣なほの笑いを浮べたが、
「勢以、茶を運んで參る折わしが部屋のでも持つて參れ。」と言つた。
千四郎は、その杖を受取ると矢庭に脇差を拔いたのである。

杖師玄齋は一瞬、目を据えたが、何も言わない。わきに坐つたこの家の乙女が、却つて顏色を變えて腰を浮かし、それから、「よろしいのでございますか？」案じ顏に杖師をうかゞい見た。
千四郎は呼吸をとゝのえた。手重りがする。一見、細長い竹に黑塗りのうるしをかけた華奢な杖であるのに、握つた手應えが重すぎたのである。芯に鐵棒でも通してあるのが直ぐ分つた。
それだけなら併し左程まで、恠しむには當らない。芯に鐵がとおつているなら、見事それも斷ち截つてみしようず、そんな氣概を籠めて、
「やツ。」
氣合とともに小刀を揮つた。刃を碎く音がして火花が散つた。杖は切れず却つて刀に刃こぼれが殘つた。
千四郎は愕然と色を失つて、

乙女が太刀を抱いてこの時戻つて來た。戸口から内らの様子を見ると、小さな叫びをあげ、
「血で此所をお穢しなされてはなりませぬ。」
と叫んだ。
「勢以、その戸を確と閉めい。はいるではないぞ。」
「は、はい……でも、」
「早く閉めぬか。そちが危い。」
乙女はふるえる手で慌てて外から戸をおろした。
しばらくして激しく物のくずれ落ちる音が内らでした。

玄齋は直門どころか、柳生喜七郎宗房の嫡男源太夫の、世をしのぶかりの名である。喜七郎宗房は松吟庵貞蓮法師の子だから、玄齋こと柳生源太夫と、十兵衛友矩兄弟は又従兄弟(またいとこ)に當る。源太夫ははじめ知行百石で但馬守宗矩の家臣となり、のち、村木茂作なる者の倅と奈良で辻斬をしたことが發覺して、表向き家は斷絶した。源太夫は杖師玄齋と名をあらためた。

しかるにこゝに不思議なことには、柳生杖師は二百石の待遇をうけるのである。この制度は柳生流杖術の傳承とともに明治に至る迄保たれた。家は斷絶しながら、却つて優遇されたわけである。また町家に在つて杖をこしらえるが、刀鍛冶の如くそれを商(あきな)いはしない。二百石といえば、一萬二千石の柳生藩では家老に準ずる待遇なのである。(家老が四百石、普通の物頭役で百五十石級(クラス)であり、馬廻役や小納戸役は、せいぜい五十石がさだめであつた。)だから如何に杖師が大

乙女の戻つて來るまで、何氣なく雜談に間をもたそうつもりか、玄齋は手の杖に目を落して尋ねる。

いかにもそれが自然の態度だつたから、

「左樣、京へ參つて半月になろうか。」

千四郞は再び刃こぼれに見入り、脇差を鞘におさめた。

ほんの、その一瞬である。

「名を騙るは浮月齋が一門か、たわけ。」

玄齋の手で唸りを生じて杖は千四郞の横面を搏つた。尋常の杖術ではない。まともに打たれれば千四郞は他日、內出血で急逝したろう。

「無禮者。」

橫ざまに千四郞は三尺餘り跳んだ。板壁に肩をぶつける。すかさず杖は玄齋の手許で反轉して脇腹を狙つた。もう躱す餘地はなく、今度は五尺餘の高さに千四郞は跳び上つた。そこから脇差を手裏劍がわりに投げつける。びん、と鋼の打合う音がして白刃は遙か土間へとばされ柱に突き刺さつた。

「そうか。うぬは柳生直門じやな。」千四郞は充分距離を隔てて、すつと土間に立つた。

「今頃氣がついたか。霞の兄弟であろう。多三郞が方か、名乘れ。」

打損じたと見ても別に玄齋は周章しない。これも其の場に立上り、杖を片手、足場をはかつてにらみすえた。

勢以は吃驚した。「これは江戸の若殿様でございましたか。お久しゅう存じまする。この内らで、でも只今曲者が立暴れております。」
「よい。千四郎と申す奴なら、玄齋に負けはせんぞ。開けい。」
と言つた。
勢以はこの時になつて氣がついたが、いつの間にか仕事場の戸口の前より母屋への通路にかけて一面に、おびただしい鐵びしが撒かれてある。戸口から千四郎がとび出して北げようものなら、忽ちに足を痛める。
「よいか。わしは母屋にて待伏せ致す。そちは戸かげにかくれて曲者を逃がせい。」
「は、はい……」
友矩が鐵びしを避けて大きく迂廻して母屋に姿を消すと、なお暫らく乙女は内らの物音をうかがつたが、良あつて、おそるおそる戸を引きあけた。
「たわけ。……し、閉めぬか。」
玄齋の絶叫より捷く「この場は引揚げるが、他日あらためて優劣をつけに來る。玄齋、お上が杖術は遠山の脆さが隙じや。」云つて、燕の飛び立つごとく、つと戸口から走り出た。太刀は拔いてなかつた。何としても杖を摑み取ろう考えから、敢て無刀で玄齋に懸つていつた爲である。遠山と云つたのは、杖を取つて身構えた折の肩のすがたをいう。右肘は峯、左ひじは谷と呼ぶ。星といえば、杖を握つた手のことである。太刀の場合も、新陰流では往々この呼稱にならつた。
千四郎はとび出した勢いで内庭を母屋へ走つた。鐵びしが足裏に刺さつた。とつさのことで、

切にされたか、とりも直さず柳生杖が尊重されたかが分る。小瀬源内とわざわざ名を騙らずとも、千四郎のように、通常の刀匠なみに玄齋を考えて應對すれば、柳生の事情にうとい僞者と一ぺんに喝破される道理だ。まして、杖を刀で斷とうなどは言語道斷の態度である。

柳生杖は現今も大和法德寺に保存されてあるが、創始者は松吟庵という、松吟庵貞蓮法師は石舟齋宗嚴の實弟で、世間向き石舟齋は劍術者、松吟庵は和（柔術）ならびに柳生流杖術の元祖となつた。むろん劍術杖術は表裏不分のものだから、杖術の祖というも單に呼稱を變えたにすぎない。實に松吟庵は石舟齋と並稱される新陰流の達人である。喜七郎はその術を繼いだ子。玄齋は孫である。

柳生杖は、芯に鐵棒をとおし、それを三本の孟宗竹を乾燥させたので圍う。孟宗竹と孟宗竹の間には更にうすい鋼の板が挾まれてある。それにしぶに浸した麻の緒を卷きつけ、漆を塗つて仕上げるのである。

孟宗竹は、乾燥させた上で、油で揚げたともいうから、堅牢さは比類がない。（釘のまだ考案されぬ往古には、建築の釘がわりに往々竹くぎを打込んである。）その竹棒三本に鋼をかませて造られた杖であれば、小手先の刀など揮つて截れるわけはなかつた。

さて乙女は息をこらして内らの樣子をうかゞつた。暫らくして、輕く背後から肩をたたく者がある。ぎくりと振返ると、旅姿の友矩が打笑つて、

「その戸を開けい。」

と言つた。

る。何にしても奉行所へ知らせに行くが先決じやと、近在の多助という百姓が町へ向つて駈け出した。興藏院へ直接しらせに行つた者もある。程なく興藏院からは若い僧がやつて來たが、

「ふむ。どうもこりや、奇怪なことじや。」

死顔をのぞき込んで怪訝そうにつぶやいた。

「お坊さまのお知合いですかい。」百姓の一人が不審げに尋ねる。

僧は云つた。「左樣じやないが、この婦人、ふつくらとして別に病人とも思えぬに、どこという て血も出ておらぬ。」というのである。

なるほどそう云われてみれば悶え苦しんで死んだ樣子は更にない。

「縊り死ではないかのう……」言つてあたりの枝を見上げる者もあつたが、縄の垂れた氣配はなかつた。

「これは、いらぬ詮議をうけるやも知れぬで、あまり、近寄らぬがよいぞい。」

誰かが言う、

「それもそうじや。」百姓達は一齊に死骸から後退した。

旅姿の武士ふたりが通りかゝつたのはこんな時である。

「や。死人かい……」

首から繃帯で左手を吊つた武士の方が、先きに見つけて走り寄つた。

「む。……却々の美女であるに、死ぬとは勿體ない女じや。」

武士は死骸に斬られた樣子がないから自死と思い込んでいる。

「う……」うめいて千四郎は跳躍し、母屋の庇に手をかけてぶら下つた。
「勢以と申したな。覺えておけよ。」
懸垂すると背を屈して「やつ。」と屋根にとび移る。鐵びしを撒いたのが勢以と彼は思つたのである。
仕事場の戸口へ玄齋が追い現われた。それを俯瞰して、
「杖の祕密は見破れなんだが、玄齋、お主ほどの達者が武士を捨てての仕事じや。何ぞわけあろう。必らず、次には盜んで見せる。」
言つて、小走りに屋根を走つて姿を沒した。カラカラとそのあとから瓦を鐵びしが轉がり落ちて來た。

檢死

奈良の町を出はずれ、興藏院わきの雜木林の路傍へ來たところで、冷たく死骸になつていた女がある。
勢以である。
上地の百姓が朝がた、これを發見して大騒ぎになつたが、女が何者かは百姓たちには分らない。よそおいから、奈良の町家の女とも思い、いや武家屋敷に奉公する娘であろうと云う者もあ

「未通女(おとめ)ならば黯血あり、人妻なれば無い筈じや。女の身分、まず確かめてかゝらねばこの死は解けぬ――不思議でならぬわ。」

普通、檢死の手法というのがあるが、とりわけ忍者はこの方法にくわしい。いかにしてその者が死んだか、他殺か自殺かは事の解決に當つて必須の手がかりだからである。他殺のうちにも、毒殺あり、勒死(ろく)(しめ殺す)、壓死、口鼻を塞いで殺すもある。水に投じて溺死さすもある。時には舌も嚙ませる。――それらが、他者の手段によつたか、或いは例えば、勒死ののち、みずから縊り死んだと見せかけ縄に吊つたものかは、檢死法によつて直ちに忍者は見分けるのである。色つぽい死様(しにざま)に「男子の房事すぎて婦人の身上にて死ぬる」というのがあるが、この場合は他の死はことごとく陽莖おとろえて軟らかであるのに、ひとり萎(なえ)ずして硬しという。

柳生藩士物集女(ものすめ)榮二郎なる者が文久三年癸亥ノ歳孟秋に筆寫した秘藏書で『自理辨疑錄』というのがある。

檢死の法を說いたものだが、それによると、

「凡そ死者を檢ずるには、比麻子(ひまし)の油を鼻に塗り、或いは蘇合香(そごうこう)丸を以て鼻の孔を塞ぎ、また韮(にら)をすりひしぎて鼻に塗りて見るべし。然らざれば屍(しかばね)の惡しき臭い(穢(え)氣)にふれ、檢死をあやまることあり。」

という。

「もし屍に疵の痕なくんば、其の頭の髪の中をよく見るべし。釘などを打ち込みて殺すもあり、

　あとからゆつくり近寄つた今一人は、無言で女の死相を見下していたが、

「ハテ。……」見る見る眼を光らした。手に繃帶したのが川野黎左衞門、あとの武士は實の多三郎である。

「ど、どうしたかい？……」

　黎左衞門は多三郎の眼が異樣に光り出したので驚いて死人の顏をのぞき込んだ。何の不思議も黎左衞門には認め得ない。死人は、死人である。

　武士ふたりのこの樣子に、おそるおそる好奇心のつよそうな百姓が、のぞき寄つて來た。多三郎は不意にかゞみ込んで死顏に顏を近寄せた。それから屍臭を嗅いだ。

「黎左衞門、白い布を持つておつたらば、貸せい。」

「布？……どうするのじや？」

「陰門を檢べる。」

「何？」

　黎左衞門は目をつり上げて、

「な、何のためにしらべるのじやい？」

「……」

「やい。白い布をどうするかい。」

「指に卷いて産門へさし入れるのじや。」

「何、何、何？……」

色または黄色に變じておれば毒死、變色なければ毒に非ざるなりという。箸を糞門に差込んでみることもある。

もし銀製の箸が無ければ、白米の飯（めし）つぶをまるめて死人の口中に入れ、これを密封して二刻（ふたとき）半ばかり經て取出し、鷄に與える。毒あれば鷄死す。萬一、死後に毒を口中に入れて毒死に見せかけたものなら皮膚に變色があらわれておらぬ。

この他、火燒死は足がちゞみ、鼻、口喉に灰や烟が入つており、殺して後に火に投じたものなら手足のび、屍の口鼻のうちに灰なく烟氣なしという。壓死（あつし）は眼球飛出し、鼻耳目みな血を噴いている。雷震死は筋肉焦げて遍身やわらかである。口鼻を絹などで塞いで殺されたものは滿面朱色、糞門便溺（べんでき）して衣服を汚す也という――

以上が『自理辨疑錄』に述べられた檢死法である。

さて黎左衞門は、多三郎に促され、乙女の裾前を掻き分け、そろそろ手をさし込んだ。指には白布を卷附けてある。

「仄あたゝこうてこそ味わいもあれ、多三郎、死人の肌というは冷たいのう。……」勝手なことを言いながら、それでも次第に奥へのばし、急につよく目をつむつた。

背後で百姓が一齊に首をのばす。

「こ、これでよいかい。」さんざまさぐつて黎左衞門は手を拔き離した。「附いてはおらんぞ。」と言つた。

おしなべて男子は陰莖、陰嚢、糞門に心をつけて見よ。婦人は陰門に心をつけて見よ」と冒頭に書かれてある。多三郎が先ず死人の産門に指を差込もうとしたのもことわりだつたわけである。

茲で、念のため検死の法を少し詳しく書いてみる。

先ず勒死（シメコロス也）だが、人に勒殺された屍は必ず口を開き、目を見はつて多くは眼球高くあがり、うなじにしめた痕が黒色に残つているそうだ。もしこれが病人などで自分から勒死したものなら、目をとじ唇をひらき、舌を嚙んで舌端が二、三分も唇から出ている。總身の肉の色は黄ばんで兩の手は握りしめているという。

縊死の場合もほぼ同樣で、自ら縊つたものは、唇の色黒く、齒をあらわし、よだれ沫などを吐いて、兩手の大指をにぎり、爪先は眞直ぐに垂らしている。ほとんどが大小便をたれ、男なれば睾丸が下つているが、絞殺してから縊死と見せかけたものは必らず睾丸あがつて、陰嚢しぼむという。――

次に水死人は、生きている時水に落ちて死んだ者の屍は手の裏、足裏の皮に皺ありて白し。死後に水に投げこまれた者は手の裏、足の裏に皺よらぬものなりという。およそ水死せるもの男はうつむき、女は仰のきて浮くという。

次が毒死である。屍の唇が裂け、舌たゞれて口中暗紫色となり、指の爪青く、遍身黒く脹れあがつている。或いは、血を吐く。時に全然右の微候のあらわれておらぬもので、毒死の疑いあれば、銀製の箸を死人の口中に差込み、のどまで屆かせて口を塞ぎ、少時して取出す。銀箸が青黒

「お役目大儀じや。」
と言う。
「お手前がたは？」
「仔細あつて京へ旅致す浪人。拙者大月多三郎――。これなるは誼の川野黎左衛門と申す。」
役人とは云つても町方同心だから、武士の多三郎に對しては深く穿鑿しえない。
「旅に出る前はいずれに居られた？」
「江戸大久保彦左衛門どの屋敷じや。」
多三郎が應えると、あつさり合點して死人の吟味の方へかゝつた。
じつと乙女の死顔をのぞき込んでいたのが、
「こ、これは玄齋どのが家の女ではないか。」
かたわらの配下を振見て聲をあげる。
「お、確かに左様でござりまするわい。」
「源太。」
「はつ。」
「その方念のため玄齋どのが家へ走つて、お女中が姿をたしかめて参れ。」
それから、多三郎を振向いた。
「只今何をしておられた？」
急にけわしい目になつた。多三郎は相變らず落着いている。

黯血の附着がない。

勢以は既に男性の寵愛をうけた女だつたのである。

多三郎の眼が光つた。

「黎左衞門、退れ。」

云つて、矢庭に彼女を抱えあげると、近々顔を寄せ、更めて屍臭を嗅いだ。それから不意に女の鳩胸から下腹部へかけてトントンと拳で叩いた。

「な、何をするのじやい。」

あたかも生ける女人を庇うごとく黎左衞門は制そうとする。多三郎はその手を拂いのけた。

「矢張りそうじや。……黎左衞門、この女はらんでおるわ。」

「何？……」

「身孕つての變死じや。こゝを、叩いてみよ。」

懷妊して死したる者、胃の下より下腹まで手を以て打つに、かたき事鐵石の如しという。

「こうするのかい……」

教えられるまゝに黎左衞門は拳を揮つて下腹部を打擲したが、丁度その時、百姓を掻き分けて奈良町奉行所よりの役人が駈けつけた。

「や。その方ども何を致しおる？」

ぎよつとして黎左衞門は手をとめる。

多三郎は落着きはらつて、立上り、

四男　五郎右衛門　慶長八年十一月十一日、伯耆飯山にて戰死。柳生新陰流の眞價を世に高からしめたのはこの五郎右衛門の武術なりという。
五男　すなわち但馬守宗矩である。
四女　京都加茂の神人に嫁す。
五女　城州瓶原の郷士安井茂右衛門に嫁す。
六女　和州邑地村の領主吉岡仁右衛門に嫁す。
石舟齋の實弟・松吟庵貞蓮法師には二男一女があつた。
長女は　南都水之坊の妻。
長男　長職坊といい興福寺に住した。
二男　喜七郎宗房。すなわち柳生玄齋の父である。尙この喜七郎には玄齋の他に、笠置郷士森島又七郎に嫁した一女と、父を繼いで喜七郎賴房と名乘つた二男があつた。ついでにいえば、明治初年までこの喜七郎の家系は柳生藩の家臣としてつゞいた。
又、但馬守宗矩には四男二女あり、嫡男十兵衛、長女於季、二男友矩、三男又十郎、二女は伊賀の住人中山路介九郎に嫁いでいる。餘談になるが、寛永御前試合に出場した柳生市之丞とあるのは、この介九郎のことである。末子が後に法德寺をまもつた六丸——すなわち義仙である。
一方、尾張の祖新次郎嚴勝には兵庫介利嚴の他に一男二女があつた。
長女は　はじめ山崎勘左衛門に嫁し、のち夫に死別して江戸に出、鮮人柳生主馬なるものに再婚した。主馬が柳生の姓を繼ぐ前身は、鮮人とより分らない。再婚させたのは但馬守宗

「行き倒れとも思えず、死相に不審あるゆえ確かめておつたが、……玄齋とは何者じやな？」
「三條通りに住居いたされる柳生藩の杖師じや。」
「柳生？」
すつと眼をほそめて、死顔を見下し、
「……そうか。」
低くうめいた。

柳生玄齋と十兵衛・友矩が又従兄弟であることは前に述べたが、柳生一族の系圖を此處で一應詳らかにしておく。
すなわち劍術者として名をなした石舟齋宗嚴には、正室春桃御前及び妾腹の間に男女十一人の子があつた。
嫡男　新次郎嚴勝　尾張の柳生兵庫の父である。
一女　和州狹川村名主福岡彌左衞門に嫁す。
二男　久齋といい、松吟庵の弟子で瑞雲庵の住持となる。
三男　德齋。龍藏院住持。のち還俗して備前大守に仕う。
二女　伊賀國主に仕える大鹽九右衞門なる者に嫁し、二男一女を生む。
三女　肥前唐津の城主寺澤志摩守に仕えた丹生將監の妻。（將監の名は武藝帳に列記されていた）．

家に仕えた勢以は、實は、宗矩の姉婿大鹽九右衛門の娘だが、後日勢以の變死を聞いて、

「杖は無事と申したな？」

と一言たゞしたきりで勢以の死に些かも動ずる色のなかつたというのは、さもあろうことである。一族ことごとくが死に面しても同じ従容を保つたろう。

さて、話は戻る――。

「一體、どういうわけじや？……大月、お主ばかりが知つた顔で濟ますテはない。我らは、相見互いではないか。……云うてくれい。どうしたわけじや？」

興藏院の前を離れ、町方同心に吟味をまかせたきりで、あつさり京へ向う多三郎に、しきりと黎左衛門は訊く。

暫らく默殺して歩いたが、

「あの女を殺したは、忍者じや。」

と多三郎は言つた。

「げつ。……ではお主らと同じ……？」

「それは分らぬ。餘程心得ある者でないと、あゝはおだやかな死顔には眠らせまいが。……ただ、あの女の孕(はら)んでおるを知らなんだことは確かじや。」

「お主の不審げであつたのは、では下手人を忍び者と見たからじやな？」

「左樣！」

矩である。兵庫には無断だつたことが、兵庫と宗矩の不和の理由であつたと表向き云われている。

二男　久三郎。朝鮮蔚山にて戰死した。

二女　笠置村郷士森島市介に嫁す。

尚又、但馬守宗矩の妻は一萬六千石駿州久能の城主松下右衛門吉綱の女(むすめ)で於松(まつ)。

十兵衛の妻は、秋篠和泉守重綱の女英(はな)である。今の奈良市から西方二キロ、平城の都跡から更に一キロ程の處やゝ西北に當つて秋篠村あり、其處の郷士の女だつた。和泉守とはいうが父の役名は分らない。明治初年まで柳生家十二代の墓塔が法德寺に揃つている。しかるに十兵衛の妻のみ過去帳にはあるが墓塔がない。塔は江戸麻布天眞寺にあり、七十五歳貞享四年三月八日に歿している。十兵衛より六ツ歳下であつて、法號は寶林院殿玉英宗珠大姉と云い、妙心寺雲居和尚が授與したという。一方、尾張の柳生兵庫の妻が石田三成の重臣島左近の女であることは前に書いた。これ又、過去帳に法號あつて墓塔なし。宗矩を別にすれば、柳生流の雙璧ともいうべき兵庫、十兵衛ともに正室を公けには爲し得なかつた。一は雄藩尾張義直に兵法師範たる身で妻の前身を祕し、他は將軍家光に打太刀をつとめながら生涯を劍客として隱密に生き、死後もなお妻を安んじ得なかつたのである。柳生を『政治の劍』と世は誤り傳えていう。果して然る乎(か)？　若し然りとせば、皇室の尊嚴をまもらんため、天下安泰のために大目付の職務を掌握しつゝ影に武藝帳三巻の行方を尋ねた宗矩は出色の大政治家であつたといえる。爲に幕府は三百年餘の安逸を持し、庶民は長く戰禍を忘れ得たのである。一族妻子の悲しみなどは夙に默過し得たろう。柳生玄齋の

花　車

木津川の流れの方向から判斷して、女官は京を出立し、旅の武士ふたりは京都へ上る途次に違いなかつた。
武士は多三郎らと同じ菅笠を目深くかぶり、餉包みを背に結んでいる――。その足どりが、遠目にも彼らの尋常ならぬ人物である事を多三郎には感じさせた。次第に女官と武士との間が縮まつていつた。
「多三郎、何を左樣に氣にしておる?」
黎左衞門は目をほそくして望見したが、
「お、すれ違うた。……」
それから語氣するどく、
「見い、武士が方で女を呼びとめ、何やら話しておるぞ。」
言われなくても川幅を距てた向う岸の人物の動きは逐一多三郎には見える。――たゞ、流れにさえぎられ、忍者の耳を以てしても話の内容は聞きとれなんだ。
そのうち、女官は雅びた仕種で一禮すると、供の女房をかえりみて又、歩き出す。武士二人も互いに顔を見合つたあと、道をいそいで京へ向う。――見る見る雙方の間はひらいていつた。

「誰の胤かい。」

「それは分らぬわ。」

「ふむ……それにしても、あのような美女を殺すとは、つれない男もいるものよのう。」

「……」

「見えたぞ。大月、殺したは腹の子の父親にちがいないわ。何ぞ不義の世間に知れるを怖れる仔細あつてじや。孕んでおるをそ奴知らぬとお主云うたが、こればかりは、お主の見込違いじや。ひよつとすると、その玄齋とやらいうが、やりよつたやも知れん。……ウン、きつとそうじや。」

それから又何やらブツブツ言つては、おのが手の指をじつと見入つてそつと鼻先へもつて來たりする。そのうち行手に水面が光り出した。木津川である。

多三郎の歩行がふと停つた。

「どうしたのじや？」

けゞんそうに黎左衛門も立停つて視線をたどる。向う岸に、丁度、禁中の女官らしい女づれと武士ふたりの行き會うのが見えた。黎左衛門に分る由もないが、ひそかに宗矩が上洛させた武藝帳に名を連ねる面々である。

「もしかすれば、向うを歩いておる中の一人、同人物やもしれん。」
「げつ。」
蛇でも踏みつけた恰好でとびさがつた。
「歩けというに。」
多三郎は低く叱つた。「半道も往けば菅井の立場に入ろう。あの二人、おそらく休息は致すまいが、町家に我らの姿をかくさば又、手段もある。お主を傷つけた相手かどうか、見究めるはそれからじや。今は拙いぞ。氣構えをせずと歩け。」
木津川はゆるやかに兩者の間を流れる。今日も薄曇りの日で空には雲が低い。旅姿の武士ふたりは奈良街道を京へとつている。多三郎と黎左衛門はこちら岸で八幡への道である。あいだに橋はない。立場にでも入つて自然に姿が紛れれば、仔細に相手をさぐるてだても生れようと多三郎は言うのである。
女官は多分奈良へ向つたのであろうが振返つて見てはまずい。首から吊つた手首の急に痛み出す錯覺に捉われたか、黎左衛門は、ウンと下腹に氣合をこめ、前方の雲を睨んで一の字に口を結び、機械人形のように歩き出した。
「……疲れましたかえ？　もう程なく木津の町じや、我慢をしやれ……」
市女笠をかざして、官女は﨟たけた容姿でふりむいた。二十四、五の、ふつくらした面長な顔に眸が澄んで大きい。先帝後水尾帝の御寵愛を蒙つた京極ノ局に仕える掌侍である。

「黎左衞門。」

不意に多三郎が言つた。「歩くのじや。氣どられてはならん――」みずからも殊更何氣ない足どりで、川の流れを距て對岸の武士と同じ方向へ歩き出した。

「一體、ど、どうしたというのじやい？……」

追いついて、無意識に多三郎へ足並を揃えるのへ、

「見るでないぞ。よいか、向うは我らに氣づいておる。……下手に氣どられてはおよ、いのちがない。」

「げつ。」

「お主が手首を落されたというは、どのような武士であつたな？」

「ど、どうということはない。……おぬしにも話した通り、はじめは我らが一味かと思うたゆえ、誘わるる儘に松林へ行つたら、卑、卑怯者めが……矢庭に斬りつけよつたのじや。――左様、年のころなら我らと同じ三十五、六、眉の太い奴であつた――」

「姓は名乘らなんだか？」

「知らぬ。」

「訛りは？」

「氣づかなんだ。」

「……」

「大月、何故また、今更左様なこと尋ねる？」

のあつたこと、中將嗣長卿の妹於四の局は、これまた帝の愛を蒙つていたのが、東福門院入内に當つて禁中を追われなされたことぐらいである。

——さて、掌侍たちは木津の宿場に着いた。高貴の身でも、京を離れれば世人の彼女らに對する扱いは一般女性へのそれと異らない。かえようにも都はずれた土地の者に、扱い方の分るはずもなかつた。

「……これはこれはようこそお寄り下されました、其處ではいこう冷えまするで、さどうぞ。奥の方にてごゆつくりとお休み下さりませ。」

彼女たちの立寄つた茶店の老爺は、そう云つて曲つた腰を一そうかゞめて招じ入れる。せいぜい、言葉使いが餘人より丁寧なぐらいで、出されるのは、澁茶である。

それでも歩き詰めて來た彼女たちには嬉しい。

「——まだ、これより奈良へは遠いかえ？」

香の匂う袿衣の袖を拂つて、湯呑を受取つて靑女房の一人が問うと、

「なあに、木津まで お越しなされたのなら、あと わずかでございますで。……奈良は、どちらへ？」

「興福寺じや。」

「それはそれはお揃いで御信心なされますなあ。」

小さな茶店で、他に憩う旅客もないまゝ老爺は自らも、店先の牀几にちよんと腰を下した。

砂ぼこりを卷いて外を寒風が吹き過る。

「いゝえ。掌侍さまこそお馴れなされぬ遠路にてお疲れ遊ばしましようえ。」

年たけた女房が言うと、

「あのお武家、もしや道長さまとお識合いではありませぬかいなあ。」

別の一人が鐵漿の口許を綻ばせて、はるかな後を振返つた。

「まさか。……」

掌侍はちよつと笑いやんで、

「めつたなことで道長さまの御名を口にしてはなりませぬ。……さ、參りましよう。」

道長とは江戸大久保家に寄宿した浪人、神矢悠之丞のことである。まことは中ノ院大納言通村の嫡男――。大納言通村が寛永寺に幽居の身を案じて馳せつける途中、千四郎と相討ちだつたことは、かなり前に述べた。ついでに記憶をあらためておくと、大納言通村は幕府の專橫を臆憲あそばした先帝御脫屣の折、幕府より責任を問われて幽居せしめられたのである。

また京極ノ局は、園左大臣基任の女で、將軍秀忠の息女入内ののち、ひそかに後水尾院の御鍾愛をうけて三年前、皇子素鵞宮を儲けたが却つて東福門院（女御・すなわち秀忠の息女）の忌諱に觸れ、素鵞宮は東福門院の子として育てられ給うことになつた。――その素鵞宮が、頃日御不例なので、これまで皇子はことごとく御早世なのを案じられた京極ノ局の代理で、かねて御信仰篤い興福寺一言觀音さまに快癒祈願のため、掌侍は詣でるところなのである。藪左中將嗣長卿の手許に武藝帳のあること、皇子御早世のかげには武藝帳の祕めた理由のあることなど、夢にも京極ノ局は知らない。まして掌侍の知つていることと云えば、藪左中將嗣長卿と大納言通村が親交

無言で今度は否々をする。
「二人か？」
「……あい。」掌侍は暫らく相手を見戍つてから、貴男と似たようなお武家でした、と言つた。
武士の眼光が強くなつた。
「兄弟と見受けられは致さなんだか？」
「いゝえ。……」
「では、どちらか、隻眼ではなかつたか？」
いゝえ、と首をふる。
「も、もしや、その中の一人、拙者そのまゝの容貌ではなかつたか？　こ、これを見よ。」
おのが菅笠をぐいと上げて、掌侍に顔を見せる。
「……」
女房のひとりが大膽に下からそれを覗き込んで、
「違うわえ。」
ゆるやかに、かぶりを振つた。武士の顔色は變つた。
「……おかしい、……」
つぶやいたのは、それでも掌侍たちの前を離れてからである。
「友矩、又十郎はたしか大津を經て京へ入る筈。隻眼でなくば十兵衛でない、わしと似ておらぬなら、多三郎でない。とすると……柳生が一門か？」

それから程なく、彼女たちが幾許かの鳥目を置いて立上つた時だつた。

いそぎ足に茶店の前を通りかゝつた武士が、店内の花やかな氣配に目を向け、ふつと歩み停つた。市女笠を搖らして次々に彼女たちは店を出る。

「――お待ち下されい。」

最後の掌侍を武士は呼びとめた。

「御身たち、京より參られたと見受けるが、仕えられるはいずれの院じや？」

「……」

「中宮か？」

女房たちは顔を見合わした。

「同じことおたずねなされてじやえ。」

「ほんに。……」

「何、同じ？……」

武士の表情が引緊つて、

「拙者と同樣の問いを致した者あつたのか？」

無言でうなずいた。

「いつじや？」

「この寄場へ着く前じや。」

「その武士、ひとりでござつたか？」

「いゝや。……」前方を見つめての歩行の儘で、含み笑つた。
「滅多なことで斬れる相手ではない。危きには、近寄らぬが勝ち――」
堤に添うて、彼岸の道は菅井の立場をすぎる邊りから、次第に左へ川を離れる。武士二人の奈良街道は右へそれる。多三郎に、翼でもそなわらぬ限り、この白晝に川を渡り來て二人を襲うとは考えられぬ。奈良街道は、山城を北上して伏見から京へ入るが、多三郎に若し二人を襲う肚あれば、一たん淀城下に入り、中書島を經てのち、伏見で待ち伏せすると見ていい。――道は長い。
先刻、女官を呼びて以來、兩者の步度に些かも遲速はないが、その同じ步幅で、ゆつくり二人は街道を步む。
しばらくして又、一人が言つた。「馬木家六はもう着いておろうか。」
「分らぬ。あれは但馬守どのより特別の内意を受けた筈じや。或いは、まだ尾張にとゞまつておろう。……それより又兵衞が氣にかゝる――」
「又兵衞は浮月齋か？」
「左樣――」重く、うなずいた。
一人は阿州蜂須賀家兵法師範・佐々木左門。他は伊達藩狹川新九郎である。

次第に足運びが早くなり、見る間に木津川べりへ差しかゝる。
その捷さを不審そうに見送つて、
「ほんとうに、まるで同じこと尋ねました、氣色が惡うございますわえ。……」
掌侍に女房がつぶやいた。

こちらは二人の武士である。
默々と歩く。
そのうち對岸に民家の立並ぶのが見えた。菅井の立場だ。
一人が言つた。
「——左門、あの兩人の右を歩いて行く方にお主、見覺えは？」
「——無い。」
「多三郎やも知れん。……」
「某もそう見たが……匿れるかな？」
「民家に紛れてからがくせものじや。匿れたら、面白いぞ。」
暫らくして、
「見い。相變らず歩いて來る——」
「まだ分らぬ。多三郎ほどの人物じや。いずれ、伏見へ入る迄に我らを襲おう。」
「斬るか？」

仕　仙臺伊達　狹川新三郎
仕　紀州家　木村助九郎
仕　阿州蜂須賀　佐々木左門
仕　泉州岸和田公　多羅尾又兵衞
仕　加州前田　笠間九兵衞
仕　越前福井　出淵平兵衞
仕　勢州津藩　柳生源太夫
仕　豫州公　松下源太夫
同　八郎左衞門
同　小源太

以上の十八人である。尚、記憶をあらためるため最初の武藝帳に記されてあつた姓名を繰返すと——

伊勢津藩　柳生源太夫
越前福井　出淵平兵衞
肥後熊本　田中甚兵衞
會津藩　小瀨源內
肥前鍋島　弓削三太夫
長州毛利家　馬木家六

直門弟子

但馬守宗矩の直門で、諸大名に仕えた兵法者は當時十八人あつた。その名は『柳生舊藩記』に記されている。『柳生舊藩記』は、もとの京都武道專門學校教授古賀太吉氏の家藏で、『柳生雜記』『袖隱抄』と同一寫本（柳生藩の松田四郎兵衛景尋の著）だが、たまたま、この小說のはじめ、友矩が襖表を引剝いで取出した柳生武藝帳に列記の人名と同一のものがあるので『舊藩記』から拔萃してみる。

仕　肥後 熊本　　田中甚兵衛
仕　會津藩　　小瀨源内
仕　土井家　　萩原檜左衛門
仕　植村家　　西江織部
仕　淀 永井公　　野殿貞右衛門
仕　立花家　　戸塚治太夫
仕　厩橋公　　辻茂右衛門
仕　長州 毛利家　　馬木家六

笠間又兵衞、ならびに蜂須賀家佐々木左門、和州多羅尾又兵衞の七名である。
宗矩はこれらの面々にそれぞれ密命を申しつけたあとでこう言つたそうである。
「次は禁中じや。雲上の御ことなれば我ら武家の苛察は控え申すべき所。しかし好惡の感情は如何とも爲し難く、お主らの中には、心ならずして武藝帳に名を列したものもあろう。わしはそれは問わぬ。今は皇統の存亡に危急ある御時なれば、默つて、わしにいのちを呉れい。」
――と。
好惡の感情は如何とも爲し難いと宗矩が言つたのは、武士の資質を推しはかつた言だつた。當時、武家政治――幕府の專横によつて、皇室は衰微され、想像するも懼れ多い有樣だつたと吾人は國史で繰返し教えられたところである。事實、豐臣秀吉が聚樂第に至尊の行幸を仰いだ挿話は、絢爛華奢な桃山文化の精彩を後世に傳える意味とは別に、まさしく皇室衰微のさまを物語つている。
が、こゝに不思議なのは皇室（詰所）系圖である。
こゝろみに、天正十四年十四歳で御即位あそばされ、四十八歳を以て崩じ給うた、第百七代後陽成天皇の御系圖を啓くと、御嗣子後水尾天皇をはじめとして、實に二十三方の親王ならびに皇女のあらせられたことが分る。第一皇子覺深法親王の御母（大典侍ノ局親子）以下、後水尾天皇の御母中和門院をはじめこれらの親王皇女を產み奉つた侍妾は九人の多きを數える。
更に、後水尾天皇には、京極ノ局、秀忠の息女東福門院和子、於四ノ局、一位ノ局（四辻大納言公達卿女）、御匣局（左大臣隆致公女）、源大典侍局（庭田重秀の女）、帥局（水無瀨氏成卿女）、

仙台伊達　狭川新九郎
加州前田　笠間又兵衛
尾張家　汀（なぎさ）佐五右衛門
阿州蜂須賀　佐々木左門
　　　　　多羅尾又兵衛
肥前唐津　丹生将監
島津　　　柳生内蔵助

松吟庵

このうち末尾の松吟庵は宗矩の父石舟斎の門弟であり、尾張の汀佐五右衛門とは柳生兵庫であることは既に述べた。笠間又兵衛が、『柳生旧記』では九兵衛、伊達の狭川新九郎は新三郎となつているが、果していずれが正しいかは分らない。

が、いずれにしろ、十八人のこれら高弟中から、宗矩は〝かの武芸帳〟に記されてあつた者だけを江戸へ集結させたのである。但し柳生源太夫はお杖師玄斎となつて奈良三條通りに在り、小瀬源内は既に寛永寺外で多三郎に斬られた。丹生将監は宗矩にとつて姉婿であることは当の姉小糸闘に述べた通りで、門弟ではない。久弓倒三太夫は鍋島元茂のもとにいる。従つて江戸へ集結しているのは福井の出淵平兵衛、肥後細川藩の田中甚兵衛、毛利の馬木家六、伊達の狭川、加賀の

うものか、身を鴻毛の輕きにおき、暗愚の君にも忠誠を盡すが卽ちこの國ぶりの醇乎たる謂か。知らず。ただ柳生宗矩は、それでも禁中に平和を保たんため直門七人の武藝者にいのちを呉れと言つたのである。

——數日後、詳しくは寛永十三年正月、それぞれに使命を託された面々は相前後して京へ向つたのだが、こゝで宗矩の策謀を述べる前に馬木家六以下、直門弟子の閱歷のあらましを述べておく。

はじめに馬木家六。

宮本武藏が西國への修業の途次に立寄つた頃というから、元和年間のことだろう、長州毛利輝元の家中で、谷田部(やたべ)左衛門吞近なる老年の家來があつた。冬夏を問わず單衣一枚でとおすほどの一徹者で、二人の息子があり、嫡男を正左衛門、二男を立之進といつた。左衛門は嫡男の新當流の腕前が兼々自慢のたねである。

或日、谷田部の上役で大番役を勤める淸水多兵衛の息子と、この嫡男が口論のすえ斬結ぶ事件がおこつた。嫡男は一刀に相手の腰を拂つたが、相手も又かねがね武藝自慢の壯者である。互いに手疵を構わず斬結ぶ所へ朋輩が駈けつけて、ようやく兩者を取抑え、次第を上に申し述べた。結果、雙方役目中不屆に付、切腹という御沙汰である。夫々(それぞれ)、身柄お預けの上、重臣の邸内で相果てた。左衛門は數日くちを一文字に結んで家人と物を言わなかつた。ところが、暫らくして、相手の父淸水多兵衛が、當日の口論にて引分ける者なくば、我が息、正左衛門を討果していたであ

壬生院新廣義門院（園左大臣基音公女）、權中納言局（四辻大納言繼季卿女）など、正庶腹に生まれ給うた親王皇女は實に三十二人を數えるのである。

これはどういう意味か？

いかに男女の放恣なのが雲上の有樣とは云っても、常の世の禁中ではない。政治の實權を幕府に掌握され、皇室の尊嚴は名のみあって實の皆無にひとしかった時代である。

そういう時代に、築地が毀れ、衣食も充分でないと嘆きながら、愛姿に三十二人の子を産ませる人の性情を、それでも尊崇し奉るには餘程大人物でなくば慊わぬことだろう。然もこの後水尾帝は、東福門院の立后ののちは絕えず京都所司代の監視下にあらせられた。それでいて三十二人の子を儲け給い、產まずの侍妾を加えれば十指に餘る寵妾をもたれたのである。（系圖は御母のみを記述されている。）念のために附け加えておく、後水尾天皇の皇子・第百十一代後西天皇は御子二十七人、百十二代靈元天皇は三十四人、時代にして幕府の基礎のかたまった寬永から享保まで、約百年のこれが萬世一系の至上の系圖だ。同時代に天下の實權を握る秀忠さえ嫡子家光以下九人、家光で男女ふくめて子は七人である。

たしかに、對女性關係のみで、その人柄を想像するのは憚らねばならぬが、天下の趨勢が如何ようなものであり、且つ經濟的にその人のおかれた立場を併せ考えれば、普通の者の神經では嫌惡の情のきざすのは當然すぎる。悲しいかな、これが九五の位に卽かれ、皇統連綿を誇る天子のおすがたである。

皇國の民なら、それでも、至尊の崇嚴をまもらねばならぬのか。それこそが、勤皇の志操とい

さて當日になつた。場所は淸水の同役菅谷某の邸内である。約束の刻限に左衞門は次男立之進を伴つて現われる。程なく淸水多兵衞が、これも三男七之亟を連れてやつて來る。

主人の菅谷は此の日は故意に在宅せぬことになつているから、雙方所用あつて菅谷家を訪ね、偶々、顏をあわしての果し合いというわけである。

場所は庭前の五十坪あまりの平地。雙方顏をあわすと、互いに名乘りをあげて先ず淸水が差料を拔放つて構えた。息子の七之亟は父の介添えに數歩退つて、萬一のため鯉口を切る。

左衞門が言つた。「思えばおぬし、不束な息子を持つたが哀れじや。いま少し息子の出來良くば、父親まで物笑いな死なせようはせずに濟んだであろう。」

淸水は烈火の如く怒つて、「それはおぬしが事と思え。」叫んで斬りつける。

それより兩者呼吸を荒らげて爭つたが、武藝は左衞門が優れていたから淸水多兵衞の片腕を斬り落した。多兵衞がひるむ處を得たりや應と踏み込んで二の太刀を仕懸けるのへ、傍から、つぶてのように飛び入つて左衞門に體當りをくれた者がある。前髮の七之亟である。

「おのれ庇い立て致すか。」

滿面朱色になつて、左衞門は不憫と思つたが少年を眞向微塵と斬つた。「あつ。」と叫んで少年は卽死した。そこで血刀を揮つて淸水をも斬り伏せ、靜かに胸の上に跨がつて止めを刺した。

そこへ立之進が駈けつけ、「父上、お美事でございまするぞ。」そう言つて、ひざまずいて左衞門を抱え起した。昨日までの上役に止めを刺し、氣が弛んだか左衞門は其處にへたり込んでいたのである。

ろうに、不憫至極と人に語つた話を耳にしたのである。忽ち左衛門の老いの面體に朱がさした。

翌日、非番を俟つて左衛門は清水宅に出向き、右の噂を耳にしたが、本心より申された事かと問うた。如何にも本心なりと清水は答えた。然らば已むを得ぬ、いかに死せる者といえども、武士が表藝をそしられては泉下で嫡男はうかばれまい。今更、亡き者の武藝の程を證するすべもなければ、我、嫡男に代つて汝に眞劍勝負を申込む、まこと汝が子息の武藝まさらば、汝我に勝つべし、と言つた。清水は承知した。そこで日を約し兩者は立合うことになつた。

谷田部左衛門と清水多兵衛の果し合いの噂はその日のうちに家中にひろまつた。夫々に親しい者が居宅に赴いて、或いは制し、或いは諫言するが頑として二人は容れない。

「事もあろうに武士たるものの表藝を誹謗せられて、默つておれというか。」

目を尖らせてひらき直る。

とりわけ谷田部左衛門は、相手は上役、萬一勝ちを制しても切腹仰せつけられるは瞭然だから、谷田部の家名斷絶を憂えて近親よりより意見をしたが、

「武士の意氣地じや。當地追放にお主らなるは不憫であるが、嫡男正左衛門があわれと思うて怺えてくれ。」と言う。

事は藩の上役にも達しているが、武門の面目を至上と自他ともに思い込んでいた時代だ。制してみたところで、今更二人の面目が立つわけはなく、却つて下手をすれば、兩人意地にも割腹するのは目に見えている。むしろ堂々の勝負をさせてやるのが情けであろうと、見て見ぬふりをなした。

「わたしへの斟酌なら無用じやぞえ。」一日、立之進になじつたが、
「何を申されます。上の御沙汰でそれがしは御奉公しております。若し、彼らが申すように、一命を惜しんでおるなら、沓に當城下を立去り浪人致しておりましよう。人の噂など氣に召されるな。」
そう言つて、相手にならなかつた。
人の心は微妙である。お家斷絶と思つたものが、息災に役目を勤めるを知つて、喜ぶどころか一そう立之進への輕視の念をあらたにした。曾ては膝詰談判で左衛門に勝負を思いとゞまらせようとした親類までが、無事である自身のことは忘れて立之進母子の家へは寄りつかない。
「左衛門も思えば氣の毒じや。嫡男の名譽のために死んだに、却つて立之進がために谷田部が名を物笑いに致しおつた、これが、兄弟いれ替つておつたらのう。」
そう陰口を言つて、苦々しげに額へ皺を寄せる。お上も却つて谷田部一族を生殺しに遊ばすようなものじやと、長大息するものもある。
ところが、たゞひとり、そういう風評にさからつて、敢て立之進に輿入れした女性があつたから人々は驚いた。
しかも、それが主君寵愛の女人と分つては二の句がつげぬ。

「だ、大丈夫じや。立之進、介錯をせい。」

左衛門は身を立て直すと、大地に坐つて直ちに十文字に腹を掻き切つた。立之進がその首を落した。

さて、淸水父子は即死し、父の左衛門も美事割腹して果てたのに、この場に在つた立之進のみ生き殘つて、剰え父の首を刎ねたというのが家中の話題になつた。

大方は、非難である。いかに私闘とは云え、左衛門の挑戰は嫡男正左衛門の名譽を守るためであつた。武士なら當然の意氣地である。しかも正左衛門は立之進にとつても實の兄だ。左衛門が切腹するというなら、「いや、淸水父子を討果したのはわたくしめと世間に申して頂きます。父上は、どうぞ末永く母上ともどもお暮しを願いまする。」ぐらいの口上はあつていい。それを肯く左衛門でないことは分つているが、一言の制止する樣子もなく、加えるに實の父の首を刎ねて平然たるとは呆れ果てた性根——。それに較べれば父の危急を救おうとして斬られた七之亟は、まだ前髪の少年とは言え立派な者だというのである。

當然この風評は、立之進の耳にも入つた。しかるに、立之進は憤る樣子を見せない。淸水、谷田部兩家とも、武邊立てなれば私闘とは申し條、却つて家中の士氣を鼓舞したるに依つて、兩人緣者御奉公の儀一切差構なし、という特別の御沙汰で、跡目相續を許されたから、立之進は老後の母へ孝養專一につとめている。

母の方が噂を案じて、

「先ずこれにて罷り退れ。」

と金百枚を與えた。

すると、いよいよたき女は色をなし、「かゝる小金に絶えて用なし。」とパッと疊へ擲る。

秀元はヘキエキして、

「よいわ。やむを得ぬ次第なれば不日、汝が請いに任す。」

と言つた。

「かならずでございますね。」

たきは更にだめを押し、ひと先ず退出した。

二日後、彼女に付し文が下り、立之進は百石の加増を賜つて左百石奥詰にて番頭となつた、という。

「三日の内に再度恩命ありしこと古よりためしなき事なり。」

と『餘閑』に書かれてあるが、尚、

『此女、夏季に至り、浴後、納涼などするに赤裸にて陰所もおおわず、手に手巾を携え傍若無人に人前に徘徊するさま、いとおかしけれども見るもの恐れて笑いを忍びしよし。』という。

そんな女である。

蓋し武士生活に於ける恐妻の先驅者かも分らない。

さてこのたき女が、立之進の妻になつたが、彼女は秀元の寵を享ける以前、「御由緒ある御方」の側近くに仕えた女中であつた。生れは大和郡山で、松田何某といえる武士の娘である。「御由

女傑

彼女は名をたきという。『毛利家列臣録餘聞』によれば、

「たき女は谷田部立之進の妻、もと秀元公の妾。のち立之進に賜る。」

とあり、すこぶる剛氣の婦であつたことが『餘聞』に書かれている。――當時、武士の妻はひたすら夫に仕え、家に在つて婢を指圖して内助の功を積み、夫の役目向きは勿論、その生死にすら時によつては容喙するを許されず、ひたすら貞淑を旨として謙譲の美徳をあらわしたのが一般と思われていたが、中には、このたき女の如き剛氣の女性もいたのである。『餘聞』にはこんな風に述べられてある。――

或る年、立之進は寵命を蒙つて御供番頭格に進むことになつた。それ迄は御小姓組番頭格、輿詰で、日々御前へ出、御小姓取扱いの勤めをしていた。祿は四百石である

ところがたきは、夫が御供番頭になると聞くと、輿をはしらせ、君前に伺候して、

「わらわが夫は疾てより精勤他に勝れたるに、本日の御沙汰何事ぞ。」

と責め奉つた。ことわる迄もないが、主君とは、たき女にとつて曾ては情けをうけた男なのである。

秀元は彼女の剣幕に苦笑して、

えなば、徳川方に従いし人々、みな御陣へぞ参らんずらん。さあらんに於ては、などか御方、勝軍せでは給うべき。」

と言葉を盡して勸めたが、これも用いられず、結局、三成の下知として美濃に赴き南宮山に陣した。その上で、毛利の先陣吉川廣家が變心して徳川方に趨つたのを理由に、戰うに堪えずと稱して徳川勢を押し分け押し分け大坂に歸つた。關ケ原の役は吉川の背信で大坂勢の敗北を招いたといわれるが、この邊、吉川廣家と秀元の間にどういう深謀があつたか今は想い及ばない。

關ケ原役後、毛利輝元は、おのが國々を沒收せられ、それらの國を以て家康は吉川に與えようとしたが、吉川は固辭して受けず、結局、周防、長門の兩國を輝元に賜つた。但し長門は秀元に讓るよう家康に下命されてである。

大坂の陣になると、秀元は徳川勢に與して、夜を日についで攻め上り首三百餘を切つて秀忠の本陣に献じた。餘談になるが、この時秀忠の馬前にあつたのが兵法者宗矩である。「この日、城兵七組、秀忠の牙營を圍み、地雷火また迸發して陣營を焚き、人馬焦爛す。秀忠本陣騷擾して甚だ危し。時に城兵――木村主計以下素肌の武者三十五人秀忠に迫る。柳生宗矩なる者、馬前に立ち忽ち七人を斬る。云々」と『安藤治右衛門家書』にあるから、宗矩が武藝の實力を示したのはこの時だつたろう。秀忠にすれば、そういう危險の直後だけに秀元の獻じた首三百餘は自軍の士氣をあげる上で嬉しかつたろう、又、そういう折に逸早く首を獻じる秀元の才覺も宗矩の印象に残つたに違いない。單身秀忠の馬前に立つた柳生宗矩は當時四十五歳である。二十代の青年ならともかく、その年で、戰場の荒武者數人を立所に斬り伏せた業前が秀元にも深く印象づけられた

緒ある御方」とは大納言典侍一位ノ局のことである。局は四辻大納言公遠卿の息女で、のちに正上の寵を蒙つて皇女梅宮を産み奉つた。たきはそのお目出度を見て勤めを辭し、秀元の寵をうけたのである。

秀元は毛利元就の孫に當る。元就の卒後、嫡孫輝元が家を繼いだが、天正十二年に年わずか五歳だつた秀元——當時宮松丸といつた——が、小早川隆景などの意見で、輝元の世嗣と定められた。幼にして祖父元就に容貌が瓜二つだつたというが、人質として大坂に在つた時、豐臣秀吉もつくづく宮松丸の顏を見詰めて、

「この幼き者、世のつねの人にあらず」と洩らしたという。

爾來、秀吉は宮松丸を可愛がつて、後水尾天皇御即位の時にも秀元を從えて朝參した。その時主上は、少年秀元を御覽になつて、汝の祖父元就は正親町天皇御即位の料を上つたが、今日、その孫として參內するこそめでたけれ、とのたまわれた。

宮松丸は成人ののち、秀吉の諱字を賜つて秀元となり、朝鮮の役には一方の大將として晋州の城を攻め、首一萬餘を擧げている。

又關ケ原の役には石田三成にかたらわれた養父輝元をいさめて、

「秀頼公いまだ幼くまします、如何で內府を善しとも惡しとも思い分ち給うべき。奉行（三成）が方人し給わん事ゆめゆめ然るべからず。」

と飜意を促したが、輝元は肯かず。

「さらば君は秀頼公の御供して東國に攻め下り給え、秀元先陣仕らん、秀頼公自ら向い給うと聞

するが不思議と惡意はわかぬらしい。遂には謝罪させられて、たきが引揚げたあと、
「ふむ、武士の妻はあれぐらいの氣性が無うては愜(かな)わぬ。よい嫁じや。」
褒める者さえある。立之進自身はそういう事に關わりなく相變らず精勤した。
ところが一日、寛永五年六月十八日拂暁に至つて、立之進は突如自刃したのである。遺書が一通あつた。宛名は御指南役馬木家六殿——。

遺　書

馬木家六は駿州久能の城主松下右衛門の家來・馬木藤兵衛吉晴の子で、幼にして但馬守宗矩の弟子となり永く大和柳生村にあずけられた。

豊臣秀吉が日吉丸といつた少年の頃、矢矧(やはぎ)橋上で薦(こも)をかぶつて寢ていたところへ、野武士蜂須賀小六が通りかゝつて日吉丸の發明に惚れ、これが機縁となつて終に小六は秀吉に隨身するといつた話は『太閤記』などでも一つのさわりになつていて有名だが、ほんとうは蜂須賀小六でなく、久能の城主松下加兵衛之綱(ゆきつな)である。矢矧橋というのも日吉丸時代には實はまだ橋は架かつていないので、曳馬川のほとりだつた。

この日——詳しくは天文二十一年の春だという——松下加兵衛が、同じ今川氏の傘下である濱松城主飯尾豐前(ぶぜん)を尋ねるため曳馬川の邊りまで來ると、異形な姿をした少年が目にとまつた、年

ろう。

秀元はこの戰功によつていよいよ本國を安堵し、寛永八年、輝元の子秀就に家を讓るまで實質上長州藩の主となつた。清水多兵衛や谷田部左衛門が輝元の家來であるのに、秀元の裁可を受けたのもこういう事情によつたのである。輝元の方は、大坂の陣に軍が散じてから馳せつけている有樣だつた。

尚、將軍家光の代になつて、「お咄衆」がもうけられた。戰場の昔語りなど、家光の御前で口を定めてする連中である。この小說の冒頭の方に書いた阿部對馬守――お咄しの口には握り飯を持つて登城し、食後、包み紙に附いた飯粒を一つ一つ丹念につまみ喰つて後、紙の皺をのばして洟をかんだ人物――などとともに秀元もその一人に加えられた。念を入れておくと、阿部對馬守は老中にのぼつた程の重臣だが、その對馬守の奥には、宗矩の娘於季が行儀見習の名で入つている。

さて、話は戾る。たきは立之進に入嫁してからは不思議なほど夫を大切にして、老母にもよく仕えた。立之進を惡評していた者もこのたきが谷田部家に納つてからは、迂濶なことは言えぬので口をつゝしむ。頑固な老臣などの中には、思い出語りに口にする者もあるが、ひと度それがたきの耳に入ると大變である。亡き舅は嫡男の武道の面目を證したから死んだ。武士として、切腹なら立派な死に方である。その父の介錯をした夫の何處が惡いかと、談じ込んでくる。たきには持前の不思議な愛嬌があつて、且つ姫君のように驕慢だから、その言い分に老人どもはヘキエキ

そう言われて單身大和柳生村に向い、爾後二十歳にいたるまで山男同然の暮しをして研鑽を重ねた。

家六が新陰流の奥儀を授けられたのは二十二歳の時だが、それに就いて、こういう話がある。

家六と同じく松吟庵のもとで武藝を修めていた坂原村の百姓の倅で伴藏なる者があつた。これが家六と違つて武力がとんと上達しない。

當人も次第にあきらめ、むしろ自棄になつて、

「所詮は生れつきのものじや。わしはお主がように發明でないでのう、修業は今日限り、やめじや。」

云つて、以後木刀を把ろうとせぬ。他の弟子たちが修業していると、獨り、庭や門前の掃除をする。暇を見ては屋敷を抜出し裏山に登つて木を擣つ。朋輩弟子の手前、修業は歇めたとは云つたが上達を念じる心は捨てかねたのである。――そのことを、知つてか知らずか松吟庵は伴藏が稽古を怠つても叱らなかつた。たゞ默つて伴藏の様子だけは見ている。

そうした或日、何を思つたか松吟庵は家六を居間に呼んでこう云つた。

「かねて申し聞かせてある通り、其方たちに稽古をつけるは我が柳生に他日あるを期するゆえじや。されば禍根は斷つておく必要がある。伴藏を其方、斬れ。萬一、伴藏に加擔致す他國者あらば構わぬ、それも斬れ。」

と言つた。

家六はわけが分らぬが、命令とあれば已むを得ない。緊張を面に漲らせ、

を訊くと十五歳という。百姓の倅で、亡父の遺物という永楽銭一貫文をもつて家出し、この金で木綿針の太いのを買込み、道々賣つて旅費として遠州濱松までやつて來たが、これから尾張へ往つて、誰ぞ名ある武將のもとに奉公しようと思う——そう少年日吉丸は答えたわけだ。

そこで松下加兵衛が、ではわしが召し抱えてやろうと日吉丸を草履取りに召しあげたのである。當時の濱松城は今の曳馬にあつた。

この松下加兵衛の子が右衛門吉綱——すなわち柳生宗矩の妻・於松の父である。

馬木家六は七歳の時父藤兵衛の脇差に疵のあるのを見て、この刀人を斬らば折るべし、すみやかに代えさせ給えと父に進言したというから、一種の神童だつたろう。試みに藤兵衛がこの脇差を揮つて庭の樹を切ると、刃先四寸二分から先きは幹に喰殘つて刃元が空を切つた。そのためあやうく傍らの中間を傷つけるところだつたという。蓋し凶相の劍である。

藤兵衛は寒心に耐えず、脇差を其の場に捨てたが、内心、我子の慧眼に舌をまいて、これを朋輩飯塚某に話した。飯塚は大小姓頭であつたが、主君右衛門に言上したのが女婿宗矩の耳に入り、少年家六は主君の肝煎りで宗矩の内弟子となつた。慶長十五年家六、十二歳の春である。

當時宗矩には天下の御流儀と謳われるほどの名聲はそなわつていない。併し十二歳の少年のことで、まだ何も分らずただ師匠大事と一心に修業した。場所は江戸である。

十六歳の時、一日宗矩に召され、

「そちにはもうあらかた基礎は仕込んだ。あとは大和にて松吟庵どのより直々指導を仰ぐがよい。」

「作藏、そちを狙うておる者がある。今日は稽古に及ばぬで、心して戻れ。」と教えた。木影で樣子を見ていた家六はぞつとした。怪訝そうに作藏が、老武士を見詰めて、

「誰が狙うていますのじや？」

尋ねると、

「ソレ、彼處におる。」

まさしく家六の身をひそめた樹影を指さし、不審げに作藏が向き直つたその背すじへ、

「不憫なれどいずれは松吟庵の手にかゝる身じや。許せよ。」

拔討ちに老武士は斬りつけた。

作藏は聲も立てず死んだのである。

「出て參れ、若造――」

老武士の右手は、杖を突いた儘である。大刀は持たず小脇差のみ差していた――その小刀を、左手で拔いたのだつた。

あまりの手際に、茫然自失して、家六がフラフラと道へ出ると、老武士は言つた。

「歸つて松吟庵にそう申せ。明身（あけみ）の太刀すじ其方に授けたようなものじやとな。」

言つたと思うと、くるりと背を見せ藪の中へ姿を消す。

馬木家六が見たこれが浮月齋の姿だつた。

家六は立歸つて委細を松吟庵に告げた。

「矢張りそうか。……」

「承知しました。」

答えて立上ろうとすると、

「心せいよ。其方の手にはおえぬやも知れぬ。」

不思議なことを言う。

家六は實際にまだ人を斬つたことがないので、さては眞劍の決意をさとされたのかと、合點をして伴藏の姿をさがした。

丁度庭の掃除をしている。邸内では他の門弟に憚りがあるので密かに様子を窺つていると、やがて掃き集めた落葉をもつて裏庭から外へ出ていつた。家六は尾けた。

不思議なことに、塵を抛る場所はいくらもあるのに委細かまわず伴藏はどんどん裏山へ這入つてゆく。やがて竹藪に來ると此處に不思議な老武士が待ち受けていて、

「さ、抛れい。」

と言つた。伴藏はパツと藪の中へ落葉や小石を投げ捨てた。

「まだ會得出來ぬかな?」

うしろから老武士が言う。ふしぎな太い杖を突いている。

「わかりませぬわい。」

伴藏が悲しげな聲を出すと、

「落膽いたさずともよい。以前とは格段の上達、もう暫らくじや。」

言つて、

家六は體をひらくと忽ちに家士を仆したが、鷹は終始片腕に停止したまゝであつた。
この時、かねて秀元から内意をうけていた家士のひとりが、家六に近づいて矢庭に斬りつけた。
「――御意。」と答えて家六はわけなくお鷹匠から『明石』を受取ると腕にとまらせる。
「どうじや、そちにこの鷹が扱えるかな。」と訊いた。

家六の召抱えられた祿高は二百石である。屋敷は豐浦（長府）に賜つた、豐浦藩は五萬石で元來、秀元の本城だが、右の手練を見て秀元は家六を本家毛利に讓るのを惜しみ自らの家來としたのである。

さて馬木家六は毛利家兵法師範となつたが、若年なのを當初はいぶかしんだ家臣たちも、『明石』の一件を噂に聞いて我先きにとあらそつて家六の指南を仰いだ。たきの夫谷田部立之進もそんな一人である。

その立之進が自死した遺書に家六への宛名が書かれていたのだ。

たきは、思慮の無い女ではない。
夫の突然の死の原因は分りかねたが、騷ぎ立てるようなことはしなかつた。一通の遺書のあることも深く祕して人に洩らさず、たゞ、夫の急死だけを公儀に屆け出たのである。
早速檢死に役人が來たが、立之進は割腹の上、頸動脈を斷つてまさしく自死している。
「何ぞ思い當ることはなかつたか？」
とたきに問うた。たきは心當るふしはないが、去る年、父を介錯して世人の惡罵を蒙つてより、

感慨深げにうなずいて、
「伴藏が遺骸、ねんごろにとむらつてやれいよ。」
と言つたきりで、この日は事情を話さない。
それから更に月餘がすぎる。
一日、松吟庵は再び家六を呼んで、山田浮月齋が石舟齋宗嚴と同じく疋田陰流の兵法者なることを明かした上で、
「明身の祕太刀、會得致し度いか。」
と問うた。
會得したいのは山々であるが、何年修業をしても迚もあれだけの手練に達そうとは思えぬ、と正直に家六が答えると、
「今のそちなれば出來る。但し浮月齋に勝ろうとは思うなよ。あれは實は忍者の太刀じや。忍の劍には業あつて位がない。その方には我が工夫の位を授ける。心して覺えよ。」
そう言つて、爾來、特別に稽古をつけて遂に新陰流明身の位を授けた。家六、二十二歳の時であつた。
家六がこの明身の業を世人に見せたのは毛利家に仕えた時だつた。
毛利秀元の乞いによつて、宗矩が家六を兵法師範に推擧したとき、秀元は長州へ着いたばかりの馬木家六の腕の程を試したのである。秀元は『明石』と名づける猛鷹を可愛がつている、鷹匠に命じてそれを持出させ、家六に、

内弟子の門弟二、三と奥座敷で雑談していたのが、そう呟いて別に顔色も變えず、
「別室へお通し申せ。」
ゆつくり立上つた。
やがて一室でたきは家六と對決した。
暫らくは雙方物を言わない。たきはこの時二十八歳である。
やがてたき女は懐中から遺書を取出すと、
「お見せ致すものがござります。これじや。」
「お前さま宛でござります。」
片時も家六の表情から目を離さずに言つた。
「——拙者宛？……」
家六は手をのばして遺書を取る。その書狀の端を、たきは疊に抑えた。
「お待ちなされ。わらわにとつて立之進はかけがえのない夫——。それが、わらわに一言の打明けもなくお前さまに死後の訴えするは不思議じや。——この書狀、あとでわらわに見せてたもれ。」
「おのぞみとあらば、此の場にてそもじが手で開かれてはどうじやな。」
「……かまわぬかえ？」
「存分に——」

ひそかに、何事かを爲果した上で死ぬ覺悟をきめていたものではあるまいか、そうとでも思わねば納得がゆかぬ旨を答えた。

役人は歸つて上役にこれを告げる。上役は更に年寄に告げ、遂に秀元の耳に入つた。

「谷田部が自死いたしたと？」

たきの夫であるだけに秀元も却つて深くは問いかねたのだろう。

「不日たきに參るよう申せ。」

命じただけで、沙汰は下さなかつた。

立之進には一子がある。それに家督を嗣がせるか、亂心者として谷田部家を斷絶させるかの沙汰である。

重臣たちは一應協議したが、何さま、相手がたきのことゆえ、どのような又難題を秀元直々に申し出るかも分らぬから、結論を出さず、沙汰は追而という事にして、ともかく葬儀をゆるした。日頃立之進と親交あつた藩士は葬儀に列したが、その數思いのほかに尠いので、今更に立之進の孤獨を知る有樣だつたという。

たきは私かに兵法者馬木家六の參列を冀（こいねが）つたが家六は何事も知らぬ氣に姿を見せない。そこで、初七日を濟ましてのち、夜にまぎれて家六の住居を問うた。

取急ぎ申し述べたき儀あり、直々面接ねがいまするると取次の中間に言つた。たきは名物女なたいなものだから、ひと目見て、中間も立之進の妻と知る。直ちに奥へ取次いだ。馬木家六は、

「ほう。……今時、何用であろうかな。」

「まことでござるワたき殿。」
「げつ。……」
「馬木家六のこの顔、お忘れかな？……あの月ケ瀬の烏梅を運んだ――」
「？」
それでもまだ思い出せなかつたらしい。不審げに、呼吸をとめてじいーつと家六の浅黒い顔を憑かれたように瞶め入つたが、
「……あ」
眉の剃迹を張つて、のけぞるばかりに驚愕した。
たしかに見覺えのある男だつた――。

月ケ瀬は、大和國添上郡――柳生村の東一里の里で、梅花を以て今に世に名高い。大日本地名辭書に據れば、
「大和、伊賀、及び山城の交界地にして月ケ瀬村大字尾山桃香野、波多野村、花垣村など交錯して名張川（一名差月川）を挾む、山際水涯みな梅を植え、世に月ケ瀬の梅溪という。」
とあり、もともと當處の梅が天下に喧傳されたのは文政時代、津藩藤堂家の儒生・齋藤拙堂の遊記に誌されてからで、梅も佳かつたが拙堂の梅溪遊記が蓋し一世の名文である。今のわれわれには到底かゝる格調高い文字で月ケ瀬を述べることは及びもつかないから、餘計な說明は抜きにして左に其文を寫してみる。

烏梅

「お言葉なれば、では披きますぞ。」

たきは言うと疊から遺書を取上げ、故意に、ゆつくり封を開く。

馬木家六は膝に手を揃えて見戍る。冷笑しているようであり、眼底が意外に鋭く光つていたが、たきはそこまで見破れなんだ。

はらりと封書を膝前に投げて右端から讀む。「一、遺言の事。此度拙者儀自刃致し候に就いては……」たきの眸が字句を追うて上下するうち次第に瞳孔をひろげていつた。かすかに指が顫え出した。

家六はじつとそんなたきを見遣つたまゝだが、とうとう堪りかねた如くたきは顔をあげた。

「ま、まことかえ?……」

胸をはずませ、穴のあくほどしげしげ家六を瞶める。

「何を申されておるやら、その書状の内容知らざる某――」

「お、お前さまは昔のわらわをよう知つてじやと書いてある……」

「ほう。……」

家六は胸をそらした。が、その顔から笑いが消えた。

高貴の婦人は皆この烏梅を用いたのである。餘談になるが、祇園の舞妓や島原の花魁(おいらん)の中に、稀にこの烏梅を使つた者が戰前にはあつたという。

「惜しむべし、かかる風情ある烏梅も近年西洋紅染に壓せられて其價大減し、三十貫わづかに二圓(舊價二十兩)。故に斬伐もつて薪と爲す者あり、後年或ひは鋤して麥畦とするも知るべからざる也(なり)。」という。

それでも、今以て梅の景勝地なのだから昔はさぞ素晴しかつたろう。

さてその烏梅の良質のものを禁中に獻ずるのが何時(いつ)の頃からの習わしであつたが、或る年、四辻大納言公達卿が觀梅かたがた殿上人や女官あまたを從えて月ケ瀬に遊ばれたことがある。

京からは丸一日の里程であり、警固も兼ねて送迎の役目を柳生松吟庵が引受けた。宗矩は當時江戸だから、柳生領主に代つた當然の擧措と人も思う。まして柳生と目と鼻の笠置山は後醍醐帝以來、幕府の專横に鬱々たる公卿遊渉の地であり、柳生一族もまた春日神領につながる土着の武士である。松吟庵の、卿等を送迎する態度に崇敬の念あふれても誰一人怪しむに當らなかつたわけだ。

たきは其の時、大納言の息女一位ノ局の供として此の觀梅に加わつたが、馬木家六は他の柳生門弟とともに警固の任にあたつた一人で、とりわけたきが好もしい梅の一枝を手折ろうとするのを、つと近寄つて折つてくれた。その時、二人の眼がヒタと會つたのを今以て忘れかねていると家六は言うのである。

すなわち拙堂梅溪遊記に云う――

「何の地か梅無らん何の郷か山水無らんや。唯和州の梅溪、花山水を挾んで而して奇、山水花を得て而して麗、天下の絕勝たり。然れども地、州の東陬に在り、頗る幽僻にして舊と造り觀る者罕れに名甚だ顯はれず。顯はれしは我伊人（伊勢國人）より始まりしと云ふ。

溪傍に種梅を業と爲す者凡そ十村、曰く石打、曰く尾山、曰く長引、曰く桃野、曰く月ケ瀨、曰く白樫……十村の梅幾萬株なるを知らず然れども盡くは谿に臨まず、谿に臨むもの最も淸絕と爲す。谿源を和（和州）の宇陀に發し此に到る廣さ殆んど百步、尾山その北岸に在り月ケ瀨、桃野その南岸に在り。危峰層巖簇々その間に錯立し、梅之が經となり而して梅之が緯となり、水竹これに點綴す。」

と。

『大八洲遊記』では、月ケ瀨が「怪石紛錯して梅と駢立雄を爭ふ。河心また巉石竦峙」し、奔流が岩を嚙んで怒號するさまに筆を盡し、拙堂の遊記は、ただ梅花を賞し水石に及ばぬのを憾んでいる。

何にしても、春ともなれば梅花らんまんの間に奇岩現出して景象絕佳の地である。

ところで月ケ瀨の諸村の民はこれ等の梅の實が熟して地に落ちると、消炭の粉をふりかけて晒し干した。すると黝々とした梅の實が出來る。これを烏梅と謂う。往昔、女人の珍重したのはすべてこの烏梅の口紅である。色はえんじにちかく、引くとうす紫に光つたそうだ。明治になつてドイツから赤い口紅が輸入されて以來、其價が大減して終に滅びるに至つたが、それまで邦國の

てくれた青年である。

「まだおやすみにならぬか？……」

悪びれず、青年は顔に炎を映して破顔つた。傍らにいた同じような年恰好の武士も、眉は太いが勇ましい顔をして好感が持てる。

ふつと、誘われて彼女は火のそばへ降り寄つた。生白い公達には見られぬ逞しさ、凛々しさが、彼らにはある。もともとたきは郡山在の武士の女であつたが、将來、妻となるなら矢張り公卿のもとへでなく、適度に野性味のあるこうした武士に嫁し度いとフト思つた……。

その、青年が今は兵法師範として、同じ毛利藩にいたのだ。然も夫は彼に師事し、今は遺書を残している――。

「いかがじや、思い出されたか？……」

緊迫していた、一時の沈黙をほぐす如く家六の口邊に再び笑みが戻つたが、逞しくこそはあれ、曾てのあの清らかな若々しさは想い浮べようにも、ない。

「思い出したわえ。」

あつい吐息とともに言葉が出て、おとめの如くたきは頰を染めた。

「ではその遺書、書かれてあること拝見致す。――さ、お見せ下され。」

すると今までと打つて變り、たきは忽ち巻紙を掴んで胸に掻き寄せた。

「いやじや。」と言つた。黒眸に不思議な瞋恚が燃えている。

そう聞けば、慥かにたきも思い當る。

武士とは云つても、どうせ田舎の百姓あがりであろうし、まして當時、次第に武士階級の横暴と粗雑な振舞いに顰蹙していた宮仕えの女のことで、柳生門の兵法遣い達が警固してくれると聞いた時には、不安にこそ思え、露ほども頼もしいとは考えなかつた。

「大丈夫でおじやろうかなあ。……」

女房同士で、寄り寄りそうつぶやいては觀梅に出掛ける日を待ちこがれつゝ一抹の懼れは抱いていたのである。

それが、笠置の手前で出迎えをうけてみると、所司代の武士たちの態度からは想像も及ばなかつたほど全てに慇懃で、つゝしみ深く且つ禮儀も正しい。門弟とて大小を差した若侍が七、八人、行列の前後に供奉したが、その殆んどが貧しい身扮ながら容姿も立派で、まるで雄藩の選りすぐりの武士たちに警固されて往くおもいだつた。梅林は目を瞠る美しさ、人また典雅で、思いがけずも桃源境に遊ぶ心地がしたことだが、――家六は、そんな中でも取りわけ好もしい青年だつたのである。

夕景ちかくまで或いは梅に興じ或いは差月川の奇觀に目を慰めて、其夜は大柳生村忍辱施寺に假泊した。この時にも門弟たちは徹宵篝火を焚き、霜夜の境内に番をしてくれたが、正堂や多寶塔や照堂などの影が篝火に映えて揺らぐ白夜の美しさは身のしまるものがあつた。たきは一位ノ局が茵にお臥せりになつたのを見とゞけたあと、浄刹のすがすがしさに誘われてそつと宿舎の部戸を開き、廊に姿を出したが、たまたま、その前で篝火を圍んでいたのがあの梅を手折つ

取つた。

自分は故あつて本日自室に於て自刃する。世の不審を蒙るは分明であるが、武士の一分相立たぬゆえとより今は申上げようもない。たゞ、死に臨んで心の殘るは年老いた母と妻たき殿のことである。この呼びように御不審のあるのは尤も至極であるが、たきどのとは自分は實は家に納れてより名のみの夫婦で未だ衾を同じゆうしたことはなかつた。彼女が自分に嫁してくれたのは惡評の中にあるのを主君秀元公が憫み給うた故であること、たき女の嫁ぎ來つた日に悟つている。かりにも君寵を蒙つた女性であるゆえ、爾來、夫婦の理を致さずに過したが、併し、世間はそうは思うまい。主君にこの事打明けては却つて恩を仇に返す仕儀ともなり、たき女の處置にほとほと困却している。

そこで、彼女の身のふり方を依頼するは師の馬木家六どのと見きわめてこの遺書をしたゝめた次第である。馬木殿はいつぞや、柳生にて修行の頃たき女を見知つておられたとか申された。聞けば彼女は大和郡山の生れであるという。さすれば御兩所は幼馴染でもあろうか。その邊のところ、死を間近にした身では徒らな推量をするより術もないが、とまれ馬木家六どのであれば主君の覺えも芽出度く、且つ當家を浪人致されることとあつてもたき女に不仕合せの生涯は送らせなさらぬであろう。自分の口から云うのも異なものであるが、たき女は世に烈婦の如く見えて、まことは實に心やさしい女性である、このことは我が老母への仕えようと、自分が他の女に孕ませた一子を我が子の如く面倒見てくれたことでも察して頂けようかと思う。

繰返すようであるが、この際となつては、日頃親交の友とてない自分としては御指南役の雅量

「……それがし名宛の書状であれば妻のそもじにさえ事によつては見せぬが武士の作法。……それを、お見せ致したに返されぬとは奇怪至極。何が書かれてあるかは存ぜぬが、とまれ、當方に見せられるが順序であろう。」
「いやじや。」
きつぱりもう一度言つて、不意に聲高く、
「お、お前さまは此處に書かれてあること知つてであろうえ？」
「何と言われる？」
「きつとそうじや。さもなくて、かような夜中にわらわの訪ねて參つたこと、こうして遺書まで差出されてその樣に落着いていやるわけはない。……家六どの、わらわが、でも、この遺言どおりすると云うたら、何としやる？」
隣室には家六の內弟子たちがいる。いずれは毛利家重職の三男坊あたりであろう。たきの語調は、それを慮つて抑壓されているが、それだけに却つて雙眸を妖しい情感がキラキラと濡らした。
家六は靜かに息を吸込み、少時、呼吸をとめる。決意をひめて不思議な緊張感が眉宇を走つた。
「今一度念のために申すが、さ、その書狀見せられい。」と言つた。
落着いていて、然も冷やかに威嚴がある。
たきは白い眼でじつと睨むように瞶め返したが、ゆるゆる胸から手を離した。家六は遺書を受

が拒めば次第によつては一刀に斬伏せても、遺書を栖にどのような理由でも述べられよう。打明けるからは、肯かねばたきを斬るつもりに違いない。

「も、申しやれ。……わらわも秀元公の側（そく）にあつた女（おなご）じや。滅多なこと口外はせぬ。」

「では申す。谷田部が遺書にある通り、そもじ我らが妻と名乗つて京へ出向いて頂けぬか？」

「……」

「不審は尤も。事を明かさば、それがし禁中に手づるが欲しい。」

「な、何のため兵法者のお前さまが殿上に御用なぞおじやるのじや？」

「それを申さば肯（がえ）んじて頂けるか。」

たきは大きな黒眸を瞠つて、じつと家六を見返し、

「……申しやれ。」

と火のような息を吐いた。家六は言つた。

「四辻大納言卿に御意を得たい。それも、期日を限る。この六月十一日——神今食（じんこじき）の日に京へ参りたいのじや。」

「——」

「そもじ大納言卿が御息女一位ノ局にしたしく仕えておられたと聞く。そもじが夫としてならば、参上致すに左程人を、」

「待つてたもれ。……お前さま、わらわが局にお仕えしたと誰にお聞きなされてじやえ？」

「——」

にお縋りする以外に手段もないので、敢て非禮もかえりみず、かく直々に遺言狀したゝめた次第であつた――あらかた、そんな意味の遺書である。

讀み了ると家六の顔面に仄かだが生色が甦つた。

家六はこう言づた。

「立之進が申し狀いちいち道理と存ずるが、そもじ、まこと某と夫婦になられるか？」

「……」

「當方、別に異存はござらぬぞ。許されるなら、よろこんでそもじがような人を妻に迎えたい――」

「うそじや。お、お前さま、何ぞわらわにかくした深い仔細がおじやろうえ？……申しやれ、それ聞いた上でなら、わらわとて……」

「む？」

神今食

家六は息もつかずヒタとたきの目を見入つた。

「當方の本心、しからばそもじに聞かせてよいか。」

太刀は差していないが脇差がある。たきとの間に遺書が置かれている。本心を打明けて、彼女

してやるかは知らぬ。なれど、もし、もし……殿がためならば包まずと申してたもれ。わらわ、どのようにもお役に立とう――」

たきは秀元の側室になつてから、寝物語にそれとなく相手の心を禁中の有樣へ誘つた。けつして、あからさまにそれを言つてはならず、主上の意圖を若し下手に幕府方へ内通されては一大事だからと、その點くどい程注意を受けて來たから、あくまで宮中での有樣を思い出語りに話すというかたちを通し拔いたのである。

秀元は暗君で無い、一度も、そんなたきに滿足のゆく應答は見せてくれなかつた。むしろ、彼女が谷田部立之進に下されたのは、それとなくたきの意を察し、ていよく逃げをうたれたと彼女白身は思い込んで來たのである。白晝、肌もゆるさぬ名目だけの立之進の前で裸のまゝ徘徊したり、猛婦の如く振舞つたのも云つてみれば私かなそんな秀元への挑戰だつたのだ。

それが、秀元の信望あつい馬木家六が自分を通じて宮中へ入ろうという。今こそ、あのくさぐさの寝物語の效があらわれたかと彼女は思つた。それならいつそ、あからさまに事實を打明けてほしい、どうせ、ことさらな馬木家六宛の遺書などしたゝめて立之進の白刃したのも、上意によつたにきまつている。立之進ほどの武士なら、それぐらいのことはするし、さもなくてあたらひとかどの侍がいわれない死に方などするわけがない、とたきは思つている。

――結果を先きに書くと、たきのこの推察ははずれた。が、家六は滿面に喜色をあふらせ、

「そこまで見ておられたか。何をかくそう、そもじが見込み通り拙者、さるお方が内意によつて禁中に參る。――が、このこと他言ならずと固く申されてあれば、敢て主君秀元公とは申さぬぞ。

「いかにも去る年、月ケ瀬の觀梅にお前さまとは會いもしました。なれどあの日は、局の他に中和門院さまも來ていやつた、土佐ノ局もいやつた。……どうしてわらわだけ、一位ノ局に仕えていたとお分りか？」

「……」

「默つていやるのじやな。わらわの方から申してみよう。――家六どの、お前さま兵法御指南役とは假の名、まことは隱密であろうえ？」

「げつ。」

家六の右手が咄嗟に脇差の柄にかゝつた。

「待ちや、待ちや。……」

たきはのけ反らんばかりに後方に手をつき、打掛をひるがえして片手をあげて制した。

「思いすごさずにいてたも。わらわ、もとを糺さばお前さま同様の身。ひそかに思うことあつて妾も秀元公の側へ來たのじや。」

先帝後水尾天皇が幕府の專横の次第に加わるのを怒らせ給い、ひそかに反徳川の大名をつのろうと遊ばされた、その時、曾て數國を領する雄藩でありながら今は周防、長門の二國のみにとゞまる毛利家へ誼を通じようとなされ、いわばその肉體の使者となつて、たきは毛利家へ入つて來たというのである。

「そ、その言に、よもいつわりはござるまいな？」

「わらわが何でかようなこと嘘いつわりに申そうかえ。……お前さまが誰のため宮中へ入ろうと

たきは睫毛をふるわせ、目をとじて、

「お前さまの篝火に映つた顔が、昨夜のように思えまする。」

武士の妻は原則として、戸外に出るおり、張着を纏う。宮中の下仕えの女が、夏、小袖の上にうちかけて肩を脱ぎ、腰以下に巻きつけた、いわゆる腰巻である。それを自らたきは解きひろげた。二人は夫婦の交りをなした。残酷な交りと云うべきだろうが、翌日、馬木家六は秀元に願い出てひと月餘の休暇を許されると京へ登つた。寛永五年五月はじめのことだ。

神今食なるものが六月十一日――月次の祭と同日に禁中で行われる。神嘉殿にて天照大神を勧請し、天子御みずから忌火の御飯を供えさせ給う儀式である。月次の祭は晝のうちに行われ神今食は夜を以て行わせ給う儀ナリという。忌火とは神に供える物を煮焚きするに火鑽で出した浄い火のこと、その忌火で炊いだのが忌火の御飯である。神事は元來六月一日未明にはじめられ、先ず内膳司が御臺盤一脚を以て『大床子の間』で之を供える。すなわち膳に木箸二雙、酢、鹽、酒、醬の四種を土器に盛つて供え、次に御飯と御菜四種――うちあわび、干鯛、いわし、鯵――それに和布の御汁一杯を供える。用意が出來たところで申奏すると、帝は出座なさつて三口召して入らせ給う。神今食の當日には、このあと神樂あり、参上の公卿ら夜もすがらうたつて還御のほどは御輿の左右に供奉してなお歌い、その聲絶えず千歳を謳うといわれた。

さてこの寛永五年六月十一日神今食のさ中に、秀忠の息女東福門院を御母とした第一皇子高仁親王は、御歳わずか三歳で薨じ給うたのである。

よいな、さるお方じや。——さる方が命によつて……」
「分りました。……」
たきの大きな眸に見る見る透明な液がうるみ上つた。
「わらわ、よろこんでそなたの自由になりまする。……どのようにでも……このからだ、どのようにでもしてたもれ……」
隣室には夜中に訪ね來たたきと師の話が意外に長びくのを不審がつてか、
「先生、われら先にやすませて頂きまするが。」
故意に聲をかけて來た。
家六はその時、
「そうしてくれよ。チトはなしが混入つて參る——」
靜かに返事を與えたから、今では內弟子たちも夫々居間に引揚つて、人の居る氣配はない。
たきは二十八である。すでに女の悅びを秀元に教えられ、しかもなお名のみの妻で十年餘の孤閨をまもつて來た。ひそかに、女の一生を捧げて盡したことが今ようやく效をあらわそうとしてくれている、そのよろこびと、この身はどうせ帝の御爲に捨てたものといつた一種の放埒心から、ここでたきが大膽すぎる態度で家六の行爲を待ちうけたとしても、あながち輕薄とは云えないだろう。
家六はしずかにたきを抱いた。「そもじが綺麗な身でいてくれたとは……それがし、夢のようじや。」

『事なく故なく（事故なく）參りて候』
と奏上すれば、
『よし』
と仰せあり、御ゆかたびらに召し直されて、あとは前述のように『夜もすがら人々うたう』
これが神今食の式次第のあらましだ。武家の加わる餘地はなく、官位を賜つている大名など、くらいに從つて參加は出來ても、戰國に狎れた荒武者どもには悠長すぎて參加の氣はもともとなかつた。たゞ、烏丸中納言に娘萬姬を嫁がせた三齋・細川忠興だけは、たまたま京に居て之に加わつたぐらいである。所司代隷下の武士たちは却つて役目をよいことに、此の時ばかりは飛香舍——茶壺ともいい、東福門院の在所であつた——に番して、儀式に參ぜぬ下仕えの女官などをからかつたり、儲君高仁親王の泣聲が洩れると、
「何をされておるかい。若君さま、乳を所望じやぞ。」
乳母にことさら近づいて几帳、御厨子の餝や灯に透く壁代（壁に代用する帳）の綺を見て觸つたりした。御歳三歳と書いたが、今様の滿で數えればわずか一年七カ月の儲君である。
帝の方は、神今食の儀式の間じゆう、龍顏つねと異つて一しお蒼白に拜されたという。併し、儀式の緊張のゆえであろうと公卿の誰一人、恐るべき深謀の成果に全知覺を集中なされておられるとは知る由もなかつた。
丁度、くだ物をおえられ、采女が本柏で注ぎ奉る黑酒を御口に運ぼうとなされた時である。神殿の東面に陣していた左近の司のあたりで、

神事のくわしい次第は茲では略すが、あらましだけを『建武年中行事』からうつしてみると、「戌ノ刻に行幸あり、帝まず大忌の御湯をめされる。ついで御輿を南階によせ、大納言、剣璽の役をつとめる。御輿に召される。月花門陰明門などを出て、中和門にいたる。御輿がすぎさせ給うと供奉の公卿ら従い、御輿は神嘉殿の南向きの壇によせられる。御輿より下御あり、神嘉殿の庇から入らせ給う。そうして大床子の御座にお著きになる。御座は御しらべりである。四すみに白木のとうろを白木の机におく。關白の座をもうける。剣璽を大床子のまえにおく。更めて御湯をめされる。山蔭中納言の子孫なる藏人が御湯のことをつこうまつる。さて御身に、御ゆかたびら召して、ついで脱ぎすて給い、うるわしい齋服に召し替えられ、采女に時を尋ねられている間に、内侍が神殿に參つて寢具を供する。これよりさき、左右近の司は殿の東西に陣を引き、上卿以下は神殿の前につらなり立つと、左右近の中將おのおの一人すゝみ出て靴をぬぎ、弓箭をといて南戸の左右に帳をかゝげる。又、さか枕、八重疊などを參議辨少納言などが次第に供す。さらに掃部頭が參つて神座を敷く。南枕に敷く。先ず一丈二尺のたゝみ、その上に六尺のたゝみ四帖、枕の方の二帖はうら有り、その上に九尺の疊七帖、その上に八重だたみをしく。九尺のうちの一帖はいさゝか東の方に敷いて、塵拂いのはこを置く。さか枕は八重だたみの下にしく。そこへ内侍が參つて御衾を八重だたみの上に奉る。御くし御扇はそばに置く。御くつは御あとにおく。

さて内侍がしりぞいて、神殿に入御あり、御はん、なま物、から物、くだ物を召されるのである。それから粥を召され、配膳の采女が白酒、黒酒を本槲で注ぎ參らせる。御手水は事はじまらぬ前と、事果ててと二度。それから些か祈念の御事あつて、采女が、

湖水渡り

後水尾天皇が密かに柳生宗矩（從五位下但馬守に敍せられたのは寛永六年三月で、この頃はまだ只の兵法者又右衞門宗矩だつた）の獻上した連名狀から選ばれた他の一人は、佐々木左門であつた。

左門の祖先は明智光春の家來で、佐々木甚兵衞隆之といい、後年、逆臣の汚名を蒙つた明智光秀の幕下に參じて菊池千本槍を把つて藩隨一と稱された上手である。

明智光春は戰國時代に知られた武將で、光秀に仕えてその女を娶り、佐馬助と號したが、一説に美濃の塗師の子で容色がすぐれていたので光秀の寵童となつたという。併し智勇ともに秀でていたから後に聟にえらばれた。天性律義で、光秀に對してひたすら忠勤を勵み、小姓から拔擢せられて士大將となつた。

常々、白練の羽織に墨繪で雲龍を狩野永德に描かせたのを具足の上から着用し、二の谷と呼ぶ名物の冑を著け、明智勢の先手をつとめてその功名かくれもなかつた武人である。天正九年丹波福知山の城主となつた。（その頃、丹波天寧寺に與えた諸色免許狀に明智彌平次秀滿と署してあり、同年十二月四日附の年貢米請取狀には同じく光滿と刻した黑印が捺してあるから、もとは光滿といつたのだろう。併し明智氏と姻戚關係のあつた細川氏の家記には左馬助光春と見えるか

「あ、あれは。」

微んだ驚愕の聲が洩れた。同時に一陣の風が隔殿の塗籠を掠めてすーつと北へ趨つたのである。采女は色を失つて愕然と跼蹐した。どうしてだか帝の手から土器がすべり落ちていたのだ。

「……」

聲にならぬ唸りを玉體の咽喉あたりに聞き奉つたようだつたと、後刻、聲をひそめて囁いた少納言もいる。

おそるおそる、ころがり落ちた土器を采女は取り上げて再び主上に捧げ參らせた。受取り給うその御指がおこりのように震える畏れ多さに采女も本榊をうまく保ちきれなかつたという。

飛香舍から、狂氣の如き喚きを發して武士の兩三名が式場に轉び込んで來たのはそれからほんの一時後だつた。

奇怪というも懼れ多く說明の詞も知らぬ有樣であつたと、乳母の悲鳴に驅けつけて見た最初の武士は、所司代板倉周防守重宗に申し立てた。くだんの上が見たのは旣に、ほんの寸刻前、泣かれた御方の死相だつたのである。

禁裏が一夜にして不安と悲嘆と恐怖の坩堝と化したことは多言を用いる迄もあるまい。が、儲君の口から暗黑色の血を吹かせたのが、果して馬木家六か或いは他の何者かは、帝にもお分りにならなかつた。柳生門の武士はまだ三名、同じように此の夜の禁裏に忍び入つていたからである。

波多野の兵は怒つて光秀の母を斬つた。光秀が信長を恨んだのはこの時以來である。

本能寺に信長を斃したあと、光秀の先ずしたことは毛利氏との盟約である。それから堺に遊覧中の家康の虛を衝こうとしたが、ともに失敗に終つた。家康が辛うじてこの明智勢から難をのがれ得たのは伊賀の忍者の功に負うところ多い。さて光秀は三日、近江に入つて同國を定め、五日には光春をして安土城を收めさせたが九日には軍を京に返し、銀子五百枚を禁裏に獻上した。更に百枚を五山に、百枚を大德寺に喜捨し、北野、ぎおん、御靈の諸社へも燈籠料を、洛外の諸寺院へは祠堂金を寄進した。

その他、本能寺戰死者の菩提を弔わせたり、洛中の土地税を免除し地下人に金錢を與えたり、所司代に人を置くなど、もつぱら京都の治安、人心の收攬につとめたが、一方において女婿細川忠興ならびに忠興の父幽齋、大和郡山の城主筒井順慶を味方に誘つた。しかし細川父子はこれを拒絕、剃髮して信長への哀悼の意を表わし、順慶また形勢を觀望して動かなかつた。光秀の計畫は漸く失敗に歸した。

そこへ秀吉の、中國からの反轉である。

もともと秀吉は毛利を攻めて備中に陣したとき、ひそかに毛利家との和平を謀つて手段を運し、西國の米を價高く買わせたから、城米を出して賣る者多く、信長の死で毛利家と秀吉は手切れになるところを、兵粮の豐かでないため毛利方は講和を結んだのである。秀吉は兵をかえして山城國山崎において明智勢と決戰したが、たゞかいわずか二時間で光秀は大敗し、勝龍寺にはいつた。その夜遁れて近江に向う途中、小栗栖に於て土民のために殺された。

ら、ここでは光春としておく。）

天正十年六月朔日（ついたち）に明智光秀は丹波龜山城に光春以下の重臣を集めて本能寺襲撃の企てを洩らした。その時齋藤利三は時機が惡いと諫止したが、光春は、既に口外なされた上は世に洩れて臍（ほぞ）を噛むとも詮ないことゆえ、即座に襲撃なされよと主張した。遂に光秀は意を決し、翌二日、光春とともに本能寺を襲つて織田信長を斃したのである。

その時光春は本能寺に陣して信長の首級を索めたのち、光秀とともに近江に入つて、信長の居城安土城を收めた。しかるに秀吉三萬餘の大軍を率いて東上するとの報に接し、二千の小兵を以て安土城を守るは詮なきを悟り、光秀と終（おわり）を倶にせんと馳せ上つたが、途すがら、光秀の敗死を聞いたので、軍を返して光秀の本城坂本に入ろうとし琵琶湖を渡つたのが世に謂う光春の湖水渡りである。同月十四日、見事坂本城に入つて光秀の妻子を殺し、その身も自殺した。時に光春四十六歳である。

一方、明智光秀は美濃の土岐氏の支族で、父を玄蕃頭光綱といつた。光秀は十兵衛と稱し、初め齋藤道三に屬したが、道三がその子義龍に弑されると、難を越前に避け、諸國を遍歴すること六年。再び越前に戻つて朝倉氏に仕え、後また朝倉家を去つて細川幽齋に屬したが、永祿九年、あらためて織田信長に仕えたのである。信長の上洛に當つては各地に轉戰して功あり、近江滋賀郡十萬石を與えられた。のち、丹波地方の經略を信長に命ぜられ、龜山城に據つて一色、波多野の諸氏を滅ぼしたが、そのまま波多野を八上城に攻めたおりに利あらず、一たん母を人質として波多野と和睦した。のち波多野兄弟を捕えて信長に送つた。信長は兄弟を磔にして殺したので、

雙方互角の大力である。彌右衛門は遂に組み勝つて和田を取つて抑え、首を掻こうとした處に和田の郎黨木村小太郎なる者が馳せて來て上なる彌右衛門の腋下をしたゝかに槍で突き抜いた。彌右衛門は穂先を胸に通された儘なおも和田の首を掻こうとして力及ばず、和田に撥ね返されて夥しく血を流して突伏せた。すかさず木村は彌右衛門の素首を掻き落し主を助けて引きあげる處へ、彌右衛門の家來辻七右衛門が駈けつけて木村小太郎を討取り、その身も遂に討死した。時に彌右衛門二十八歳、家來辻は四十一歳という。

左門はこの彌右衛門の孫である。

本能寺の變のとき、左門の父は當時七歳で國許福知山にいた。名を彌三郎という。のちに諸國を流浪して播州平福村に居住し、百姓となつたが、まことは馬の草鞋を作つて生活していたそうである。時に刀術の指南を乞う土民があると、あたりに在る薪を拾い取つて懇ろに指導した。併し自らは武術を役立てて募兵に應ずることはなかつた。或いはどこか不具の身だつた爲かも知れない。當時は戰國のたゞ中で、百姓の中にも意を戰陣に馳せ、ひとかどの士卒になろうと野望を燃やす者が間々いた。刀術そのものは、まだ技の大へん大雜把な、要するに戰場での組討や首の掻き方など教えた程度かと思われる。

左門はこの父の許で百姓の倅として育つたので、馬木家六ほど、混み入つた咄は残つていない。左門が柳生宗矩に弟子入りしたのは澤庵和尚の斡旋に依つた。(澤庵のことは別に書く。)平福村に一寺あり、或る日、佐用城主池田右近大夫輝興の家臣で某の中間がこの寺に來て水を所望した。

時に五十五歳。

光秀は下剋上の時代ながら、實力なく私憤で信長を暗殺したから人望、地に墜ち、あえない最期を遂げ、剰え逆臣の汚名をのこす結果になつたが、元來、武將としての素養は相當にあつた人で、築城の名手として知られ、城攻めの兵法、劍術、槍、薙刀はもとより、鐵砲を取つても天下一の風評あつた人物である。武道に限らず、茶湯、和歌、連歌の道にも通じていた。

左門の祖先佐々木甚兵衛は、此の光秀にのぞまれて帷幄に參じたほどの豪傑である。

甚兵衛の子が彌右衛門春尚で、主君光春の湖水渡りに殿して討死した。ために光春は無事に坂本へ入り得たのであるという。

この時の光春勢は總勢二千。粟津ケ原から北へ大津を指して行く所に秀吉の先陣堀秀政の軍と出會つた。光春方は小勢だから忽ちに打破られ、本道は敵に塞がれた。そこで光春以下湖水に馬を打ち入れて游がせたから秀政の軍兵は汀に居並んで「溺れん有樣を見よ。」と笑いあつた。光春は例の白練に雲龍を描いた羽織に二の谷の冑を著て、大鹿毛と名づける馬で難なく唐崎濱へ乗上げた。永年坂本に居て、大津より唐崎への遠淺を了知していたのである。

次々と馬體を濡れ光らせた騎馬武者が汀にあがるのを見た堀秀政の手勢は、湖畔添いに北へ移動して光春勢を追撃した。それを一手に引受けたのが佐々木彌右衛門である。

「との、殿は坂本へ落ちられませい。拙者これにて、冥府への御供つかまつる。」

そう大音に喚いて光春を引かせると、自ら百餘人の魁首となつて敵七人を斬り落し、堀方の將和田伊賀守惟之と引組んだ。

「おぬしこの寺の弟子でもないに、何で井戸の深さを知つておるな。」

問いかけると、

「それぐらい屁の河童じや。わしは和尚さんに叱られてもこの寺には、蟬やとんぼ採りに来るでの。井戸の水、和尚さんが汲んどるのは何度も見るで、分る。」

「どうして分るな？」

五十二尺といえばずい分深い井戸なので、何を以て測つたか澤庵には不審だつたのである。

少年はこう答えた。住持の綱を手繰る回数が毎日ほとんど變ることがない。兩の手を交互に動かして釣瓶を上げるが、その手の幅で回數を掛算すれば深さはおのずから分る――。

倫二人は顏を見合つた。この少年が、後の左門である。

澤庵は細川幽齋とは大へん昵懇の間柄で、忠興の妻が明智光秀の女であることは無論知つている。そんな事情もあり、ひとかどの武士の裔が馬の草鞋をひさいでいるのを哀れんで少年の身柄をあずかつたのが、左門の宗矩に入門する機縁であつた。馬木家六の場合同様、宗矩は左門も柳生村の松吟庵に託した。

從つて家六が月ケ瀬觀梅に警固の任にあたつた時左門も供奉した一人である。――が、このことで取分けて挿話はない。どちらかといえば、眉目秀麗の家六とちがい、左門は色の淺黒い地味な男だつた。腕前は家六と立合つていずれが勝つかは眞劍を揮わねば分らぬだろう。ただ、家六には明身の太刀の悟得があり、左門には『一葉浮水の構え』がある。

住持が、

「存分に其處な井戸を汲まつしやれ。」

と言うと、中間は早速つるべを手繰つたが、豫想以上に深く、手繰れども手繰れどもつるべは上らない。

「一體、この井戸の深さは何ぼあるんじやい。」

かんしやくまぎれに中間がうそぶいた。

するとスカさず、

「五十二尺じや。分らんのかい。」

庭から云つた者がある。見ると、十歳ぐらいの少年である。

寺に偶々来あわせていた澤庵がこれを聞いて、じつと少年を見ていてから、

「あの小倅は近在の者でござるか。」

住持に尋ねた。

「左樣で。――コレ、また柿など盗もうとて參つておるんであろう。ならんならん、早よいね（歸れ）。」

と住持は叱つた。

「ふうーん。ケチな寺じやのう。」

惡まれ口をたゝいたが素直に立去ろうとする。

何を思つたか澤庵が縁側から呼びとめて、

蓬庵は少時考えて、今度は眞顔で、
「ならば試してみよ。但し、……よいか、抜けばそちは負くるぞ。」

一葉浮水の構え

濱田龍右衛門には蓬庵の云う意味がよく分らない。
「それがし負けると申されますか？」
下から、じいつと藩主をにらみあげた。
「おゝ負くるぞ。それを覺悟なら立合うてみるか？」
「左様に申されましては、いよいよ以て、佐々木どのが手のうち拜見致さいでは武士の一分相立ち申さん。――殿、本日即刻お庭にて眞劍試合お許しをねがいまする。」
龍右衛門はむきになると眇視をする癖があつた。當人は意氣込んでいるつもりだろうが、はた目にはそれが可笑しさを添え一向に凄絕の感が湧かない。
蓬庵は相變らずニヤニヤ含み笑つて、
「伊之助。」
側小姓を振向くと、
「左門をこれへ呼べい。」

佐々木左門が蜂須賀家に召抱えられたのは寛永三年、左門二十六歳の時で、祿高二百石、徒士組である。柳生武藝帳に列記された面々のうち兵法指南役でなかつたのはこの左門一人である。

一葉浮水の構えに就いてはこんな話がある――。

左門が蜂須賀蓬庵に仕えて間もなくの頃、藩中きつての田宮流の達者濱田龍右衛門から技くらべを申込まれたことがあつた。

もともと、藩臣蜂須賀蓬庵は山崎の合戰に明智光秀を擊破して功あり、播州佐用郡に采地三千石を與えられたこともある。そんな因緣で、却つて宗矩の推擧する高弟のうちから、左門を召抱えたが、遉がに家中の忿懣を容れて藩の兵法師範役にはしなかつたのである。左門は別に不服の色もなく、たゞの徒士組で日々出仕していた。が、天下の柳生新陰流にて奥傳免許の使い手というのがかくれもなく、濱田龍右衛門の挑戰を受けたのである。

龍右衛門は先ず蓬庵に許しを願い出てこう言つた。

「新陰流にも居合拔きこれ有りと兼々聞き及びますれど拙者いまだ手合せの機を得ませぬ。左門どのは柳生宗矩どのが高足との噂でござれば、是非とも立合いの儀お赦しを願いまする。」

龍右衛門この時三十二歳であつた。田宮流は拔刀術だから技を競うといつても眞劍を用いる。

蓬庵はしげしげ其の顏を見入つて、

「龍右衛門、そちには勝てぬ相手じや。無用にせい。」そう言つてニヤニヤ笑つた。

「これは異なお言葉。そうと聞いては猶更がまんがなり申さん。」

蜂須賀武士の意地にかけても勝つてみせるという。

ずい、と詰め寄つて、「先程より言上致したるとおり柳生兵法（ひょうほう）には居合の技ありと聞き及びまする。されば他流と立合うて武技を鍛えるは武士たるものの役目。然るを、あたら佐々木どのが謙虚を眞（ま）にお受けなされて、」

「分つたぞ。」

皆まで言わさず、

「左門。あのように申しておる。辭退は尤もじやが、蜂須賀の荒武者どもは思い込んだらあとへはひかぬでな。差構いない、存分に業（わざ）見せい。」

と言つた。

上命とあれば已むを得ない、こうして左門は龍右衛門との試合をすることになつたが、

「コノ比（コロ）ハ、モツパラ試闘ハヤリテ、能（コキ）武士ノムダ死モ多カリケレバ、國主領主モ猥リニ試闘ナド致スコト禁ゼラレシニ、此ノ時バカリハ如何ナル御思念ヤアリケン御許シアリ」と、當日の模様を述べた一書に書かれている。

場所は龍右衛門の希望どおり城中の庭園で、雙方まずはるかな主君の座に向つて一禮すると左いにさつと左右に別れ、充分の間合をとつて相（あい）對した。居合術は鞘のうちが勝負である。龍右衛門の太刀が鞘走れば生死いずれにもせよ、勝負はつく。

多分、左門は龍右衛門に拔かせようとするだろう、一度拔討ちを外せば、左門が勝つ。逆に拔かせようとするその仕懸けがはずされれば龍右衛門に斬られる。柳生新陰に居合のテはあるにせよ、ないにせよ、拔刀術そのもので龍右衛門にまさろうとは誰の目にも思えない。蓬庵は無論だ

龍右衛門はもう許しを得たつもりだ。忽ちに、容易ならぬ決意を見せ、
「忝うござります。」
平伏するとパッと支度に立上る。
「まだ分らぬぞ。」
蜂須賀蓬庵この時六十九歳である。父小六とともに秀吉に屬して以來戰功あり、徳川の天下になつてからは阿波十七萬三千石を安堵して慶長五年に致仕し、蓬庵と號したが、嫡男至鎭が三十五歳で父に先立つたので再び藩政をとつた。正室は豐臣の家臣生駒八右衛門家長の女――すなわち柳生松吟庵の妻には從姉妹にあたる――。
左門が側小姓の案内で君前に伺候すると、
「左門、これなる濱田、そちに立合いを所望しておる。相手になるか？」
蓬庵の老いの面は龍右衛門に對するようには笑つていない。
即座に左門は固辭した。
「なかなか以て、それがし如き弱輩の及ぶところではござりませねば。」
と言つた。
心憎そうに、蓬庵がウムウムとうなずくと、
「これはしたり、殿。」
龍右衛門は色を變えて、
「とのには我らが田宮流をおからかい召されまするや。」

が打てば木刀を握る手が痺(しび)れて思わず手離す――それが、水平にヒタと落ちるという。

この奥義が浮舟である。一般に、浮舟を中段の構えとのみ思つている人が多いが、物の表を見て裏のあるのを知らぬにひとしい。が、何にしても、太刀を叩き落せば勝敗は決したようなものであろう。

ところで。

太刀の叩き落されたところから次の技(わざ)に入る恐るべき奥旨(おうし)を編み出した者がある。柳生石舟齋である。石舟齋は疋田文五郎に就いて新陰流を修めていた頃、何度立向つても一瞬木刀を叩き落されて勝負にならなかつた。そこで苦心のすえに一(いつ)の太刀を按じたのが『一葉浮水の構え』という。

すなわち左門が小脇差を捨てたのは、いわば浮舟の太刀のおわり、――一葉浮水の構えはこのおわつたところから始まる。蓬庵以下、見る者はそれを知らなかつた。當の龍右衛門が知る筈はない。龍右衛門は、田宮流居合の極意を揮(ふる)うに必要な彼我の距離を測るのに妙を得ていたが、左門は早くもそれを喝破して間合の呼吸を亂すため、脇差を抛げて來たと見たのである。

一定の歩幅でじりじりにじり寄つていた龍右衛門が其の場に佇立し、瞳孔を大きくしてハツタと左門を睨み据えた。その顔面に玉のような汗が吹き出した。

左門は片膝つきで少しずつ斜めに龍右衛門へ詰寄つてゆく。まるで廻り舞臺に乘せられた人のような圓滑な移動である。

兩者の距離が迫つた。

が、この場に居合わせた他の家臣も一應の心得はあつた。そういう者が見て共通の判斷を下すことには案外誤りはないのである。だから若し左門が勝つたら、いかなる業にしろ、ともかく龍右衛門の抜討ちは躱してからであろう。云つてみれば兩者の勝敗は龍右衛門の初太刀を躱すかかわさぬか、その一瞬に總てがかけられていると見てよい。――一同固唾をのんで見戍つた。次第に兩者の間合がせまつた。

龍右衛門は刀のツカに手をかけた儘でいる。一方の手は鍔口に添えている。居合抜きはこの兩の手の呼吸で一瞬の業を仕懸ける。左門の方は自然の歩行の身構えで、少しずつ間合をせばめていつた。そうしながら何時とはなく靜かに刀へ手をかけたが、この時見ていた者は齊しく「あつ。」と小さな叫びを發した。

左門の手がかゝつたのは小脇差の方である。左門は小さな刀を抜くと、何を思つたか龍右衛門との間へ靜かに抛り捨てたのである。

新陰流の太刀捌きに『浮舟』というのがある。終始、中段につけて敵と對し、相手の撃ち込んでくるのをハズに躱して丁と白刃を叩き落す。中段ゆえこちらの籠手に隙があり、敵は籠手を狙つてくるが、當然、敵の太刀も水平に延びる。その延びた刹那を打つのである。柳生十兵衛や宗矩などは、この浮舟――中段の構えを脇から見ると、恰も太刀が水平に舟の浮く如き槪あり、よつて浮舟と名づく――で相手の稽古太刀を叩くと、床へ吸いつく如く落ちたそうだ。ガラガラと床板に轉がつては落ちない。木刀を叩き落して響きの立つのはまだ技の未熟の證據で、熟練の士

「秋には戻つて參れよ。」

と念をおして許した。左門は數日のうちに旅裝を纏めて德島を發足した。而(そう)して七月の暑いさなかに國許へ戻つたが、彼が江戸表にいたものなら、當然、和田藏御門前の蜂須賀家上屋敷に姿を見せてよい筈であるのに、一度も顏を出したことがなかつたのを、役替りで國許へ歸つた者が訝つていたという。

――以上が左門の閱歷である。

次は加州前田家の兵法師範・笠間又兵衞――。

笠間の祖先は、大和笠間鄕の古族の裔で、又兵衞の祖父を十左衞門定輔といつた。定輔は郡山城主筒井伊賀守の家來で、頗る豪氣を以て鳴つた人物という。

筒井伊賀守にはひとつの奇癖があつた。おのれの愛妾に姉妹があれば、之を親類緣者に與えようという習癖である。緣者の間はよいのだが、遂にはおのれの長男にまで及ぼそうとしたから茲に一つの事件がおこつた。

そもそも、伊賀守は五十四萬石を領して松永彈正と威をきそつた有名な筒井順慶の養子で、正室は織田信長の女である。この正室との間に三男あり、長男を右近、次を三四郎、季(すえ)を若狹介という。慶長十二年、伊賀守五十六歳の時に日頃親交のあつた大坂方の大野治長から、一人の美女を送られた。名を於大留(おてる)といつたが、伊賀守は十八歳のこの美少女をいたく可愛がつて、やがて一子を儲けると、正腹に三男あるにも關らず、この幼兒をひそかに世嗣とすることを公言しはじめた。

左門の手が腰の刀にかゝる、と見る間に、
「御免。」
ぱつと龍右衛門の目の前で虹が走つた。人々は目を疑つた。美事に太刀を抜いていたのは龍右衛門の方であるのに、
「参つた……」
と、その龍右衛門が叫んだのだ。フラフラと後退して、彼は大地に尻餅をついた。「左門ドノ遣(ツカ)ワレシハ腰ノ太刀ニ非ズ。手ズカラ地ニ抛ラレシ小サ刀也。小サ刀ヲ掠メ取タル業(ワザ)、龍右衛門ドノニ勝(マサ)リタル歟(カ)。ゲニ恐ロシノ太刀サバキヨト後日、龍右衛門ドノ近親ニ語ラレシトイウ、吾人、イマダカカル輕捷ノ業ヲ見ザレバ、何ノ流ト呼ブベキカヲ知ラズ。」
これが一葉浮水の構えについて、佐々木左門に纏わる挿話である。左門は下から龍右衛門の臑(すね)を拂い上げたので、以後濱田龍右衛門は眇(すがめ)の上に跛となり、徳島藩の名物男になつた。尚この一件で蜂須賀家の者たちは多分に左門を敬遠したから、爾後、左門の武藝の程を窺い知る機會はなかつたという。
左門はそれから二月餘り、同じ徒士組で奉公して寛永五年三月に蓬庵へ一度休暇を願い出た。毎年五月初旬から秋の終りにかけて、江戸八重洲河岸の柳生家道場で總稽古が行われる。久しく稽古に遠ざかつているから武技を練り直して來たいというのである。
蓬庵はしばらく默つて左門の淺黑く引緊つた顔を見遣つていたが、

或る日、登城にあたつて、妻子を居間に呼ぶと十左衛門はこう言つた。

「そちらも知るがように、我らは當家に聞えた武勇の家柄じや。併し如何に武勇名譽とて、義が立たねば詮もない。次第によつては、今日、やにこき殿へ諫言致し腹掻き切るやも知れん。されば覺悟をしておけよ。」

そう言つて家を出、登城すると早速に目通りを願い出た。

伊賀守は勘づいたらしく「所用あれば他日に致せ。」という。十左衛門は構わず奥に進んで、表との境に當る筋違い廊下で遂に伊賀守を捉え、

「殿、申上げたき儀がござる。」

袂を摑んで諫言しはじめた。

伊賀守は耳をかさず、

「おのれ不屆の言辭を吐くは許さんぞ。退れ。」

と大喝した。

十左衛門は端然と廊下に坐して尙も言を斂(おさ)めない。

堪忍袋をきつた伊賀守は「默れ。」と叫ぶと遂に太刀を揮つて手討ちにしようとしたが、老年のため仕損じてわずかに肩口を斬つた。

十左衛門はすると、脇差を次へ投げすてて、

「これ程に申上げてもお分りがねがえぬとは情無い。殿、この十左衛門を討とうとなら、ずんと睾丸(たま)を下げねばかない申さんぞ。さ、ずんと下げられい。」

それはよいのだが、こゝに例の奇癖を發揮し、於天留の姉で於市なる娘を嫡男右近の側室にと言い出したのである。

右近には既に正室がある。右近はそれを理由にさり氣なく辭退をした。實は、右の幼兒（國松丸）が世嗣となるなら、於天留は右近にとつても母と呼ぶべき人で、その姉なら伯母に當るわけである。如何になんでも伯母甥に交合のことあるは前代未聞のことなれば、というのが拒絶の理由であつた。併しそれを表立てては父の不道をなじることになり、ただ正室のあるのを云つて辭退したのである。

伊賀守は併しその内意を知つて怒つた。いかにも國松丸の生母とはいえ別腹なれば遠慮あるべからず、むしろ、於天留を母同然というは國松丸が世嗣となるのを嫉む心からであろう――そう云つて、重ねて姉を妾に迎えることを迫り、若し拒むに於ては、

「親の命に背きおのが理を立てるは親をないがしろにする處、以ての外の不孝である。」

と家來に言わしめた。

それでも右近は拒んだ。ひそかに家來に向つて、

「かく迄、父が仰せに背くからは屹度きびしき沙汰あるは必定なり。我すでに肚をきめたり。」

と言つた。

家來は伊賀守にこれを報じたから伊賀守は烈火の如く怒り、遂に右近を廢嫡して一室に幽閉したのである。

ところで、この處置に肚を据えかねたのが笠間十左衛門である。

ておき、門大夫と彼とが仕合の時は毎度かの弟子を澁紙の内へ招き寄せて特別の指南をした。

勝つているうちはそれでも門大夫は我慢をしたが、次第に、三本のうち一本は取られるようになる。時には二本美事に先を打たれることになる。遂に我慢しかねて、

「我ら眞實執心して日夜稽古致すは師もごぞんじでござろう。しかるを彼の者のみ別格の御指南とは心外に存ずる。我らが父は、師も存じ寄りの如く至つて一徹者にござる。この上は是非もござらぬ。直々先生との試合を所望いたす。」

と申出た。

「その方、弟子の分際でわしに勝とうとか？」

「されば只今も申すとおり、是非もなき次第。さ、お立合い下されい。」

門大夫まだ二十一歳の血氣盛りの頃だつた。

膂力衆にすぐれて、とりわけ拍子能く遣つたという。

そもそも門大夫が西郷に弟子入りするとき、かねがね西郷は門大夫の父に向つて「御子息門大夫どのは懸打ちの才能き仁にござれば、我らが道場にて修業致されなば一段と上達なされましょう。」と言つていた。それで父の十左衛門が弟子入りをすゝめたところ、

「西郷どのの如きの指南は受くるに及び申さず。たとい今直ぐ仕合申し候ても某勝つて御覧に入れまする。」

「屹度左様か？」

十左衛門は駄目をおして、

そう言つて、この時傍らにあつた家臣の一人が、伊賀守の命で十左衛門の背後へ廻らうとすると、

「たわけ。」

振向いて白眼で睨みつけ、その間に伊賀守がこの太刀を振りかざすのへ、

「お静かに致されい。」

十左衛門は向き直つて項垂れた　伊賀守は一の太刀、二の太刀と斬りつけた　遂に十左衛門は其の場で息が絶えた。

笠間又兵衛はこの十左衛門の末つ子の伜であつた。

袂の裏

又兵衛は祖父のお手討ち後、郡山を逐われた父とともに一時攝津の緣故に身を寄せたが、こゝで父の門大夫は淺野幸長に取立てられ、大番組知行百五十石で召抱えられることになつた。門大夫には、いろいろ面白い逸話がある――。まだ郡山藩にいた頃、門大夫は幼少から父に似て槍合せ、太刀打ちの術を好んで西鄕市郎右衛門を師として劍術を學んだが、その頃、西鄕には贔屓の弟子があり、數年來稽古を勵んだが門大夫に及ばない。

これを見た師の西鄕は、この弟子に別格の勝利を悅ばそうと、稽古場の傍らに澁紙で園いをし

と氣勢を發し、片膝つきに相手の臑を拂つた。いつの間にか西郷はその上を飛越え門大夫のうしろに立つたが、こゝで何を思つたかガラリと袋竹刀を打捨て、
「所用じや所用じや。」
急に用を思い出した態に見せかけて一散に道場を走り出た。
門大夫は、
「してやられたり。我負けたり。」
と無念げに其處で地團駄をふんだという。
後日、門弟の一人が西郷に向つて、どうしてあのように一散に駈け出されたのかと問うと、
「さればよ、我は以前戸さしを踏まえ門大夫を飛越えて勝ちを制したるに、今また八幟の片隅に我を追い込み全く同じ手口にて懸り來るは、彼に新工夫の術ある證據なり。よし左様の工夫なくとも、曾て敗れた手口を用いるその膽の太さはげに百錬の技にまさる。迚も及ぶべくもあらねば北るが勝ちと祭したり。」
と答えたという。
――又。
西郷に義絶ののち、門大夫は更めて中條流木村彦左衛門の門弟に連なつて日夜稽古にはげんだが、その頃、同門の丹羽七郎兵衛なる者とは互角であつた。ところが一日、丹羽は師の許に來て、大いに不興なる顔色で、
「先生は如何なる大事を門大夫に相傳なされてござる？」

「しからば若し、その方負けなば入門致すのじやぞ。」
と門大夫を西郷の道場へ試合に遣らせた。
門大夫は意氣込んで西郷の道場に赴くと、
「それがし負け候わば弟子になるべし。」
云つて袋竹刀を摑んで立上る。西郷も立つ。
それより勝負に及んだところ、門大夫は西郷を八疊敷きの隅の方へ追込んで片膝突きに身を臥せて裾を拂い上げた。いつの間にか西郷はうしろの戸さしを踏まえ門大夫の上を飛越えて後から羽交締めに門大夫を抱き、
「いかに。」
と言つた。その戸さしをふまえ飛越えた早業は人間わざとは見えなかつたと、高岡彌五右衛門なる者が見て歸つて十左衛門に語つた。
むろん、門大夫は其の場で畏怖して西郷に入門した——その師と弟子である。
「門大夫、存分に參れ。」
「おゝ、いかいでか。」
門大夫は氣合鋭く詰めよつて何時か八疊敷きの片隅へ西郷を追込んだ。折から盛夏のことで門大夫の顔面からは玉の如き汗が流れる。西郷はこれに反して冷靜そのものの如く見えたが、そのうち、以前と全く同樣に門大夫は、
「やつ。」

り、大音に、
「我等は左衛門大夫どの家來にて、今朝より供奉いたし退屈なるまゝ槍の型を遣い候ところ、はからずも御壁を突抜き候、何とぞ御容赦ねがいたい。」
と申入れた。
すると門大夫が直接姿を見せて、
「御念の入つたることとなり。且つは御心掛あつぱれ。」
と酒三升を贈り、「日長の慰めになされい。」と家來に持たせた。元來、門大夫は某(なにがし)の世話で淺野家に仕えた時、家人が某への御禮に、一席、宴を張つてもてなしたらとすゝめたが、「我は幸長公のお目鑑(がね)にて召抱えられたり、人の世話で大番の役目勤むべきや。」と頑として肯かず、後日、大番組の相役一同とともにかの世話人も屋敷に招待したが、二階の上すみの所にわずかに疊を敷き、其の外はむしろばかりだつた。そこへ自分着領の具足をはじめ、番具足、陣鍋など殘らず取揃えて並べ、さて一同に向つて、
「このたび拙者儀、大番組にて新規に召抱えられたり、お役目の品かくの如く取揃え申し候えど、不足の物あらば何卒お指圖下されい。」
と言つた。一同その物固さに呆れたが、
「充分と存じ候。」
と一人が答えると、はじめて、
「然らば盃の眞似致し度い。」

と詰寄る。近頃は門大夫の太刀の回り早く却々我らの及ばぬは格別の御傳授のゆえであろうというのである。

するとすると木村は、

「おぬしが疑い至極なり。されどこれを見よ。」

と言つて諸肌ぬぎになり、「我ら頃日、稽古の有様かくの如し。」と披露した。丹羽が覗き込むと肩先から二の腕にかけて、當りしないの跡が黒くあざになつてのこつていたという。

又。

淺野幸長に仕えてから、門大夫は當番の折は常に搏飯を四ツ袂にして出仕した。或人が何故かと問うと、二ツは萬一の節君にすゝめるなり、二ツは自分のたしなみなりと答えた。御用召しのときは何時もわらじ一足に腰兵粮を持參して刀の側へ置く。何故かと尋ねる人があると、「御用の程計り難く、他國御用筋仰せつけられ候ことも知れざる故なり。」と答えたという。

又こんな咄がある。

或る時、福島左衛門正則が淺野幸長の許へ來て、供奉した家來衆が門大夫の隣りの長屋で待つていたが、退屈の餘り、竹をふるつて戯れるうち、圖らずも門大夫方との壁に突入れた。

これを見た淺野家の家士が、

「隣家は至つてむつかしき人なれば挨拶致されるがよろしくはござらぬか。」と耳打ちする。

聞いて、福島の家來池田某は、才覺者だつたから「わしにまかせておけ。」と門大夫の玄關に到

その時門大夫は病床にあり、使者の役は實は門大夫に仰せつけられたが、自分に代つて倅又兵衛を差遣わし下されたくと願い出て之をゆるされたのである。

又兵衛が加州家へ出立するとき、門大夫は家來に兩脇を支えられて病床に起き直ると、

「わしに代つて死なせるは不憫であるが、筑前守どの（利常）が意はすでに定まつておる筈。されば淺野家にも膽のすわつた武士あるを見せて參れ。」

と言つた。家康の大坂攻めが必須と見られた時代である。曾て幸長とともに豐臣家の重鎭と目された加州家の意のあるところは、心ある者には既に察しがついた。

又兵衛の役目というのが、いわばその前田利常に今一度、豐臣家への忠誠をうながそうというのだから、これは生還の期せる使いではない。

併し又兵衛は父に似て、肚の太いこと父以上といわれた。眉ひとつ動かさず、

「せいぜい、お父上も病いをお養い下され。」

言い殘すと、單身、伏見の加賀屋敷へ向つた。

さて、淺野幸長よりの口上を述べ、玄關に控えていた時である。家老横山山城守の使いが姿をあらわし、

「主君筑前守より今一つ御用あり、別の間に通られよ。」と云う。

又兵衛は、一瞬、目を据えたが、從容と案内にまかさせた。

通されたのは先ほど口上を述べたのとは別の、如何にも狹苦しい部屋である。先刻のは謂わば淺野家使者として遇する座敷、これはたかだか百石取りの他家の賤士を扱う部屋と見える。

と德利に酒を入れ、摺鉢に梅干を盛つて出した。
如何なる肴かとのぞき込んだ一人が、
「これは御馳走もなし。きついものよ。」と言うと、
「肴はなくともあの具足一領、槍一本を肴にて先ずは一獻。」
悠然と茶碗酒を振舞つたという。
そんな門大夫だから吝嗇漢と影口されていたのが、他藩の上へは酒三升を贈つたのである。
又、淺野邸に失火のあつたとき、火のしずまつたあと上役某の宅で酒をのんだ。その時皆火事羽織を脱ぎ捨てた中に門大夫のみは取らない。
「どうなされた、それでは座にある者氣が張つて寛ぎもならぬ。もはや火は鎭まり申した。脱がれたがよろしかろう。」
上役がすゝめるので、
「されば御免あれ。」
と羽織を取ると、何と、萠黄おどしの小具足を著込んでいる。呆れて相役の某が、
「それほどの事致されるに及ぶまいに。」
と言うと、門大夫は「火を防ぐは足輕の業なり、我らは君を警固致すが役目なればかく心得て候。」と答えたという。
笠間又兵衛は、こういう父の膝下に成人した。又兵衛が加州家に仕えたのは淺野家の使者として前田利常のもとへ赴いたのが機縁である。

しかと御承知下されよ。」
「これは念の入つたお言葉。當方とて容赦は仕らぬ。――さ、參られい。」片足引いてさつと槍を構える。
同時に又兵衛もとび下つて青眼につけた。それより兩者隙をうかゞつて對峙するうち、師範役の無言にパツと繰り出す槍が又兵衛の手裏へ拔けた。同時に又兵衛の木刀が微かに相手の肩を擣つた。
「我が槍早くお手前に當つたり。」と師範役は叫んだ。
「當らぬ。」と又兵衛は言つた。
「いや、當つた。」
「當らぬ。」
「あれだけ當つてもお主には見えぬか。」
すると矢庭に、又兵衛は脇差を拔いて、我が袖を突きとおし、
「袖を突いて人は死ぬるか。これにてもお手前の流儀では、當つたと申されるか。」大音に叫んだのである。
ハツと師範役の顏色が變る。
忽ち不興げに利常は座を立つた。つゞいて村井飛驒、富田甲斐守をはじめ一人のこらず座をはずす。氣配に恐れ入つてか當の師範役も次の間に去る。
とうとう、又兵衛ひとりが殘された。

やがて唐紙がサツと開いて家老横山山城守が姿をあらわした。「主君筑前守御意に、笠間門大夫が武術のほどは兼ねて聞き及びしところ、その倅なれば、さぞや父にまさる手練の者であろう。幸い、當屋敷へ參つたることなれば、當家槍役の者と試合を所望なされる。御苦勞なれど、ひと手立合つて貰えぬか。」と言う。

又兵衛は、答えて、「某儀、本日淺野家より使者として罷り越したる者なれば、覺悟もつかまつらず、その儀は平に御容赦願い度うござる。」

「申すところ尤もながら、是非御所望の御意なれば、重ねて賴む、一本、試合されよ。」

その帶刀の顏を凝乎と又兵衛は見上げてから、

「左程に申されますならお恥ずかしい技ながら、」——腰の小脇差を取つて靜かに脇へはずすと、

「それには及ばぬぞ。その儘にて仔細ない。たゞの稽古じや。」

なるほど、案内されたのは槍の間である。上段に前田利常すでに着座し、それより村井飛驒守、富田甲斐守、成瀨內藏之助以下加州家の歷々がずらりと並んでいる。槍役の者というのは總髮で五十前後、裏附袴の股立をとり、二間柄の稽古槍を小脇に抱えて一方の端に控えている。

又兵衛は惡びれず案内のまゝにスルスルと道場中央に進んで用意された一本の木刀を把つた。そうして利常以下並居る重臣連を物ともせず、件の師範役に向つて、

「それがし使者たる役目を蒙つて當家へ參つた身、いまだ筑前守どのより吉左右の御返答も承らず、お手前の相手致すは迷惑千萬。さりながら、強つての御所望と聞き申すゆえ何事も役目かと存じお手合せ仕る。——が、事は武邊にわたることゆえ、使者たる禮節は守り兼ね申す。この儀

「淺野どの使者笠間又兵衛とは御身か。」
「知れたこと。當座敷に在るは我一人、あらためて名を問われるは上意討ちでも致されようとの御存念かい。」
又兵衛が白眼をむくと、
「これは氣の早い。次第によつては手にかけも致そうが――」
言いながら、口邊に薄笑いをうかべ又兵衛の對面に坐つた。しばらく凝乎と又兵衛の表情を見入つていて、
「――おぬし、寔は槍を身に當てられたな？」
「何？」
「はつはは……そう色を變えるようでは當方の見込みどおりか？」
「お、お手前何者じやい？」
「申したとて存じ寄るまい。それより、家老横山山城守が詞を相傳える。よいかナ、先程の其方が手際、いかにも鮮かなれど言葉があまり過ぎたるゆえ、筑前守どの甚だ御立腹あらせられた。依つて、後のことは我ら良き様に取計らい申すゆえ即刻當所を辭去致されよ。――これが山城守よりの傳言じや。」
「御免蒙る。」
「なに？」
「お手前當家中にて如何ようの役向かは存じ申さぬが、拙者儀、使者として參つた者、筑前守ど

「何じやい。」

又兵衛はニヤリとして、

「殺すなら殺せい。ふん。」

本當は、師範の槍で胸下を美事突かれていたのである。

蕨餅

無氣味に『槍の間』は謐まり返つている。

かりにも加賀百十萬五千石の領主の御前で、抱え師範を面罵したのだから只では濟むまい。いずれ腕の立つ歴々が上意と名乘つて斬込んで來ようが、その時は及ばずとも一太刀浴びせて淺野家に武士ありと知らせた上で相果てよう、又兵衛はそう思うから、油斷なく四邊に氣をくばり座敷中央に端坐していた。

——が、一向に斬り込んで來る者の氣配がない。

『槍の間』は北に面して武者窓があり、其の外は庭になつているらしくサヤサヤ風に樹々の騷ぐのばかりが聞かれた。次第に又兵衛は危惧の念をいだき出した。

丁度その時である。次の間との杉戸が靜かに開けられて、一人の武士が這入つて來た。又兵衛は目を据えた。

「返答の儀は我らよりも言葉を添えて其許越度にならざるよう努力致す。加州家が信じ難しとならばこの宗矩を信じよ。」

とも言つた。果して一両日を経て、前田家よりは使いを以て返答の書附が浅野幸長の居城和歌山に届けられた。

後に分明することだが、又兵衛の見込みとは違つて、浅野幸長も利常同様に、ひそかに徳川方へは心を寄せている。いわば又兵衛使者の趣きの裏には、一つの腹藝が仕組まれてあつた。大坂方の目を欺く藝である。又兵衛の武骨一邊の率直さが却つて、この大役を仕おおせた。

さて又兵衛が使者として、前田利常に面接をした翌年――慶長十八年八月に、主君幸長は三十八歳を以て歿したので、一時又兵衛は浪人をした。大坂の陣の起る一年前である。この頃には父門大夫も既に病歿していたが、又兵衛の浪人したことを聞いて利常は人を差向けて仕官をすゝめた。一両度又兵衛は辭退したが、

「我に思うことあり、いずれは主取りを致すなら是非我に仕えよ。」

と利常は云う。

遂に、一度は御家中の手にて討たれるを覚悟せしこの又兵衛なれば、存分に御料理あそばされよと言つて利常の臣となつた。又兵衛時に二十四歳、大坂の陣がおわり徳川の天下となつた翌年である。

利常は知行二百石を與えると、「汝の最も好むところによつて仕えよ。」

と言つた。

の御返答をうけたまわらずば引上げるわけには參らぬわ。この邊のところお手前とて、武士なればお察しあろう。如何ようの御返答か、匆々筑前守どのよりうけたまわつて頂き度い、と左樣申し傳えて下され。」

云つて、への字に口を結び又兵衞は兩肘張つて、其の場に目を瞑つた。

テコでも動かぬ氣色と見て、カラカラ快げに武士は笑つたのである。

「めつぽう其許氣は强い。併し使者としては少々、拔けておるな。」と言つた。

「何なとぬかせ。」

又兵衞が依怙地に目もあけずにいると、

「教えて進ぜる。拙者を當家中の者と思いおるが、拔けた證據よ。」

と云つたのだ。

武士は將軍秀忠の師範柳生宗矩だつたのである。

笠間又兵衞は相手が宗矩と聞かされて忽ち氣がくじけ、宗矩の指示の儘にこの日は和歌山へ引返した。武士はいたずらに命を捨てるが本意に非ず、かりにも前田家家老ともある人物が「良き樣にはからい申す。」と云うなら、それを眞にうけて一たんおとなしく辭去するのが使者たるものの採るべき擧措だと諭されたのである。「其許を斬り捨てよう爲なれば、槍役との稽古など所望致さず速かに騙し討つは造作もあるまじき事、あつぱれ笠間門大夫が倅との慈悲あればこそ、稽古ものぞまれたるならん。」とも宗矩は言い、

云つたと思うと袴をサツとまくりあげ、大なる睾丸を披露に及んだ。疝氣というのは、神經性腸痛または睾丸炎のことである。

讃岐守はむろんだが、滿座の大名はフツと笑い出し、またぞろ肥前守どののオドケがはじまり候といいながら、年若き大名などは笑い倒れて物も言えず、利常はますます眞顔になつて、

「いやいやおどけには之無いぞ。たゞ、これを出し申さずんばナ。」言いながら睾丸をたゝみ込み、「申し分立ち申さず候――」從容として袴のひだを直し大廊下の席に戻つたという。

加賀の前田は海内第一の大藩である。合羽籠はまだ金澤の城下を離れぬうちに、先驅は十里、二十里の前程にある、三日四日の行列はひきもきらず、流石日本第一の大名と云われた。

或る日、利常は日坂の宿で小休して土地の名産の蕨餅を喰つたが、却々に美味である、供に連れたる扶持人の菓子師が製せしものより遙かに好し、何者の造りし餅か、と問うた。近習の一人が七十ばかりの姥が手製の餅に候と答えると、利常は、

「さればその姥を雇い、菓子道具入れたる長持の上に毛氈敷き、婆々を乘せて供させよ。」

と言つた。

そうでなくても評判高い加賀大名の行列である。街道の宿場には人山をきずいている。道具が通り、輿が過ぎ、引馬がすぎ、家老がこれに從い、中間も皆すぎた頃に、里の童がめざとく見つけて、「やあ、婆さんが毛氈の上に坐つている。」と囃す。なるほど白髮の老婆が威儀を正し膝に手をチョンとのせて坐つているのだ。二人、四人とこれに氣づいて彼らは口々に囁いた。

「何じやあの婆さまわい。」

「それがしの好みは刀術にござれば、何役なりとも仰せつけ下されい。」
と又兵衛は言つた。
「左樣か。」
利常はニヤニヤして、「ならば柳生宗矩が許に入つて修業致せ。免許を得れば師範じや。」
諸藩の武藝者中、主君に祿をはんで他家の門に弟子入りした師範役は後にも前にもこの又兵衛以外にない。そういう利常は一風變つて、表面鼻毛をのばし、愚をよそおい常に自から韜晦して頗る鷹揚のふうのある大名だつた。例の睾丸さらしや蕨餅の姥を傭つた一件など總てこのたぐいである。――
利常が江戸に參覲していた一日、御用部屋の敷居にかしこまつた御坊主が、
「本日は松平肥前守さま（利常のこと）御病氣により御出仕なされず候。」
と屆け出たことがある。
時の老中酒井讃岐守はこれを聞くと眉をひそめ、又しても加州どのが氣隨かいと呟いたが、その後、利常は出仕して大廊下のあたりで酒井讃岐守に出會つた。
酒井は會釋ののち、
「先日は肥前守さまには御出仕なされず、御氣隨が出で申し候かナ。」
と笑うと、利常は顏色を變え、
「ヤア讃岐、左樣に思われ候は至極迷惑なり。我ら近頃、疝氣にて行步も叶わざれば已むを得ざる仕儀。先ずはこれを見られよ。」

か、外樣大名とは云え加賀藩に對しては頗る寛大であつた。が、それは表向きだろう、海内第一の雄藩として、曾ての豐臣家との關係を抽き出すまでもなく、幕府の要職がひそかに何を懼れていたかは察するに餘りがある。さればこそ我は故らに韜晦せりと一夜近臣に洩らしたという。併し、一見、鷹揚と見えて才略人に過ぎ、人となり聰明機敏の英主だつた利常ほどの者の本心が、ただ幕府の忌疑をおそれたための愚をよそおつたのか否かは輕々に斷定出來ない。

又兵衛が召抱えられて數年後の或る年頭に、居城にあつて利常は家臣よりの年始の禮をうけたが、數百人の家來の挨拶である。居間に入つてから、近臣中村某に向つて、困りはてたものよと洩らした。

中村は謹んで、「御長座ゆえ御尤もに存じまする。」と應答すると、

「さにあらず。長座は困らぬが、天下をも取らんと思う者が、大分の知行をあの愚鈍漢どもに取らせるかと思えば、それに困るわ。」

と言つた。

又兵衛が召抱えられた當時の宗矩は、無論大目付などの要職にはなく、萬石以上の大名にも列せずたゞの家士である。その宗矩に後年、兵法師範の斡旋を依頼した諸大名は多々あつた。利常ひとりは自ら家臣を門に入らせて免許を得させた。柳生新陰に實は忍びの裏面ありと夙に見破つていたのか、宗矩を將來、幕府の樞要に加わる器量と見込んだからか。たゞ、笠間又兵衛を物の用に立つ武士と見て一そうの武略を身につけさせるためだつたか、その邊のところは分らない。が、一方、宗矩の方も又兵衛だけは他に異つて柳生村の松吟庵には託さなかつた。江戸にあつて、

「あれか、あれを知らぬ奴があるものか、加賀のお殿様の正眞（ほんと）の御母様（おふくろ）だぞ。」
「お大名のおふくろ様が、どうして長持の蓋（ふた）の上に乘つてるだ。」
「そこが身もあり蓋もあり。」
「まぜつかえすでねえ。」
あらかたそんな騷ぎである。
利常は別に蕨餅をつくれと命ずることもなく、函根にさしかゝると、婆々を駕籠に乘せ、銀二十枚をつかわして國へ歸せと命じた。老婆は隨喜して歸路についたが、有頂天である。
「わしが造つた蕨餅が加賀のお殿樣の御意にかのうてのう、日本一の蕨餅じやと御褒めの詞をこうむりましてのう、駕籠から宿々の泊りまで下されて、白銀の御褒美まで頂きましたわいの。年は老いてもわしやえらいものじやろうの？」
銀子（かね）に浮かれて、尾ひれのつく自慢話を宿場々々で吹聴してゆく。忽ち加賀の評判は街道中にひゞきわたつた。その後は宿場々々の茶屋、旅籠屋、物賣りの店に至るまでが加賀の行列といえば、念に念を入れた馳走ぶりで汁ひとつにも吟味をこらしたから、行列の小者にいたるまでが他藩とは比較にならぬ美食を得たという。ふざけ心と見せかけた利常の端倪すべからざる政略の一端である。

笠間又兵衛の柳生入門もこの例に洩れなかつた。
そもそも前田家は徳川家康と並んで天下に重きをなした家柄である。幕府も餘程遠慮があつた

「されば……」
又兵衛はパシパシ瞬いて、
　武蔵野に折りべい花は数あれどつゆっぽくて折られない
至極つたない抑揚にのせてよんだ。列座の者斉しく失笑したが、利常の眼は強い光りを放った。
「そうか。ならば甲斐がそちに、嫁を世話致すぞ。」
言って忽ち座を立った。甲斐とは加賀藩侍帳に名を連ねた三千石近藤甲斐守のことである。
利常は即刻、この放言を實行にうつさせたが、或る日、富田重政を側近く召して右の歌のことわりを話し、
「そちの見込みはどうじゃな？」
と尋ねたところ、即座に重政は「あっぱれなる者。」とこたえたので、
「さればその方、予に一度、又兵衛が伎倆のほどを見せてみぬか。」
と言った。重政は中條流を遣って一萬三千五百石、一世の名人と稱された富田越後のことである、例の佐々木小次郎の師富田勢源は眼疾を病んで家督を弟治郎左衛門に譲り、治郎左衛門景政には一子があったが、天正十一年二十五歳で柳ケ瀬の戰いに討死したので、女に聟養子を迎えたのが、すなわち山崎彌三兵衛の子の名人越後である。
　越後は少時考えて、
「それがしにも些か存じ寄りのすじもござれば、いかにも試してみましようわ。」
「いつじや。」

手ずから二年に亙るあいだ、心魂こめて稽古をつけ、元和四年、「もはやいずれに出されても兵法者として恥ずまじく」と親書を添え、加賀へ歸した。又兵衛時に二十六歳。念のため言っておくが、柳生武藝帳に列記された面々のうち當時不惑を越えていたのは笠間又兵衛たゞ一人である。

又、前の毛利藩馬木家六が明身の太刀を會得して江戸に戻つたときに、宗矩は他の弟子と業を競わせたが、家六をして一歩をゆずらせた相手は又兵衛だけであつたという。

又兵衛が妻を娶つたのは利常のもとへ歸つて翌年の春である。

利常は又兵衛の歸參を聞くと、早速目通りを許して、

「どうじや。江戸にはよい女がおろうがな？」

と訊いた。武藝の上には一切ふれず、だしぬけにそう尋ねたのだ。

列座していた家臣たちは、又兵衛が何處とやら武邊一邊の士なのを知つているから、何と答えるか、返事に窮する顔が見たいと腹のうちに思い、笑いを怺え見戍つていると、案に相違して又兵衛は即座に主君を見上げ、

「されば某、がらになく歌一首詠め戻つてでござる。」

と答えた。

「いかような歌じや。」

「は。」

「構わぬ、披露せい。」

と云つたのには利常もなる程と感心した。――これは『耳底記』に拠つている噺である。柳生宗矩にも似た挿話が傳えられているが、恐らく『耳底記』からの剽竊だろう。

又、一日、越後が家來に脅をあたらせていた。家來がひそかに思うのに、如何なる名人の越後どのでも今刺せば容易であろう、と。すかさず越後は言つた。「汝の思うところ極めて慘である。冗談は、ならんぞ。」聞いて家來は驚き大いに畏怖したという。

こういう越後だ。柳生宗矩の印可を受けた笠間又兵衛を試すというのだから、一體どんなことになるかと、話を知つた家中の者は固唾をのんで擧式當日を待ち侘ねていたのである。

念のため云つておくと、富田越後は加賀藩の兵法師範ではない。越後は前に書いたように山崎河內守の孫・彌三兵衛の伜で、富田家の家督は三千四百石。以來、關東の合戰、小松、大聖寺など諸所の合戰に軍功をたて、其の度に加增を受けて遂に一萬三千六百七十石、人持頭を仰せつけられた。慶長十八年にはすでに隱居の身で、大坂陣にも隱居後、軍役として伜下野守重康の後見となつて出陣している。重康も本祿一萬石の人持組頭で、師範役ではない。餘談になるがこの重康は晩年中風に罹つたので、父の名人越後に對して中風越後と呼ばれた。

兵法師範役笠間又兵衛の祿高は三百五十石である。

さて擧式當日になつた。

媒妁人近藤甲斐守が世話した嫁は、藩士由比勘兵衛の女で十八歲。色の白い、立居振舞の淑や

「されば婚姻の日がよろしきかと存じまするな。」
「何？」
「婚姻の日。——」
越後は意味あり氣に笑つて、
「婚姻の日でござる。」と言う。この時越後すでに五十歳である。
利常は、
「そちが思う儘に致せ。」と言つた。
翌年四月、又兵衛は金澤森下町に邸地を賜わり、妻を迎えた——。

無刀取り

名人越後には幾つかの兵法談がある。或る時主君の前田利常が、
「その方の家に、無刀取りの術ありと聞く、これを取つてみよ。」
と佩刀をすらりと抜いて面前に突き附けた。
越後は畏つて、無刀取りは祕術にござれば他見を憚りまする。御襖の陰より窺う者あり、お叱りを蒙いますと言つた。利常が思わずうしろを顧みたすきに進んで刀を取り、
「これが無刀取りでござる。」

へ各々進物がおくられるのを以て「祝言すむ」と云い、あと、夫婦は共に部屋に入つて合歡の事をすませるが、――丁度その色直しののち再度盃を交した直後だ。
祝宴に列して上座にあつた富田越後が、突如たちあがりツカツカと新郎又兵衛の前へ行つた。
(始まつたぞ。)
と一同思わず目を凝らすと、
「婿どの、この富田越後お手前に引出物とらせるが、受けるか？」
じつと見下して言う。
「何なりと欣んで頂戴仕る。」
「さらば、受けてみよ。」
言つて、腰の脇差を抜き放つと又兵衛の面前へ切尖を突き附けたのである。
途端に、
「それは受けられぬわ。」
大音聲に又兵衛は喚いた。並居る一同、色を失つた。かりにも人持頭を勤め一萬三千五百石餘を領したことのある重臣だ。よし、武藝が出來るにせよ、又兵衛はわずか三百五十石取り。師の柳生宗矩さえ當時はたかだか二千石の旗下である。それが藩の老臣に向つて、罵言同様の口を利いたのだから、媒妁人近藤甲斐は肝をつぶしたのも無理はない。
遉がに、越後は蠅がとまつたほどにも表情を變えなかつた。
ぷるつとして、

かないゝ花嫁である。由比勘兵衛は知行四百石、御船肝煎役を勤めていたから、四百石取りの格式に従つて、花嫁には長持三棹、挽箱一荷、葛籠一荷、屛風一雙、指樽一荷、衣桁一ツがいわゆる嫁入りの荷として附けられた。但し蒔繪の道具を用いることは禁じられていた。別に聟引出物として勘兵衛より花聟へ刀一腰（但し新身）が贈られる。

當時の風習で、擧式は夜陰に至つて行われた。

屋敷の門前、玄關、臺所には紋附の提燈を耀かし、燭を列ねて花嫁の到着を待つていると、白小袖に麻の被衣を着て、負木というものに尻かけ、うしろざまに負われた花嫁が來た。又兵衛は玄關に迎え出て、負木にちよつと手を掛けた。作法である。綿帽子に覆われ、花嫁の表情は見えないが又兵衛の方は、益がに緊張に靑ざめている。如何な武藝の達人も嫁を納れる莊嚴感に滲りはないのだろう。むしろ律義一ぺんの又兵衛だけに一そう身を固くして緊張していたかも知れぬ。やがて彼が負木から離れると、女童が迎え出て、花嫁の手をとつて内に導き入れ化粧室へ案内した。それから、式の座敷へ現われた。

主居と謂つて、下座に坐る方が花嫁である。一家の主人又兵衛が却つてこの時は客位――上座に着く。往昔の婚禮は夫が妻の家へ行き、妻方で種々の酒食を机に並べて新夫を饗應して、擧式した習俗の名殘りだろう。さて新郎新婦が並ぶと、いわゆる三々九度の盃ののち、列座の一同へは雜煮が出されている間に新夫婦は席をはずして別間で色直しをする。現今では花嫁だけがするると思われているが、曾ては新郎も之をした。舅から進物された小袖を着て再び席に戻るのである。（花嫁の色直しの衣裳も婿方から進物される。）そうして再度盃を交し、兩家の親緣奴婢など

「いかにも、受け致し申そう。」
「左様か、ならば、これ。」
切尖を今度は、鼻前寸前に、ピタリと當て、
「柳生新陰にも無刀取りの秘技ありと申すが、どうじや、この太刀受けてみい。」
又兵衛はじつと越後の顔を見て動かない。
鼻先の切尖などには介意しない。徐々に胸を反らせ、膝で退つて何時の間にやら中腰になつた。その間、又兵衛が身をそらせば反らすにつれ、膝頭を利して退けばその幅だけ過不足なく吸いついたように切尖は鼻先を去らない。越後も又、そうして上から終始又兵衛の眼を見据える。兩者の呼吸は全く一となり、見る者の息のつまりそうな緊張感である。花嫁は一度、思いがけぬ事態にハツと美しい顔をあげたが、間もなく俯せた。それきり項垂れて動かない。微かに肩のふるえているのは、盃を交えたからは夫であり、その人の身に萬一のことあれば即座に自害しよう覺悟でいたからである。又兵衛にはこの金澤で縁者は一人もないので、上野作兵衛という御旗奉行が親代りになつてくれていたが、これ又、變事でも興つた時には、武士の義理で、一太刀なりとも名手越後の無謀に刃向つて死のうと咄嗟の覺悟を決めている。
無言の一時が過ぎた。
「どうじや、取らぬか。」と越後が言つた。その聲のおわらぬうちに又兵衛の手が合掌の恰好に切尖をヒタと挾み、

「何故じやな？」
「かりにも前田家に奉公致す武士が祝言でござるぞ。禮儀に愜う引出物ならば、白刃なりとも欣んで受けも致そう。禮を失した只今の口上、一分にかけてもこの又兵衞受け申さぬ。」
「何が禮を失したな？」
「お手前、只今『さらば受けよ』と申されたな？　祝言の席に、申してよいこと惡いことのけじめも知らぬうつけ者の引出物など、誰が受け申そうか。」
「ほざきおつたの小倅……」
越後はニヤリと笑つたが、確かにこれは名人越後、一本取られた恰好である。
およそ婚禮の日に、「かえす」とか「去る」「おくる」「なおなお」「いよいよ」「もどる」等の詞は忌むべきものとされている。直接、間接に姻緣を離絕すべき意を含むからである。越後の洩らした一言は、從つて又兵衞の擧式にケチをつけたと採られても仕方がない。ケチをつける者の引出物などは受けぬというのもだから道理で、白刃を向けられて間髮を容れずこの應對の出來た又兵衞は、立合わずともたゞ者でないことはあらためて一同に分つた。
が、越後は顏色ひとつ變えない。
「いかにも身共が失言、詫びるぞ。花婿どの、その上にて今一度、殿に代つて引出物致すが、受けて貰えようか。」
と言つた。
又兵衞はしばらく越後を見上げていたが、

つもりより出る故に、簡要は『山月の位』にあり。今時、柴田某なる下司しばしば當流を偸む。然れば無刀をも不日彼が工夫の如く披露すべし。されど是は下司が欲心の爲せる業にて、かかるは無刀取りに非ず、盗用なり。――云々」

これで見れば笠間又兵衛の會得した『山月の位』がどのようなものかが分るが、越後はそれを見拔いたのだろう。

翌日、城に登つて、

「越後、どうであつた？」

利常が好奇と期待の問いをしたのへ、

「拔群の使い手にござる。あれなれば、御家の師範に足る器量。いずれの藩へ差遣わされても當家にきずのつくようなことござるまい。」

と云い、それから聲を低めて、「殿、恐るべきは柳生。他日かならず天下の武邊を制しましょうぞ。」

と言つた。

繰返すが、宗矩一介の家士たる時代の言である。名人越後の名に恥じずというべきか。

又兵衛は結婚ののち改めて五十石の加増を受け、祿高併せて四百石。別に森下町の屋敷の横に道場を建てられ家士の教授に當つた。夫婦仲は至つて圓滿で、寛永十三年、霞の多三郎を追つて京へ上るまでに一男二女をもうけた。

「然れば頂戴致す。」

見る見る顔面朱を注いで掌の内の白刃を引いた。

「見えたぞ。天っ晴れじゃ。」

越後が叫んだ。岩をも砕く脅迫で白刃を挾み、自から己が咽喉へ突立てようとしたのである。

柳生宗矩の自著した書に『無刀之卷』というのがある。「無刀は必ずしも人の刀をとらずしては愜わずという儀にあらず。」と書き出され、柳生流の無刀取りがどういうものかを瞭らかにしているが、その中に曰く――、

「無刀取りは、刀を取つて見せ是を名譽にせんとてはなし。我が刀なき時、人にきられじとの無刀也。いで取つて見しようなどと云う事を、本意とするにあらず。

一、相手とられじとするを、是非とらんとするにはあらず、取られじとするをば取らぬも無刀也。我はきられぬを勝とする。人の刀を取るを、藝とする道にてはなし。

一、無刀は取る用にてもなし、人をきらんにてもなし。敵から是非きらんとせば、取るべき也。取るをはじめより本意とはせざる也。敵の打太刀をおそれず、身にあたる時は、あたる分別のはたらきあり、太刀の我が身にあたる座にて取る也、きられてとるべし。

一、無刀は、人には刀をもたせ、我は手を道具にして、仕相するつもり也。しかれば刀は長く手はみじかし、敵の身ちかくよりて、きらるる程にあらずば成間敷也。

以上ときにあたつて一様にかたまるべからず、いずれも身によりそわずば、とられまじく、無刀は當流に是を專一の祕事とする也。身構え、太刀構え、場の位の遠近、皆ことごとく無刀の

一、又弟子中へ傳授之儀は師家の見分の上にて相談申すべく候事
右之條々相亂れざるよう守り申さるべく候。且つ免許以上の衆中は申し合わされ、若し師家に心得違いコレ有るに於ては遠慮なく助言に及び申さるべく候もの也

月　日

先驅け

次は柳生源太夫である。
天正十八年の小田原陣の時に、韮山城を攻めた藤堂高虎の配下で鐵砲頭をつとめた若尾彌平次という勇士があつた。
高虎は森右近と韮山攻めの先陣をあらそつていたが、或る朝、誰が云い出したか、城中から必死の敵がうつて出るから皆々旗本へ集つて一手になつて戰うようにと言う。この觸れを聞いて味方はざわめき立ち、我も我もとあとさきになつて後陣へ引きさがつた。
彌平次は動かない。
「我らは殿より此處にあつて先登いたせと仰せつかつた身じや。下知あらばさがりもしよう、下知なからんには、何條此の場を動くべき。」
と頑として去らない。配下の足輕が、

尙稽古場に次の如き『定』『規』を掲げて心得を諭している。當時の藩の兵法師範がどういう風だつたかを窺う參考にもなるので左に寫してみる――。

定

一、稽古のみぎりは不實なく勵み御修行あるべく候。但し、太刀遣う身を養う道理を得心すべく候。稽古場にて無役の雜說は勿論、不行儀コレ無き樣一樣に御心掛けコレ有べき事

附 他流之批判は御遠慮あるべく候事

一、形は小書順の通り相渡すべく候。形を見せ候儀は免許以上に限るべき事

一、目錄前の御方は互いの仕合日御遠慮あるべく候　平稽古、打太刀は目錄以上に限るべし。

但し兩樣とも免許以上の差圖コレ有候は格別の事

右之通り相極め候間みだりにコレ無き樣なさるべく候　以上

規

一、目錄傳授の儀は免許以上の衆相揃い集議の上相究め候事

一、免許の儀は印可の衆中相談の上相究め候事

(註。柳生新陰が御流儀と稱し濫りに印可を與えることを許さなくなつたのは、宗矩が將軍家光の師範役となつて後だつた)

一、他流より仕合のぞまれ候は辭退に及ぶべく候。たつて望まれ候わば印可の衆へ相掛け差圖の上に致さるべき事

「さればよ。なに事ということを知らず、皆々あわてふためきて引きさがれど、それがしが方へは何の使いもなし。まして鐵砲など預つたる身であれば事の實否も聞き定めず去ることならず、こうして踏みとゞまつておるわ。――ま、敵參らば及ばずとも一番槍いたそう肚じや。おぬしも力をかせい。」

「承知仕つた。」

それより二人は前方に目を据えて敵を待つたが、ふと彌平次は足許から視線を若武者の手へ移し、

「や。おぬしが槍の身構えようは、敵來らばその槍にて當方をつまずかせ、汝(うぬ)こそ一番槍しようとの肚と見えたり。却々(なかなか)以ておかしき事かな。そもそも、此處に居つたるは某(それがし)じやぞ。其許、それがしを力にこそ參つたるに、その槍の持ちよう侍(さむらい)の作法にあらず。きたなし。その槍引けい。」

と呶鳴つた。

「これは思いも寄らず、拙者左様のこと夢々存じ申さず――」

「よいわ。ともあれ、この槍引けい。」

分部太郎八と名乘つた若武者は、云われるまゝに素直に槍を取直す。

そこへ、これ又一人、老臣の各務兵庫というのが、年寄りながら至つて氣が強く、味方退くこそ究竟(くっきょう)なれ、我こそ一番槍せんとノコノコ遣つて來たが、

「やゝ。それにあるはいずれの家中かい。」言いながら顔を見て、「や彌平次か。……これは失敗(しま)

「もしお觸れに背いたと分れば罪を蒙りまするぞ。」と進言したが耳を藉さなかつた。
その間にもあたりでは齒が拔け落ちてゆくように一人去り、二人去りして、終にとゞまるもの彌平次以下わずか七人となつた。
彌平次は言つた。
「我らが死場所は此處ときめたり。――よいか、敵來るとも一歩もさがるべからず。それがし下知致さば鐵砲を一うちして、わが鑓を合わせたあとへどつと懸かれ。」
そう下知して手ぐすねひいて敵の襲來を待ちうけていると、この時、うしろより小聲で、
「それに居給うは誰ぞ。」
と聲をかけ、近寄つて來る者がある。
見ると大身の槍を小脇にかゝえて、まだ前髪をおとしたばかりの凛々しい若武者だ。
「我は若尾彌平次。其許、我らとともに立働こうとなら、さ、これへ來られい。」
彌平次は差し招いておのれの横に坐らせた。
若武者は、自分は藤堂勢の一方の將・忍田平左衛門の配下で分部太郎八という者であると言い、
「何とはなく人々引き退き申すゆえ、我らも人並みに引こうと致し申したが、あまり心許なければ念のため立戻つてござる。旗本までさがれとの觸れは、寔でござるか。」
と訊いた。
彌平次は、

若尾彌平次は十八歳の時から戰陣の高名あり、藤堂高虎よりの感狀二つ、他に九州陣には日向の目白城を攻めて大和大納言秀長からの感狀もうけ、藤堂家きつての勇士と褒稱された。

又、彌平次に「侍の作法知らず、きたなし」と云われた分部太郎八は、御旗奉行分部權三郎兵衛の子で、實は各務兵庫の娘婿松宮彦左衛門の末男であつたのが、乞われて分部の養子となつた。當時十七歳である。

各務兵庫は高虎の父・藤堂源助虎高の代から仕える老臣である。もともと藤堂家は、祖先が近江源氏の支族と傳えられ、近江犬山郡藤堂邑の士藤堂源助に興つた。高虎はその次男だつた。元龜元年六月の姉川の合戰に高虎十五歳で出陣した時傅役をつとめたのが各務兵庫である。

高虎は千軍萬馬の間に若年より往來し、武道の嗜みが深かつたが、領内の民治にも心を致して種々治績をあげたのは、傅役各務兵庫の薫育にも負うところ尠くなかつたといわれる。

さてその各務と彌平次、太郎八の三人、いずれも年齢に差こそあれ、敵來らば一番槍の功名せんと待ち構えている。その裡、城の堀櫓の上に、諸邊氣遣いなき體で停つていた鳥が一齊に羽撃き立つのを見て、

「それ來よつたぞよ。」

と兵庫が叫んだ。

併しまだ城郭の内は少時しずまり返つていたという。やがて門をひらいて、城兵がどつと押し寄せて來る。彌平次は、

つたり。」

ガツカリ其の場へへたり込んだ。

氣ばかり張つても相手が若尾彌平次では、一番槍の功名ならずと觀念したのである。

「これは御老體、いつもながらの御勇心感服仕る、さゝ、これへ參つて我らともども鎗合せ致されましよう。」

彌平次は坐り込んでいた座をあけて老人を招じた。

「おゝ、いかいでかい。」

痩我慢を張るところが各務兵庫の泣き所である。少し古びて縅毛の色褪めた鎧の肩をいからせ彌平次のとなりへ割込み、ふと若武者を見て、

「何じや、こわつぱまで來ておつたか。」

「これは爺樣、異なところでお會い致しまする。分部の太郎八にござる。」

「分つておるワ。したがおぬしは忍田平左衞門どの配下と聞いたぞ。」

「はい。なれど味方の退き樣心許なく存じ申すゆえ、これへ參つて、」

「彌平次と先陣の槍あらそいせんとてか。」

「いえ、却々以て左樣の、」

「ふン、わかつておるわ。」

でんと胡坐を組んで兩肘張り、それ以後はへの字に口を結んで一言も發しない。城に鬨の聲でも擧がれば、まことは一番に躍り出そうつもりであつた。

したのを加藤清正が五百石で召抱えようと言つた。康政の三男康義の室は、加藤清正の女であつた關係から、生前康政は清正と善かつたのである。

太郎八は召に應じて肥後熊本に赴いた。ところが程なく、今度は加藤清正が卒する。よくよく自分というものは主取りに縁のない者であると感じ、それからは入道して閑齋と號し終身主君を取らなかつた。

源太夫は清正の卒した時は僅かまだ四歳である。父が入道したので、母方の實家小松氏に預けられ其處に成人した。小松氏は久能城主榊原昭久の家臣で、柳生石舟齋の門人・小栗仁右衛門正信に就いて小栗新陰流を習（おさ）めた達人である。

源太夫ははじめは、この母方の祖父小松甚太夫に武術を習つた。可愛い孫への甚太夫の教授ぶりは、他の門弟がハツとするほど嚴しいものであつたが、歯をくいしばつて源太夫は一心に修業した。或る時祖父が一室に源太夫を呼んで言つた。

「そちに最早わしの教えるところ何もない。この上は、江戸へ參つて又右衛門宗矩どのが教授なうけい。孫ながら、そちをこの久能に埋もれさすは惜しい。」

そう言つて、宗矩への添書を與え江戸へ旅立たせた。源太夫時に十九歳であつた。

さて江戸に着いて、柳生家を訪ねようと、とある橋の手前にさしかゝつた時である。多勢の人だかりがして、一様に橋を渡りかねている。

「いかがなされておるか。」

わけを問うと、

「鐵砲擊て。」

と足輕に命じ、自ら彈丸のあとを追う如く躍り出した。

「何條おくれて堪るべき。」と各務、太郎八は前後して進み、槍を合わせる。足輕もつづく。後方にあつた藤堂勢はこれを見て、

「あの者犬死さすな。」とばかり鬨をあげて攻めたてたから、忽ち彼我入り亂れて接戰となり、この合戰で終に韮山城は落ちた。一番槍は彌平次である。併し彌平次は手を負うたので功名首の手柄は分部太郎八が擧げた。この城攻めに當つて、「首を取り候とも打捨て敵に向うべし。」と高虎よりの指圖があつたから、いずれも鼻や耳をそいで徴としたが、太郎八は口びるへかけてそいであつた。髭がなければ女わらべと紛れるからである。後にこのことを聞いて、「さりながら、世には髭なき若武者もあり、そのときはどうするか。」と或る武士が尋ねると、太郎八は莞爾として、

「何ぞ其者に道具無からん、さる時は股間の一物取る迄でござる。」平然として答えたので一同「きついものよ。」と呆れたという。

この太郎八の子が、源太夫である。

太郎八は、一度主君高虎が高野山に登つて剃髪した時、ともに從つたが、再び高虎に舊領の與えられた折には故あつて主家に戾らず、浪人して江戶小石川に住んだ、それを招いたのが德川四天王の一人榊原康政である。併し慶長十一年に康政は病を以て居城館林に歿したので、再び浪人

「では、拙者がお通しして進ぜます。何さま、實は拙者の方もいそいでおるで。」

言つて、何やら耳に囁いた。

「どのようにいたすのでございますか。」

「されば今も申した通り拙者が狼藉を働く體にて、そもじを後より追いかけます。走つて、お逃げ下され。」

「……」

「いや、御心配無用。かならず無事にお渡し申すぞ。」

それでもまだ意を決しかねているようだつたが、急ぎの用にせきたてられてか、

「では、何卒お願いを致しまする。」

「承知致した。」

源太夫は太刀を靜かに拔くと、

「よろしいな？　拙者大聲で喚き申す、お逃げなさいよ。」

それから、矢庭に頭上に太刀をふりかざして、

「おのれ無禮者、婦女子と思うて堪忍致せば重ね重ねの雜言、もはやかんべんならん。斬つてくるる。……待て、逃げようとて、逃がさんぞ、ま、待たぬか。」

一町餘も響くほどの大音聲で喚き、頭上に太刀を振り廻した。驚いたのは町民である。ハッと道をあける。

娘は小走りにその間を拔け橋の中央へ走つた。

「これはお侍さまかね。わけも何も、あれを御覧なされ。」

指さす。

なるほど、人群の背後から背のびして覗くと、一人の亂心者の武士が太刀を抜き放ち、何やら喚いてはあたり構わず振り廻している。むろん、怖れをなして橋を渡る者もないが、一向に、彼の方でも渡りすぎる様子はなく、橋の中央に頑張つて動かない。

「はゝあ。おもしろうござるな。」

源太夫は物珍しそうに笑つて眺めた。

「おもしろいも何もあるもんですかい。それほど平氣でお笑いなさるぐらいなら、お武家さまの手で、あのお侍を取り押えていたゞきたいものじや。」

「いや。それがしまだ弱輩ゆえ、とてもあの様な仁には愜い申さん。ま、氣長くお手前どものあとからでも渡らせて頂き申す。」言つて、うしろに立ち、相變らず笑つて見ている。

「なるほど田舍者は氣が長えや。」

聞えよがしに誰やら言つたが源太夫は平氣だ。

ところが暫らくして此處へ女中を從えた美しい娘がさしかゝつた。それが橋を渡れぬと知つて非常に困つている。餘程いそぎの用があるらしい。

と見ると、源太夫はツカツカと寄つていつた。

「そもじ、急いでおられるか?」

「はい。……」

乙女が源太夫に一禮して、急ぎ足に立去ろうとすると不意に源太夫がとめた。

「異なことをお尋ね致すが、そもじ、この江戸のお人か？」

「？……」

先程橋を渡らせて進ぜようと申出た折とは、別人の如くきびしい表情だつた。

「どうして、そのようなことお尋ねなされますのじや。」

「それがし越前より今日、この江戸へ參つたばかりの在所者ではあるが、人を見る眼は祖父さまから教えてもろうた。……そもじ、武藝の心得があるな？」

はつと女の身構えが變る。

「やつぱりそうか。……御女中、言葉遣いの至らざるは許して下されよ。さきほど亂心者の前を驅け拔けたそもじの足運び、尋常でない。いずれで修行めされたのじや。」

くい入るような視線で見据えられ、思わず乙女の手が胸を抱いて懷劍をまさぐつた。それから、

「貴方さまは？」と訊く。

「今も申した通り、在所より出て參つたばかりの田舍者、名乘るほどの者ではない。」

「……」

「――のう、差し障りないなら申して頂けまいか。うら若いそもじをそれまでに仕込んだ武藝者じや。餘程の人物に相違ござらぬ――」

祖父のすゝめで柳生宗矩の門を敲こう身であるが、何なら、この乙女を仕込んだ人物に師事し

「待たぬか無禮者！……待て。」
源太夫は即かず離れず、追うた。あつという間もない。却つて亂心者が氣を呑まれ、呆氣にとられている間に乙女と源太夫はまんまと前を通りすぎたが、この乙女が、柳生松吟庵の娘だつた……。

逆立ち

橋を無事に渡りきると、乙女は丁寧に禮を述べた。
「何、禮など申されるすじはない。御怪我はなかつたか？」
「……おかげさまで、本當に有難う存じますする。いそいでおりますゆえ、これにて失禮を致しまするが、お名前をお聞かせ願います。」
「姓など名乘るほどの者ではござらん。要らぬことじや。」
源太夫は手を振つた。橋の向うではまだ町民どもが何やらガヤガヤ言つている。女中はその中に取殘された儘である。橋のこちらにも人だかりはしていたのだが、太刀を振りかざした源太夫が驅けて來たのに驚いて四散した。
橋上の亂心者は謀られたとはまだ氣づかぬのだろう、異樣な叫びをあげて、向う岸の人群へ何やら惡態ごとを浴びせかけている。

やがて同じ青年が戻つて來て、
「其許が手の內、ひと先ず拜見致したいとの宗矩が言でござる。直に道場へお廻り願いたい。」
と言う。伎倆試しである。
當然のことと思つて素直に源太夫は道場へ案內された。
暫らく待つていると五十過ぎの一見おだやかそうな人物があらわれ、
「宗矩じや。其許の手のうち見たい。用意を致されよ。」
と言う。
「それがし分けて支度の致しようもござらぬ。これにてお相手を仕る。」
言つて、襷をかけるでもなく、道場の端から靜かに立上つて中央へ進んだ。手に道具を持つていなかつた。
「左樣か。――ならば、十兵衞。」宗矩は玄關に應對に出た隻眼の靑年を振返つて、
「其方相手を致してみよ。」
と言つた。
「はつ。」
他に門弟の姿はない。十兵衞は言われる儘に宗矩の背後から立上ると、
「小松源太夫と申されるか。武具は何を所望じや。槍か？」
「お手前は何を遣われますか？」
「當方袋竹刀にて相手を致す。」

てみたいもの、そう思つたのである。
乙女は、それでもまだ充分の間合を距てておいて、
「別に誰とて師事は致しませぬえ。……父に手ほどきを受けましたのじや。」
低い聲で言つた。
「父上はいずれのお方じや？」
「大和でおじやります。」
「大和？――で、では、そもじ……」
せき込んで思わず二、三歩進み出ると、
「いそいでおりますので、失禮を致します。」
言つて、袂をひるがえし、あつという間に人垣を分けて走り去つた。
「そうか。成程あれが柳生どのの息女か。――そうか。」
感に堪えぬ面持で源太夫はうめき、「じゝさまの申されるは寔であつた。よし、女であれまでに教えられる柳生どのなら、師と仰ぐに不滿はない。修業一途に專念して、きつと、じゝさまに勝つほどになつてみしよう。」
源太夫が柳生家の門を入つたのはそれから間もなくである。玄關で來意を告げ、祖父から託された添書を差出すと、
「暫時、お待ち下され。」
應對に出た二十前の隻眼の武士がチラと一瞥をなげてから奥へ消える。

「チト其方に話がある。後でわしの居間へ來るように。」
そう言つて奥へ入つた。
井戸で汗を流してから、たずねて行くと、
「近う坐れ。」
宗矩は常になくにこやかな笑顔を見せている。
「どうじや。其方も最早充分に使える。旅に出る氣はないか。十兵衛と偕にじや。」
「武者修業でござりますか。」
源太夫が緊張して訊くと、
「隱密よ。」
ずばりと言い、「其の方も心得のある武士、まさか、美和が振舞い知らぬとは申すまい。」
冷笑を口邊に湛えてじつと源太夫を見据えたのである。
忽ち源太夫は表情を失つた。美和というのは一年半前、あの橋を驅け渡つた時の乙女で、宗矩の息女と思つたのが實は柳生村にある松吟庵の娘であつた。いかにもその美和の振舞いなら、源太夫も思い當る。
美和は彼が入門して間もなく江戸を去つて大和へ歸つたが、この數日前、再び父松吟庵の所用をことづかつたと云つて江戸へ遣つて來た。源太夫ははじめ美和の來ていることを知らなかつたが、二、三日あとに、何氣なく道場から屋敷の方へ庭づたいに這入つて來たところ、思いも寄らず乙女が大地に逆立ちをしている。とつさに築山に身をかくし、あられもない所業を見ぬふりで

「ならば拙者も。」

源太夫は壁板の刀架へ戻つて新陰流所定の袋竹刀を取ると十兵衛の前へ戻り、さて稽古試合に及んだ。

これが、問題にならなかつた。

源太夫とて祖父甚太夫から箕裘を継いで、大概の遣い手にならば互角に立合える自信があつた。併し僅かに打つたと思う太刀もことごとくぬけて十兵衛の身にあたらず、まるであしらわれている態である。数合を撃ち合わずして源太夫は「参つた。」と叫び、詫びつしよりになつて十兵衛の妙手に屈した。

「甚太夫どの書面に僞りなし。なるほど、使うな。」

言つて宗矩は十兵衛と視線をあわし、

「其許入門いかにも差し許すぞ。」

こうして小松源太夫は此の日から柳生道場に内弟子となつた。他に稽古をはげんでいたのは後に伊達政宗に召抱えられた狭川新九郎、細川藩に仕えた田中甚兵衛などである。いずれも源太夫には兄弟子と稱すべく、腕も源太夫が遙かに及ばなかつた。併し半年経ち、一年とたつうちに急速に上達をして、翌年の秋には殆んど十兵衛にも三本のうち一本は取れる迄になつた。

そんな或る日、珍しく宗矩自身が他の門弟を差し置いて、源太夫に直々の稽古をつけてくれたあと、

宗矩は相變らず笑いつゞけ、
「然らば隱密の儀、承引致してくれるな？——場所は九州、薩摩じや。」
源太夫が柳生十兵衞に作われて江戸を發足したのはこの年——寛永三年十月である。
「さる事ありて、君の御前を退いて私ならず山にわけ入りぬれば、白から世をのがるると人はうめれど」
と、十兵衞自身が其の著『月の抄』に記している。表向きの目的は、薩摩藩の探索である。十兵衞自身は、この西國隱密の旅に遂に十年餘をついやし、江戸へ戻るのは霞の忍者多三郎の跡を追うた寛永十二年だが、源太夫の方は江戸を發して二年後に、十兵衞の命で一たん大和國柳生村まで戾つた。——其處で、思いがけぬ配偶者を持つた。美和である。
前の章で述べた如く、松吟庵には、二男喜七郎宗房の長子に、後に杖師玄齋と名乘つた柳生源太夫がある。松吟庵には孫に當る。然るに今、末娘美和の夫に小松源太夫を迎え、これに柳生の姓を名乘らせた。小松改め柳生源太夫は從つて養子婿になる。源太夫は、みずからの感情に於て も何一つ美和を拒む理由を見出せなかつたので、請われる儘に年上の妻を娶り、三月餘りを舅の庵室に同居して暮した。そうして寛永五年に、いにしえの緣故で津藩藤堂家に宗矩の推擧に依つて仕えたのである。
この間、例の禁中へ呈上された武藝帳にも名を連ねている。併し、儲君高仁親王の御夭逝に暗躍した一人かどうかはまだ分らない。藤堂家に召抱えられてからの源太夫は美和ともども城内の

濟まそうとしたが、思わず釘づけに立ち停つた。乙女の逆立ちするさえ異なものであるのに、よくよく見れば、彼女のは大地につく手を握りしめての逆立ちで、云えば拳の指に體重をかけて逆立ち、ヒヨイヒヨイその指で歩いて行くのである。

不審はこの時は解けなかつた。

住居の方の所用を濟ませ、再び庭へ廻つて、彼女の逆立ちしていた場所の庭土を何氣なく見ると、怪むべし、拳の指の跡が恰も犬の足跡そのまゝに殘つている。若し彼女に他意あつて、その逆立ちで他家の庭へ潜入しても足跡を見た者は犬が紛れ入つたとしか思わぬ道理だ。源太夫は忍者の所作を目にしたことはなかつたが、忍者が何を爲すかは知つている。もしやと思い、かりにも將軍家光公の兵法師範たる武術家の一族に忍者がいようとも考えられず、不審のまゝに打過ぎて來たのである。

——が、今こそ宗矩の方から、恐るべき謎を解いた。——そう源太夫には思えたのだ。

いかなる魂膽で師がそれを明かしてくれたかは、とつさに判斷出來ぬが、事が事だけに場合によつては向後、源太夫は柳生の祕密を知る者として刺殺されるかも知れぬ。宗矩が「心得ておろう」と云つたのは、いわばその邊の覺悟を促したのに相違ない、と源太夫は解釋したから、一時沈思ののち、

「いかにも美和どのが振舞い拜見致してござる。」

と言つた。

「そうか。」

後に家來たちは「相番衆のうちにも主人亂心の事聞こし召され、取鎭めんとて參られし方幾人もあり、いずれも彼是と遲滯なされ候ところに、源太夫さま造作なく取抑え下され候こと、さすがは御流儀の上手なり。」

と一齊に心服した。亂心者はおしなべて、取り抑える際には、抑える身より亂心者自身の傷つくことが多いのを彼らも知つていたからである。

妙安寺

さて柳生直門の面々のうち、最初に京の地を踏んだのは加賀の笠間又兵衛。――寛永十三年三月十二日夕景のことだつた。

二日後れて毛利の馬木家六が京に着く。ついで佐々木左門と狹川新九郎が伏見街道を上り、加茂川沿いに京へ入つた。數刻おくれ道を京津街道にとつた柳生源太夫が三條に着く。いずれも旅姿。京の町へ入ると前後して、それとなく刀脇差のさやに二つ卷きの紙縒を結びつけた。

加茂川堤を七條大橋に達したとき新九郎が左門に言つた。

「どうやら追つて參らぬ樣子じや。が、いずれは我らが行手に立現われよう。――油斷はならんぞ、左門。」

木津川べりで二人を狙つた多三郎のことである。

武家長屋に住んだ。道場は構えず、大小姓組にて知行百五十石である。源太夫の武邊のほどが藩士たちに認識されたのにはこんな咄がある——。

藩主高虎に從つて江戸に在つた時、相役の小笠原三郎右衛門が具足に兜を着し祕藏の波平の刀を拔いて亂心に及び、住居の二階に取籠められたことがあつた。

三郎右衛門は日頃源太夫と親交があつたから、小笠原家の若黨は源太夫の長屋へ來て主人亂心の由を告げた。

丁度源太夫は寢所で休んでいたときである。話を聞くと、

「その使いの者ここへ呼べ。」

と言つた。若黨が枕元へ來ると矢庭に源太夫は腕首を捉え、その場にねじ伏せて自分の家來を呼び、

「此の者身共が歸る迄あずけ置くぞ。ぬかりなく番をせい。」

と申しつけ、さて衣服をとゝのえて三郎右衛門の長屋へ行くと、若黨の申し條に相違なく、家來などは手に汗して二階の主人の亂心を取り鎭めかねている。見た源太夫は、「案ずることはない。これにて待つておれよ。」と家人に言い殘すと何事もない顔つきでスタスタと二階へ昇り、

「三郎右衛門、この源太夫に一太刀浴びせてくれよ。」

と聲を掛けざまに太刀下をかい潜つて忽ち取つて押えた。その氣配に、追々家來たちもかけ昇つて來たが、既に三郎右衛門は惡夢から醒めた態でガツクリとうなだれている。東軍流を取つてはひとかどの上手だつたのである。

「——それが、女人でな。」

「女人？」

「左様。我ら同様に普化僧姿を致しておる。」

甚左衛門と呼ばれた三十前後の痩せぎすな浪人が、そう云つて、ゆつくり天蓋を脱いだ。

ここは京都池田町の端、妙安寺の庫裡である。何十人と数知れぬ虚無僧が、朝食を済ませ、これから銘々に町へ布施を乞いに彷徨おうと身支度を整えている最中だ。

既に三々五々、打連れて山門を出て行つた者も多いが、まだ随分と虚無僧姿が残つている。いずれも元を洗えば罪科をのがれてこの寺に入つた浪人者だ。由來、虚無僧は尺八を奏して托鉢を受け、菰僧ともいつて禪宗の一派・普化宗に屬した。多く有髪で天蓋を常にかぶる。武士の亡命者もしくは罪を問われる者が、刑罰をのがれるためこの群に投じたが、京都に於ける其の本山が妙安寺である。慶長十九年、幕府は浪人の取締策として『虚無僧掟書』なるものを作り、多少特典を與えて彼らに宗門組織を許した。主家を逐われたもの、主家の滅亡で浪人した勇士などが不穏の暴擧をなさぬよう一時の隱家として妙安寺や關東小金の一月寺に入門すれば特別の扱いを差許す——自由に旅をさせ、帯刀を赦すという特典である。從つて武士でなければ門に入るのは許されないから、常の物乞いと異り、彼らのうちには屢々大物の世をあざむく姿もあつた。

さてその虚無僧の一人が、托鉢に寺を出ようとした處で、同じ普化僧姿ながら紛れもない女人から多三郎なる九州浪人が寺に居ないかと問われたという。

「何、何、多三郎を尋ねておるというかい？」

左門は念のため背後をすかし見たが、
「この町中で、まさか騒ぎ立てても來まい……お宅、では行くか？」
京へ入れば各自が別行動をとる。朝、奈良を發足したから日はもうとつぷりと暮れている。早い月が空に懸り、くつきり二人の足許に影を落した。
先ず新九郎が如何にも鄭重な會釋をして對岸へ橋を渡つて往つた。鞘の先に結んだ白い紙綫が仄白い絲を曳いて彼方に消えるのを見送つてから、暫らく尚も其處にイみ左門はそれとなく四園の様子を窺う。
別に、兩者の訣れるのに怪訝の視線を注いだ者もない様子だ。
左門の左手は心持ち差料を帶からおし上げた。一葉浮水の構えを取る手段である。あたりに多三郎の姿は見えぬが、相手は忍者のことで何時闇から飛鳥の如く襲い來ぬとも限らない。ゆつくり、編笠を搖らして左門は東山五條へ向つた。

「おい日下、おぬし生國は九州と申したな？」
「いかにも。」
「大月多三郎というを、知らぬか。」
「大月？……知らぬが——」
「何事じや甚左衛門？」
「む？……ナニ、身共が表へ出ようと致すと、大月多三郎というを知らぬかと呼びとめられた

天蓋をかぶつた左手に、手首が無い。

「イヤ何、チト仔細がござつてな。……それより女人まだ門前におり申そうや？」

會釋するのももどかしげに七間へ降りて草鞋を穿くと、出入口を前後して出ようとする他の虚無僧の肩を押しのけ、「暫らく。……し、暫らく。」身をすり拔けて外へとび出す。

「あやつ、何者じやい？」

あとに殘つた日下(くさか)某というのが、天蓋をかぶりながら不快げに甚左衛門へ訊いた。

「それがしも一向存じ寄らぬが、何にしても粗忽な奴――」

すると後ろに聲あつて、

「あの新入りなれば知つておるぞ。」

大聲で食膳から喚いた者がある。

「江戸の大久保彦左衛門どの屋敷に居つたとか申す奴じや。當人の口より聞いたゆえ、あてにはならんが。」

「併し、大久保どのと申せば旗本肝煎(きもいり)とて聞えた御仁。その屋敷に居候かなうほどの者が何ゆえ又、かような處に仲間入り致して參つた？」

「そこ迄は知らぬがのう。當寺へ參つたは確か一昨日(おとゝい)じや。何でも、昔の朋輩とやら申すはしこげな浪人者と同道であつた。」

「その朋輩は、おらぬか？」

「さテ……」

彼らが話しあつている少し後方の板の間で、今しもめしを濟ませた一人が、話を耳にするなり差料を摑んでそばへ寄つて來た。
「尋ねたが女人というは、ま、まことか？」
と訊く。太刀を引摑んでいるのは右手だが、差料は常の武士のものと變らない。まだ虚無僧になつて日が淺く、充分支度の出來ていない證據だ。
「いかにも女人じやが、お主、大月多三郎とやらに、心當りがござるのか？」
甚左衞門というのが、相手の身支度をジロリと一瞥した。
「べ、別に心當りと申すほどではないが、拙者、大月とやらよりその、女、女人に心當りがござる。――まだ、門前に居り申すかい？」
「お手前は？　當寺に見掛けぬ御仁じやが、いずれより參られた？」
どうせこういう社會に身をかくす面々だから、お互いに、名を尋ねても本名を名乘る筈はない。それでも符牒めいた呼び掛け方は必要だから、「九州の」とか「備前の」と、土地を名前がわりにして呼ぶ。餘程親しくなければ甚左衞門などと、名はあかさぬのが建前である。尤も、これとて何處まで本名かは當人以外に知る筈もないが、それにしても、甚左衞門と呼ばれた浪人が此の妙安寺でかなり古顏であることだけは明らかだろう。
「拙者か？……え、江戸より參つてござる。」言つて、慌て氣味にすつぽり急に天蓋をかぶつた。
見て一人が目を据えた。
「や。おぬし其の手は？……」

女性の方は併し、他の虛無僧たちにこの有樣を見られるのは却つて迷惑そうな樣子だつた。黎左衞門と出會つた以上は、少しでも、自分が何者かは人に知られたくないのであろう。
「それにしてもそもじ、どうして我ら此處に在るを、」
「では、多三郎さまも一緒かえ?」
「おゝ一緒じや。何さま京へ着くまではそもじも知られる通り旅姿であつたに、急にかような恰好をせいと云うで、はつはは……併し、おなつかしゆうござるのう。」
「シテあの、……多三郎さまは寺にいやるのか?」
「ひと足ちがいであつた。」
「え?」
「今朝ほど早くにな、夕刻までには立戻るとやら申して出掛けてござる。——何、行先は身共、知らぬでもない。」
「何處じや? 教えてたもれ。……ど、何處じやえ?」
山門を出た虛無僧たちが怪訝そうに二人の立話を見まもつて出て行く。中にはその儘で立停り見ている者もある。
天蓋に覆われ相手の顏の見えぬのが却つて女虛無僧には不安のようだつた。
多三郎の行先を黎左衞門が言い澁つている樣子に、堪えかねたか彼女は手を捉えて人氣のない塀のはずれへ引張つて行つた。
もともと妙安寺の在る池田町は、有名な三十三間堂の南門の外にあたる。少し行くと耳塚があ

彼らが話しあつている少し後方の板の間で、今しもめしを濟ませた一人が、話を耳にするなり差料を摑んでそばへ寄つて來た。

「尋ねたが女人というは、ま、まことか？」

と訊く。太刀を引摑んでいるのは右手だが、差料は常の武士のものと變らない。まだ虛無僧になつて日が淺く、充分支度の出來ていない證據だ。

「いかにも女人じやが、お主、大月多三郎とやらに、心當りがござるのか？」

甚左衞門というのが、相手の身支度をジロリと一瞥した。

「べ、別に心當りと申すほどではないが、拙者、大月とやらよりその、女、女人に心當りがござる。——まだ、門前に居り申すかい？」

「お手前は？　當寺に見掛けぬ御仁じやが、いずれより參られた？」

どうせこういう社會に身をかくす面々だから、お互いに、名を尋ねても本名を名乘る筈はない。それでも符牒めいた呼び掛け方は必要だから、「九州の」とか「備前の」と、土地を名前がわりにして呼ぶ。餘程親しくなければ甚左衞門などと、名はあかさぬのが建前である。尤も、これとて何處まで本名かは當人以外に知る筈もないが、それにしても、甚左衞門と呼ばれた浪人が此の妙安寺でかなり古顏であることだけは明らかだろう。

「拙者か？……え、江戶より參つてござる。」言つて、慌て氣味にすつぽり急に天蓋をかぶつた。

見て一人が目を据えた。

「や。おぬし其の手は？……」

さを思い出したのである。

「誰とお思いじやえ？」女が又訊いた。

「さればゝそもじを赤面させせるは心苦しいが、……あの時もそもじ、虚無僧すがた致されておつたのう？――」

「……」

默つている。

天蓋をかぶつた同士の對話なので聲がどうしても高くなる。

いつとなくうしろに今一人の虚無僧が尾けていた。

「忘れはせん、そもじが麻生の吉郎とやら申す下郎の背に負われて行く、と申されるゆえ、よしなく別れは致したがの、ずつと心にかけておつたわい。」

「……よく、よく覺えておいでじやな。」心なしか面を伏せ氣味に言つた。

「當り前じや。こう見えても拙者、一日たりとてもそもじがこと忘れは致さんに。……ふゝ。まことでござるぞ。」

道は耳塚から一すじに北へ向い、いつとはなく六波羅蜜寺の前をすぎる。相變らず一定の距離をおいて、虚無僧が二人のあとにつゞいている。

「それにしてものう、そなた、どうして我らが妙安寺に在るを知られたのかい？　京へ來るとはあの時申されておつたように記憶は致すが……」

「……千四郎さまに聞きましたのじや。」

彼らが話しあつている少し後方の板の間で、今しもめしを濟ませた一人が、話を耳にするなり差料を摑んでそばへ寄つて來た。

「尋ねたが女人というは、ま、まことか？」

と訊く。太刀を引摑んでいるのは右手だが、差料は常の武士のものと變らない。まだ虛無僧になつて日が淺く、充分支度の出來ていない證據だ。

「いかにも女人じやが、お主、大月多三郎とやらに、心當りがござるのか？」

甚左衛門というのが、相手の身支度をジロリと一瞥した。

「べ、別に心當りと申すほどではないが、拙者、大月とやらよりその、女、女人に心當りがござる。――まだ、門前に居り申すかい？」

「お手前は？　當寺に見掛けぬ御仁じやが、いずれより參られた？」

どうせこういう社會に身をかくす面々だから、お互いに、名を尋ねても本名を名乘る筈はない。それでも符牒めいた呼び掛け方は必要だから、「九州の」とか「備前の」と、土地を名前がわりにして呼ぶ。餘程親しくなければ甚左衛門などと、名はあかさぬのが建前である。尤も、これとて何處まで本名かは當人以外に知る筈もないが、それにしても、甚左衛門と呼ばれた浪人が此の妙安寺でかなり古顏であることだけは明らかだろう。

「拙者か？……え、江戸より參つてござる。」言つて、慌て氣味にすつぽり急に天蓋をかぶつた。

見て一人が目を据えた。

「や。おぬし其の手は？……」

「む？　そ、それは申上げかぬる。」
黎左衛門あわてて胸を反らし、女虚無僧から離れた。――多分に、策謀なるものが何かは夢にも知らぬ趣きがある。
「多三郎さまは、では、獄舎へ忍び入っておじゃるのかえ？」
「さ、左様――」
「何處の獄舎じや？」
「それが確とはそれがしにも分り申さん。たゞ今夕酉ノ刻までに六角堂にて待つよう多三郎は申すで……や、あ奴、何者かい？」
前方のとある辻を指さして黎左衛門は奇聲をあげた。
丁度建仁寺の上塀をすぎて祇園町にさしかゝつた四つ角である。
辻のこちらに身をひそめ、今しも横通りから遣つて來る何者かを待伏せる身構えの男があつた。後姿で顔は見えぬが、一見して野袴の色褪せた旅裝の武士である。大きな深編笠をかぶつている。
誰を待伏せるのかは無論分らぬが、半歩、足をひらいて體をきめた。刀に手をかける不樣な擧動には出ぬ。併し多少心得のある者ならそれが拔討ちの手段とは讀める。
黎左衛門が夕姫と思い込んでいる女虚無僧も辻へ頭をめぐらしたが、その前にチラと後ろに尾けている例の謎の人物へ再び合圖を送つた。彼方で天蓋が點頭するのを見とゞけてから、辻を見返つたのである。

彼らが話しあつている少し後方の板の間で、今しもめしを濟ませた一人が、話を耳にするなり差料を摑んでそばへ寄つて來た。
「尋ねたが女人というは、ま、まことか？」
と訊く。太刀を引摑んでいるのは右手だが、差料は常の武士のものと變らない。まだ虛無僧になつて日が淺く、充分支度の出來ていない證據だ。
「いかにも女人じやが、お主、大月多三郎とやらに、心當りがござるのか？」
甚左衞門というのが、相手の身支度をジロリと一瞥した。
「べ、別に心當りと申すほどではないが、拙者、大月とやらよりその、女、女人に心當りがござる。――まだ、門前に居り申すかい？」
「お手前は？　當寺に見掛けぬ御仁じやが、いずれより參られた？」
どうせこういう社會に身をかくす面々だから、お互いに、名を尋ねても本名を名乘る筈はない。それでも符牒めいた呼び掛け方は必要だから、「九州の」とか「備前の」と、土地を名前がわりにして呼ぶ。餘程親しくなければ甚左衞門などと、名はあかさぬのが建前である。尤も、これとて何處まで本名かは當人以外に知る筈もないが、それにしても、甚左衞門と呼ばれた浪人が此の妙安寺でかなり古顏であることだけは明らかだろう。
「拙者か？……え、江戸より參つてござる。」言つて、慌て氣味にすつぽり急に天蓋をかぶつた。
見て一人が目を据えた。
「や。おぬし其の手は？……」

あとは獨り言だ。それとなく臍下に氣合をいれて、更に二、三歩前へ進んだ。
丁度その時、辻をまわつて人物の姿が見えた。深編笠の肩がピクリと痙攣したかと見えたのと辻を曲つた人物の體が跳躍して向うへとび退つたのが同時だ。
「何者じや、名乘れ。」
と言つた。
同じような旅姿をしている。三十前後に見える。笠はかぶらず、差料の鞘に紙撚が卷いてあつた。
深編笠が何か言つたが聞きとれない。
其の後、暫らく兩者は無言に睨み合つている。少しずつ、用心をして黎左衛門は近づいていつた。それを見送り女虛無僧が又うしろを振向いた。相變らず、微かに天蓋の首を振つて謎の人物は尺八を吹いている。嫋々とその餘韻は風に乘つて殺伐の氣をはらむ辻へ流れた。
「……おのれ、この身に斬り込める自信あつての挑戰か。――名乘れ。」
相手は刀の鍔を拇指でジリ、と押上げて、訊いた。
深編笠は無言のまゝ兩股を一そうひろげ出した。それからじりじり右足を前へ、左を後方に退いて斜に構え柄に手をかけ、
「いかにも其方肥後の田中甚兵衛と承知の上の挑戰じや。かく云うは鈴木兵庫が直門井元庸之介富江、いざ勝負せい。」
と言つた。

彼らが話しあつている少し後方の板の間で、今しもめしいを濟ませた一人が、話を耳にするなり差料を摑んでそばへ寄つて來た。

「尋ねたが女人というは、ま、まことか？」

と訊く。太刀を引摑んでいるのは右手だが、差料は常の武士のものと變らない。まだ虛無僧になつて日が淺く、充分支度の出來ていない證據だ。

「いかにも女人じやが、お主、大月多三郎とやらに、心當りがござるのか？」

甚左衛門というのが、相手の身支度をジロリと一瞥した。

「べ、別に心當りと申すほどではないが、拙者、大月とやらよりその、女、女人に心當りがござる。――まだ、門前に居り申すかい？」

「お手前は？　當寺に見掛けぬ御仁じやが、いずれより參られた？」

どうせこういう社會に身をかくす面々だから、お互いに、名を尋ねても本名を名乘る筈はない。それでも符牒めいた呼び掛け方は必要だから、「九州の」とか「備前の」と、土地を名前がわりにして呼ぶ。餘程親しくなければ甚左衛門などと、名はあかさぬのが建前である。尤も、これとて何處まで本名かは當人以外に知る筈もないが、それにしても、甚左衛門と呼ばれた浪人が此の妙安寺でかなり古顏であることだけは明らかだろう。

「拙者か？……え、江戸より參つてござる。」言つて、慌て氣味にすつぽり急に天蓋をかぶつた。

見て一人が目を据えた。

「や。おぬし其の手は？……」

いぞ。ま、此處のところは、仔細は如何にもあれ、身共にお委せを願えまいかい。」

それから小半刻後——。

「どうでござる。あの時の身共が振舞い、……チト差し出ておつたでござろうかのう。」

小鼻を蠢かせて黎左衛門は隣りの女虚無僧をかえり見た。天蓋につゝまれ表情は見てもらえぬが、今や得意の絶頂である。鼻に汗まで浮かせて紅潮しているのだ。

「わらわはお美事じやと思いますぞえ。でも、あの一人は、お前さまの敵と申されていたではおじやらぬか。」

「さ、されば、それがしも當初は左樣思い申したが、話しぶりがどうも見込み違いであつたで、……ハツハハハ……それにしても、案外素直に拙者が言を首肯して引分けてくれよつたは愉快。——全く、仲裁は時の氏神と申すが、蓋し至言でござるな。ハツハハ……」

道は四條通りから堀川に沿つて二條城へ向つている。相も變らず一定の距離をおいて今一人の虚無僧姿が、尾けているが、黎左衛門は露知らなかつた。

小橋を渡つた。巧みに女虚無僧は黎左衛門がフト川沿いの虚無僧姿を見とめぬよう、すつと傍らへ寄つて來る。

「京の土地にはお詳しいのかえ？」

話しかけた。その時の足運びが乙女にしては意外に敏捷であつたのに黎左衛門が氣づけばよかつたのである。

彼らが話しあつている少し後方の板の間で、今しもめしいを濟ませた一人が、話を耳にするなり差料を摑んでそばへ寄つて來た。
「尋ねたが女人というは、ま、まことか？」
と訊く。太刀を引摑んでいるのは右手だが、差料は常の武士のものと變らない。まだ虛無僧になつて日が淺く、充分支度の出來ていない證據だ。
「いかにも女人じやが、お主、大月多三郎とやらに、心當りがござるのか？」
甚左衞門というのが、相手の身支度をジロリと一瞥した。
「べ、別に心當りと申すほどではないが、拙者、大月とやらよりその、女、女人に心當りがござる。――まだ、門前に居り申すかい？」
「お手前は？　當寺に見掛けぬ御仁じやが、いずれより參られた？」
どうせこういう社會に身をかくす面々だから、お互いに、名を尋ねても本名を名乘る筈はない。それでも符牒めいた呼び掛け方は必要だから、「九州の」とか「備前の」と、土地を名前がわりにして呼ぶ。餘程親しくなければ甚左衞門などと、名はあかさぬのが建前である。尤も、これとて何處まで本名かは當人以外に知る筈もないが、それにしても、甚左衞門と呼ばれた浪人が此の妙安寺でかなり古顏であることだけは明らかだろう。
「拙者か？……え、江戸より參つてござる。」言つて、慌て氣味にすつぽり急に天蓋をかぶつた。
見て一人が目を据えた。
「や。おぬし其の手は？……」

普化僧だ。

「まずい奴がおるわ。」

　祕かにつぶやいたが、そこは小心者の虚勢で、

「おーい。それにおるは誰かい。身共は川野黎左衞門――過日江戸表より參つて寺に厄介の身じゃ。おぬし其處で、何をしておるかい。」

　大聲に呼びかけた。途端に、來るでなく去るでなかつた件（くだん）の虚無僧は、ツカツカと步をいそがせて黎左衞門の身近かに來ると、

「卒爾ながらお手前、江戸は大久保彦左衞門どの屋敷におられたか？」

　錆びのある、武道で鍛えた聲である。

「左樣。お手前は？」

　無意識に女虚無僧を背後へかばう。

「お手前が確（しか）と大久保家に寄食なされておつた仁なれば、些か、お手渡し申したい品がござる。某（それがし）けつして怪しい者ではない。お二人ながらこちらへ、チト參つて頂けぬか。」

　濠端のきわまで誘つた。

「何を渡そうと云われる？」

　うしろ手に確乎（しつか）と女虚無僧の手を取つて言われる儘について行くと、突如、聲もなく背後で手をふり拂われた。

「？」

「詳しいとは申し兼ねるがの、何さま備前を浪人致してより、ずい分と仕官のあてを求めて諸所を流浪いたしたでのう。……過ぐる年、この京には暫らく住んでおり申したわい。」

「……」

「そもじは、どうじや？」

「わらわは知りませぬ。多三郎さまと落合う六角堂はもう間もなくか？」

「何を申される。さいぜん、此處が六角堂じやとお教え致したに。――ふン、そ、それほどにそもじ多三郎が忘れかぬるかの。」

「いやな人じや。ホホ……」

「む？　む？　すりや、そもじこの川野黎左衞門と多三郎めのいずれを……」

さすがに好きかとは質しかねるが、相手の天蓋がユラリと搖れ、うなだれるのを見て、

「そ、そうじや。のう、このそれがしにそう何時までも面をかくされること要るまいに。東海道の途次にてさんざん見せてくれた顏ではないかい。なつかしゆう思いつゞけて參つたぞ……さいわい、アレに二條城が見える。濠に臨めば餘人には見えぬで、横顏なとと見せて貰えんか。……拙者どうも、そもじがいとしゆうてならん。……」

言いながらも、袖を引かんばかりに促して足早やに進んだ。

一丁も行けば道は豁然とひらけ二條城の濠端に出る。其處で、人目のない場所をさがすため前後を見廻して、

「？……」はじめて今一人の虚無僧姿に氣がついた。一見して、同じ妙安寺から托鉢に出ている

縛したのは勝重である。

且つ勝重は捕えた者を悉く斷罪に處して首を加茂川原に曝した。併し庶民に對しては公平、擁容力めて之を綏服したと平安通史に曰う。更に同通史に據れば、

「勝重の職に在ること廿年、恩威並び行い、裁決流れるごとく、これを以て府に滯案なく獄に淹囚なし。」と稱された。上下能く新政に服したわけだ。元和六年、職を辭したが秀忠は後任なき事を理由に聽かず、强請して其の後任を推薦せよと言つたところ、勝重は對えて、

「それがしに强いて選べとならば、兒の重宗あるのみでござる。」と云つた。秀忠は大いに欣んで重宗を召して、固辭するのを肯かず遂に二代所司代をつとめさせたのである。

重宗は周防守となつて、職を襲ぐに及んで封五萬石を受け、從四位上に陞敍した。重宗の在職中にこんな咄がある。

所司代は京師警固の他に訴訟をも裁くが、或る時家臣の茶屋某に問うて、

「我の裁きを人は何と申しておるか。」と訊いた。茶屋は、

「ありていに言上致してようござるか?」と言う。

「申せ。」

すると茶屋は、重宗が白洲に居る者に對して常に餘りに謹嚴すぎるゆえ、庶民は往々畏れをなしその實をも時には白狀しかねると言つた。

聞いて重宗は大いに悟り、其の後は法廷に臨んでも訟を聽くときは紙障子を隔てて訴人の顔を見ず、內らにあつて茶を挽き、默坐靜思して、全く愛憎を去つて實を探り曲直を斷じたという。

驚いて振向いたのが運のつきである。ふわりと空中に身の躍るのを自覺した時には、片腕をパツと摑んで腰投げに濠へ投げ飛ばされていたのだ。

「ひえーつ……お、おのれは何をするんかい。」

悲鳴ともつかず叫ぶ口が、ガブリと水を噉んだ。水音が濠端に立つ二人のもとへ鈍く返つた。

恐らく、あとも見返らず、互いに頷きあつて立去つた筈の二人に、だが思いがけぬ注視の目がそそがれた。偶々城門を出かかつていた所司代板倉重宗が、この光景を見たのである。

重宗は初代板倉勝重の子で、徳川幕府を或る意味で三百年の安泰においた父に劣らぬ人物だつたと云われる。

そもそも父の勝重は、徳川譜代の臣だが、はじめ僧となり、尾張の永安寺に居て宗哲と稱した。それを家康が召還し、歸俗せしめて板倉氏を嗣がせたのである。即ち一代の傑物伊賀守勝重が誕生する。

勝重は身を緇林より起し、書史に通じ、且つ性深沈で幹事の才あり、天正十四年には駿府奉行に任じ、ついで江戸地奉行、町奉行となり、武藏に於て萬石を食んだ。京都所司代の役に就いたのは慶長六年五月である。

時に戰亂の世もあらかた靜まつたが、衆心まだ平和になずまず、やゝもすれば口を豐臣氏に藉りて異議を唱える者が多かつた。殊に大坂の陣が起るや豐臣氏の客は多く京都に入つて或いは民家に火を放ち、或いは家康を狙撃せんとしたが、これを未然に阻止したのは兵法者柳生宗矩、捕

所司代（二）

重宗の言葉のおわらぬうちに原田菊三郎以下數人が濠端を走る。
大手門から虛無僧の前までほゞ二丁餘の距離がある。
數人の駈けつける跫音に、ゆつくり、虛無僧二人はあと返つたが、ふと大手門前に馬上姿の所司代重宗をみとめるとビクツと肩をすくめた。
「――拙い。そなたは無言でおれよ。よいか。」
黎左衛門を蹴落した方が素早く囁きかけて背後に庇うと、駈けつける原田菊三郎を屹乎と見る。女虛無僧は、その間に兩の手を耳わきから天蓋へ差し入れ、何やら手を動かしたと見る間に、うなじを傳つて背へ黑い物がすべり落ちた。――女の長髮である。黎左衛門が夕姫と思い込んでいたのは實は女裝の武士だ。
菊三郎が駈けつけた。
「その方たち不審の儀にて相調べる。我らともどもあれへ罷り越されい。」と言つた。
「あれ？……あれとは奈邊でござるな？」
「控えい。あれにおわすは所司代板倉周防守さまじや。おのれ薦露の分際で……」
與力の一人が氣負い立つて踏み込もうとするのを、

以後庶民たちは重宗を敬愛すること慈父の如くであつた。又、或る時家光が重宗と弟の重昌の才を試すため、偕に一事を決せしめた。重昌は即座に答を出した。重宗は數日をついやして後、答えた。その解答が同じだつた。人々は皆重昌の卽答を稱したが、父勝重ひとりは、重宗こそ凡ならずと褒めたという。――こういう重宗である。所司代の要職にあること三十餘年、一意徳川氏のために圖り、

「京畿を鎭して庶民を撫綏す、治績もつとも顯著なりしと雖も朝廷に對しては往々壓制を加え、其の權力をそぎ、當時の公卿皆竊かに之を惡むという。」と日本野史に書かれている。

云えば總府の安泰を專一に心掛ける點では一時期、柳生宗矩と呢んだが、皇室に對しては正反對の立場にあつた。その重宗が、城を出ようとして一虛無僧の濠へ墜ちるのを見たのである。

「菊三郎、馬とめい。」

重宗に供奉する一人、原田菊三郎に命じて馬上に立つと、

「あの兩人召捕えい。」

左右の與力をかえり見て言つた。

「よいか、只の鼠ではない。心して懸れよ。」

と言つた。

菊三郎は無論だが、他の者も穴のあくほどまじまじ顏を見入つた。普化僧は浪人者の境涯ときまつているのに、相手の月代は綺麗に剃られ、どう見ても譜代の旗本か、何處ぞ歴とした家中の士である。

氣の利いた同心の一人は踵を返してツカツカと濠ぎわに進み、念のため足下を覗き込む。二條城はもともと軍事上の要害を目的として築かれたものでなく、將軍家の京都在住中、邸宅にあてられるのが目的で構えられたものだから、城郭風に造られてはいるが、規模小さく、且つ濠も淺い。過つて落ちたにしろ一命に別條あるわけがない。

倖い、川野黎左衛門は水練の立およぎが殊のほか巧みで、座敷の上を餘人の歩くぐらいにゆるやかに見えたというが、その立泳ぎで故意に濠の中央へ虚無僧の樣子を見とゞけるため泳ぎ出していたのである。

「おのおの方、……そやつ怪しからん。無禮者でござるぞ。召捕えて下され、召し――」

聲を大にして叫んでいる。その頭髮は月代がのび、紛れもない浪人者だ。

菊三郎は同心の一人を振返ると直ぐさま黎左衛門を扶け上げよと命じた。それから又虚無僧に向き直り、

「委細は、所司代御前にて言上いたされるがよかろう。我らの役目は、其許ら二人ながら連れ参れとの命でござる。――さ、參られぬか。」

と言つた。

「待て。」
さすがに菊三郎は落着いている。
「我らは所司代板倉さま家來にて原田菊三郎と申す。其許達の所業、いさゝか不審のすじあり取調べよとの命でござれば御同道願いたい。」
「これは異なことを承るが、我らの所業何を以て、不審と云われるか。」
「その儀なれば所司代直々にお取調べがあろう。我らは主命に據つて其許らを連れ申す迄。――若し、たつて、同道ならぬとあらば役目柄召捕え申すが、よろしいか？」
所司代附きの與力が普化僧に對する態度としては丁寧すぎる言葉使いである。菊三郎は、主人重宗の重厚の人柄を知悉している。――それが、只のねずみではないぞ、と念を押されたからよくよくの相手と見たのだ。
虛無僧はしばらく默り込んだ。相變らず、先程まで女と見られた今一人を背後に庇い立つている。
やがて、何を思つたか自らの天蓋を靜かに脫いで、
「身に覺えもなく召捕えられるは甚だ迷惑。いかにも同道致そうが、それがし一人で事足り申そうな？」
天蓋を脫いだ顏は色の白い意外に物やさしい侍である。二十四、五に見える。それが口許に皮肉な微笑をうかべ、
「……それとも、濠に落ちたあれなる虛無僧、同道致せとの御命令か。」

座敷の障子を開き放つて重宗が座に着いた。背後に六曲一雙の屛風を立て、何を思つてか、裃を脫ぎ平常着に寛ろいでいる。それだけに裁下神明と稱された炯眼のこの所司代の意中が友矩には薄氣味惡かつたろう。

重宗が座につくと倂し友矩は眞直ぐ視線をあげて目を見入つた。時に板倉重宗四十九歲。別に緣側には佑筆茶屋六左衞門が机を据え、となりに原田菊三郞が控えている。

重宗は先ず黎左衞門、友矩の兩脇にかしこまつた中間(ちゆうげん)をひき退らせた。

それからあらためて、

「兩人おもてをあげい。」

と言つた。無氣味なほど穩やかに低い聲だ。

友矩は頸(うなじ)を反らした儘である。黎左衞門だけが、ぽとりと一滴、ひたいから雫を落して、寒さにふるえながら顏をあげた。唇が紫に變色している。

「其の方、いずれの生國にて何時より普化宗に入つたな？」

先ず黎左衞門に下問した。

「……さ、されば、それがし生國は備前にて、もと池田宮內少輔さま家來川野黎左衞門と申す者。いさゝか事情がござつて主、主家を浪人致し二年前より江戶大久保彥左衞門さま屋敷に寄食致しおりましたるところ――」

「それはよい。いつから妙安寺へ入つたかと申しておるのじや。」

「さ、されば、昨秋、ゆえあつて江戶大久保彥左衞門さま屋敷を立退きましたる砌(みぎ)り、餘人にす

その時である。矢庭に虚無僧がうしろを振返り、

「おのれ、その方が無様のため要らざる詮議を受ける。この身の一分立たぬわ。くたばれ。」

叫んで、手の尺八で打擲に懸つたのだ。

ひらりと相手は身を躱した。水際立つた早業で、餘程の修業を積まねばこれだけの機敏さは身につかぬ。

「亂暴をなされては當方こそ迷惑至極。本來ならお手前と此の場にて勝負をいたすべきところ、上の御詮議ある其許ゆえ此處は引きさがり申すが、他日、かならずこの結着はつけ申すぞ。」

云つたと思うと、

「待て。」

菊三郎が呼びとめるのへスルスルと後退して、

「所司代どのへよしなに申し傳えられよ。それがしいさゝか世を憚る身なれば、――御免。」

一禮するや天蓋を目深に下げてパツと身を飜し駈け去つた。同心二、三人が追跡したが忽ちに距離をはなされた。

黎左衞門と連れ立つていたあのたおやかさからは想像もされぬ身輕さである。

一時後。

二條城の北にある所司代の官邸廣庭に虚無僧二人が引据えられた。

一人は漏れ鼠の川野黎左衞門。一人は巧みに女装の又十郎を遁した兄友矩である。

なさ奴、何卒――」

「虚無僧姿いたした女人、と識合つたと申すか。」

「いかにも。」

「まことか？」

「斷じてまことにござるわい。」

チラと重宗は緣側の菊三郎を見た。

「先程にげた虚無僧がその節の女人と間違いないと申すのじやな。」

「左樣――」

「證據は？」

「さ、されば、妙安寺へそれがしを尋ね參つてくれたが何よりの證據にござる。拙者、話まで致したに――」

「分つた。今ひとつ訊くが、その女人の身許のほどは存じておろうな？」

「そ、それは……」

「有體に申さば其方たゞちに釋放致す。謂わば内分の調べじや。かりにも將軍家お屋敷へ無斷に立入つたる儀、表立てて詮議致さば極刑にも處すべきところ。……それとも、あくまで女を庇い斷罪に處せられたいかな。どうじや？」

「も、申しまするわい。何でも、永井信濃守さま奥に仕える女中とか、當人より打明けられてござる。」

すめられ申して下總一月寺に入り、舊臘、朋輩にすゝめらるるまゝ、」
「京へ參つたか？」
「左、左樣でござる。」胸をはつた。
重宗はフト嗤つた。いたぶつているようにも見える微笑だつた。――が、
「其方は？」
友矩へ注いだ目は底光つている。
「それがし美濃の浪人にて大崎十左衞門、父は結城氏に仕え嘉左衞門と申す。」まじろぎもせず低聲に答えた。
「そうか。」
重宗は凝乎と見据えてから、再び黎左衞門に向いて、
「その方お濠にはまつたは何故じやな。仔細あれば申してみよ。」
と言つた。
「されば。」
重宗がニコニコしているのに勇氣を得て黎左衞門の口は俄然なめらかになる。
「實はそれがし江戶表より京へ參る途中、東海道知立の宿近くにて、虛無僧姿を致す不思議の女人と相識つてござるが、途中にて行きはぐれ、別れ別れになり申したところ、今朝ほど、わざわざそれがしを妙安寺に訪ね吳れ申した。されば連れ立つて濠端ちかく迄參つたるに、突如、こ、これなる無禮者がそれがしを欺き濠へ蹴落しくさつてござる。所司代どの、かゝる無禮きわまり

幾らもある筈。如何なる意圖にて當所附近まで參つたのじや。申せ。」
聲は取調べの初めと相變らずおだやかに低い。口許には幾らかの薄笑いさえまだ浮べている。それでいて、黎左衛門には今は膽の冷えるほどその薄笑いが恐ろしかつた。
「べ、別に含むところあつて參つたのではござらん、所司代どのも知らるるがように、我ら、た、た、托鉢致すが虚無僧のならいなれば當然――」
「それで知らざるうちに濠端近くまで參つておつたと申すか？」
「御意。」
「原田――。」
重宗はゆつくりと緣側をふり向いた。
「見かけに似合わずとぼけ樣に妙を得た奴じや。已むを得ぬ。二條城城代支配へ改めて差し廻す。さ、繩をかけい。」
「はつ。」
「ま、ま、待つて下されい。……」
狼狽して顏色を失い、あわてて黎左衛門は中腰になつたが、
「たわけ者、ひかえぬか。」
重宗は大喝した。障子がふるえるほどの激しさだ。
「さきほどより隨分と情けをかけ垂問致しておる。もはや容赦は致さぬ。さがれ。」
「ま、待つて下され。申します。拙者實は、ま、待つてくれい、何をかくそう此の黎左衛門實は

聞いてさつと重宗の顔色が變つた。

「永井信濃守どのとな?……」

うめくようにうなずくと、

「然らば今ひとつ最後に訊こう、これに返答致せば其方直ちに釋放じや。よいな。」

京都を守護すべき所司代の隷下に、禁裏御附の侍（さむらい）というのがある。與力十騎、同心四十八人が之に附屬するが、下に禁裏賄頭（まかないがしら）、御勘定使、買物使などの職あり、これと禁裏火番の役には高槻、膳所、龜山の大名とともに淀藩永井信濃守家臣も一隊となつて皇居の警備と消防の任に當つている。

重宗は、黎左衞門が夕姫から出まかせに言われたことを眞にうけて今、申述べているのだとは知る由もないが、永井信濃守の息女清姫に就いては多少知るところがあつた。加えて、江戸の松平伊豆守と所司代は密接の間柄にあり、伊豆守からの情報で、武藝帳なるものを繞つて柳生一門の暗躍のしらせも得ているのである。柳生武藝帳が如何なるものか重宗はまだ知らぬが、昨夜、何者かが禁裏に忍び入つて警士に取抑えられた。拷問にかけてもまだ姓名身許一切を明かさぬので、如何なる意圖での禁中潜入かは不明だが、疑えば思い當るふしがある。そこへ、武藝帳にかかわりあるらしい清姫の名が出たから重宗は顔色を變えた。

「川野黎左衞門と申したな。よいか、今ひとつ予（よ）が問いに返答致せよ。――其方、何用あつて其の女虛無僧とやらを伴いこの二條城へ參つたか? 妙安寺は三十三間堂の近く、久々に對面しての散策としては、道のりがチト遠すぎは致さぬか。況して、語らいの意圖なれば他に適當の場所

六十六部

二日前のことである。

友矩が奈良三條通りの杖師・玄齋の居宅で千四郎を取逃したあと、京へ入つて間もなくゝのことだ。

有名な清水寺に詣で、『勝軍地藏』ならびに『勝毘沙門』に宿願成就のひそかな祈願をこめ、境内を出かゝつたところでフト氣づくと、十間ばかり前方を同じように二王門から出て行こうとする六十六部姿の老人があつた。

六十六部というのは、もと行脚僧が法華六十六部を書寫して日本六十六箇國を遍歴し、其の靈場に各一部ずつを納めたところから出た呼稱だが、轉じて廻國の修行者を云い、往々、死後の冥福を祈るため佛像入りの厨子を負い、鉦を叩き、鈴をふつて戸毎に錢米を乞い歩く巡禮の姿をとる。——その六十六部の背姿に、友矩の目がとまつたのである。

しばらく、それとなく六十六部のあとについて歩いたが、そのうち、菅笠の下で友矩の眼が、異樣に輝き出すと、つかつかと歩度を早め背後へ近寄つた。

「異なことを尋ね申すが……モシ。」

黒い手甲をはめた手で、ゆつくり、背の笈をたゝき、

……」

わめきあげて陳述しようとしたが假借なく菊三郎はうしろに廻つて、利き腕を引つ捉えた。

「今更何を騒がれる。さ、参らぬか。」

冷やかなほど物靜かに言つて、有無なく庭前から別處へ拉致し去つた。

この間、友矩の方は正坐をつゞけた儘である。顏色ひとつ變えず終始重宗の處置を見戍つていた。

「茶屋、さゆを持て。」

重宗はもとの穏やかな口調に返つて、筆を採つていた茶屋に命じた。先程から、茶屋は主人と黎左衛門の問答のあらましをしたゝめていると見せかけ、その實勝手な文句を書きつらねていた。あらかじめ、重宗からそう吩いつかつていたのである。

茶屋が茶の用意に中座すると後は重宗と友矩の二人きりだ。

「異なところで出會うものじやな、お主、わしを覺えておるかな？」

友矩には意外な言葉だつたらしい。眉を張つて、一時、息をつめて見詰めてから、

「あつ。」

小さな叫びが出た。

「されば、見破つたと何故そう直ぐ口に出して見せる？　たわけ。見破るはよいわ。そしらぬ體で何故あつさりと別れておかぬ。見破つたことそちらで申せば、この正體見拔くほどの者柳生のせがれに相違なしと、當方とて見るが道理。それぐらいの才覺もつかぬようではお主、どうやら十兵衞ではないの？——すりや、友矩か。」

低いがずんと肚に沁みる聲だ。

「お主、……だ、誰じや？」

思わず友矩は問うた。

京に在る限り、餘人に柳生の者とは斷じてさとられてはならぬ、「餘儀ない場合は斬れ。」とも父宗矩から諭されての上洛である。事の成就せぬ折は柳生一門ことごとく死罪を蒙ること覺悟せよと、兄十兵衞からも吩い含められている。

不思議の六十六部が、山田浮月齋と同じ疋田陰流の鈴木兵庫と咄嗟に見込んで、謂わばさぐりを入れる意圖から聲をかけたが、相手の正體も見究めず逆に柳生友矩とさとられては、この場合、刀にかけても無爲に別れ去ることは出來ぬ。

「お主は、誰じやな？」

友矩はゆつくり袴の股立を引上げ、刀へ手をかけた。

最初から相手との間は充分離してある。萬一の人目を考え菅笠は脫がぬが、若し見込みどおり鈴木兵庫助なら、友矩がどれ程の遣い手かは既に喝破した筈だつた。——普通、笠をかぶつての立合いは上段に構える時笠のひさしが邪魔になるので凡庸の者なら遣えぬ。それを友矩は、敢て

「其許、熊野より參られたのではないか。」
と問いかけた。實は熊野などどうでもよい。自然に、相手の容貌が窺えればいゝのである。
六十六部は忍び笠をめぐらして、ゆるやかに振向き、
「いかにも熊野へ參じてまいつたが、――お手前……」
紛れもない侍言葉だ。それを、友矩にかくそうともせぬ。
「お手前は、江戸からかの。」
「左樣。」
友矩はうなずいて油斷なく間をへだてた。
老人の片眼はつぶれている。それへ永樂錢を紐で結んであててある。年は五十餘り、うしろ姿の折より、前へ廻ると全身が鍛えられて逞しい。
「いかにも拙者中されるとおり江戸より參つたが、」
「尋ね人でもあつてか。」
「ほう、よく御存知じや。ついでにその、尋ねる相手の居所もお教えねがえると有難い。」
六十六部は巡禮らしからず太身の杖を突いているが、最初から、仕込杖でないことを友矩は見取つてあつた。
つぶれた眼へ顏の皺がきゆつと寄ると、皮肉笑いをうかべ、
「どうやら此の身の正體見破つている口ぶりじやが、……おぬし、案外、馬鹿者よ。」
「ぬつ？」

にやり過ごしもならぬ。
結局、友矩は肚をきめ、
「ろく部、その方にまだ話があるぞ。——待たぬか。」
人目のあるのを意識して故意にぞんざいに呼びかけながら跡を追つたが、その行き交いに、坂をのぼつて來る騎馬姿の武士とすれ違つたのが思えば板倉重宗だつたのである。

友矩にすれば、蓮眞と名乘る相手に氣をとられていたので馬上の武士に深く注意はそゝがなかつた。というより、三、四人の供を従えたその騎馬姿をひと目で役人輩と見て、とつさに寧ろ面を俯せ、道をよけたのである。重宗の方で、そんな友矩への監視を怠つていなかつたとすれば、不運と云うものであろう。
友矩は土産物をひさぐ店のたち並んだあたりで六十六部に追いすがり、
「蓮眞と名乘られただけでは納得が参らぬぞ。それがしの尋ねる者、誰と知つての注進じや。申されい。」
低く問うた。六十六部は一きわ強く杖の先きで坂道を搏つた。
「尋ねるは唐津藩の兵法師範山田浮月齋——違うたかの。」
「何故それを知つておられる？」
「だから十兵衞に訊けいと申しておる。」
「……」

被つているのである。

参詣人がぽつり、ぽつり、二王門を出て石段を下りかけては友矩と六十六部の睨み合いに、怪訝の目をみはつて、歩み停る。連れあいに袖を引かれ却つて足早やに去つて往く者もある。

老人の杖は、友矩が身構えた時から何でもない普通の構えで足許に突かれていた。

ひつそり、不意にわらつた。

「出來ると聞いてはおつたが、成程、お主のその手のうちなれば一太刀はわしへ打懸れようも知れぬ喃。……併し、淺いぞ。」

「――」

「友矩、誰と見て今聲を掛けて參つたかは知らぬが、慈悲で教えて進ぜる。そちの尋ねる者、妙安寺に潜み居ろうで當つてみるがよい。……但し、大物は、おるまい。」

「其、其許名乘れ。誰じや。」

「左程に聞きたいかの。――日夏蓮眞。」

「？」

「知らぬか。無理もないが……ま、宿へ戻つて十兵衞にでも問えい。」

それきり、何を思つたかクルリと背を向け、相手にならずに坂を下つて行こうとする。

二、三歩つんのめる如く友矩は前へ出た。あくまで、呼びとめて挑むべきか、人目の多いこの場は一たん見送るべきかと迷つたのである。

意味あり氣な、兄十兵衞の名指し方が氣になる。と云つて、こちらの身を知られた以上は無爲

思わずぎくつとして、顔をあげると、何と、目の前へやつて來るのは浪人二人を從えた江戸の大久保彥左衞門である。

「……だ、默らつしやい。年はとつてもこの彥左……京童子の足に合うかゝるヘナヘナ坂に骨はあげぬわ。其方らこそ何をモタモタ致しておる。とつとと歩かぬかい。」

陽燒けして色さめた野袴で、一見して江戸から着いたばかりの樣子だが、供の浪人は、いずれも江戸に寄食していた面々である。

思わず左右に離れた六十六部と菅笠の武士を、それでも一人はジロリと流し見て通り過ぎた。

何故、大久保彥左衞門が老軀をかつてわざわざ上洛したのか。——そもそも、坂をのぼつて來る老人をひと目で大久保彥左衞門と見知つた日夏蓮眞とは、そも何者か。

友矩には更めて危惧めいた不安が勃然と湧く。もし蓮眞の言う如く寺澤半平が浮月齋一派に與すれば、慥かに父や兄十兵衞にとつて强敵には違いないからだ。

寺澤半平は、肥前藩主寺澤志摩守廣高の甥で、疋田文五郎が唐津に滯留した比、山田浮月齋とともに文五郎に師事して疋田陰流を學んだ。後に、浮月齋が唐津藩の兵法師範役となると、主君すじの自分がいては浮月齋も家中の士を教導しにくかろう、唐津如き小藩に達人二人は無用であると、自からは諸國修業の旅に出て、後年、淺野但馬守長晟にいたく囑望され、弓頭を勤めて千石を領した人物である。長晟に仕えたのには、家康の女振姫の長晟は女婿であることから、將軍秀忠直々に懇請された爲ともいう。

蓮眞は別に步度を緩めない。ゆつくり、ゆつくり石段へ來ると、其處を踏み降りた。そうして言う。

「これだけは今ひとつ、申し聞かせる。この身はな、お主の父宗矩どのの敵ではない。……と申して別に合力しようとも思わぬが。お主らのすること、美事成就せば柳生は天下一の兵法じや。が、浮月齋、あれは遣うぞ……。鈴木兵庫、猪上惣之助、次第によつては安藝の寺澤半平も浮月齋に同じよう……お主ら一門どれほどの逸材と大名を動かすかは知らぬが、この身の見るところ、寺澤が動かば恐らく事は成るまい。安藝は、大物じや。」

「……」

「友矩。」

「はつ？」

不思議な相手の識見に友矩の疑惑はもう霧散して、一種、崇敬の念さえ湧き、言葉づかいまでが自ずと改まつた。

「いつじやな。お主らの擧行？——」

「そ、それは……」

「知らぬか。はつはは……」

氣味わるく咽喉の奥で含み笑つていたのが、不意に、

「友矩離れい。」

聲を抑え鋭く言つたのである。

半平は易い事と言つて立合い、二刀遣いが打つてかゝるところを、先ず入れ違いに手取りにして投げ倒し、
「これは柔じや。」
と笑つた。
又立向つて二刀遣いが左の短い木刀を手裏剣に打つたのを、半平は左手を以て之を取り、袋竹刀を以て太刀を打落したので、二刀遣いは赤面して去つた。あとで半平は門人に向い、
「そちらは心中に拙者を危んだと見えるが、剣術は十分練熟して心身相和し、彼我ともに忘るるに至れば未だ鋒刃を交えぬ先きに勝つことを得て、危きものでは無い。」
と言つたという。
右の二刀遣いが、宮本武蔵というのは身贔屓にすぎるとしても、寺澤半平が、何處やらに若殿めいた戯れ心で劍を使つたのは、生死に遊べるほどの熟達の上であつたことを語つているともとれる。
友矩にとつて、友矩自身が父や兄に學んだ劍はそういう慰戯からは遠いが、死生の場に直面して左程の飄逸心を保持しうる劍客が何人あるかと指折れば、兄の十兵衛とて容易に勝ちは獲られぬかとも思えるのである。
まして、不思議の人物蓮眞は暗に寺澤半平の抜群の强さを示唆する……
五條坂の大半を降りきつて、彦左衛門の目も屆くまいと再び六十六部へ近寄つて行く氣になるまで、友矩が沈思したのは當然だろう。その間、だが重宗はひそかに腹心の家來を附けさせてい

半平の技倆のほどを物語るのにこんな咄がある――

一年、江戸の留守居に行つて、暇な時は友人などを集めて打合いをし、負けた者には『負け詣』を結わせ、又そうめん饅頭などを賞品に出して興がり、半平は常に扇を持ち相手に戸張りの竹を持たせて立合つたが、悉く勝ちを取つて、一度も危いことはなかつた。

ある時、二刀遣いが安藝廣島に來て仕官を望んだ時に、藩主長晟は其の試驗を半平に命じたことがある。

すると半平は二刀遣いを自宅に招いて談話を聞き、

「お話の模様では術を見る迄もないゆえ當家への望みは止められよ。御浪人なれば望みの無い所に長逗留は無益である。挨拶ならば今少し滞在をとでも云うべきであるが、それでは不實で御身のためにならぬから。」

と言つた。之を聞いた二刀遣いは怒りを含んで、

「手すじも御覧にならず實力は知れ申すまい。ともあれ我が手のうち一應お目にかけ申したい。」

と言う。

そこで半平は來合わせた門人某に向い、

「一度では物足らぬであろうゆえ二度相手を致す。其方、注文の手を申せ、その通りに勝つてみせる。」

聞いた門弟はためらつて答えないのを強いて注文させると、「然らば一度は手取りに、他はひしぎ打ちを拝見仕りとうござる。」と言う。

六剣士 (一)

重宗が明かしたのは友矩には思いもよらぬ事だつた。六十六部・蓮眞が越前忠直卿の黑幕だというのである。

蓮眞は師は不明だが中條流を修めた兵術者で、元日夏勘解由左衛門（又は單に勘解由）元春といい、越前忠直卿に仕えた。或る時、高倉某なる武者修業者が來て、忠直の家臣が多く其門に學んだ、忠直はこれを快よしとせず、臣下六人の達人を呼んで高倉との試合を命じ、高倉にも其旨を使者を以て通じて翌日登城せよと云いやつた。高倉も之を承諾した。

さて當日、六劍士の登城は勿論、拜觀の諸士も登城したが、高倉は登城せぬので使者を遣つて見れば逃亡して居なかつた。そこで忠直は中條流の小太刀が見たいと言い、六劍士の一人に、蓮眞――勘解由左衛門との試合を命じたところ、蓮眞は老年の故を以て辭退をして何としても立合わなかつた。高倉が六劍士を相手に如何なる術を披露するかと登城した諸士の目をなぐさめるため、忠直の云い出したことだが、我らは家中の士に手の内見せる雅心なしと勘解由は突つぱねたのである。

忠直は之を憾みに思つて、其後自ら勘解由を殺そうと決意し、一日勘解由を呼びつけると、「汝と試合を致す。」云つて脇差を拔いた。勘解由は小太刀代りに木刀を以てふせぎ、忠直が如何にし

たかも知れない。武士が六十六部ごときと語らいながら歩くのを、所司代の目がいぶかるのに不思議はないからである。

五條坂下にさしかゝつたところで、

「どこまで参つたとて同じよ。もう其許も身の儘に往けばどうじや。」

蓮眞が言つた。

云われてみればその通りだ。

「然れば他日、機を得て再お會い致すが。」

友矩は佇立して一禮すると、相手の立去るのを暫し見送つてから、別の辻へ曲つたが。

——今、庭前に引据え友矩を吟味する重宗の眼差に、意外に深いところまで實情を知つていそうな慧眼を、まざまざ友矩は見たのである。

——それでも、應えはきまつている。

「所司代どのと出會うたとは、それこそ異なお言葉を承りますな。——それがし、所司代どのが謦咳に接した覺えなどござらぬが。」

「左様か。」

重宗は口邊の冷笑を消さない。良あつて、

「爲らばあの砌り、その方と同道致した六十六部、正體何者かも知らぬかの？　知らねば、予が申し聞かせるが……」

人にすれば、いかに主筋とはいえ亡夫が殉死した人の子である。人情としても忠直の寵愛を受けるに忍びない。いつそ、「黑髮あればこそ人に袖もひかるるなれば髮剃りこぼち、亡夫が後世を弔わん。」そう決心して落飾して尼になつた。

これが、却つて忠直の癇に觸つた。

さなきだに怏々と愉しまぬ日々である。おのれ主君にたてつくか、と大いに怒つて、

「おのれ忘れ形見あるゆえ我が意に添いかぬると申すなら、何故まず遺兒右衛門を僧門に入れても主君が寵を受けけん、との眞心を見せぬか。且つ又、我が愛を入道に非ずと拒もうなら、いつそ潔よく一命を絕つて申せ。落髮などの貞女づら許せぬ。」

言つて、家上を召し集め、主人に對し無禮の言動ゆるすべからず、すみやかに右衛門を刺せと命じた。

これが永見の方にも傳わつたから、一族郎黨屋敷に集つて手の者をかり集め、槍よ鐵砲よと犇めいた。忠直はますます憤り、さらば軍兵を差向け彼等が首、ひとつ殘らず刎ねよと嚴命し、あわや福井城下が騷然となろうとするのを、老臣本多丹波守が馬に鞭して永見屋敷に出向き、赤心をあらわして鎭撫したので一時は事無きを得たが、その丹波守が永見屋敷へ赴いた時に、籠つていた一族の中から、

「あれ好き敵ござんなれ、かゝる上は丹波守どのを討取り腹切らん、さすれば寄せ手何萬殺すより面白し。」

と喚き立てた者のあるのを聞いた忠直は、其の年元和八年大晦日夕刻、不意に二、三百騎を差

ても斬込むことが出來なかつたので、その脇差を投出して、汝の藝は寔に神の如くである、この脇差を汝に與える、と言つて遣わした。それからは諸事、勘解由に對しては態度を變えた。

そもそも忠直は越前宰相結城秀康の嫡男である。秀康は將軍秀忠には兄に當る。

慶長十二年、父秀康の死去によつて家を繼ぎ、越前六十七萬石を領した。大坂冬の陣には祖父家康に從つて玉造口に戰い、翌元和元年夏の陣にも天王寺茶臼山方面に於て大いに眞田幸村と激戰のすえにこれを斬つた。

この時の戰功に對し、家康は當座の賞として初花の肩衝を與え、追つて領地を加えるべき事を約したので、忠直は戰功の家臣に對してまた所領を加えるべきことを約したが、その後、忠直は參議從三位に敍任せられたのみで、家康より何らの賞賜もなかつたから、大いに自負を疵つけられ、また家臣に對する面目もあり旁々不平懊惱に陷つた。

もともと前述の如く、父は秀忠の兄に當る、本來なら家康の後を嗣ぐべき立場という自恃がある。然るに叔父秀忠に將軍職がゆずられたので、家康の歿後は病いと稱して殆んど江戸に參覲せず、秀忠に對しても不敬の行いが尠くなかつた。幕府では兼々そのため忠直に隙あるのを待ちのぞんでいたが、偶々永見一族を成敗する事件があつたので遂に封を奪つて忠直を豐後に流した。

永見一族成敗の事件というのは、忠直暴虐の喩によく引用される咄である。

秀康の急逝の時殉死した家臣に永見中務なる者があり、中務（殉死のとき二十四歳）には右衞門尉なる遺兒もあつたが、未亡人池鯉鮒殿の美貌に惑かされて忠直は側室に召そうとした。未亡

城氏の義子となつて結城姓を継いだ。人はよくこの秀康を伊達政宗とたとえる。

「秀康若し徳川の一門に非ず、家康の子に非ずんば空しく中原の鹿をして秀忠に與うる者に非ず。」というのである。

いわば子の忠直も含めて、岡崎三郎信康、薩摩守忠吉、紀伊の頼宣などは同系列に屬する勇將だ。これに反して二代將軍秀忠、尾張の義直、水戸頼房などはどちらかといえば温良の領主である。徳川氏の系統には、常にこの勇猛と温良の二面を視る。幕府にあつて天下の政務を補佐する者、諸大名の動靜とは別にいわばこの剛柔二面の血の動きにも目を配らねばならぬ。但馬守宗矩は宗矩流に、所司代は所司代の立場で、とすると、或いは、眼前の板倉重宗の胸中に在るものも究極は父宗矩の意圖するところとさして違わぬのではあるまいか、そんな氣がふと友矩はして、一概にこの人物と敵對する必要はないかも知れぬ……そう思つた。且つ、一伯となつた越前忠直卿が終生を西國の果てでこの儘おわろうとは思えない。若し忠直卿にして鬱々の覇氣を沮いきらぬなら、武藝帳をめぐつた浮月齋一派の暗躍は便乘の好機であろうし、安藝淺野長晟のもとに在る寺澤半平を動かす者も或いは浮月齋でなく蓮員その人かも知れぬ。

友矩は、かれを想い之を思うと漸やく顔面紅潮した。

が、何事も口外はならぬと江戸で嚴命された身である。所司代重宗の意が天下安泰を究極にのぞむにしろ、禁裏への在り方だけはどうやら柳生者と異る。

「先程より申されること、當方にては何のことやらトンと判斷に苦しみ申す。」

向け永見の郎黨にいたる迄悉くを斬らせた。家臣を手討にするのが別に暗君の所業とのみ限らなかつた當時とすれば、大して異とするに足らぬことと忠直は思つたろうし、秀吉の松丸殿の場合や近くは祖父家康の愛妾何人かの場合にてらしても、おのれだけが非道の欲望を持つたとは思わなかつたろう。たしかに家臣の妻を欲することなど當時では普通の倫理感覺である。

幕府は併しそれを責め、翌元和九年、遂に忠直を豐後國萩原に流し、五千石を給して剃髪せしめた。忠直はよつて一伯と號し世を捨てた。

――その間、勘解由は旅に上つて福井城に居ない。丁度忠直の流謫されたとき江戸に立寄つていて、直ちに福井へ歸ろうとする處を秀忠に制せられ、下命に據つて身柄を預けられた先が、侍從永井信濃守尚政のもとである。年餘を經て、ようやく九州豐後の忠直の許に行くことを赦されたが、爾來、勘解由も剃髪して蓮眞となつた。ほゞ十二年前の話である。

――今、忠直あらため一伯は蟄居して尚も豐後に在る。秀忠の薨じる前、三代將軍家光の内命を受け九州隱密の旅に赴いた柳生十兵衛の使命のひとつが、忠直卿の動靜をうかゞう事にあつたのは友矩も知つている。由來、徳川家には二つのタイプの武將があらわれた、一は越前宰相秀康、一は將軍秀忠である。秀康は家康の第三子に生れ、生母お萬の方が系統卑しい爲三河國產見で成人したが姑くは家康も公けに子としなかつた。秀康幼名於義丸という。或る時兄の岡崎三郎信康と忠臣本多家次の忠言で、初めて父家康の膝に抱かれたのである。

ついで十歲の時に人質（のち養子）として豐臣秀吉のもとに置かれ、猛將福島正則や加藤清正を市松よ、虎之助よと呼んで遊んだ。十二歲のとき三河守羽柴秀康と名乗り、のち東國の名族結

境内には紅梅數株あつて如月（きさらぎ）の頃は人々こゝに集まり未開紅の艶色を賞したという。又、塔頭（たつちゅう）長仙院の庭は佳境として名高く、同じく竹林院には小堀遠州の數寄屋あり、これを遠州の八窓という。彦左衛門が宿所にしているのも竹林院で、庭中の風景絶倫である。

重宗が案内を乞うと直ぐ通された。

控えの間に昨日の浪人二人。相手が所司代と分つているので、四角ばつた會釋はしたが何やら視線を避ける。

彦左衛門はすこぶるむつかしい顔色である。挨拶を述べて重宗が對面に着座すると、

「コレ、所司代どの直々にこの爺（じい）をお訪ね下さるというに、澁茶では非禮じや。點前（てまえ）でも致さんか。」

皮肉を利かせたつもりの叱言（こごと）を傍らの女性へ言う。重宗は蛙に水がかゝつたほどにも反應を示さなかつた。

「その節は思いがけぬ出會（しゅつかい）ゆえ馬上の儘にて失禮を致した。」

わざと鄭重に頭を下げて、

「祇園の櫻には季節がチト早いかと存ずるが、遊山でもなさろう御上洛でござるかな？　それとも何ぞ、お上（かみ）より内々の御沙汰にて、上洛をこの重宗には內密に致せと――」

「十三郎。」

彦左衛門への字に結んでいた口をひらいた。十三郎とは所司代の職に就く前の重宗の名である。

皓い齒を見せた。重宗の方でも薄笑いは消さない。「左様か。」あつさり頷いて、緣側を返り見、「原田、どうやら只の ねずみでないと見たは予のあやまり、無冠の普化僧如きに、要らざる時刻を費した、差構いない、釋放致せ。」

あつと心中に友矩が叫んだほど、呆氣なく吟味を打切つて、

「まさしく結城家浪人大崎十左衛門に相違ない、起て。」

下知するや自身袴を捌いて奧へ入つた。結城氏に仕えて美濃の浪人大崎十左衛門とは、吟味に當つて友矩自身が名乘つた事である。その身が曾ての結城家師範役日夏勘解由左衛門を知らなかつた。出まかせの口上は忽ち露見していたわけだ。それを敢て重宗は解放した。

その足で、重宗は下京櫻之町誓願寺へ出向いている。大久保彦左衛門に對面のためである。もともとそのつもりで二條城を出たのが不審の虛無僧吟味に時を費したのである。

誓願寺は現今と違つて當時の境內六千三十餘坪、すこぶる繁華の寺院であつた。秀吉の愛妾松丸殿の造營である。松丸殿は京極氏の女で初め若狹の豪族武田孫八郎に嫁したが、本能寺の變後、孫八郎は秀吉の爲に近江の梅津で誘殺（ゆうさつ）された。松丸殿は名を龍子といい絕世の美人だつたので、秀吉が之を奪わんため刺したのであろうという。後年、淀殿が寵を專らにした如く傳えられるが、いわば秀賴を産んだからで、側妾としてなら龍子の方が寵愛いちじるしかつたと傳える。天資の美貌も松丸殿が拔んでていたそうである。文祿三年春、伏見の築城のなつた時、同城松の丸を與えられたので松丸殿と稱するに至つた。秀吉の薨去後は尼となり、以來寬永十一年九月まで京西の洞院の邸に在つて餘世を樂しんだ。その間誓願寺は德川氏から寺祿十七石を寄せられ、

「その川野とやらが何と致した？」

「先刻二條城お濠に飛込み申してござる。」

「何？」

「されば、虚無僧に身をやつし、不審のすじ有之つて町奉行所に引据えてござるが。」

途端に彦左衞門は頭へ突き拔ける如き奇聲をあげた。

「せば既に奉行所に拉致いたした者如きを、お主、わざわざこの大久保に問おうと申さるるのじやな。これは奇怪至極。身許不明の者なれば兎も角、すでに奉行所に在るという に、素浪人ひとりが事でこの年寄に會わねば埒明かぬのかい。いや以て貫に見上げた所司代どのよ。左様ではないか。偶々拙者江戸より參つておつたればこそよいが、若し參らねば何と致される存念であつたな。む？　この彦左が屋敷に世話致す浪人ばら、いちいち覺えておるがような、」

「重ねてお尋ねを致す、川野黎左衞門に御記憶はござらぬのか？」

「知らん知らん、川野と申すがような者金輪際知らん。」

この時、控えの間に聲あつて、浪人の一人が、「御老體御老體……黎左衞門なれば確か我ら、」

「默らつしやい。」

大聲で喚いた。

「かりにも神君より天下の御意見番いたせと申しつかつて参つたこの彦左衛門にお主、意見しようとてかい。」

「何も御意見なぞ申上げる意は毛頭ござらぬ。役目柄、一應詮議申上げるすじあつて参つた迄のこと。」

「すりやこの儂に怪しいふしでもあると申さるるか？　面白い。何なりと問われい。但しじや、お手前所司代の職分にて物申すなら、身共江戸御旗奉行の立場にて後刻糺明致すことがある、と、その心得あつて問われいよ。」

「これは笑止のお詞。その儀は念をおされる迄もござらぬ。」

「よし。何を詮議しようとて参られたの、さ、問わつしやれ。」

一膝氣負つて乗り出した。

重宗は落着いている。「然らば お尋ねを致す。御老體が江戸屋敷にて昵懇なされた浪人中に川野黎左衛門なる者ござ候由、しかと左樣か？」

「何、何……？」

彦左衛門は拍子抜けした態で瞬いた。清水寺石段下で、京では一番會いたくない相手と出喰わしてから、謹嚴一徹の人物のことゆえ、たゞでは濟むまいと覺悟はきめていたが、案の如く宿所を問われ、上洛の理由でも訊かれることか、世話していた浪人の名前など持出されたのである。多いときには三百人からの居候どもだ。一々姓名なぞ覺えられるものでない。

「御記憶ござらぬかな？　川野黎左衛門――至つて人物は小人ながら根は人の好さそうな――。」

「？」

　ニヤニヤしていた彦左衛門の表情が固くなる。

「お、お主、何もかも知つての上で問うておるのかい。」

「これは又、野暮なお詞を承る。この板倉重宗、かりにも京都所司代の職分を以て對面仕るからは、事の直否を糾し申すが役目、知る知らぬの儀ではござらぬ。」

「何、何じやと？……」

「されば、神矢悠之丞が正體何者かを今はお尋ね致してはおり申さぬぞ。某氣懸りなはその雙生兒兄弟、しかと御老體も面體に御記憶がござろうや？　又、川野黎左衛門なるもの事實江戸表にて寄食致しており候ものなれば、いつ頃江戸より出奔仕つたか、この邊のところ、有體にお教えが願い度い。」

　彦左衛門はゆつくり横をふりむいた。

「小百合とやら申したの？」

「ハ、ハイ……」

「あれなる手筥、これへ持つて參れ。」

　小女が吩いつけられる儘に床の間から螺鈿づくりの手筥を取寄せて來ると、

「吉田源左衛門、――大塚もこれへ參れ。」

　控え座敷の浪人兩名を呼びつけて、彦左衛門は手筥から一分判金を取出し、ぱらつと疊へ投げ出した。

六　劍士㈡

「其許が尋問というは、それだけか。」

控え座敷の浪人を一喝した彦左衛門の顔が、急に人が變つた如くニコニコし出したのである。

「この年に相成つてはのう、多少は耄碌致しておろうで、その川野と申す者も或いは江戸屋敷に世話しておつたやも知れん。ふむ、したが、それがどうしたと申さるるのじやな？」

「まこと御老體の肝煎致された浪人なれば、容貌は御記憶なされておりましような？」

「――多分、この彦左、名は至つて忘れつぽいが面（つら）だけは間違いは致さん。たとえ雙生兒（ふたご）兄弟でものう、ちやんと見分けがつこうわ。ふたごでもじや。」

「ほう……雙生兒兄弟の浪人者御存知とあれば、これは大分（だいぶ）、お話が致しやすい――」

重宗の手で扇子が把（と）り直された。

ひと膝、出る。

「然れば御老體、單刀直入に相尋ねる。去る夏頃、ふた兒の兄弟世話致しておられたと申す儀は、まことでござろうか？」

「誰に聞かれた？」

「神矢悠之丞――」

「申さば腹藏なきところ、御老體にても打明け下さりましようや？」
「勿論。立場こそ異れ、要はお上が爲なれば、この彦左、神文に誓つて二言は化らぬ。」
「左樣なれば。」
重宗は膝前をパンと扇子で捌いて彦左衛門へ片膝乘出し、
「昨夜、禁裏へ忍び入つた不屆者がござる。御老體、その者の面貌お目にかけ申さば、雙生兒が兄弟のうち一人と、しかと、お見屆けなされましようや？」
「いかにも。その者まこと雙生兒が一人なれば見て誤りは致さぬ。……が、一體誰が、その曲者雙生兒と申すのじやい？」
「誰も、しかとは申しておりませぬが、江戸表よりの注進によつてでござる。」
「注進？……だ、誰の知らせじや。」
「阿部對馬守重次どの。」
「何、何？」
彦左衛門の首が猫背から鶴のように延びた。
「阿部對馬守もすりや今度のこと、知つておつたのかい？」
「何を申されておるのか……」
適當に韜晦すべきことは、するだけの才覺が重宗にはある。
「――目下の處あるいは御老體の方が、所司代のそれがしより、その方の事情には餘程お委しい

「所司代どのとチト込入つて要談がある。長びこうやも知れんで、京見物でも致して來るがよいわ。」

思わずふたりは顔を見合つた。ゴクンと生唾をのんだのが源左衛門と呼ばれた方である。

「よ、よろしいのでござるか御老體。」

「我ら當寺にて既に格別の心づくしを頂戴しており申すで、か、かようのものを別に……」

それにはもう應えず彦左衛門は傍らの小女へも何か吩いつける。

チラと兩人は、所司代重宗に畏怖と狼狽の視線をなげたが、

「然、然樣なればお詞に甘え、われら町を見物致して參りまする。」

「何刻ごろに戻つて參らばよろしゆうござろうか？」

「その金子にて思いの儘じや。」

「はツ。」

浪人二名、疊に頭をすりつけんばかりに重宗へも大袈裟な禮をして立去ると、つゞいて小女が座敷を出て行つた。

「十三郎――」

彦左衛門のまがつていた背すじがぐつと延びた。

「其許が先程よりの問い、どうやら此の彦左が、上洛致して參つた所用と關わりがありそうじや。次第によつては當方知ること一切打明けて進ぜる。何を以て、その雙生兒兄弟ならびに川野黎左衛門がこと念をおされるか？　仔細を、申してみられぬか。」

しような？」とダメを押して來た。もともと、神矢悠之丞が千四郎と相打ちで傷を負うて以來、武藝帳をめぐる柳生宗矩と浮月齋一派の葛藤の内情を躍起となつてさぐり、或る程度、武藝帳なるものにひそむ事情も知り得て思いついた上洛だが、ひとつには、屋敷で腕を撫している浪人どもに何とか仕官の機會を與えてやりたく思つての出發だつたのである。だから先程控え座敷を出ていつた兩人とは別に、多少見込みのありそうな浪人十名餘りを別に京へ上らせた。うち半數は、普化僧に仕立て、妙安寺へ紛れ入らせてある。別の一隊は武士の宿泊しそうな寺院へ投宿させている。

が、何にしても、「手柄」は武藝帳の一件を取鎭めてからの話で、その武藝帳を繞つて天下を擾亂する中心人物が、同じ大久保屋敷に寄食していた朋輩と分つたのでは、折角浪人どもの立てる「手柄」もすじが通らない。こゝは一番、何としても多三郎や千四郎が浪人達と知合いでは困るので、從つて霞の兄弟を屋敷で世話していたとは云い兼ねるのである。

彦左衛門は大きな空咳をふたつばかりした。

「耄碌致した老人を、お主、からかおう存念かい？　いかさま雙生兒を美事見分くるとは申したれど、當方、それが忍者とは申したおぼえ更に無い。儂が知つておるというは、ただ揃うて腕の立つ武藝者での。其許とて、雙生兒が二人ながら拔群の遣い手なればよも忘れは致されまい。武人なれば、その顏覺えおくは當然。――そ、それよりはじや、今一人、何とやら申されたの？」

「川野黎左衛門にござりますか？」

「そ、そ奴。……お濠にはまつたというは如何なる仔細かい？」

ようでござるが。當方たゞ、對馬守どのよりの報らせにて、霞の兄弟とやら申す忍び者、京洛に於て何事か企みおる由の注進を得た迄にござる。萬一、禁中に忍び入つたる者件の兄弟なれば由由しき大事と存じ、御老體がお力添えをお願い申す。」
「何で又、霞が兄弟とやらを當方にて存じおると判斷致されたかの？」
「これはおカラカイ召されますか。雙生兒兄弟なりとも見誤らぬとはたつた今、御老體自身より申されたことでござろう。當方は又何ゆえ忍者ごときをお見知りおきなされるか、それを不審に存じておつたところ。……御老體、そもそも霞の兄弟とやら、お見知りおかれたは何ゆえでござる？」
　ぐつと彥左衛門は返答につまつた。屋敷に居候させておつたまで、と答えるのはたやすいが、江戸を發足するに當つて實は將軍家光に大見えをきつて來た手前がある。我らこと、常々物の用にたつ浪人者あまた面倒見て參つてござるが、近頃、京に於て不逞の輩何やら企みおる由、世話致し申した浪人より注進して呉れ申したで、この際、思い切つて上洛の上、我が手にて取鎭めたく存じますれば、何卒上洛の儀お赦しが賜りとうござる、と言い、「然らば公儀に於て詮議致させようぞ。」と家光が言うのへ、「何、老いたりとてこの彥左衛門、かゝる折が備えにこそ百人に餘る浪人共を抱えおりまする、お上の御沙汰とあつては却つて世も要らざる騷ぎ立て致しまするは必定。たかが不逞の奴輩如き、いつそこの彥左ひとりめにお委せを願いまするわい。かならずともに、お上に御滿足が頂ける働らき致して御覽にいれまする。」胸を張つて言つてのけ、「但し上樣、萬事落着の砌りはこの爺めは兎も角、手柄相立て申した浪人どもに相應の御褒美賜わりま

た。

「姓を申しても御存知はござあるまい。……それに、お連れの仁の手前、却つて名乘らぬが御老體の爲かとも存じ申すが。」

低い、含み笑いの口調が心惡いばかりに落着いている。

「人を呼びとめたに姓を名乘らぬは儂のためと？　味なことぬかす。……よし、ならば當方にても問わぬ。が、用は何じや？」

「これにてはチト話しにくうござれば、――左樣、暫時がほど、同道ねがえませぬか。」

「何處へじや。」

「お連れ樣の跡より參つてよろしゆうござる。時間は掛け申さぬ。」

まだ三十にはなつていないかも知れぬ。不思議に聲に重みがある。

彦左衞門はいつそ好奇心を誘われたらしい。

「暫時であるな？」

念をおして、

「十三郎。さ、さきに行かれよ。」

重宗は別に氣負いだたなかつた。

「さればごゆるりと――」

一揖して悠然り歩を移す。その時武士の刀の鞘に白い紙縒の卷いてあるのは見逃さなんだ。――たしかに六十六部の蓮眞と歩いていたあの日の武士にも、奇妙な紙縒が鞘にあつた。

「別に仔細とてござらぬが、不思議な（ここでふつと嗤つた）普化僧に抛り込まれたと申し立てるが不審ゆえ、ひと先ず奉行所に差しとめ申してござる。いずれ、御老體にこの者の面體もおあらため願つた上にて――」

「む。ならば要らざる口論こゝにて致すは無用じやな？　即刻參ろう。どのような馬鹿づら致しておる輩か、この目でしかと見屆けてくるる。」

言うなりさつと起上つて、

「小百合、コリヤ……袴の用意を致せ。」

その足で板倉重宗と連れ立ち彦左衞門は奉行所へ赴いた。その途次――不思議な人物が老人を呼びとめた。

重宗は彦左衞門が徒歩で往くと言い張るので、まさか一人馬に乘ることもならず、手綱を供の者に渡すと彦左衞門に並んで歩いたが、丁度、姉小路通りから松ケ崎天神わきへ曲りかゝつた時だつた。深編笠の、背のあまり高くない肩幅は逞しい侍が、

「大久保の御老體ではござらぬか？」

聲をかけた。

裃の紋所を見ただけで並び歩いているのが所司代板倉重宗とは一目で分つている筈であるのに、彼みずからは目深かの編笠も脫がない。

「如何にも彦左じやが、おぬし誰じやい。」

呼びとめた其の錆びのある聲からして、横柄で癇にさわつたから彦左衞門の眉がぐつと寄つ

「待て、お主がような柳生の身内、何故霞を庇う？」
「庇う？……然れば御老體、この十兵衛が霞者を庇うは不思議のわけ、御承知か？」
背すじに惡寒が走るほど、編笠の下に光る眼には殺氣があつた。彦左衛門は思わず下腹に氣合を入れ股をひらいた。
さつと十兵衛の方から脇を離れ、
「今申上げたこと必らずお疑いあるな。――」
言つて、再び目深かに笠を俯せると踵を轉じ、もう足早やに來た道を去つて行く。胸を張つてその後ろ姿を彦左衛門は見送つたが、重宗の疑心など眼中にない。
「……分らぬわい。柳生十兵衛が霞の兄弟を庇いおる。……あの宗矩がせがれめに武士の情などあるわけないわ。ふム、こりや儂が見込みより、どうやら事は大きそうじやぞ。」
手の鐵扇で刀の柄を敲きつゝ思い耽る。
それから奉行所まで殆んど無言で歩みつゞけた。重宗も強いて話しかけはしないが、何處やらに飄逸味のあつた彦左衛門の風貌が、京都町奉行所にさしかゝる頃には次第に緊張に靑ざめ、餘人のついぞ見たことのない嚴肅な、古武士の悲痛の面差に變つている。
「十三郎――」
奉行所の門をはいるとき、何を思つたか、彦左衛門のその足が停つた。

「……話というのは、何じや？」
馬と供の者を遣りすごしたあとから、彦左衛門は歩き出した。
「所司代へ參られるのか？　それならばよし。若し奉行所にて、過日禁裏に潜入致した曲者が吟味に參られるなら、霞の兄弟とは、申されぬ方がよろしゆうござろう。」
「？」
釘づけになつて彦左衛門は停つた。
「そ、それを知つておるお主は？」
「當り申したか――」
「其許、誰じや？」
「……」
「申さぬか。だ、誰じやな？」
武士の手が靜かに深編笠にかゝり、ぐい、と押上げる。
「これでお分りになりましよう。」
言つた顏を下から覗き込んで、
「や。其、其許？……」
多少のことには動じないつもりの彦左衛門も胸を反らした。
「しつ。……御老體なればこそ、此のめつかちをお見せ致した。さ、お分りになつたれば只今申上げたこと確と胸におとゞめおき下されよ。」

「さあ、……それがしにはその邊のところ、一切分り兼ね申すが。何樣、奇怪至極の注進にござつてな。」

重宗は老獪な笑みに紛らせ、さつさと奉行所玄關へ步を運んだ。

既に重宗の姿が門を入つた時から、注進が奧へ達していたらしい。奉行所附き與力、同心が逸早く玄關前に並び出て恭しく重宗を迎える。中で一人、これは玄關内に佇立のまゝで應接したのが京都代官・五味金右衞門である。

「これはこれは。先程より隨分お出でを待兼ねてござる。」

重宗に一禮をして、引緊つて皺の多い面差を彦左衞門に向け、

「おオこれは。……いつ、京へお着きなされましたな？」

懷しそうに笑いかけた。ジロリと、彦左衞門の方は睨め返しただけで、

「お主も息災であつたかい。……フむ。」

殊更重宗に先んじて草履を脫ぎ玄關へ上つた。

五味金右衞門は慶長二年、八歲で大番に列し、秀忠が關ケ原役に眞田幸昌の籠る信州上田城を攻めたとき、これに扈從した。のち保科正光や眞田伊豆守の命を受けて信濃國伊奈山より材木を伐り出す奉行となり、大坂夏の陣には、秀忠の傍らに勤仕して、落城後は城中にある金銭等を點檢し、その儘大坂にとゞまつて御金奉行をつとめた。かたわら河内國讃良古市兩郡の御料所をあずかり、更に山城國うちにて二萬石の地をあずけられた。

金右衞門が大久保彦左衞門と面識あつたのはこういう戰陣の折である。

京都代官

「阿部對馬守より注進あつたと先程お主申したの。」

奉行所の左右門脇に佇立する番卒が、所司代重宗直々の徒歩姿に何事かと畏れ、並び歩く得體の知れぬ老人を怪訝そうに遠目で見戍つている。

「いかにも江戸より注進あつたと申し上げましたが。」

重宗はどんどん先きに立つて門を入り、彦左衛門との間をひきはなしてから徐ろに振向いた。

否應なく彦左衛門は門を入る仕儀になる。

「柳生但馬がこと、注進のうちに加わつておらなんだか？」

何ということもなく、待構える重宗の袴のすそから覗く足袋の白さへ、チラと視線を落して彦左衛門は問いかけた。

「柳生但馬どの？」

「ソリヤ、おぬしは京に在つて知るまいが、但馬守が娘於季というは阿部對馬の奥に仕えておる。さすれば對馬とて老中職にある身、注進するにも萬石の大名が自ら探索致すわけもなし、於季を通して、柳生但馬守がこと耳に入ろうというものじや。——或いは、注進なるものの内容そもそも但馬より出ておるやも知れん。」

政義とて、」

「これは異なお詞でござるな。金銀の検察いたし、寺社の造營沙汰いたすも總てお上の御爲と思えばこそ――」

「分つておるわい。いかさまお主とて、大坂の軍には我ら手柄のほど確と見届け申した。たゞのう、時勢とは申せ、あの金右衛門が今は他人の系行を穿鑿いたすかと思うと不憫に涙がこぼるるわ……」

彦左衛門は憎々しげに言つて、苦笑する金右衛門には目もくれず、

「十三郎。事は急ぐであろうで、さ、参ろう。」

茶も呑まず一番に起上つた。

獄舎は京都郡代（後の町奉行）の管轄である。曲者の風貌吟味のために、重宗直々に出向くことは豫め通達してあつたらしく、獄吏は直ぐ牢へ案内した。

曲者の幽閉されているのは、常の格子牢である。かなり嚴しい拷問を受けたが終におのが姓名すら明かさぬという。それで普通の揚屋でなく座敷牢（揚座敷）へ容れられていた。むろん、何人も添えず、一種の獨房である。

金右衛門、重宗、彦左衛門の順で牢番、鍵番、外張番などの控えている手前に來て、立停つた。先ずそれとなく外から風貌を窺つてみようというわけである。面貌をたしかめるだけなら白洲へ引据えれば造作も無いが、相手の正體の分明せぬうちは、なまじ、所司代直々の吟味などと異例の處置は公けに致さぬがよい、と、そう重宗自身から金右衛門に云い含め、獄吏にもこの旨は申

ついで元和三年、金右衛門の方は秀忠上洛に當つて通用錢を檢察し、女御（東福門院）入内のため小堀遠州とともに禁裏御所造營の事をも奉行した。一方、福島正則の除封に當つては廣島城受取りの使者となつている。又、京都知恩院山門の造營、伏見城普請奉行、寛永元年には二條城の營作及び加茂神社の造營の事をも沙汰して知行千七十石である。

寛永十一年八月、所司代の兼職だつた京都郡代（町奉行）に任ぜられ、板倉重宗を補佐して京都治安に大いに與（あずか）つて力があつた。——云つてみれば、大久保彦左衛門には所司代重宗についで、逢いたくない人物である。

「御老體は、また何用あつて京へ參られてござるな？」

ひと先ず三人で奥座敷に落着くと早速、五味金右衛門が口をきつた。金右衛門とて既に五十をすぎているのに人を御老體、御老體と呼ぶのが彦左衛門には癪である。

「五味、おぬしが祖先はもと武田家人であつたな？」

「左樣、我らが祖父は武田信玄公に仕え山内威豐と名乘り申した。父政義の代に至つて、信玄どのの命により五味常運が名跡を繼ぎ、以來五味を稱してござる。」

「いかにもその政義どのなら、身共とて覺えがあるわ。長久手の役には政義めも供奉して軍功あり、小田原陣のときには、酒井重勝ともども名譽の御槍奉行であつた。同じ奉行奉行と申してもの、寺や城の普請ばかり奉行いたし居ると違うて、昔の槍奉行と申さば、武士のほまれじや。その政義どのが悴に、錢（ぜに）勘定いたしたり人の素行を論（あげつら）う腑甲斐ない者うまれるとは、さぞ地下の

「知らぬ。」

「然らば霞の忍者ではござらぬか？」

「違うわい。か、霞の兄弟では斷じてない。……あれは、わしが目に狂いなくば安藝淺野家にて寺澤半平と申す人物じや。——が、それにしては年が若すぎる——」

「何と申される？」

「重宗、こりや下手を致すと、由々しき大事になろうやも知れぬぞ。うム。こうなつては、儂も頑固は通しておれんで、有るが儘を申そうでお主、これから肚を割つて知ること全て聞かせてくれぬか。——安藝藩までが動いては只事では濟むまい。とてものことに、わしが手なぞには負えそうにないぞ。」

彦左衛門は座敷に戻ると、其處で知る儘をぶちまけた。

柳生一門に何やら祕密のあるらしいこと、それが武藝帳によつて解ける筈のこと。柳生十兵衞、友矩、又十郎の三兄弟がいずれも今は京に潜伏していること。但馬守宗矩と松平伊豆との間に何やら反目の感情あること。神矢悠之丞と變名の實は中ノ院大納言通村の一子立原道長を何故か柳生宗矩は庇いつゞけていること。その悠之丞と霞の千四郎が斬結んだこと、霞の兄弟を擁した山田浮月齋の背後には當然唐津藩主寺澤氏が動いているとみられる中、浮月齋と同門の陰流兵法者二、三が浮月齋一派に合力していること。柳生、山田兩者の紛糾にまぎれて龍造寺家の直緣夕姫なるものの介在すること。多三郎、千四郎の兄弟及び川野黎左衛門を昨秋まではたしかに江戸屋敷で世話していたこと、黎左衛門も多三郎に同じて行動していたらしいこと、及び、江戸

し渡してあつたから、牢番も一應は何氣ない態度をよそおつている。
　曲者は、都合わるく格子へは斜めに背を向けて坐つていた。うしろ恰好しか見えない。傍らに本膳坪平つきの食膳が箸もつけず置かれてある。大小は取上げられた丸腰で、二十五、六の筋骨逞しい――忍者に相違のないことはその背姿からも察しはついた。彦左衛門が不意にツカツカとその格子の前へ進んだ。
「やい、こちらを向いてみよ。」
　囚人はいかにも煩さげに、ゆつくり後返つた。
「……」
　彦左衛門は目をむいた。
「何か身共に御用か？」
　言つて、向うでも凝乎と彦左衛門を見る。ありあり苦悶の色が彦左衛門の老いの目にうかんだ。摑んでいた格子の手をおろし、
「わからぬ。いよいよ以て、わしには分らぬわい。」
　獨り言ともなく低く、うめいたのである。
　それきり、格子の前を離れ、物影に立つ重宗や金右衛門には目もくれずどんどん牢屋を出だした。そつとあとに續いて、重宗が牢舎を出たところで、
「いかゞでござつたな？　お見覺えはないか？」
　問いかけると、

ぬ。然も、寺澤半平に瓜二つの人物があらわれては、いよいよ事は混亂して理解し難い。一體あの曲者、禁中の何處で誰が召捕えたのかと彦左衛門の問うのに對して、禁裏警護の永井家臣が、夜御殿前にてと金右衛門は答えたが、分つたようで、これとて一向要領を得ぬことに變りはないのである。結局、爾來一層の警戒を怠らぬこと、もし互いの手で新事實の判明した節は、すぐさま連絡しあうこと、さしあたつては川野黎左衛門に尾行させた同心の報告を待つ以外にすべのないことに話は落着いた。

こちらはその川野黎左衛門。

「だ、だから申しておるのじや、かゝる姿に今は身をやつしておれど、この川野黎左衛門、身に一點の逆心も持つてはおらんに。――何にしろ納得參られたは祝著、遉がは所司代どのと違うて五味金右衛門どのは天晴れなる代官――とそれがし左樣申していたと傳えて下され。」

送り出されて奉行所を出ると、尾けられているとも知らずさつぱりした氣分で堀川端を南へ向つた。お布施の名目で思わぬ銀子を受け、濡れていた裝束もいつの間にやら火でかわかしてくれてある。

「京都郡代というは、全く出來た人物ではある。」心からそう思い、

「多三郎と約束の刻限にはまだ暫時が程はあろうでのう。……あの女虚無僧がことも氣にかゝるが、今に及んでは爲樣もない。思えば、あ奴、よくぞ我らを濠に投げようたぞ。今度……今度出逢うたらオノレ只ではおかぬわ。……」

り浪人二十數名、實はひそかに引具して京へ上つたことなどである。

これに對して、所司代重宗と郡代五味金右衛門は、川野黎左衛門に實はひそかに尾行の者を附けて先刻故意に釋放してあること、越前忠直卿の黑幕と目される托鉢僧蓮眞がこの京の何處かに居ること、その蓮眞と立話していた武士は友矩らしいこと、老中阿部對馬守ならびに松平伊豆守よりの諜報では、この度の一件に禁裏も關わりあるらしいこと、爲に近日、春日局が上洛する筈のこと、水戶家、肥後細川藩、長門の毛利、佐賀鍋島元茂らの諸大名も何らかに關係あるらしいこと。これらに就いては、目下、所司代隸下に屬して禁裏警護の任にある永井尙政の家臣數名をして偵察に當らせていること。洛中要所々々には既に警戒の手段をつくしてあること、不思議女虛無僧の徘徊すること。及び、京都町奉行としては如何なる目的のため柳生三兄弟が上洛したか、また暗躍する面々の巨體を白日下にさらすには如何なる手段を採ればよいか、その判斷に苦しんでいること等を打明けたが、雙方、言葉を惜しまず知る限りを述べあつているうちに、或程度、事件の輪郭は朧ろげながら見えて來た。たゞ、然れば何のために彼らが京へ集結したかがどうしても瞭然としない。

それと、今一つ不思議なのは先程柳生十兵衛が霞の忍者を見のがせと彥左衛門に示唆したことである。本心からか、或いは他に含むところあつての上かは分明でないが、少なくとも霞者の糺彈を今暫く猶豫してほしげな十兵衛の胸中だけは、誤たず彥左衛門は見拔いたつもりでいる。あきらかに柳生一門に敵對し、むしろ公儀の捕縛に陷るのを悅んでこそ當然の十兵衛が、自身の姿を彥左衛門の目前に見せてまで救命をのぞんだその原因が、何としても、彥左衛門には納得ゆか

「お遊びになりますのかえ？」

「當り前じや。」

駈け寄つて赤い前垂で手をふくのが、下働きの下女らしいことが黎左衛門には不滿である。

「そちでは話にならぬ。誰ぞ、おらぬか。」

「直ぐ、直ぐ姐さまをお呼びしますわいな。」

えりもとをつくろいながらそれでも紺のれんを掻き分け遣手婆の出て來たのは案外早かつた。

「これはこれはまあ、ようお越しなされましたえ。……さ、どうぞお上りなされておくれ。」

無愛想と見ても一向怪しまず愛想笑いをうかべるのは、黎左衛門の見込みに反して一流の妓樓ではないからだろうが、すつかり彼自身は御機嫌である。

「しからば、ゆるせよ。」

上り框に腰をすえ、身をかゞめて器用に片手で草鞋を解いた。

表を誰やら人影が二つ横切つた。

婆に案内されたのは、それでも結構の至つて華美な座敷である。仄暗い廊下の何處かで微かに嬌聲が立つ。

あらわれた遊女を見て黎左衛門は甚だ滿足をした。

眸のうるんだ聲のほつそりと透きとおつて美しい女であつた。

「名は何と申す？」

「玉蟲でおじやります。」

勝手な獨り言を云うと、とりあえず多三郎と落合う筈の六角堂へと歩いているうち、ふと遊女街が目についた。有名な島原は寛永十八年、はじめて現今の場所へ移されたので、當時はまだ六條西ノ洞院通りにある。思いがけぬ銀子の懷中にあることでもあり、折角の女虛無僧を見失った口惜しさも手傳って、黎左衞門は妙な氣分を誘われた。

一寸、立停って思案をしたが、白晝とて遊客はある。何處やらから絃のさゞめきさえもう聞えている。嚢中には充分の銀子もあることで、まして、こういう思案はすればするほど、重心を妓樓へ傾けるように出來ている。黎左衞門には抗しかねる誘惑である。

ちょっと、前後左右を見廻してから、胸をそらして一軒の暖簾を分け入った。佇ずして、前後を見廻したこと、白晝それも戸毎に尺八で錢米を乞う身が妓樓に登ったこと、――それが、尾行して來た同心にどれほどの衝撃を與えたかは知る由もない。

「だ、誰かおらぬかい。上るぞ。」

天蓋を脫ぎ取って上り框から喚いた。

玉　蟲

上間にいた女中は、虛無僧が這入って來たのを錢米でも乞うかと思ったらしい。

ぽかんと口をあけていたのが慌てて、

ほどほどに酒がまわると黎左衞門は饒舌になつた。
「何、身共がかようの姿を致しておるが不思議じやと？ よく申した。これでもな、江戸にて川野黎左衞門と申さばチツトは知られた人物じや。されば、よんどころなき筋より依頼をうけ、かく普化僧に變裝な致して京へ紛れ入つておる。」
「ではお侍さまは、江戸かえ？」
「左樣。」
婆と玉蟲がちよつと顏を見合つた。
「今日はほんに、江戸のお人が多いわえ。」
「身共の他にも江戸の客が上つておると申すか？」
「あい。」
「身共同樣の普化僧でな？」
「いゝえ。」
ゆつくり首を振ると、玉蟲のおとがいにふくよかな色氣が漂つた。「たゞの、浪人風のお侍さま――」
「一人か？」
「ふたあり。」
ゆるんでいた黎左衞門の顏が急に引緊つた。
「江戸より參つたと、そ、その浪人が口より聞いたのかい？」

「玉蟲？　よ、よい名じやのう。……そちは？」
「禿の狹衣じや。」
「や。しからばそちが生れは筑前ではないかい。」
「いゝや……」
　頬に垂れるおさげ髮を烈しく左右に振り、「とゝさまもかゝさまも、京じや。」
「ふーむ、……然れば人違いであつたかのう。」
「誰ぞお心當りがおいでますのか？」
「身共が妹も狹衣と申すわい。」
「まあ。お幾つぐらいじや？」
「左様。生れておれば十七、八にもなろうか。」
「うまれて？……」
　ようやく擔がれていると氣づいたらしい。袖で黎左衞門の膝をパツと打ち、
「冗談ばつかり！……」
「はつハハハ……一杯かゝりおつたわい。」
　それから忽ち座が賑わいで酒宴になつた。
　性質として、黎左衞門豪勢なことは出來ない。それでも、遣手婆、禿、遊女玉蟲の他に二人あまり、器量のすぐれぬ女が侍つて主として黎左衞門に盃が集中した。
　當時は遊藝費が終日、女を買いきつて銀一匁である。

きあつた吉田源左衛門、大塚幸兵衛の兩人だつたから黎左衛門も驚いた、いささか、遇うにしては場所柄が氣羞ずかしいが、これはお互いである。

「ほんとうにお上ら、どうして京へ參つたのかい。」

曾ての朋輩と分ると酒の酔いも手傳つて俄然黎左衛門は氣がつよくなり、そのまゝ吉田と大塚の座敷へあがり込んだ。吉田、大塚の兩人とも、夫々に相方をはべらせているが、どうも玉蟲ほどの容色がない。それがまた黎左衛門には滿足である。何とか、心の裏では此の座敷へ玉蟲をつれて來て、二人に披露したくてたまらぬ。その下心もあつて座敷へあがり込んだのである。

「それがしらは御老體がお供で京へ參つたが、お主こそ、いつから上洛致したのじや。」

「何、御老體も京へ上つておらるるのか。これは知らなんだ。シテいずれに御滯留じや？」

「誓願寺内よ。」

「ふーん、……あのお年で、よく參られたのう。」

「おぬしは？」

「見らるるとおりの姿ゆえ、妙、妙安寺におる。」

「何でまたそのようなお主。」

「そ、それだけは訊いてくるるなと云うに。……それより、何はともあれ一獻、うけてくれい。」

前の德利を取り上げて、ぐいと突出した。

「コレ。」

傍らを振返ると八歳ぐらいの禿へ「わしが部屋へ行つてな、玉蟲というをこれへ呼んで來てく

「あい……」
「ふム。」
黎左衞門は持つていた盃をコトリと置いて、
「年の頃はいか程の人物じや。」
「丁度お前さまぐらいであろうえ。」
「江戸は何處におつたと申す？」
默つて今度はかぶりを振る。
良あつて、
「その兩人が部屋は、何處じやな？」
わき差を摑み取ると、ぬつと立上つた。

「や。これは奇怪奇怪。……どうしてお主ら、これにおる？」
「おお、川野ではないか……これは愕いた。其許こそ何時から京へ來ておるのか？」
「それに、そのいでたち――どうしたというのかい。我ら、お主が突然姿を消したゆえ、或いは何者かが手にかゝつて果てたのではあるまいかと寄々噂を致しておつた。一體その風態は。」
「む？　こ、これには何かと仔細あつてな、一口には申せん。……それより、かようの場所でお主らと會おうとは全く奇、奇遇よのう……」
二人づれの浪人に不審をいだき襖ごしにそれとなく覗いたのが、江戸大久保屋敷で無駄口を叩

くるる。」

「何を致すのか？」

「左樣、事は祕密にぞくするで、詳しいこと申せぬが、天下を驚倒さする大事じや。その相談とて、今宵も我ら六角堂にて多三郎めと落合う手筈に致しておる。」

「六角堂？　では矢張り、大月も京へ參つておるのじやな？」

「左樣。——」

大塚は源左衛門と顏を見合つた。幾らか、源左衛門には困惑の色があり、辛兵衛の眼は鷹のように光つたのは大久保彦左衛門が京へ來たあらましの事情は知つているからだろう。

「六角堂、と申したの？」

辛兵衛の方が重ねて尋ねながら前の膳をおしのけて、一膝のり出した時である。

「うぬ。……な、何者……！」

廊下はずれに當つて悲痛な叫びがおこつた。

ついで、きやつと女の叫ぶのが聞える。食膳が倒れ、梯子を轉び落ちる跫音がする、絃歌にさざめく妓樓内が一瞬にして叫喚の坩堝と化した。

「——何事じや？」

浪人三人、互いに目を見合つて呆氣にとられた。

素早く座を立上つた遊女のひとりが、樣子を見に障子をすべり出ると、これ又、

れよ。」

大塚幸兵衛は色白で、二十八歳。黎左衛門よりは古くから大久保家に寄食し、何かと彦左衛門の機嫌を取るのが旨かつたが、それを鼻にかけ、ともすると他の浪人へは相手を見下げた口の利きようをすることが多かつたので、朋輩の間では評判わるく、その傲つた口のききようを、蔭では「大塚法皇」と諷する者もあつた。幸兵衛の父は剃髪して大塚道齋と稱していた、と幸兵衛自身が常に云つていたからである。

大塚にくらべると、吉田源左衛門の方は年もゆき、それだけに經て來た苦勞も多い。人柄も溫厚で、だから兎もすれば黎左衛門も吉田の方に向き直つて話し込む。

玉蟲が裳を引いてはいつて來ると、それ迄、黎左衛門の闖入で遠慮がちだつた他の遊女たちも氣分がとけたか、遽かにさゞめいて嬌笑を立て出した。

玉蟲から吉田、大塚の兩人へも酌をする。兩人の相方が黎左衛門にサービスする。ものの四半刻もたたぬうち、すつかり黎左衛門は醉いで人がよくなつた。

「源左衛門、おぬし、大月多三郎というを覺えておるかい。髑髏の大きいあの。」

「覺えておらいでか。其許が急に江戸屋敷より身を消したは多三郎に或いは斬られたやも知れぬ、と申しておつた程よ。」

「そうか。實を申せば、拙者、その多三郎に合力致して京へ參つた。」

「……」

「こゝだけの話じやがナ、今に、京ででかいこと我ら仕出かしてお主らをあつと羨ましがらせて

「げ、源左衞門。……當方が聲を立てるまで、――武士じや、かりにも狼狽の様あつては相成らん。お主らは、そのまゝ平靜に酒をくんでおつてくれいよ。――よいな。」

言つて、くだけるほど強く脇差を握り、肩を張り、障子の前で一度停つて、力一杯さつと障子を開けた。

誰もいない。

廊下は座敷に添うて一方が手摺の附いた渡り階になつている。一方は先程黎左衞門が忍び足で來た座敷へつゞく。

その中間に階段がある。そこの踊り場に氣を失つて先刻の遊女が倒れていた。

當身をうけたに違いない、と黎左衞門は判斷をした。

「曲者は何處にひそんでおるかい。出ませい。」

あたりにひゞき渡る大聲を發した時だ。

「……黎左衞門、コレ、此處じや。顏をあげよ。……」

低く、囁きかける聲が降つて來たのである。

思わず目をあげて、「ひえーつ。」と咽喉の奥で叫んだ。

蝙蝠の如く廊下の天井に張りついた覆面の士が不氣味な眼で笑いかけている。

隻眼である。

「名、名乘れ。うぬは――」

「靜かになされ。當方御身に殺意あつて參つたのではない。むしろ、其許が身に危害の及ぶをふ

「あつ。」

と叫び、「だ、誰か、來てたもれ……」

悲鳴にちかい聲をあげる。

妓樓に遊ぶ身で、わざと差料は床の刀架にかけてある。

黎左衞門だけが、傍らの小脇差を引寄せた。

「お主、持て。……」

その間に源左衞門が刀架へ驅寄つて太刀を摑むと、大塚辛兵衞へも抛げるように渡した。

「……」

少時、聲をのんで廊下の氣配をうかゞう。

出ていつた遊女は、それきり聲も立てない。

「もうしお前さまえ。」

座敷の中では案外玉蟲が一番落着いているようだつた。黎左衞門の肩へ身を傾け、

「今の姐さまはわたしが永い間世話をうけた常盤太夫さんじや。氣になつてなりませぬ。早よ樣子を見てたもれ。……おねがい。」膝をゆすつた。

「さ、さればと申して……」

「おいやかえ。」

「何……む、しからば見、見て參るでこれにて待つておれよ。……よいな。」

視線をむしろ武士二人へ注いで言うと、意を決したか、

相手はもうその時は身を躍らせて廊下から屋根へとび出していた。

七騎落

覆面装束の十兵衛に刺されたのは、代官五味金右衛門が密かに黎左衛門のあとをつけさせた町奉行所同心二木嘉右衛門である。

嘉右衛門は黎左衛門が妓楼『相模屋』に入るのを見て、少時思案ののち、相役の沖津某を念のため奉行所へ返し、それとなく遊客をよそおつて登楼した。

黎左衛門が曾ての朋輩吉田、大塚両人との奇遇に心をゆるして、この日夕刻六角堂で霞の多三郎と逢う手筈を打明けているのを偸み聴いていて、柳生十兵衛に刺されたのは全て、十兵衛が黎左衛門に囁いた通りである。妓楼『相模屋』は當時京都三筋町――現今の室町西ノ洞院五條橋通りの南――西ノ洞院川にかゝる石橋を渡つて傾城町へ入つて直ぐきわにあつた。楼主を相模屋藤兵衛という。後日、奉行所の取調べを受けたとき、曲者（十兵衛）を故意に潜伏させていたのではないかと相當嚴しい吟味をうけたが、思いもよらぬことで、いつの間にどうして潜入していたのか、「お奉行さまはじめ御役人さま御承知の如く、手前ども屋形には隨分女どもが雑居いたしております、人目にたたぬ道理はございませんに」と、誰よりも不思議がつた。二木嘉右衛門の刺されていたのは遊女七浦の座敷を出た敷居際で、背すじから一突き、左の肺腑を刺貫いていた。

せごう爲じゃ。」
「何を、何を以て左様のことをぬかす。」
「コレ、大きな聲を立てるでないというに。……其許先程多三郎に逢うたと申したな。」
「や、や。ではうぬはあれ、聞いておつたか。失敗つたぞ。」
「しくじりは致さぬ。當方未然に防いでおいた。」
「?――」
「お主は氣づかずにおつたであろうが、町奉行所より其許には尾行の監視がつけられておつた。――それが、お主のあとより當妓樓にて遊ぶをよそおい、先刻の多三郎が一件聞きとつたゆえ、後日の面倒残さぬようたつた今、殺害いたしたばかりじゃ。」
「!……」
「お分りかな。繰返し申す。當方お主に危害を及ぼす意志はない。女わらべの騒ぎ立てるは已むを得ぬが、お手前らは武士、關わりない態をよそおい、――さ、座敷に戻つて酒宴をはられよ。但し、長居は無用になさるがよいぞ。いずれは、奉行所より急を知つて役人ども馳けつけて參る。それに要らざる詮議を受けては事面倒じゃ。この儀は川野どの、お主ばかりでない、座敷の二人にも申しつたえられるがよいぞ。……よろしいな?」
「ま、待たぬか。おぬし、我らや多三郎が急を救うてくると云うからは、いずれは事を知つての上じゃな。なれば我らの味方であろう? 姓を名乘られい。それがし川野黎左衛門、あ、あれなる兩人は――や、待たれぬか、ど、何處へ……」

死相の漂う、その横顔を抱えこむようにのぞき込んで、
「矢、矢つ張りじや！……」
川野黎左衛門は叫んだ。
先程二條城の濠に落ちて奉行所で吟味をうけたときに、立會つた役人の一人に相違なかつたのである。
「見覺えがあるというか？」
大塚の聲が顫えをおびている。
「ある。たしかに身共へ衣服を干して渡してくれた仁じや。――それにしても……」
何を言い遺そうというのか。
「これ、しつかり召されい。……拙者大久保彦左衛門どの供にて京へ参つた吉田源左衛門と申す。何を書こうとなされる。コレ……」
源左衛門が二木を抱え起こし、その全身を搖つた。
微かに、どろんとした眼に生氣が甦える。「こ、……こ、今宵。」
「む。今宵の文字は既に壁にて讀める。――何のための今宵じや。氣を、氣を確かにもたれよ。」
云つて更に全身をゆすると、最後の力をふり絞り源左衛門に身を支えられて、手ずから、胸の血痕をなずつては壁へ書いた。
今宵いぬの刻、吉田神社うちにて

七浦は、嘉右衛門の聲に驚ろいて廊下へ出たところを、階から無言で突落されたという。

さて川野黎左衛門は、相手が柳生十兵衛とは知る筈もなく、曲者をにがしたと思い込んで吉田、大塚の兩人の座敷へ戻り、

「ふ、不思議な奴じや。我らへは手向い致さずと北おつた。」

兎も角、斬られたという人物の樣子を見に其の座敷へ走つた。吉田源左衛門、大塚幸兵衛の二人も無論押つ取り刀で前後する。先程曲者と黎左衛門との話は筒拔けで彼等の耳にも入つているが、兩人にすれば、所司代板倉重宗が彦左衛門を訪ねて來て、密議ありというので特別に、「京見物を致せ」と銀子を貰い受けて來たのである。事もあろうに、それがこういう場所で遊んでいたと判明するさえ氣羞ずかしいのに、刺されたのが奉行所の役人とあつては、事情は分らぬながら戻つて大久保彦左衛門へ何と申しひらきを立てたものか、今から生きた心地もない。まして件の役人が刺された場所に居合わせたのである。次第によつては、所司代への大久保彦左衛門の立場のため、且つは自らの一分を立てるためにも切腹しなければならぬ――。

「大塚。」

走りながら私かに源左衛門は囁いた。

「事によつては我らこの儘には濟まぬ――覺悟をしておけよ。」

「分つておるわ。……」

三人で現場へ馳せつけたとき、二木嘉右衛門にはわずかだが未だ息があつた。それが何を告げるためか斷末魔の苦悩に堪え、おのが血で壁へ何やら書きつけている。

大塚は日頃彦左衛門のウケがよいだけに、こうなると氣がひるむのだろう。
「川野が方はどう致すのじや。確か、六角堂やらにて大月多三郎と出會うとか申しておつた――」
「それはわし一人にて處置いたすわい。各々とは關りないこと、何も、」
「默れ。もともとおのれが徒黨に荷擔など致しおつて――」
「よせというに。今更爭いなど致す場合ではあるまい。お主が參らぬなら、某まかり行つて御老體へ申し上げよう――」
「いや。な、ならば身共が參る。」
「行くか？」
「む。」
紙のように靑ざめた面で、尙も黎左衛門を睨みつけてから、
「御老體に何か手がかりともなる奴。こ奴が監視、賴んだぞ。」
刀を落し差し其の儘妓樓をとび出た。
大塚幸兵衛の注進に奉行所内が色めき立つたのは當然である。大久保彦左衛門は委細を聞いて暗澹の面持に沈んだが、會て面倒を見たことのある川野黎左衛門が、いよいよ事件に紛れ込んでいると分明しては、無理もなかつたろう。
――が、中で、板倉重宗だけは暫し、じつと沈思してから、
「どうもいぶかしい。」
低くつぶやいたそうである。

「吉田？……吉田神社うちにて何がある？」
「やぎゅう」
「柳生と？……柳生の、何じや？」
併しそれ以上は終に書き得ず、二木は事キレた。
漸くその頃には、樓主の藤兵衞はじめ氣性の勝つた遊女や、仲居どもが座敷へ集まつて來る。ともかく役所へ屆けるよう源左衞門は樓主へ指示し、あらためて二木の亡骸を座敷奥へ運び入れた。
それから、
「誰ぞこの内にて樣子を見知つておる女は、おらぬか。」
あたりを見廻したが、誰ひとり、後難を惧れて申出る者はない。實は有つたにしたところで、源左衞門たち三人の面目の立つわけもないのだ。
「もとはと云えば川野、お主に尾けて參つた役人というではないか。我らの立場、一體、どうしてくれるのじやい？」
大塚が眼をつり上げて詰ると、
「止せ。今に及んで左樣のこと申したとて追いつかぬ、此の場に在つた、我らが非運じや。それより、いずれは取調の者參ろうが、吉田神社の柳生というが氣にかゝる。――大塚、お主、ともあれ御老體が許へ注進してはくれぬか。事の如何によつては一刻を爭うやも知れまい。」
「そ、それは……」

彦左衛門が初めて言葉を挾み、

「先刻、當奉行所前にてわしに耳うち致し、多三郎を庇えと申しおつたも正しく十兵衛であつた。恐らくはあ奴、ひそかに門前を徘徊致し、黎左衛門を尾行する二木があとよりつけおつたに相違ない。」

「すると、妓樓に潛入致したは十兵衛その者と申されまするか。」

「そう思わねば筋が合うまい。」

「ならば何ゆえ柳生十兵衛が多三郎を庇い申す？」

「さ、それじやテ。……」

彦左衛門の皺の多い顏にありあり苦澁が浮ぶ。

併し徒らに詮議してみても始まらず、取敢えず吉田神社と六角堂に警戒の手配を下す傍ら『相模屋』を取調べた。且つ黎左衛門を召捕えて吟味すると、矢張り十兵衛に間違いなさそうである。階段を突落された遊女七浦も失心から我に返つて有りの儘を申したてたが、片目の曲者は、「川野如き雜魚を相手に致さずと大物を狙わぬか。今夜戌ノ刻、吉田神社から目を離されぬなよ。」

そう囁いてのちに突いたようだつた、はつきり、これは障子越しに聞いたという。

念のため二木嘉右衛門の死骸をあらためると、重宗の見込み通り、わずかに心臟を抉つて背から胸板へひと刺しの疵である。それも恐るべき手練の切先であつた。

吉田神社境內へ差廻された役人は岩見三左衛門以下與力八騎、同心平林某以下十五人である。

「いぶかしいとは？」
五味金右衛門が鋭い目を注ぐと、重宗はこう言つた。
件の曲者が片目であつたというなら多分柳生十兵衛に相違ないが、二木を刺した意圖が奈邊にもあれ、十兵衛ほどの達人が手がけて、その二木の即死していないというのが訝しい。刺すなら一突きで心臓を仕止めている筈、それを、わざわざ急所を避けたのは「吉田神社云々」のことを、故意に奉行所へ知らせるためではなかつたか。さもなくば件の曲者、片目をよそおつた僞の柳生十兵衛であろう、というのである。
「おことばを返すようでござるが――」
五味金右衛門がこれを聞いて、一膝乘り出し、
「いかさま、然樣の判斷を致されるは當然。なれど、二木嘉右衛門と申すは當京都奉行所内にて一、二を競う一刀流の達者にござる、某の見るところ、二木を刺せるは先ず當代、柳生但馬どのを除いては考えられませぬが――」
大きく出た。
「では矢張り十兵衛三嚴と申すか？」
「いかにも」自信あり氣に金右衛門は首肯した。
「しからば、かりにも江戸大目付の嫡男たる身で、何がため所司代縁下の役人を手にかける？……
…」
「さ、儂が分らぬも、寔はそれじや。」

それから少時、不氣味な靜寂の過ぎた直後だ。微かな跫音が日降坂を登つて來た。
「……來たぞ。」
「しツ……」
木叢のかげに潜んだ同心が相互に牒(しめ)し合う。ぴたりと跫音は停つた。
「何のためひそんでおられる？……出られい。」
低い、意外に落着き拂つた聲である。
「……」
「だいぶ、多勢で參られておるようだが、……各々は奉行所役人か？　それとも刺客か？」この聲には氣合がこめられていた。
「いずれじや？　出い。」
思わず身を動かした同心がある。
もはや氣づかれた上は、と意を決したのだろう。
「出ろ。——」岩見三左衛門みずから左右へ叫んで、木叢影を躍り出た。
黑覆面の侍が突立つている。
忽ち前後左右を取圍まれ、猶身じろぎもしない。
「お手前、何用あつて當所へ參られた？」
岩見三左衛門が一歩出て、「我ら役目によつて相調べる。——其許、姓名は？」
「——」

六角堂へは同じく與力十騎、同心二十名が差向けられた。酉ノ刻に及んでも遂に多三郎の姿は出現しなかつたので後に與力五騎、同心十名は吉田神社警備の役に加えられたが、かほどの人數が不穏の空氣のため差廻された記録は此の日――寛永十三年三月十六日を措いて他に無い。如何に所司代が柳生一門の動きに神經を尖らせていたか分るのである。

　ところで、その吉田神社境内で諸士の目撃したのは思いも寄らぬ光景だつた――戌の刻といえば今の午後八時だ。躑躅の季節には早すぎ、夜ともなれば詣でる人のあるはずもない。そもそも吉田神社は京神樂岡にあり、本殿大元宮には日本神祇三千一百三十二座を鎮座し奉る。境内龍澤より本殿に登る道を日降坂というがその日降坂を中心に、戌の刻前には既に警士二十數名が襷、鉢卷姿で、何事かのおこるのを息をひそめて待ち構えていた。如何なる人物が、何のためにこの夜中に境内へあらわれるのか一切の事情は分らぬ。が、怪しいと見れば容赦なく斬れと重宗は直直に下知した。大久保彦左衛門が老いのいのちを抛つても現場に出向いて眞相を糾明するというのを、或いはこれとて大山鳴動ねずみ一匹の譬に了るやも知れ申さず、先ずは自重なされよと重宗は制し、その代り、何者にもあれ擧動の不審あらば誰何の上にて斬れ、と下知したのである。

　――戌の刻になつた。

　夕刻前に小雨のぱらついた星ひとつない暗夜で、仄かに神燈の洩れる邊り以外は全くの暗闇である。同僚の鉢卷だけが朧ろに白く浮き上つて見える。

　――一時たつ。二時經つ。

　突如闇の梢で鋭く夜鳥が啼き羽搏いた。

岩見三左衛門の再度の尋問を浴び、漸く新九郎の手が鯉口へかゝろうとした其時。
「その武士はお手前がたに斬れ申さず。殺生無益、某にお委せなされ。」
物静かな口吻で闇の何處からともなく人物があらわれ、ゆつくり新九郎に近づいた。
六十過ぎと思える老武士であつた。氣儘頭巾を覆つている。それが、事もあろうに謠曲『七騎落ち』を口ずさみながら新九郎に寄つて行つた。
一瞬前と打つて變り、新九郎は畏怖に愕然と立ち竦んだ。『七騎落ち』は、源頼朝が石橋山の戰いに敗れ、安房上總へ落ちのびようとした時に、乘船に當つて主從八騎となつたが、八騎は祖父爲義が都落ちの折と同じ數であるのを不吉と忌み嫌つた、そこで誰か一人を取殘すこととなり、遂に土肥次郎實平の子遠平を上陸させて七騎落ちしたという曲である。
悠々と、それを謠いつゝ老武士は近寄つて行く。

寒夜ニ聞ヽ霜ノ太刀

狹川新九郎が蜂須賀家の佐々木左門と木津川沿いに京へ入つたことは前に書いたが、新九郎の祖先は大和國狹川城を治めた狹川上野亮助正である。
助正の孫を甲斐守助貞といい、織田信長に仕えて、天正十年、信長の弑されるに及んで狹川城も陷つたので、牢人となつて一時柳生石舟齋のもとに身を預けた。その比、新陰流の上泉武藏守

「申さぬか？」

「これは無體。この暗闇に、お手前らこそ役目柄とは何を以て證されるかな？」

「何？」

「されば、當方姓名を名乘り申せばとて直ちにお疑いは霽れ申すまい。當方とて同じ、かゝる場所で、徒らに役目柄を申されても一向合點參らぬわ。然れば此の場は相見互い、強つて、取調べると申すなら武士の意地、……刀にかけても罷り通るぞ。」

「おのれ不屆な奴。――斬れ。」

叫ぶと同時に七、八人一齊に太刀を拔いた。まだ警士の大方は木陰にひそんだ儘でいる。後事に備えるため、先ず岩見以下の第一隊だけが躍り出たのである。

――そのことを既に察してか、或いはのがれ得ぬと知つてか、件の覆面は刀へ手はかけぬ。

「これは氣の早い。……お手前がた先ず身分を證されるが身の爲ではないか。その構えとうで、それがしは斬れぬ――」

「默れ。」

岩見三左衛門はぷつと刀の柄に濕りを吹き、

「慈悲によつて今一度問いつかわす。何者じや？　名乘れ。……」

――多分この押し問答が尙一兩度繰返されておれば、同心の何人かは斬死していたろう。

覆面の武士は、狹川新九郎（仙臺藩）である。尋常なら岩見如きは敵ではなかつた。

――が、事は意外な方に進展した。

百石を與え、刀法師範の職を命じた。

その後、江戸へ參覲した砌り、政宗は柳生宗矩に、

「御邊も人が惡い。この老耄に、今になつて過ぎた男を吳れおつた。未練が殘るわ。」と言つたそうだ。

伊達政宗は外様の中で、最も柳生宗矩と親しかつた大名である。兩者の親交を物語るのにこんな咄がある――。

御三家の一德川賴宣は紀伊藩主となつた頃から名ある浪人を多く召抱え、或いはひそかに影扶持を送つて萬一の場合おれに合力いたしてくれよ、と懇望していたが、そんな浪人で、曾て上杉景勝に仕えた横田大學なる名臣があつた。大學は德川家康にも懇意の者で、元來は一城の主であるが、沒落して上杉景勝に仕えていたのである。その後、景勝は小身となつて米澤へ移され、武臣の大半は浪人したが、特に家康は大學の行方を南光坊天海に問わせたところ、既に出羽へ引籠つていて召しに應じないのが分つた。家康は、惜しい男よと口惜しんでいたのを賴宣は幼少のころ聞き覺えていて、大坂の陣ののち、板坂卜齋に横田大學を召抱えたいものだがと相談をした。

(賴宣まだ十四歲の時であつた。)

すると卜齋は、

「どうも横田大學へは仙臺黃門(伊達政宗)も心をおかけなされ候由、手前、政宗公とはそれ程心易くござ候わず。柳生但馬守は政宗公と無二に心易く候間、但馬に尋ねさせ候え。」

と言つている。

が柳生へ來たから、石舟齋とともに上泉武藏守について刀術の教授をうけ、のち單身明へ渡って更に刀術を精しゆうして歸つたという。

助貞の子を筑前守助延といい、以來世々刀術を業とした。助延の子が新九郎助信である。いってみれば新九郎は柳生新陰流へは相弟子の間柄に當るが、自ら但馬守宗矩に師事して終に秘太刀を編み「寒夜ニ聞ク霜ノ太刀」と唱えた。愛洲新陰の奥義書に「此ノ構ヘハ眼ヲスマシ、心ヲ靜メテ寒夜ニ霜ヲ聞ク如ク、敵ノ手立ヲ見ル心ナリ。」とある。新九郎のは祖父助貞が奥旨を極めて戻つた明の刀法を加味し、大上段の位に霜ヲ聞ク心境を導入したのであろうが、その精妙さに於て父宗矩をしのぐと云われた柳生十兵衞が、狹川新九郎との稽古で大上段に構えられ遂に及ばず、

「我は父の直門中たゞ狹川の上段を推す。」

と慨嘆せしめている。

仙臺藩主・伊達政宗から宗矩が兵法師範の推擧を乞われて即座に推薦したのもこの狹川新九郎である。

「悴十兵衞に勝るは、この宗矩にも優るならんと、人は申し候。」

と其時宗矩が微笑しながら言つたので、政宗は且つは喜び且つは怪しんで、新九郎が仙臺に來ると早速、刀術に精しい者十四人を撰び新九郎と立合わせた。新九郎が上段に構えたのは十四人中たゞ諏訪半右衞門(當時五十八歳の老臣)ひとりであつた。諏訪は一合をも交えず、新九郎の大上段を見て「我の敵するところに非ず。」とその場で太刀を抛つた。政宗は感嘆して新九郎に三

と嘆じたというのである。

さて、それほどの狹川新九郎に向つて『七騎落ち』を謠いながら、氣儘頭巾の老武士は近寄つていつた。

新九郎を取圍んでいた同心達が悠然たるその態度に呆れ、中で氣丈の一人が、

「おのれ何者？」

行手を遮ると、

「お退きなされ。お上たちに斬れる相手ではない。」

靜かに言つて、歩一歩、あとは無言で覆面裝束の新九郎に迫ると、

「……其方、大上段の祕太刀を會得しておるそうなが？――わしの業、受けてみるか。」

新九郎はその聲を聞くや「あつ。」と云つて、聲も發し得ぬ。

老武士が近づくとその步幅だけジリジリ退つた。

退りながら、

「人違いなさるな！……」と叫んだ。

聲が乾ききつている。

「拔かぬか？　其方で拔かねば當方より參るぞ。」

「待つて下され。こ、この新九郎を何ゆえ――」

「知らぬ。天命のきわまるところ、不憫ではあるが、死ね。」

頼宣はそれでも諦めずに一日、柳生宗矩へ大學のことをそれとなく伊達政宗へ打診してくれと頼んだところ、政宗の返答として、
「横田ことは戰場にて人も存じたる者なり、一萬石にて堪忍致し候わば我等もほしく候え共なかなかそれにては合點致しくれ申さず。」
との返事だつた。
結局、この横田大學は頼宣も伊達政宗も遂に召し抱え得なかつたが、とも角政宗を動かす爲には、頼宣ほどの身でも柳生宗矩を通す必要があつたのである。
又、政宗の嫡男で宇和島藩主となつた伊達秀宗が、誤つて家老山家淸兵衞を斬り、父の逆鱗にふれたとき、わざわざ宥しを乞うために柳生家を使者に立てている。
――それほど、政宗と柳生但馬守は親しかつた。
狭川新九郎を推擧されて政宗が欣んだのも當然で、後年、新九郎の子の狭川新三郎助直も同じく宗矩に從つて刀法を學び、其祕奥を得て柳門四傑の一と稱されたが、新三郎みずからは、「我は父の境地に未だ遠い」と常に洩らしていたそうで、新九郎の武藝がどれほどかを物語る今ひとつこんな挿話もある。
或る日、澤庵和尚と新九郎が對話していた。時に一羽の雀あり、飛び來つて座側に入つた。新九郎は徐かに扇を執つて之を壓伏した。暫く後、話しおわつて扇を擧げれば雀は驚いて飛び去つた。新九郎は聊かも顧眄する所なく、從容たるもので、澤庵は深くその妙技に服し、
「其許は但馬以上ではあるまいかな。」

パチンと一方の太刀が鞘に收まる音。

良あつて、

「この人々は君のため龍門原上の土に屍はさらすとも、惜しかるまじき命かな。いずれを選び出さんと、さしもの實平思いかねつ……」

低い、鬼氣迫る聲が謠いながら靜かに此の場を立去ろうとするのである。

ようやく、同心達は己れに返り、

「待てい。……」

岩見三左衛門が聲を勵まして呼びかけ乍ら、

「各々、出、出ませい。」

四邊の木叢影へ叱咤する。

木の葉を鳴らして彼方此處に十數人があらわれた。いずれも白鉢卷、襷掛けに勇み立つているが、內實は目撃した老武人の神技に茫然としている。闇をへだてて見た限りでは、謠いつゝ近づき、すれ違いざまに新九郎に一刀を浴びせたとしか思えなかつた。然も斬り伏せて、あとも見返らず此の場を去ろうというのである。

覆面裝束の狹川新九郎が如何なる達人か無論諸役人はまだ知らぬし、不思議の老武士の正體は分らぬ。

併し彼等とて、この吉田神社へ選ばれて來た面々である。多少は腕に覺えもある。

老武士が、名ある兵法者に違いないことだけは分つた。

言つたが別に太刀に手はかけず、再び低く謠曲を誦し徐ろに歩を運ぶ。
新九郎は又跳び退つた。
「……そうか。」臟腑を絞るような悲痛な聲である。
相手が何者か、もう新九郎には分つているのだ。
「……左程に申されるなら……」
左足を半歩引いて、鯉口を切つた。老武士は歩度を緩めない。
「……身は捨小舟うらみても、身は捨小舟うらみても甲斐なき憂き世なるらん。是は兵衛佐賴朝とは我が事なり。さても昨日石橋山の合戰に味方打負け……」
謠いつゝ右、左と足を運ぶ。じりじり新九郎は後退する。次第にその眼に殺意が光る。徐かに手が刀へかゝり、
「この新九郎を斬れるとお思いか？」
太刀を抜いて徐々に大上段に構えた。老人は相變らず無手で近寄る。
新九郎は又とび退つた。
不意に老武士の唇から、謠曲でない一聲が洩れた。
「……」
聲にならぬ叫びが闇の中におこり、もう謠曲は歇んでいる。
闇夜に白刃の交叉するのを僅かに諸役人は見たが、ずい分長い沈默があつたと思われた後に、バサリと、頭上で切られた梢の落ちて來る音がした。

る。其方ら、無用の手向い致したとて縛められる當方ではない。早う去れ。」

不思議に威嚴のこもる語氣であつた。

思わず役人輩が顔を見合い、その容姿の悠然たる様（さま）に壓せられて見送つていると、老武士は又謠いついで、奈邊ともなく姿を消した。

無用と云われても立去るわけにはゆかず、岩見の指令で與力の一人が馬を驅り直ちに右の仔細を所司代屋敷へ告げた。一方、境内に殘つた者は、龕燈（がんどう）に灯を點じて覆面の屍骸をあらためると、鎖帷子（くさりかたびら）を着込んだ筋骨たくましい侍である。年齒は二十七、八、腦天から鼻梁へかけ一刀を浴びせられ、夥しい血に顔面が染つているので容貌は卽座に確（しか）と見定め難い。忍び道具らしい麻紐一すじ以外に所持品は無かつた。

注進を聞いて驚いたのは所司代屋敷につめていた彦左衛門と京都代官五味である。

「新九郎と申しおつたか？」

「は。確かに左様に――」

「姓は？」

「終始口にのぼらなんだと覺えまする。」

「斬つた老人が人品は？　い、卑しくはなかつたであろうな？」

「闇夜ゆえ確かなことは斷じかねまするが、いかにも人品いやしからざる武士。」

「それを師と呼ばなんだか？」

岩見三左衛門とてこれは同様だから、おのずと尋問の語調にも畏怖の念が混る。

「我ら奉行所より當境内警備のため差廻されし面々、役目柄相尋ねるが、いずれより參つていずれへ赴かれるか?」

背を向けた老武士はふと謠いやんで、

「五味金右衛門どの配下か?」

「左樣。」

「所司代どのは? この場の警備に釆配は致しおられぬか?」

「そ、そのようなこと答え申すすじはござらぬぞ。それよりお手前が事、」

「それならば問われても無用。一切、當方口を割らぬ。——それより、もはや當所にて變事はおこり申すまい。夜中に要らざる詮議など無用にして立歸られたらどうじや。この上警備なされておつても犬の子一匹あらわれは致すまい。」

「然れば何ゆえ其許それを御承知じや? 又、姓名も明かさぬ仁より左樣のこと聞けばとて、おめおめ此の場を去れる我らと思召すか?」

「ならば、存分に——」

「待てというに。」

その儘、また歩き出すのだ。

三、四人がバラバラと前方へ廻り込もうとすると、

「所司代聲がかりの與力十三、同心三十名——〆て四十三人この場に在りとは承知の上で罷りあ

「なれば確かに『七騎落ち』じや。」
「金右衛門、その『七騎落ち』と申すが大意は何じやい。」
彦左衛門が問うと、
「されば源頼朝が石橋山の合戰に敗れて落ち申すとき――」
五味金右衛門は些か誇らしげに梗概の說明をする。
――途端に、
「讀めたぞ。」
頓狂もない奇聲をあげ、
「そ、それは柳生じや、柳生但馬に相違ない。」
彦左衛門は叫んだのである。

丁度その頃。
こちらは老武士である。吉田神社の境内を拔けると、道を南にとつて神樂岡山裾づたいに眞如堂わきから黑谷へ出た。殆んど綾目(あやめ)も分たぬ闇夜の中をさながら見える如く往く。
黑谷の黝々と聳え立つ森影に一寺あり、老武士は山門をくゞつて音もなく境内から內庭へはいつた。
書院に灯がついている。
緣側の前で停ると、

「は、——別に」
「ふーむ。」
「御老體に、お心當りがござるか。」
金右衞門がチラと上座の重宗を見て、膝を進めると、
「分らん。師と呼ぶなれば一應のめやすも附こうが——」彦左衞門は腕を組んで、「残念ながら分らんわい。」
重宗が聲をかけた。
「謠つておつた文句に其方心覺えはないか？」
「それがし不調法にて、謠曲に一向馴染がござりませねば。」
「それは分つておる。歌詞に覺えはないかと申すのじや。一節にてもよいぞ。」
「は。……何でも、この者は君がため屍をさらすとか謠つたようにおぼえまする。」
「屍をさらすと？……」
「御意。」
五味金右衞門の小鼻の孔が大きく開いて、
「所司代どの、それなれば或いは七騎落ち——かと愚考いたしまするが。」
座敷はずれに手をつかえる與力へ向き直り、
「龍門原上の土に屍をば曝すとも、惜しかるまじき命かな……左樣謠い申さなんだかい？」
「い、いかにもその通りにござる。」

武藝帳に名を連ねる面々のうち、

仙臺　伊達　狹川新九郎

の一條をすーと消した。

密　使

宗矩とは表裏一體となつて武藝帳の事に當つている兄十兵衞には、狹川新九郎の名の消された仔細は分つているのであろうが、又十郎には何のことかわけが分らない。
寶のところ、江戸にいる筈の父宗矩が此の場に現われたのさえ、又十郎にすれば不審である。武藝帳の何たるかは知らぬが、それが貴重な品であることだけは違いあるまいに、父は事もなげに墨で汚したのである。
消した、というより何か樂書きでもする風な輕い宗矩の筆運びだつたので、それが狹川新九郎の此の地上より抹殺された意味とは、又十郎に理解出來るわけもなかつた。
「十兵衞。」
「は?」

「父上か？」
室内から聲があり、立つて來て障子をあけた。
默つて老武士は入つた。
獨眼の顎に無精髯の濃い武士と並んで女裝の普化僧がいる。
一齊に、緊張した視線を注ぎ上げたが、老人は用意された正座に著くと、
「十兵衞。武藝帳を出せ。」
言つて、ゆつくり頭巾の紐を解いた。
「如何なされますか？」
「出せと申すに。」
低いが一途な聲だ。
ちよつと十兵衞は女裝の方を振見て、
「江戸より持參致した方ですか？」
これには無言で頷いた。
十兵衞が次の間に下り、やがて一卷を所持して父の前へ置くと、包みの袱紗を解き、紐をとき、さらさら膝の前に擴げる。曾て友矩が見たことのある姓名列記のあの一卷である。
思わず傍から二人が覗き込むのへ、
「又十郎、硯を持て。」
宗矩は言つて、文案から女裝の又十郎が硯箱を持ち來つて其處に置くと、手ずから墨をすり、

「明日は、そちじや。」

「?」

「知つておろうが藝州の寺澤半平が倅、いらざる仲裁をかつて出て町奉行所に捕われおつた。仲裁を申しつけたは父の半平であろうが、次第によつては藝州公自身やも知れぬ。その邊のところ、其方が才覺にて質すことが一つ、今ひとつは友矩の見たと申す隠者・日夏蓮眞――」

「……」

「越前忠直卿の密命にて京へ参つたか、それとも蓮眞みずからの肚にて致した上洛か。もし、忠直卿が意向に出るなれば何ゆえを以て、江戸へ参らずこの京に潜伏いたすか、蓮眞一人の意による場合は、その根據は何か?……話がチトやゝこしいが、右のふたつ其方の手にて調べて貰いたい。多分、我らと直接に關りある筈はないと思うが、今の場合、あまり人の出入が多いと、事が何かと面倒じやでな。――明日のうちにも、右の二條、頼んでおく。」

「……」

「父上。」又十郎は宗矩の手で武藝帳が巻き収められたのを見て、初めて聲をかけた。

「わたくしは何をいたせばよろしいのでございますか?」

宗矩の擧措へ不審の残つていることに變りないし、從前は十兵衛に指圖をうけて來た身だが、今、父と對面しているので、この際自分のことも聞き取つておこう、と咄嗟に思い立つたのであろう。いくらかその又十郎の表情に含羞みの色のあるのは、久々に父と對面して挨拶もまだ述べていないことと、女装の折は兄や柳生の弟子の前でも女ことばで話すよう吩いつけられたが、さ

「馬木家六の知らせはまだ參らぬか？」
ホトリ、と硯函へ筆を措いて十兵衞をかえり見た宗矩の顏に、樂書きなどとは思いもよらぬ沈痛の色がある。
「まだ參りませんが。……いずれ、今明日中には友矩の連絡もあろうかと存じまする。」
「友矩は、では公卿家へ出向いたのじやな？」
「左樣であろうと……」
「其許は知らぬか？」
「未だ神矢悠之丞なる者に出會致しませぬで。」
十兵衞の片目の瞳孔全體が、燭臺の灯を反射してギラギラ光つている。
事を解せぬながらに、それで愈々不審の念を又十郎が深めていると、
「次は馬木家六ですか？」
低く、十兵衞が尋ねた。
「……」
宗矩は默つて膝前の武藝帳を執りあげ、兩の手で卷く。
チラとその手許に視線をなげ、十兵衞はハツとした。手首に微かに傷があつた。――が、さり氣なく、
「明日の御豫定は？」
おだやかに訊く。

十兵衞は途中で、追うのを歇めて目を据えた。この時の十兵衞の顏は何か横へ向けたと見えたが、片目ゆえの自然の習癖であろう。

冷笑とも、安堵ともつかぬ薄わらいに十兵衞の頰がゆるむと、闇の四邊を念のため見渡してから、悠然り座敷へ戾つて來る。

後ろ手に障子を閉めた。

「何者ですか父上、あれは？……」

まだ笑つている。相手が夜目にも白い襷鉢卷で、案じたような浮月齋一派の忍者ではなかつたからである。樹の葉を騷がせ夢中で逃げ出した足つきは早かつたが、いのち惜しさの爲せる業で、所詮、十兵衞が本氣で追えばのがれられるいのちではなかつたからだ。

宗矩は、

「あれは逃がしておいた方がよい。」

落着いた口調で言い、めずらしく目を笑わした。十兵衞のとび出していつた時に、障子のすべりを十兵衞がきちんと測つたことへの、滿足からである。普通の者なら、曲者ありと聞けば障子は夢中で音たてて開ける。十兵衞は、そういう咄嗟の折にも音を忍んで開けていた。

「そもじの名は、何と申したかな？」

十兵衞が座に坐ると、再び宗矩は又十郎へ向き直つた。

「ま、萬でござります。」

これも兼ての手筈なので答えると、

すがに、父を前にしては、それも氣羞ずかしかつたのだ。
宗矩は併し表情ひとつ動かさぬ。
「そなたか？」
ゆつくり顔を向けて、「いつもながらお美しい……、少しは京の町にも馴染まれたかな？」
カラカわれているようで、何と返事してよいのか又十郎には分らない。
「ハ、ハイ。……」
兄の顔を思わず見ながら、うなずくと、
「そうじや、女人に似合わずそなた武藝を遣うそうなが、一度、手のうち拜見させて頂こうかな。」
「？」
「――十兵衞。」
視線を戻して、
「丁度よい相手が、あれにおわす――」
目顔で庭を示し、「これへお呼び致したらどうじや？」
又十郎が心中あつと聲をあげた時には、十兵衞は差料を摑み横つとび緣側へ出ていた。
その背へ、「斬るなよ十兵衞――」
十兵衞が障子をあけて飛び出したのも捷かつたが、逃げる彼等の足も早い。

「い、いたしまする。どの樣にでもして。」

「出來るか？」

「ハイツ。……」

爲損ずれば死ね、という意味のダメのおし方と思うから、さすがに請合つて、又十郎の頰がすうーと靑ざめる。

宗矩は言つた。

「そなたに『くの一ノ術』をほどこした頃、まだこれ迄に武藝帳で人が動くとは思わなんだ。しかし今ではうすうすそなたも知るように江戸にて松平伊豆、春日ノ局、大久保の老人も氣儘を出して京へまで參つた樣子。爲に、所司代が事を嗅ぎつけ京洛中に警固の手配を致しておる。加えて日夏蓮眞の出現じや。永井信濃守が息女のことなども當初は思いもよらざる儀……これでは、浮月齋一派の暗躍のみを目安に構えてはおれまいのう？」

又十郎は父宗矩のこういうくだけた物言いは聞いたことがない。いつも、胸中に何を考え込んでいるか、表武藝も練達であるが思慮も深い父のことゆえ、弱輩の自分に內意のうかゞえぬは當然にしろ、何か、從前は一種の不氣味さを父の人柄に感じてきた。それが、この夜ばかりは別人の如くにうちとけている。要するに柳生武藝帳と呼ばれるものをめぐつた世の動きが、宗矩の當初の判斷を越えた邊りにまで擴がりそうゆえ、これ以上の錯亂をさけるために、事件の核心である武藝帳列記の人物――二皇子を叡念によつて暗殺し奉つた者を含め、高弟すべてを無きものに

「萬か、……そなたは近く、嗣長卿が邸へ往つてもらわねばならぬ。それも、公卿に變裝してな。」

「？……」

「父は先刻狹川新九郎を斬つた。今の二人は、其の場にいた奉行所役人であろう。」

「な、何と仰せられます？」

「靜かに致せ。父とておのが手鹽にかけ指導した弟子を斬る太刀は持たぬ。が、もはやこれまでに事が搆がつては本意に非ず、――次第によつては、そなたも斬ろうやもしれぬぞ。」

「わたくしは、……わたくしが一命などは、構いませぬが、父上、何故、あれほどにお親しみなされた伊達樣の御指南役――」

「……」

「申して下さりませ。この又十……萬は、おのぞみとあればいつにても一命を差上げまする。しかし、せめて理由（わけ）なとうかゞわせて頂かねば堪忍がなりませぬ。申して下さりませ。今お消しなされたのは――」

宗矩の手が、音たてて硯函に蓋をしたので又十郎は思わず言葉が閊えた。黑地に七夕蒔繪の美事な函である。

「よいか、そもじが不審に思うも無理からぬが、この武藝帳に列記の面々、ひとりずつ父と十兵衞で斬る時が來たのじや。――但し、そなたの働きにより、藪左中將嗣長卿が手中の一卷見事入手致さば別――」

う不安である。

「父上。」

又十郎はもう女の口吻などでよそおつてはいられず、紅潮して一膝進んだ。

「わたくしのお役目には、必らず死力を盡しまする。併し、副長卿とやらの手許にある品を奪い得ずして、お父上の只今申された如く列記の方々をお手にかけなさろうとも、かように申してはお怒りなされましようが、もし、もし父上がお負けなされたら、何となさるのでございますか？」

「……」

「兄上、兄上はこの點を何とお考えなされているのです？」

又十郎は思わず兄へも熱い眼を注いだ。言下に十兵衛は、

「その方未熟にてまだ分るまい、父上が武藝の程は、恐らく世の評價以上――。少しは強いと云われるこの十兵衛とて、足許にも及ばぬぞ。」

すると宗矩が、靜かに言葉をはさんだ。

「よく其處へ氣がついた、又十郎、いかにも、この但馬、負けるかも知れぬ。」

「父上。」

「十兵衛も聞け、わしは先程新九郎を斬つたが、技（わざ）で勝つたと思うか？……あれは、新九郎より負けて來たのじや？」

「？」

「技に於て新九郎の大上段、わしに優る。それを、我が意（こゝろ）を祭し自ら新九郎は斬られて死んだ―

する、という。

當初は、武藝帳三巻を入手すれば自ずと密命を果した者が分明する筈であつた。事が紛糾して、今では全巻を獲るさえ容易でないのに、宗矩の最も惧れる所司代が動き出している。事が公儀の糺明するところとなれば當然、宗矩の身に譴責が下ろうし、所司代の努力如何によつては禁裏の祕密が暴露して宗矩以下、詰腹を切らされるかもしれぬのである。死そのものは宗矩自身、おそれぬにしろ、かりにも大目付の職分に在る身で、前將軍秀忠息女の生み給うた皇子を弑する役目を陰で果したとあつては、柳生の弟子を師範役に抱える諸大名にまで嫌疑がかゝろう。常々宗矩を相手に稽古を勵む家光にすら、老中一同より一應の諫勸があるに違いない。そうなつては家光自身の將軍たる威信は地に墜ちようし、いずれにしろ、天下は未曾有の精神的不安に捲き込まれる——。

いえば、そういう事態を防ぐために、最後の手段でおのが手がけた門弟を斬ると宗矩は言う。——が、又十郎には新たな不安が湧くのである。いかに師と呼ばれるとは云え、父宗矩のもとで彼等が修練したのは七年餘も前であつた、然もその半ばは、父にでなく柳生の大叔父松吟庵に仕込まれた。又、宗矩とても老年の衰えは如何とも爲し難いだろう。萬に一、過つて父の方が斬られたら武藝帳はどうなるのか？——という不安。

今ひとつは、かりに父の實力が神技の如きであつたにせよ、所司代の嚴しい監視を如何にしてのがれ得るか。萬に一、父宗矩が高弟を斬つたと分明すれば、それだけで天下の疑惑は沛然と集注する。師範に抱えた藩の大名も默過すまいに、そのことを父は如何に仕置するつもりか、とい

代痛風を患つて右足が三寸程短く、跛をひいて歩行も思うにまかせないので、退屈まぎれに五寸釘を投げて雀を打落すことに興味を覚え、日々根氣よく修練するうちに百發百中、すつかり腕をあげた。そこで、手裏劍で身を立てようとはかり生玉に道場を持つた。彼が左右に八本ずつ、〆て十六本を把り、矢繼早やに繰出す手裏劍術は大方の武藝者も㤀わず次第に門弟がふえた。竹永は誰かあつて我に勝る者にめぐり遇いたしと兼々弟子に洩らしていた。

一日、遂にのぞむ相手にめぐり會つた。則ち柳生十兵衛である。

竹永は十兵衛との立合いに當つて、手裏劍の先に胡粉をつけ、胡粉が十兵衛の黑の着附につけば竹永の勝であることを豫め申しあわせた。さて竹永は左右の指に各々八本を把り、懸聲もろとも左右交互に手裏劍を打つた。その輕捷なること一本の槍の繰り出される如く流れて切れ目がなかつた。十兵衛は鐵扇で拂い落していつたが次第に顏色が青ざめ、

「それがしの負けじや。」

と言つた。

十兵衛の着附には十四ケ所の白い點が附いていたのである。併し、二度目の試合に竹永の手裏劍は一本も着物に觸れることがなかつたという。

一說に、この竹永を大坂横堀材木問屋の忰で、名を毛利玄達としているが、當時玄達なる武人は存在しない。竹永隼人は心眼流を遣つたというから手裏劍術でも無さそうである。詳しいことはだから分らないが、『術藝夜話』によれば、竹永の弟子に京都町奉行所役人（外側破損方）を勤めた淺尾吉左衛門なる侍があり、それが京に於ける當時の動きを目擊して、私かに師の竹永に𢘿

――」

「……」

「よいかな、彼を仆しに向つたがこの宗矩と知つたゆえ彼は默つて我が太刀を浴びたが、爾後の者、同じ覺悟を決してくれるとは限らぬ。生死の場に臨んで新九郎同様、とつさに一切を見拔いてくれるかどうか……。わしが劍を把つて教え、柳生流兵法の何たるかを仕込んだその成果は、これから正に現われようとする。――もし、我が武術の眞諦を會得して呉れておつたら、新九郎同樣に默つて我が刃に伏そう。然らずば、いのちを賭してこの宗矩に勝負を挑む。――それも兵法、かれも兵法……思えば武藝帳には柳生但馬が劍のいのちがとじられておつた……」

仙洞御所（一）

宗矩が次に斬ろうとした門人は加賀藩の笠間又兵衛である。伊達藩にしろ、加州の前田家にしろ德川氏に拮抗するに足る雄藩だが、事が失敗におわつた場合、そうした雄藩の師範役であつた彼等の立場を何か逆用する意圖に據つたのではないかと、當時京都に在つた劍客竹永隼人は『術藝夜話』に記しているが、これは分らない。

（竹永隼人というのは、閱歷未詳の人物で、巷說では柳生十兵衛との試合を云々されている。――何でも寛永のはじめ頃、大坂生玉に道場を持つ竹永某なる手裏劍の名手があつた。彼は幼少時

「今一人は確と女人であつたか？」
「はい。」
「萬と申したと？」
「左様――」
金右衞門は膝を返し重宗の顏を見るのへ、
「老武士の落着いた先は黑谷の寺と申すのか。」
垂問する重宗の口調には常と變つた昂ぶりの氣配はない。併し顏色は誰よりも蒼かつた。
柳生十兵衞を呼び捨てにする者なら正しく但馬守宗矩に相違ないが、かりにも大目付の要職にある身が、公儀の通達なしに上洛する筈がない。特別の上意により、敢て內密に江戶を發足したにしても、所司代へはその旨の連絡が內々にあつて然るべきものである。それが無いのは私用の入洛と見做さねばならないが、宗矩ほどの人物が、おのれの私用で京に潛入したことをわざわざ尾行の役人へさとらせたというのは、妓樓で二木を斬つた十兵衞の場合と同樣、ことさら、その潛入を所司代へ知らせる肚だつたと見なければならぬ。
然れば宗矩の眞に意圖するところは何か？
次に萬という女性の正體が重宗には思い當らない。但馬守には女があるが萬という名ではない。
吉田神社境內で斬られた覆面の士の身許も重宗には謎である。柳生一門に敵對する浮月齋の配下なら、「人違いなされるな。」と呼びかけるのは訝しい。又宗矩の門弟なら、何故おのが弟子を

生但馬守の京都潜行の行跡を物語つたという。)

いずれにしても、だが宗矩は笠間又兵衛を目ざした。寛永十三年三月十八日——狭川新九郎の斬られた夜から二日目である。

場所は仙洞御所わきの柳馬場であつたが、それを暫く前に所司代の動きに觸れておかねばならない——。

宗矩が、新九郎を仆した吉田神社の境内を立去つてから、ひそかに其の跡をつけた役人二名が柳生十兵衛に脅かされ、遁走した條りは前に書いたが、彼等は直ちに右の仔細を所司代邸へ報告した。

「何が何やら分らぬわい。」沈痛な面持で大久保彦左衛門が一先ず智積寺の宿舎に引揚げた直後である。

代官五味金右衛門はまだ残つていて、これは額に深い立皺を寄せ、重宗が何か指示するのを待つている。——そこへ、右の二人が息せき切つて馳せ戻つたのである。

二名は直ぐ重宗の居間の庭へ通された。次の間に控えていた家來が先ず手燭をかゝげて、縁側に進み兩人より委細を聞き質していると、

「十兵衛をその者は呼び捨てたのじやな?」

金右衛門が扇を取直し、質問を引取つて一膝出た。

「いかにも十兵衛と呼び申してござりまする。」

今玄關に參つておられまするが。」
小姓が廊下に手をついて告げた。
重宗の手から箸がこぼれ落ちた。
「……但馬守が參つた?……」
思わず呟いて、
「通せ――」
小姓が一禮して去ると、わざと悠然り重宗は食事を採りつづけている。時々、箸をとめ、朝日の差す庭に呆然り視線をとめた。小雨のバラついた昨晩と違つて、爽かに空氣の澄み透つた朝である。食事を了えると裃を出させた。
應對の座敷へ出向くと、宗矩も裃を着用して、ひつそりと坐つている。
重宗はその脇を通つて上座に着いた。
「……」
暫く無言で凝視した。
宗矩は居睡りの眞似をしていたのだ。それが、薄くすうーと目をあいて、
「お人拂いを願い申す。」
不氣味に頬笑んだのである。
「餘人に聞かれてならぬ要件にて參られたか?」
「御賢察の通り――」

この京で、奉行所役人衆目の前で斬つたか？
……要するに、重宗にはこの時何ひとつ解せることはなかつたし、云えば宗矩の韜晦策は見事効を奏したのである。併し板倉重宗も一代の傑物だつた。
「黒谷の寺とやらへ直ちに吟味方の手配致しましようや？」
金右衛門が思い餘つた面持でうかゞうのへ、
「予に考えるところもある。一兩日、この儘で樣子を見ると致そう。」
そう言つて制し、たゞ斬られた覆面の死骸だけは嚴しく吟味するようにと命じた。
翌朝になつて、檢死の報告が屆いた。
斃れていた者は年の比三十前後、所持した刀は備前四郎國安、在銘で、近頃に人を斬つた血のりの迹はなく、手入れの行き屆いた美事な一ふりである。尚、容貌は顏面の血を洗つても最早たしかには見定め難いが、念のため町廻り目付配下の役人を諸所に出して調べさせたところ、京極寺に數日來滯在していた旅の武士が昨夜から戻らぬという、寺僧を伴つて死相をあらためさせると、果して同人物であることが分つた　何でも奥州の浪人で山城在の知人を尋ねて上洛して來たという。遺留品を檢べようとしたが何一つ無かつた。――以上が檢死の報告である。
居間で遲い朝餉を採りながら取次からこれを聞き取り、重宗はフト箸をとめ、
「矢張り柳生が高足の一人か……？」
呟いた時だ。
「申上げます。江戸表より柳生但馬守さま内々にて上洛遊ばされ、申上げたき儀がござるとて只

書院造りの床の間の明障子に陽差が白く映え、兩者の片頰が餘映に浮き上つている。皺は、宗矩の方が深かつた。重宗は五十二歳、但馬守宗矩の年齢六十八歳である。

「疑つておられるな。」

宗矩は微苦笑した。「念のために然らばこれを披露致すが、よろしいか?」

語尾に不思議な威壓がある。

「何を披露なされるかは知らぬが、所司代としてのこの身へ申されるか。それとも、私人としての重宗へか?」

口調に凛然たる氣魄をこめて重宗は訊き返した。

「いずれなりとお手前の覺悟次第。」

聞えぬぐらい低く宗矩は言う。

「しかれば所司代の職分にて、拜見いたそう。」

「然樣なれば——」

宗矩は能面の如く無表情の顏で、懷中より白い封書を取り出すと、忽ちに容を改め、

「お墨附でござるぞ。」

「あつ。」重宗の顏色が變つた。

「拜見召されるか。」

「待て。そ、それは……」

おそらく柳生宗矩も切腹を覺悟でしている芝居であろう。それは見えているが、併し滅多なこ

重宗は尚もじつと凝視め返し、徐ろに、膝前の湯呑を取上げて、茶を喫した。
「人拂いの前に相尋ねるが、昨夜、其許の手にかけた人物は？」
「それを申上げるぐらいなれば、こうして、のこのこ出向いて參りは致すまい。」
言つて、宗矩も徐ろに茶碗を取る。
「……そういうものか。」
重宗が今度は冷笑した。それから鈴を振り、詞をかける迄座敷に入つてはならぬと家來に吩いつけ、襖を閉め立てて家來が退出すると、
「京へは何時、入られた？」
何でもない顏で訊く。
「昨夜半遲く――」
宗矩も落着いた口吻で言う。うそに違いないが、重宗はチラと見ただけで默つた。
暫くして宗矩が言つた。
「本日はやばやと出向いて參つた意圖、お察しでもあろうが、こゝ暫らく、當方が進退への詮議は無用に願えまいか。」
「……」
「それとも、この儀役目柄相成らぬとあれば、せめて、伜十兵衞が擧措のみにても看過して頂くべき事――。其許も所司代を勤められる身。十兵衞に上意を賜つたる仔細は存じて居られよう。」
「それだけを言いに御邊、この京へ參られたかの？」

「見ぬ。断じて左様のもの見る目は持たぬぞ。」
「左様のもの？……然ればこれを、偽物と申されるのか。」
「如何にも。」きつぱり言つた。すうとそのこめかみに冷やかな汗が一條流れた。
「……左様か。」
宗矩の片頬に複雑な讃嘆の色が泛ぶ。
「これを贋物と申されては其許と對面の餘地もござらぬ。當方より、披露は差控え申そう。」
そう言つて封書を胸に斂めると、
「板倉どの、お役目、今後とも大切に致されいよ。」
袴を捌いて、ツト立つ。
「待て但馬。」
重宗はぎらぎら輝く眼で、
「今、暫く見のがせと其許申したが、暫くとは何日迄じや？」
「ここ二十日を限り申す。」
「二十日？……確と相違ないな？」
「この柳生、かりにも武略を以てお上に仕え奉る身。事を運ぶに凡その日數は計上いたす。」
「よし。」
重宗は今度は紅潮して頷いた。どの様な事を宗矩が策するにせよ、この京でわずか二十日を限るのでは、今夜のうちにも次の何事かは起るに違いない、その萬端の警備を直ぐにも指示しよう

とでこのお墨附は啓けない。

十兵衛三厳が長向き亂心を稱して江戸を逐われ、その實は隱密として九州へ趨つたときに、後日のあかしの爲家光から直筆が下されている。

「家の兵法殘らず相傳のところ滿足に候。いよいよ此後永らく兵法の儀、能き樣に賴み入り候。また七郎儀のちのちまで無沙汰あるまじく、たとえ又右衛門これあらず候とも七郎儀に無沙汰あるまじき事誓言の上は心易く致さるべく候もの也。

寅三月二十日

家光

やぎう又右衛門へ」

七郎とは十兵衛の幼名、又右衛門は宗矩のことである。宗矩から皆傳印可狀を受けたことを謝して、將來も兵法について依賴し、且つ十兵衛のことは、たとえ宗矩の歿後も昵懇にするから安心セヨとの文意である。

詳しいこの文面までを、重宗が知る筈はないが、右樣の直筆の柳生に下されたことは所司代の役目柄聞き知つていた。これを披見されれば、だから爾後京に於ける宗矩の言動一切に吟味はなし難い。と云つて、一柳生に京洛の政道を紊されることは、家光の上意が如何であれ、重宗としては默過するわけにはゆかぬ、たとえ後日死を賜つても、ここでお墨附を見てしまつては取返しがつかぬのである。

「何をなされておる、上樣より下されたこのお墨附、所司代ごときで拜見ならぬと申されるか?」

中には有名な深林があり、加茂川の水を引いて奇岩を配した池泉があつて、殆んど深山大澤に入つた趣きと異らない。帝の御在所は西面して禁裏をのぞむ位置にあつて、大宮御所とは長廊下で通じるように建てられている。大宮御所というのは、東福門院（將軍秀忠の息女）のため幕府が造營した謂わば女院の住居である。

曲者二人は、この仙洞御所の林泉から、東庭を傳つて常御殿に忍び入つた。――もう少し詳しく云うと、後水尾院の御在所（宮殿）は内に御車寄があり、公卿の間、諸大夫の間、殿上の間、御休息所などが連なつている。其處から廊下があつて東の方南殿に至る。更に長廊を渡つて北に折れ、常御殿、小御所を經て大宮御所に達するが、曲者は遥かな林泉から園池の畔りを通つて一たん寢所（夜御殿）の屋根に攀り、庇づたいに釣燈籠をすべり下りて後水尾院の枕頭に立つたのである。

院は初めはお氣づきにならなかつた。

曲者は一人だけが枕邊に跪坐して御寢息をうかゞい、一人は釣燈籠につかまつた儘あたりの氣配に氣を配つた。

仙洞御所には仙院附屬の與力同心が奉行所から配されている。多分に、警固の爲というより院御自身の御行状を監視するのが含みだから、御寢ののちは、却つて氣をゆるし侍所に引籠つている。お次の間で御用を足すのは、だから女官である。それも亥ノ刻ともなれば臥んでいるから、あたりを氣遣う必要はない筈だが、一人は釣燈籠を下りなかつた。釣燈籠は四隅に天井から垂らされた明りである。他に燭臺は無く、疊の上一尺ばかりのところで、朧ろに室内の四隅を照らし

と意を決したからである。
——果してその夜。
仙洞御所の寢所へ忍び入つた二人づれの曲者があつた。

仙洞御所 (二)

時刻は亥ノ刻過ぎである。
仙洞は禁裏の北に在つて、寛永三年、幕府が二條城に後水尾帝の行幸を仰いだあと、その行幸殿を毀して禁裏のわきへ移し建てた。
「このとき帝が聖算わずかに三十、且つ未だ皇子あらず。則ち其の仙洞は何の爲めに營せしや。幕府ひそかに帝の英邁を忌み、早く其外孫を九五ノ位に即かしめんと欲して女院に隣して之を營せし也。然れば其跡につき之を見るに、德川氏、その志を隱然の内に成せしと雖ども、其意歉然たるを免かれず。」と湯本文彦の著書にもある。
幕府は主上の御脫屣によつて、寛永六年十一月には遂に女主を立てて天子と爲すを得たが、更に帝の歡心を買うため御料を增加したり、仙洞に土木の巧を盡くしたり、更には修學院離宮を造つて仙遊の所とした。仙洞御所は北は上長者町通りから南は下立賣通りに至る間、東は寺町通りから柳馬場に至る凡そ二萬二千五百餘坪の邸地である。

「御意。」

釣燈籠の紐にぶら下つた武士は微動もせず問答を見戍つている。わずかにでも身を動かせば下の明りは揺れる道理で、後水尾院がもう一人の忍者にお氣づき遊ばさぬのは、如何に渠が其術に精妙であるかの證據であろう。

無言で、一時躊らいをみせ給うた院の唇から、やがて、

「何故そのようなことを尋ねるか。……」

呻きに似たお聲が洩れた。

「御焼却あそばされておるものなれば究竟。さりながら萬一いまだ御手許にコレ有らば一日も早く御處置あそばするか、柳生の手にお下し給わらば後日の憂いもこれ無きかと存じ、かゝる夜中に推參仕つてござりまする。」

「それは慨わぬ。」

「は？」

「嗣長卿の許にあるを假令焼却するとも、他の二巻世にある限りは同じと惟う。」

のたまわれて、

「今更かえらぬが、あの砌り、直後に處置すべきであつたものを……」

悲痛なその語尾は、往時の輕率を後悔あそばす御胸中かに拜されたという。幕府の専横への御憤りから、皇統の血を繼ぐ嬰兒を人手にかけさせ給うたその痛恨か、武藝帳を即座に處置遊ばされなかつた事への御後悔か、それは分らない。二親王御他界のあと、武藝帳の抹殺を希望なされ

ている。餘程眼が馴れねば、空間の闇に張附いた感じの、忍者の黒裝束は目につかない。それでも尚、渠は釣燈籠で闇の四邊へ眼を光らしていた。

そのうち、枕邊に跪坐した方が膝で進み寄つて、御肩に手をかけた。院は跳起き給うた。

ここでかゝる小說に至上の御言動を寫すのは懼れ多いきわみだが、院の御歳三十八歳、皇位は御息女・一宮内親王（明正天皇）にお讓りなされたが、新帝の聖算はわずかに未だ十四歳で政務の實質は仙洞に在る後水尾院が聽いておられる。更にそれ以上の實權は幕府に在る。

「何者が參りしぞ。」

おそらくそう言われたろう。院は聲を殺し、すばやく四邊を窺い給うて目を据えられたに違いない。高仁親王ならびに若宮の御他界以來は、再び禁中に上る要なしと云い渡されてある筈の忍者だからである。

「別に用とてもござりませぬが、又、我ら賤臣に、御耳へ達したきことあればとてかゝる推參の仕りよう致そうとは存じませぬが、只、ひとつ――」

忍者はここで言葉をきり、龍顏を仰いだ。

「申してみよ。」

「過ぐる寛永五年、お手許に呈上つかまつりましたる卷物三卷のうち一ツ、今以て藪左中將嗣長卿が御許にござりましようや、それとも又、風說どおり既に御燒却遊ばされましたるや？」

「それは、」

院の瞼に忽ち朱味がさした。「柳生又右衞門よりの問いか？」

今一人――吊燈籠にぶら下つていたのが笠間又兵衛である。

沈痛な後水尾院の口吻で、たしかにまだ武藝帳は嗣長卿の手許に在ると分つてみれば、馬木家六に御寢所への用はない。院の御心痛など、寧ろ目をそむけ度いことだつたろう。

「過ぐる日の御事ども我ら如きも、御心中拜察致さば恐懼のきわみにござりまするが最早、何事も過ぎた上は一切忘却あそばしまするが御爲かと――」

言いつゝ、靜かに後退して、腰をあげる。

院はそれを別に目におとめなさる氣色もなく、

「忘れよという者が何故わざわざ卷物をたしかめに來るか……？」

視線を俯せ、自らへ問うように、そう呟かれた時――

庭に當つて、微かに人聲がした。

ゆらりと、吊燈籠が動いた。

馬木家六は慌てない。落着いた聲で、

「案じ遊ばしませぬよう。我らの一味、庭前にて警固仕つておりますれば……さ、どうぞもう、お寢を願いまする。」

笑いさえ浮べて言うと、手早く覆面をして、

「あ、それから……私事にはござれど、たきは息災に致しておりまする。」

ニツと笑つた。長州に殘したあの女傑と云われた妻のことを言つたのである。

た主上に、殊更な理由をのべて保存を申し出たのは柳生宗矩自身である。事は國家の皇位繼承に關わる問題で、他口、どのようなことから若宮御急逝の裏面に暗躍した柳生者の慘忍が詰られるかも分らない、その場合、主上の叡念より發したことを證するためにも、姑く武藝帳を保存しておきたいというのが宗矩のその時の申し出であつた。それで、一處に纏めて置いては、火災などの場合烏有に歸する惧れありというので、わざわざ三卷の一を主上の身近か――藪左中將嗣良卿の手許に、一を事の秘密を知る鍋島家に、今一つは柳生家に領つたのである。

この内、宗矩の高弟でもある佐賀小城の城主鍋島元茂の許にあつた一卷が、轉々して永井家の息女清姫の手にわたつていたことは既に述べた。又柳生家のそれは、寔はひそかに尾張の柳生兵庫の手に握られていたのが、兵庫から十兵衛に天林山笠覆寺の境内で手渡されたのも前に述べた通りである。從つて江戸柳生但馬守屋敷にあつた一卷――襖裏に貼りつけてあつたのを友矩が父の命で取出した條りを、記憶のいい讀者なら覺えておられよう――は、實は尾張にあつたものの寫しである。霞の多三郎が、寛永寺境内外で斬つた會津の小瀨源内の口より、この事を聞き知つたから、汀佐五右衛門（柳生兵庫の實は變名）を求めて多三郎は尾州へ入つたことも本篇の初めのころに述べておいた。

從つて、その實否の確とまだ瞭らかでないのは禁中に殘る筈の一卷だが、宗矩は、又十郎の變裝を以てやがてそれを手に入れようとしている。その爲、豫め、後水尾院の御口から在り場を聞き取ろうと忍者を忍び込ませたのだが、忍者は――これだけは事件のかげに暗躍したと宗矩も見込みを立てた毛利の馬木家六であつた。

て雪洞(ぼんぼり)に灯を點じ廊(ほそどの)から庭をうかゞい見た。すると人影が動いた。

「誰じやえ？……」

大きな聲で問うことは院の御耳にさわる、そう思つたから彼女は人影の動いたと思う方へ、庭を降り、様子を見に往つた。不意に、背後より何者かの手で口をふさがれたのである。

「――靜かに致されよ。怪しい者ではない、ほんの、暫くじや。」

低いが錆びのある太い聲が耳許で囁いた。首すじへ吹きかゝるその男の呼吸で、彼女は相手が覆面なのを覺つたろう。

それほど冷靜な女だつたから、別に澡掻くことをせず、指だけで、口を覆う手をもぎ取ろうと抗(あらが)つた。一方の手にした雪洞が、それで一そう虚空に泳いだのを、中島に潜んでいた多三郎が目にしたのである。

自らも要慎をしつゝ多三郎は歩一歩近寄つたが、女官と無言に争う黒覆面の武士が隻眼なのを見たとき、

「や、十兵衛か。」

突立つて思わず聲を發した。

「……」手加減を加えて女を抑えていた十兵衛の手に力がこもる。

「――多三郎か。」

「これは異なところで出逢うた。お主みずから、此處へ忍び入るとは思わなんだ。――十兵衛、これも宿縁か。」

院の御口がそれでフト上つた時には、一瞬のその隙を捉えて釣燈籠から笠間又兵衞は帳臺の向うへ跳び降り、家六より先きに寢所を出ていつた。

家六の方は、

「お忘れになりましたか、一位ノ局にお仕え申したあのたきにござる――」

覆面の口で又、わらい、忍び入る時開けておいた儘の中戸から、又兵衞に續いて暗い室外へ出たが。

其處で初めてぎよつと立竦み、先きに突立つている又兵衞と不審の目を見合つた。庭の人聲が唯事ではなかつたからである。

後に分明するところでは、所司代重宗が、洛中夜廻りに特別の處置を下して、自ら捕吏を率い奉行所を出たのがこの時刻になる。重宗は柳生宗矩の朝の態度から、當夜何事かがあると見込んでこの擧に出たのだつた――。

東庭で聲を發したのは十兵衞と對峙した霞の多三郎である。

加茂川の水を引いた大池に沿うて東庭から左折すると、八ツ橋造りの長橋がある。橋を過ぎて中島二つあり、島の中央に御腰掛と呼ばれる小亭が建つている。前述の如く邸内は茂樹密林の概があるから、人が潛み匿れるには謂わば究竟な場所のわけだ。

騷ぎははじめ、院に仕える一女官の聰さからおこつた。

彼女は夜中に目覺めて、何となく人の氣配が庭の邊りにしたように思つたから、褥を起き立つ

十兵衛の吐いた息は熱かつた。手に脇差は無い。忍者の手法で、返り血をふせぐため女體へ刺した儘なのである。

「多三郎、――さ、いかにも勝負を致そう。場所は、此處か?」

隻眼が妖しい光りを放つ。

「女人を手にかけたこの場で斬られてもよいというか。十兵衛、お主とは敵味方であつたが倶に新陰流に生涯を捧げた我らじや。武士の情けは知つておる。他の場所にて致したいなら、遠慮なく言えい。」

「それには及ばぬ――」

十兵衛の手は静かに刀にかゝつた。

「多三郎聞け。父が昨夜吉田神社境内にて致したことを知れば、浮月齋の言に躍る其方とて、よも今のような言葉は吐かぬであろう。父の意中……お主ら一派の見るより、もう少しは大きいわ――」

言いながら、ゆつくり太刀を抜いた。

多三郎はとび離れた。これも鯉口を切り、

「然れば何故今その女人を斬つた?……父を庇うは勝手じやが、この多三郎には利かぬわ。」

「もうよい。――抜け。」

メラメラ燃え出した雪洞の炎に十兵衛の片目が細められている。

言いつゝも多三郎の口邊には押しころした殺氣がある。

「退け。」

鋭く十兵衞は叫ぶ。「今其許との相手を致す餘裕はない。强つて雌雄を決したくば他日、いずれの場所へも出向いて致そう。此處は其方らのうろつく場所ではないわ。」

「默れ。」

多三郎は不敵に笑つた。

「先ずその女人を手離してみよ。お主と我、いずれを怪しんで叫ぶか。……元は禁裏よりおこつたお主らが陰謀——此處にて死ぬるが天の裁きと思わぬか。」

「陰謀?……聞き捨てならぬ事を言う奴。」

十兵衞の口裏にはこの對話を女官に聞かれている配慮がある。

野人の多三郎には無用の氣遣いだつた。

「陰謀でないものが何故わざわざ武藝帳を殘したか。宗矩の心底、後日若し天下覆えりなば武藝帳にて帝が恩賞を强請らんためとは、いかにもあの宗矩の企みそうなことよ。お主、それすらも知らずと武藝帳を求めて來たとは、よも申すまい?」

十兵衞の手がこの時無言に脇差を拔き、女官の背を刺貫いていた。口は押えてあつた儘だ。

「!……」

腕を解くと、膝からゆつくり女の體が崩れた。地に倒れても空洞だけはしつかり握つている。

「……やむをえぬ。」

足許の庭に女官が突俯している。夥しい血が夜目にも黝々と流れ、すでに事きれているが、院に仕える女官を刺すとは容易ならぬことだ。それにもましてギラギラ眼を光らして十兵衛と對決した武士が何者かは、血魂を見ただけで分つた。太刀を把つて立てば大方の相手に優る馬木家六と、笠間又兵衛の眼に狂いはない。

「疋田陰流の遣い手か。」

うめくように笠間又兵衛が言つて、一歩出る。

多三郎は激怒して十兵衛へ叫んだ。

「そうか!……女人を手にかけた此處で勝負致そうと申したお主が肚、柳生門弟どもに助太刀させよう爲じやな。そ、それが柳生の兵法か。」

「默れ、聲が高いぞ多三郎。」

「いゝや默らぬ。」

多三郎は言つた。

「負けじや。口惜しいがこの霞の多三郎、宵方から中の島に潜んでいたわ。それが、お主ら三人當仙洞御所へ忍び入るに氣づかなんだ。十兵衛ひとりであれば見落しということもあろう、あの兩人まで氣づかずにいたは凡庸の二人でない證據。いかな霞者も、お、お主ら三人を相手では及ばぬ――」

悲痛な語氣で言つてジリジリ十兵衛に詰寄る。

縁側から無言で馬木家六が跳び降りた。片腕に鷹をとまらせ、一方の手で拔討ちに人を斬つて

柳馬場

太刀を多三郎が抜くと同時に十兵衞は後退した。

「逃ぐるか十兵衞。」

「逃げは致さぬ。」

十兵衞の手のうちで、白刃(しらは)が炎を寫して光る。多三郎の方は容易に進み出ない。十兵衞は庭石の一個を背に構えている。まだ太刀は右手に引つさげた儘である。この時、燃えつきようとする雪洞(ぼんぼり)の火が女官の髪を焦がして異樣な臭氣があたりに漂い出した。

後水尾院の寢所に忍び入つていた馬木家六と、笠間又兵衞が廊(ほそどの)に姿をあらわしたのも此時であつた。

十兵衞には豫め分つていたことだろうが、多三郎にとつて、黑裝束の武士二人の出現は毛孔の塞ぐ思いがしたろう。

一瞬、滿面朱を注ぐ緊張で廊下を睨んだ。

「手出しはならぬぞ。」

叫んだのは十兵衞である。「お主らの助勢は要らぬわ。」と言つた。

廊下の二人は顏を見合つた。

「宗矩に其許勝てるか？」

と問うたところ、

「柳生も噂ではひとかどの武士、この越後と立合おうとは申しますまいが、もし申すようなら、身共の勝ち。挑もうと致さずば、これは永久に優劣がつきかねまする。」

そんな意味のことを答えた。江戸へ出向いても多分試合することにはなるまい。おそらく将軍家の戯言に出たことであろうから、断つては加賀藩の武門にもかゝわるので承諾しておいた、いずれにしろ、宗矩の方から挑んでくるようなら手のうちは知れている、とも言つたが、果して越後の出立の前に、試合を取消す旨の報らせが江戸から届いた。

又兵衛はその時から私に省みて、力量互角の場合は先きに仕掛けた方に隙の生ずるのを、あらためて教えられている。十兵衛と多三郎のいずれが先きに仕懸けるかに、武藝者の關心を燃やしたのである。

多三郎は、大きく迂廻しはじめた。十兵衛と家六に挾撃されてはそれ迄である。少しずつ、少しずつ手の先をあげ、十兵衛に迫っていつた。もう無言だ。

「手出しはならぬぞ、退け。」

十兵衛は再び言つて、胸をそらし氣味に上段に太刀をつける。馬木家六の眼が緊張に光つた。縁側の笠間又兵衛は十兵衛に多三郎が近づくと見えたので、廊を走つた。庭へは降りなかつた。

十兵衛と多三郎の太刀が交叉したのはほんの一時である。多三郎の方から不意に驅け出して行

鷹が知らずにとまつていたといわれる早業、『明身の太刀』を會得した家六である。
　その家六が、
「十兵衛どの。」
　さすがに聲は抑壓されて低いが、言外に殺氣をこめて呼びかけるのへ、
「手を出すでない。其許らは控えい。」
　鋭く言う。
　果して多三郎の疑つた通り、十兵衛は彼等の助勢を目算において、この場で試合を希んだのか。あくまで武藝者の面目で尋常の果し合いをしようというのか？　家六には判断がつきかねる。
　柳生十兵衛ほどの者に正面きつて挑めるのは同じ新陰流に霞の多三郎を措いてない。
　家六が危惧したのは十兵衛の身に若しやという不安があつたからである。
　寢所にあらせられる後水尾院の御耳にも庭の騷ぎはとゞいていたと思われるが、院は姿をお出しにならなかつた。夜御殿の中は、不氣味に謐（しず）まり返つている。
　笠間又兵衛は廊（ほそどの）に突立つて、目をこらして多三郎の動きを見入つた。又兵衛が仕える加賀藩の名人富田越後は、柳生但馬守との試合を將軍家から仰せつかつた時に、
「上のお詞とあらば推參仕る。」
　即座に應えて江戸へ發つ準備をした。藩主前田利常がその樣子を聞いて、

不意に笠間又兵衞が小さく何やら叫んだ。暗夜でさすがの家六にも勝負は見えなかつたが、近い位置にいた又兵衞の目に結果は瞭然だつたのである。

十兵衞から再度叱咤されて家六と又兵衞が東庭の暗闇をいずれかへ消えると、

「多三郎、何、何故懸つて來ぬ。……」

低く十兵衞が言つた。庭石に背を凭らせている。

「お主……、お、お主……遣つたな。」

あえぐような、多三郎の聲だつた。

「……動けぬか。」と十兵衞。

「駄目じや。見事お主に左袈裟やられた。……二、二寸は斬つたな。」

「わしは、もう目が見えぬ――」

十兵衞の顫える手でカチカチ白刄が岩に當つている。多三郎の方は黝い影全體に血の匂いを漾わせて、それでも兩足を踏張り立ち盡くした。一陣の夜風が闇に吹き通つた。

「お主、そ、それ程の深手か?……」

あえぐ呼吸で、多三郎が問う。なつかしい年來の友へ話しかけるような口調だ。

「分らん。ただ、目が見えぬ。」

「何處をおれは斬つた?……」

「胴……みごと屆いたぞ。」

つて、鋭い氣合が雙方の口からほとばしり、ついで、兩者はとび離れた。
「十兵衞どの。」家六が叫びかけた。
庭の暗闇にぼんやり二つの影が對峙している。
燈籠か何ぞのように、じつと動かない。そばへは如何な家六にも近寄れなかつた。勝負は既に決している！　いずれはどちらかが、倒れる。
「――家六。」
低い、十兵衞の聲が其處からした。
「？」
「待つ筈の人があろう、お主、柳馬場へ行け。」
「？……」
「馬場に、人が待つておる。子ノ刻限じや。……往け。」
「し、併しこの場を……」
「構うな。勝負はまだ、す、濟みはせぬ……」
それから一段と強い語氣で、
「往け。」
と叱咤した。
この語調のたしかさに家六は危惧を捨てたのである。
この間、多三郎の方は朧ろな影で彳んだまゝ微動もせぬ。

将軍家兵法師範たる家柄の嫡男が斬られていても、相手の姿さえその場に無くば、どの様にでも家門の面目は繕える。……十兵衛のそれが最後の願いなのだろうか。

仙洞御所つきの役人が夜警に御所内を廻る時刻は定まっているので、多三郎もそれは了知していたに違いない。

「十兵衛、ならばあの女官を刺したは、わしと言おう存念か。」

「……」

「そうか、……よい。さ、鞘を拋れ。」

弱々しく十兵衛の手が腰にかゝって、脇差の鞘を捨てた。多三郎は蹲ってそれを拾い上げる時に傷の痛みにうつ、と呻いた。それでも、鞘ごと自分のを抜き、地に突っ立てて杖にして立って、十兵衛の足許へ、拋った。

二萬二千餘坪の仙洞御所から手負いの儘で無事に脱出する方が、夜番の警士に縛められる屈辱より堪え難く至難なのは自明であろう。多三郎は、死力をつくしてその困難の道をえらんだのである。途中に行き倒れれば、忍者のしきたりで顔を小柄で搔き裂くにちがいない。

蹌踉と多三郎が闇に消えると、それでも暫くまだ、十兵衛三厳は岩に凭れて肩で息をしていた。それから、五、六歩前の脇差を拾い取ろうとして、ばったり、倒れた。太刀だけが地に突立っていた。

子ノ刻の夜番が庭の異變を發見して仙洞御所内が大騒ぎになったのはそれから間もなくであ

暫らく闇に身を蠢かせて、一歩、二歩、多三郎が近づいて來た。顫えていた十兵衞の手が岩を摑んだ。
「武士の作法じや。と、とゞめを刺せい。……」多三郎が言う。
十兵衞は手さぐりに岩を撫でつゝ右へ右へとにげた。
「何故逃げる?……」
「……相討ちなれば、この三厳いのちのつゞく限り、爲さねばならぬ使命がある。」
「ならば何故わしを刺さぬか。」
「その餘力あらば、夙にしておつた。」
兩者の吐く呼吸が互いに接近した。
「多三郎。」
不意に十兵衞が言つた。
「人が來る。……に、逃げい。」
血を吐くような聲だ。
「この期に及んでにげられるくらいなら、わしが方でお主に、止めを刺す――」
「いゝや、その聲の張りならばお主のこと、にげ得る。面目を栖にとる場合ではない。今に夜番の警上が來る。……逃げい。……」
「お主はどうするかい。」
「いらざる斟酌じや。――頼む、にげてくれ。……」

嗣長卿邸

柳馬場の東に當つて、二百坪餘りの廣地がある。巨きな榎が夜空に梢を聳やかしている。

柳生宗矩はその樹影で二人の弟子が來るのを待つた。

馬木家六がすがたをあらわした。仙洞御所の林苑の遙かなあたりで、さゞめくような騒ぎがこの時聞えた。四邊は文目も分たぬ闇である。京の町並は寢靜まつている。廣地に來ると、家六は露に濡れた草へ頰をつけんばかりに身を跼めてあたりの闇を透かし見た。背後に黝々と突立つている笠間又兵衛へ、「尾けて來る者はないか。」低く、念をおした。「ない。」又兵衛のは熱のこもつた聲だ。先程から又兵衛は異常に昂奮している。

馬木家六が廣地に伏兵のないのを確かめて身を起した前へ、ゆつくり宗矩が來て、立つた。

「仙洞御所に何事があつたな?」

宗矩は頭巾をかぶるでなく、黑つぽい羽織に、吾亦紅の家紋さえ白く浮かせている。

「御承知とは存じまするが、十兵衛どのへ霞の多三郎私鬪を申込みましてござる。多分あの騒ぎはその爲かと――」

勝負を見屆けていないので、家六の語尾は曖昧になる。宗矩は沈默した。

暫くして、

る。

後水尾院は寢所で役人より詳細をお聽き遊ばしたが、この夜、ついに御座所をお出ましにならなかつた。騷ぎを鎭めたのは、所司代重宗である。

洛中夜廻りの非常措置には出たが、柳生宗矩が何處で何をするか一切まだ不明なので、捕吏を二手に分け、一は洛東へ、他は洛內を見廻らせ自らは宗矩父子のいたという黑谷を監視する目的で馬を率かせていて、下立賣通りにさしかゝつた所で、仙洞御所內の騷ぎを知つた。

「常御殿の東庭と?」思わず問い返し、馬を驅つて仙洞に入ると、先ず一番に、倒れている武士の面體をあらためて、

「こ、これは。」

重宗の顏色は變つた。

十兵衛はまだ息がある。手をのばして倒れた前方に鞘ごと脇差が落ち、女官は背を刺貫かれて死んでいる。更に明りに照らさせると點々と血の跡が深林へ續いていた。重宗は役人にその迹をたどらせるかたわら、くすし（醫師）を呼ばせた。

「死なしてはならぬ。死なれては手がかりが消ゆるぞ。……」

自身に云いきかす如く十兵衛を抱えて口走つた。

「いかにも又兵衛の申すところ道理至極。」

宗矩が言つた。

「よく十兵衛の重手を見捨てこれへ參つてくれたぞ。」そう云つて、矢庭に拔討ちを懸けたのである。

又兵衛は危く體をひらいて、「これは。」と叫びざま宗矩へ向き合つて立つて、何時の間にか手に白刃を提げていた。

家六には何のことか分らない。

闇の柳馬場に三人夫々の位置で凝然と鼎立した。

刀を鞘に斂めたのは宗矩である。

「不憫ではあるが、――又兵衛、汝が忘れ形見はかならずこの但馬が引取つて世話を致す。安んじて成佛せよ。」

と言つた。この言葉のおわらぬうちに次第に笠間又兵衛の覆面の中で血が噴きいで、兩の眼に流れ込んだ。それでもまだ姑く又兵衛は宗矩を睨んでいた。既に勝負はついていたのである。

宗矩が切られた左肘を抑え半身を引く、其處へ寄りかゝるように、どうと又兵衛は音たてて地に伏した。

後にこの笠間又兵衛は眞言宗蓮臺寺に葬られている。諡は涼窓愛蔭禪定門靈位。宗矩はそのことば通り加賀に在つた又兵衛の遺兒を引取つて江戸で成人させた。元服の時には自ら秋元但馬守に加冠の役を頼んでいる。併し笠間新七郎と名乘つた遺兒は十八歳の折、時疫に罹つて逝つた

「院の詞はどうであつた？」
常と變らぬ無感動な口調で尋ねた。未だ嗣長卿の手許にある由を家六が答えると、「そうか。」聲は低かつたが、安堵したようにふつと肩を落した。そうして初めて、
「又兵衞、そちに話がある――」
向き直つたのである。

「それがしにも實はお話がござりまするぞ。」
又兵衞は家六を押しやるように前へ出て、「十兵衞どの深手を負われておつたならば何となされます？」
「其方に勝負の分れが見えたか？」
「長年お教え頂いたそれがしの目に、多分くるいはござりますまい。今頃は、息をひき取られたやも知れ申さぬ。」
「な、何をいう、お主それが見えておつたら、何故あの場で申してくれなんだ？」
家六が狼狽して遮ると、
「これはお主の言葉とも思えぬぞ。立場を代え、若しお主が十兵衞どのなら、父上に仕込まれた弟子二人を前にして、何者かに斬られる未熟さ、知られてもよいというか？ あの場合、それとなく身を消すが十兵衞どのへの武士の情と思わなんだか。」
血を吐くような語氣だつた。

言つて、半信半疑で見送る家六の前を、徐ろに寺町へ向いて歩き出した。肘はおさえた儘であつた。

宗矩が姿を出したのは所司代重宗の前である。まだ醫師は遣つて來ずに、常御殿の庭前で重宗に抱えられて十兵衛は蟲の息をついていた。

意外な柳生宗矩の出現に重宗は目を瞠つたが、すかさず宗矩が何か言つたので、

「お、お手前みずから斬られたと?」

「いかにも。場所柄もわきまえず、事もあろうに恐れ多き御側へ近づき申すによつて、我が悴ながら已むを得ず手にかけ申した……」

聲は低いが、萬感の懷いが何か籠つている。

「!……」

まじろぎもせず、重宗はその顏を見入つた。

宗矩は言葉をつゞけて、「御不審は御尤もなれど、かゝる夜中、場所柄もござれば此の場はお引取りを願い度い。——いずれ、明朝、但馬守宗矩みずから所司代へ參り、御詮議のすじあらば如何樣にも釋明を仕る——」

そう言つて十兵衛を見下して立つて、

「起て。この宗矩、父子の情に腕のにぶつたが汝の倖せ。父直々に介錯をしてつかわす。兵法者の悴らしく此の場に於て腹を切れ。三厳……立たぬか。」

蟲の息の十兵衛の横腹をぱつと蹴つた。

ので兵法者としての笠間氏は又兵衞一代で絶えた。又兵衞の妻は後に實家の由比勘兵衞方に引取られて尼となつた。
又兵衞の死を傳え聞いたとき、藩主利常は、「宗矩めが。」と一言いつたきり、以後、家中に柳生流は遣わせなかつたそうである。どの程度眞實を知つてそうしたのかは、分らない。
目前に又兵衞の斬られたのを見て、馬木家六は茫然としたが、忽ち顔色が變つた。恐るべき宗矩の練達ぶりである。その宗矩が何のため又兵衞を手にかけたか――多分、遠からず汝もこの樣にして死ね、という含みもあつて、殊更目前で又兵衞を斬つたのに違いない。……
宗矩の方はかすかに左籠手に切疵を受けていた。血の流れるのを右手でおさえていて、何故か血止めをしようとせずに、
「家六、多三郎はどうであつた？」
仙洞御所の夜空のあたりに目をすえて尋ねる。次第にその邊で騒ぎが大きくなつている。京の市衢は碁盤の目に直截に區切られているので、通りのはずれ迄一目で見通せたが、丁度、數丁さきの仙洞御所の上塀に沿うた寺町通りを、提灯をかゝげて數人の役人が走り過ぎるのが見えた。
「十兵衞どのと對決の儘、微動だに致さなんだと覺えまする。」
「十兵衞深手を負うて後もか？」
「いかにも。」
宗矩の目が不氣味に輝やき出した。「家六、その方には後にまだ果してもらわねばならぬ用がある、今宵は、この儘立歸つて身を休めてくれよ。わしは、十兵衞の跡始末をつけねばならぬ。」

てある。

重宗が出會せぬと聞くと宗矩は玄關でこう言つたことが取次の者から重宗に傳えられた。

「十兵衞ことお言葉もあれば其後醫師の手にかけ介抱致せしところ、一命ようやく取止めてござる。」

そう傳えてくれと言つたという。念のために、十兵衞の施療している場所を家人が問うと、柳生家に俗縁ある一寺の書院、と言い殘して宗矩は歸つて行つたという。

さて、話は變る。藪左中將嗣長卿の邸が二條富小路にある。

後水尾院が御脫屣(だつし)あそばしてから、幕府の責を蒙つて嗣長卿は一時、幽閉同様の有様であつたが、仙洞御所で政務をお聽きになる此の頃では、所司代の態度もようやく軟化して來たので、時に御所へ上り、院の御機嫌をうかゞうことぐらいは大目にみのがしてもらえるようになつた。それでも、江戸寛永寺に流謫同様の中ノ院大納言とともに、幕府の監視が常に身邊にあることに變りはなく、嗣長卿は四十六歳の男盛りで、いわば浮世を他所に暮さねばならない。思えばお氣の毒なことよと昔を知る公卿たちは折々話しあつている。邸のたゝずまいもいつとはなく荒れすさみ、築地(ついじ)の前で遊ぶ京童(わらんべ)の囃し歌など、手にとるように聞えるのもいつそあわれである。嗣長卿自身は、ことさら、昔と變る明暮れを心痛なさる氣色はない。それでも皺の加わつたお顏に寂寥の感じは蔽うべくもないと、下働らきの奴婢までが囁きあつた。

そんな嗣長卿邸に、或る日、めずらしく晴れやかな笑聲が聞かれた。江戸にある中ノ院大納言

翌日。

宗矩は所司代へ出向いたが重宗の方で對面しなかつた。宗矩が十兵衞を斬つたのではないことは、誰の目にも明らかである。十兵衞に蒙つた疵だと、宗矩は左肘を見せたが、點々と深林へつづいた血の跡の說明にはならない。それに十兵衞の白刃に附いた血のりは、宗矩に手疵を與えたごときものではなかつた。多分、十兵衞と斬結んだ相手が負傷していることを知つておれば、宗矩は芝居をうたなかつたであろう、と重宗にも察しられる。たゞ、それなら柳生十兵衞に深手を負わすほどの相手が何物か、その見込みがつかぬので宗矩との對面を重宗は拒んだのである。

如何なる祕密の事情があつた上にしろ、夜陰に仙洞御所へ紛れ入るとは由々しい大事である。この點を詰問すると、宗矩は、「既に十年前に亂心の惧れありとして勘當申しつけた十兵衞であれば、常人の判斷しかねる所業あるは當然と申すより他はない。且つその故にこそ、將軍家直々の打太刀までつとめた悴を勘當致したものである。」と答えたそうだ。「然らばお手前、常人の判斷しかねる亂心者が夜陰に仙洞へ侵入すること、なにゆえ存じ寄られたな?」と重ねて詰ると、「人の擧動を窺い知るに兵法あり、まして長年膝下においた悴であれば、凡その言動にて見當ては立つものなり。」と宗矩は言つた。お上の許しを得て私に上洛したのも、實はこういう間違いを起させぬためであつたと云うのである。結局問答をしていては埒があかぬので、確かな證據を摑むまで表立てて詮議をせぬが上策と判斷をして、宗矩がのぞむ儘に昨夜は仙洞御所を引拂つた。ただ、十兵衞の一命だけは、後日取調べのすじもあり、滅多なことは致されるなよとダメをおし

あろうゆえ、いちど、ひらき見たいものじやと――」
「？」
嗣長卿の眉が寄つた。
「そのようなこと、道長が申したか？」
じつと相手の眼を見る。それから、
「――そうか」
うなずくと急に聲を立てて笑い出し、
「よい、よい。御許とて一度は見ておくも何かの語り草になろう。……待つていやれ、麿がこれへ持つて來て進ぜる。」
脇息の肱をあげると緩りと起上つた。
「……さすがは京、もう花が咲いておりまするな。」
うしろの武士は、卿の去つた跡の緊張をほぐすように、ゆるやかに庭の櫻に視線を移して言う。
暫らく、嗣長卿は戻つて來ない。やがて衣摺れが廂にして、几帳のかげから姿を出したのは女房風な女である。手に短册を載せている。それが、靜かに笑いかけて、
「姫さまよりの贈り物にござりまする。何卒、お返しをたまわりませ。」
と言つた。

の近況をたずさえて若い公卿が、はるばる訪ねて來たのである。
「そうか、中ノ院に道長のいたことは知つていたれど、御許のように、かくし子のあつたことは知らなんだ。」
嗣長卿はそう言つて、鐵漿の黒い齒を笑つた。
對面に坐つた公卿は京にも多くは見かけぬほどの美貌である。口許がとくに優美で、嗤うと、女のように笑靨が浮く。
「御許、年はいくつかな？」
「十八でおざります。」
「さすれば、道長より、六つ下かな。」
「いえ、兄は二十八になりましよう。」若い公卿の背後に控えた武士が、この時低く、「若、道長どののことで思い出してござるが、例の話、卿にお願いなされてはいかゞでござる？」
「そうであつたなあ。」
「何事かの。麿にかなうことなれば喜んで致そうぞ。」
若い公卿は、ゆつくり笑つて、
「兄道長は卿も御承知のように、いたく武藝に打込み、悠之丞などと江戸にては名をかえあつぱれ武士の仲間入りを致しております。」
「？——」
「その兄の申すに、卿がお手許にある柳生武藝帳とやら、さぞ柳生流の奧旨をしたゝめたのでも

姨（おばすて）捨　井上靖
風濤（ふうとう）　井上靖
夏草冬濤　井上靖
額田女王　井上靖
後白河院　井上靖
幼き日のこと・青春放浪　井上靖
西域物語　井上靖
四角な船　井上靖
少年・あかね雲　井上靖
多甚古村　井伏鱒二
山椒魚　井伏鱒二
遙拝隊長・本日休診　井伏鱒二
集金旅行　井伏鱒二
駅前旅館　井伏鱒二
黒い雨　井伏鱒二
海潮音　上田敏訳詩集
小説の味わい方　臼井吉見

色ざんげ　宇野千代
おはん　宇野千代
桜島・日の果て　梅崎春生
幻化　梅崎春生
文学と私・戦後と私　江藤淳
決定版夏目漱石　江藤淳
江戸川乱歩傑作選　江戸川乱歩
妖　円地文子
女坂　円地文子
朱を奪うもの　円地文子
傷ある翼　円地文子
女面　円地文子
なまみこ物語　円地文子
虹と修羅　円地文子
白い人・黄色い人　遠藤周作
海と毒薬　遠藤周作
留学　遠藤周作

月光のドミナ　遠藤周作
大変だァ　遠藤周作
牧歌　遠藤周作
影法師　遠藤周作
母なるもの　遠藤周作
ピエロの歌　遠藤周作
彼の生きかた　遠藤周作
ボクは好奇心のかたまり　遠藤周作
砂の城　遠藤周作
死者の奢り・飼育　大江健三郎
われらの時代　大江健三郎
芽むしり仔撃ち　大江健三郎
性的人間　大江健三郎
遅れてきた青年　大江健三郎
日常生活の冒険　大江健三郎
空の怪物アグイー　大江健三郎
見るまえに跳べ　大江健三郎

新潮文庫　日本の作品

亀裂　石原慎太郎
完全な遊戯　石原慎太郎
行為と死　石原慎太郎
星と舵　石原慎太郎
挑戦　石原慎太郎
歌行燈・高野聖　泉鏡花
内灘夫人　五木寛之
風に吹かれて　五木寛之
ゴキブリの歌　五木寛之
にっぽん三銃士(上下)　五木寛之
変奏曲　五木寛之
鳩を撃つ　五木寛之
地図のない旅　五木寛之
野菊の墓　伊藤左千夫
伊東静雄詩集　桑原武夫・富士正晴編
現代詩の鑑賞(上下)　伊藤信吉

詩のふるさと　伊藤信吉
現代名詩選(上中下)　伊藤信吉編
イカルス失墜　伊藤整
典子の生きかた　伊藤整
氾濫　伊藤整
火の鳥　伊藤整
若い詩人の肖像　伊藤整
青春　伊藤整
伊藤整詩集　伊藤整
小説の方法　伊藤整
一千一秒物語　稲垣足穂
ブンとフン　井上ひさし
表裏源内蛙合戦　井上ひさし
道元の冒険　井上ひさし
ドン松五郎の生活　井上ひさし
日本亭主図鑑　井上ひさし
偽原始人　井上ひさし

虚構のクレーン　井上光晴
地の群れ　井上光晴
猟銃・闘牛　井上靖
ある偽作家の生涯　井上靖
あした来る人　井上靖
敦煌(とんこう)　井上靖
あすなろ物語　井上靖
黒い蝶　井上靖
風林火山　井上靖
詩集 北国　井上靖
射程　井上靖
氷壁　井上靖
天平の甍　井上靖
しろばんば　井上靖
蒼き狼　井上靖
楼蘭(ろうらん)　井上靖
憂愁平野　井上靖

夢の時間　金井美恵子
大和古寺風物誌　亀井勝一郎
人生論・幸福論　亀井勝一郎
日本のアウトサイダー　河上徹太郎
雪国　川端康成
伊豆の踊子　川端康成
花のワルツ　川端康成
愛する人達　川端康成
掌の小説　川端康成
舞姫　川端康成
千羽鶴　川端康成
虹・浅草の姉妹　川端康成
山の音　川端康成
川のある下町の話　川端康成
女であること　川端康成
虹いくたび　川端康成
みずうみ　川端康成

名人　川端康成
眠れる美女　川端康成
古都　川端康成
新文章読本　川端康成
愛・自由・幸福　河盛好蔵
人とつき合う法　河盛好蔵
親とつき合う法　河盛好蔵
藤十郎の恋・恩讐の彼方に　菊池寛
父帰る・屋上の狂人　菊池寛
硫黄島・あゝ江田島　菊村到
暖流　岸田国士
日本の書物　紀田順一郎
夜と霧の隅で　北杜夫
幽霊　北杜夫
どくとるマンボウ航海記　北杜夫
どくとるマンボウ昆虫記　北杜夫
船乗りクプクプの冒険　北杜夫

楡家の人びと（上）　北杜夫
遥かな国　遠い国　北杜夫
高みの見物　北杜夫
南太平洋ひるね旅　北杜夫
星のない街路　北杜夫
奇病連盟　北杜夫
あくびノオト　北杜夫
天井裏の子供たち　北杜夫
へそのない本　北杜夫
マンボウおもちゃ箱　北杜夫
月と10セント　北杜夫
黄いろい船　北杜夫
マンボウぼうえんきょう　北杜夫
木精　北杜夫
北原白秋詩集　神西清編
夕鶴・彦市ばなし　木下順二
ことばの歳時記　金田一春彦

われらの狂気を生き延びる道を教えよ 大江健三郎
俘虜記 大岡昇平
武蔵野夫人 大岡昇平
野火 大岡昇平
花影 大岡昇平
愛について 大岡昇平
酸素 大岡昇平
日本語の年輪 大野晋
蒼という女 大原富枝
亜紀子 大原富枝
野獣死すべし 大藪春彦
血の来訪者 大藪春彦
ウィンチェスターM70 大藪春彦
絶望の挑戦者 大藪春彦
戦いの肖像 大藪春彦
血まみれの野獣 大藪春彦
観光バスの行かない…… 岡部伊都子

老妓抄 岡本かの子
或る聖書 小川国夫
アポロンの島 小川国夫
小川未明童話集 小川未明
奥の細道ノート 荻原井泉水
暢気眼鏡 尾崎一雄
虫のいろいろ 尾崎一雄
金色夜叉 尾崎紅葉
人生劇場 青春篇(上・下) 尾崎士郎
人生劇場 愛慾篇(上・下) 尾崎士郎
人生劇場 残侠篇(上・下) 尾崎士郎
人生劇場 風雲篇(上・下) 尾崎士郎
人生劇場 離愁篇 尾崎士郎
人生劇場 夢現篇 尾崎士郎
人生劇場 望郷篇 尾崎士郎
帰郷 大佛次郎
旅路 大佛次郎

赤穂浪士(上・下) 大佛次郎
夫婦善哉 織田作之助
平将門(中) 海音寺潮五郎
西郷と大久保 海音寺潮五郎
幕末動乱の男たち(上・下) 海音寺潮五郎
おどんな日本一 海音寺潮五郎
二本の銀杏 海音寺潮五郎
パニック・裸の王様 開高健
日本三文オペラ 開高健
ロビンソンの末裔 開高健
フィッシュ・オン 開高健
新しい天体 開高健
開口閉口 開高健
フランドルの冬 加賀乙彦
檸檬(れもん) 梶井基次郎
愛の生活 金井美恵子

ドストエフスキイの生活	小林秀雄
モオツァルト・無常という事	小林秀雄
近代絵画	小林秀雄
地球になった男	小松左京
アダムの裔	小松左京
戦争はなかった	小松左京
闇の中の子供	小松左京
時間エージェント	小松左京
夢からの脱走	小松左京
物体O	小松左京
春の軍隊	小松左京
秘剣・柳生連也斎	五味康祐
柳生武芸帳（上中下）	五味康祐
薄桜記	五味康祐
お吟さま	今東光
春泥尼抄	今東光

悪名（あくみょう）	今東光
白痴	坂口安吾
くれない	佐多稲子
素足の娘	佐多稲子
体の中を風が吹く	佐多稲子
田園の憂鬱	佐藤春夫
佐藤春夫詩集	島田謹二編
多情仏心	里見弴
北海道の旅	更科源蔵
重き流れの中に	椎名麟三
永遠なる序章	椎名麟三
美しい女	椎名麟三
自由の彼方で	椎名麟三
愛の年代記	塩野七生
和解	志賀直哉
暗夜行路（前後）	志賀直哉

清兵衛と瓢簞・網走まで	志賀直哉
小僧の神様・城の崎にて	志賀直哉
灰色の月・万暦赤絵	志賀直哉
父の乳	獅子文六
娘と私	獅子文六
大番（上下）	獅子文六
湯葉・隅田川	芝木好子
贈る言葉	柴田翔
鳥の影	柴田翔
立ち盡す明日	柴田翔
剣は知っていた（上下）	柴田錬三郎
江戸群盗伝	柴田錬三郎
続江戸群盗伝	柴田錬三郎
美男城	柴田錬三郎
眠狂四郎無頼控（全六冊）	柴田錬三郎
眠狂四郎独歩行（上下）	柴田錬三郎

草野心平詩集　豊島与志雄編
武蔵野　国木田独歩
牛肉と馬鈴薯・酒中日記　国木田独歩
現代名歌選　久保田正文編
学生時代　久米正雄
出家とその弟子　倉田百三
婚約　倉橋由美子
暗い旅　倉橋由美子
ヴァージニア　倉橋由美子
妖女のように　倉橋由美子
夢のなかの街　倉橋由美子
人間のない神　倉橋由美子
パルタイ　倉橋由美子
ギリシア神話（上下）　呉茂一
休日の断崖　黒岩重吾
真昼の罠　黒岩重吾
背徳のメス　黒岩重吾

象牙の穴　黒岩重吾
失われた古代大陸　黒沼健
七人の予言者　黒沼健
霊と呪い　黒沼健
三等重役　源氏鶏太
新・三等重役（上中下）　源氏鶏太
鬼の居ぬ間　源氏鶏太
鏡　源氏鶏太
新サラリーマン読本　源氏鶏太
天上大風　源氏鶏太
実は熟したり　源氏鶏太
夢を失わず　源氏鶏太
停年退職　源氏鶏太
男性無用　源氏鶏太
男と女の世の中　源氏鶏太
家庭との戦い　源氏鶏太

口紅と鏡　源氏鶏太
掌の中の卵　源氏鶏太
歌なきものの歌　源氏鶏太
女の顔　源氏鶏太
時計台の文字盤　源氏鶏太
ずこいきり　源氏鶏太
小泉八雲集　上田和夫訳
父・こんなこと　幸田文
流れる　幸田文
おとうと　幸田文
黒い裾　幸田文
北愁　幸田文
幼児狩り・蟹　河野多恵子
アメリカン・スクール　小島信夫
蟹工船・党生活者　小林多喜二
Xへの手紙・私小説論　小林秀雄
作家の顔　小林秀雄

新潮文庫最新刊

著者・訳者	書名	内容	価格
五木寛之著	戒厳令の夜（上下）	スペインの大画家パブロ・ロペスの幻のコレクションが日本に存在する！ 戦慄のロマン。	上360円 下280円
円地文子訳	源氏物語（三四）	巻三には、栄華の極みを手にする光源氏の中年期を、巻四には、その生涯の終焉を描く。	各440円
三浦哲郎著	真夜中のサーカス	つましく生活する市井人の姿を、サーカスの意匠に仮託してスポットをあてた連作短編。	240円
三浦綾子著	道ありき	二十四歳で発病、以来十三年間の闘病生活の中に、著者が愛と信仰を告白した心の歴史。	320円
小川国夫著	試みの岸	殺人という試練に立たされた馬喰とその周囲の人々を、彫の深い文体で刻み上げた三部作。	280円
犬養道子著	新約聖書物語（上下）	イエスとは一体誰であったのか？ 現代日本人のために、綜合的に描く〈聖書〉の世界。	上480円 下440円
高橋義孝著	叱言たわごと独り言	イヤな世相百態から、酒、料理、人生のほろ苦さまで――辛口に仕上げたエッセイ集。	280円
J・ブルース 浅倉久志訳	空中衝突	DC8とセスナの衝突事故の発生から裁判までをノンフィクション的タッチで克明に描く。	520円
円地文子訳	源氏物語（一二）	女流独自の想像力と、読みやすく、魅力的な現代語訳により甦る源氏物語の世界。全五巻。	各440円

- 眠狂四郎殺法帖（上下）　柴田錬三郎
- 眠狂四郎孤剣五十三次　柴田錬三郎
- 眠狂四郎虚無日誌　柴田錬三郎
- 孤剣は折れず　柴田錬三郎
- 赤い影法師　柴田錬三郎
- 運命峠（前後）　柴田錬三郎
- 剣鬼　柴田錬三郎
- 梟の城　司馬遼太郎
- 風神の門　司馬遼太郎
- 人斬り以蔵　司馬遼太郎
- 国盗り物語（全四冊）　司馬遼太郎
- 燃えよ剣（上下）　司馬遼太郎
- 新史太閤記（上下）　司馬遼太郎
- 関ヶ原（上中下）　司馬遼太郎
- 峠（上下）　司馬遼太郎

- 花神（上中下）　司馬遼太郎
- 城塞（上中下）　司馬遼太郎
- 果心居士の幻術　司馬遼太郎
- 馬上少年過ぐ　司馬遼太郎
- 覇王の家　司馬遼太郎
- 出発は遂に訪れず　島尾敏雄
- 出孤島記　島尾敏雄
- 嵐・ある女の生涯　島崎藤村
- 春　島崎藤村
- 桜の実の熟する時　島崎藤村
- 家（上下）　島崎藤村
- 破戒　島崎藤村
- 夜明け前（一上下・二上下）　島崎藤村
- 藤村詩稿　島崎藤村
- 千曲川のスケッチ　島崎藤村

- 新生（上下）　島崎藤村
- 藤村詩集　島崎藤村
- 父子鷹（上下）　子母沢寛
- おとこ鷹（上下）　子母沢寛
- 勝海舟（全六冊）　子母沢寛
- 次郎物語（全五冊）　下村湖人
- 青年の思索のために　下村湖人
- プールサイド小景・静物　庄野潤三
- 総会屋錦城　城山三郎
- 役員室午後三時　城山三郎
- 雄気堂々（上下）　城山三郎
- ある倒産　城山三郎
- 生命なき街　城山三郎
- 小説日本銀行　城山三郎
- 乗取り　城山三郎

〰新潮文庫〰

五味康祐の作品

秘剣・柳生連也斎
柳生武芸帳（上）
〃　　（中）
〃　　（下）
薄桜記

カバー印刷　錦明印刷

柳生武藝帳

中巻

定價400圓

新潮文庫 草151 C

昭和三十七年九月三十日 發行
昭和五十五年三月十五日 二十四刷

著者 五味康祐

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社 新潮社

郵便番號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四一一
振替東京四—八〇八番

亂丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負擔にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式會社　製本・憲專堂製本株式會社

© Yasusuke Gomi 1962 Printed in Japan

0193-115103-3162

¥ 400